
遼州戦記 保安隊日乗 6 改訂版

橋本 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遼州戦記 保安隊日乗 6 改訂版

【Nコード】

N7746L

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

法術と呼ばれる魔法を使う人々の暮らす星『遼州』の経済大国『東和』。そこで次々と起こる法術師を操って起こる些細な事件。その事件を追っていく『遼州同盟司法局』通称『保安隊』。その捜査の中で次第に隊員の神前誠達は法術に対するゆがんだ社会の摂理と大国やテロ組織の不気味な思惑を知ることになるのだった。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 1

にぎやかな祭りの雰囲気浸っているといきなり西園寺要大尉が升酒を噴出したので、神前誠は突然の出来事に動揺を隠し切れなかった。そして噴出した酒が吹きかけられたのはどうにも堅気とは思えない目つきの出店を仕切っている元締めという風格の男だった。

そんな迫力のあるオヤジに赤の地に黄金色の牡丹と蝶をあしらった彼女らしいとても値段を聞けないような振袖姿のお嬢様風の相手とはいえ思い切り顔面に酒を吐き出されて顎からぴたぴたと酒のしずくを滴らせている有様。謝りもしないでただじっとオヤジをみる要。オヤジはゆっくりと頭に手をやると自分の顔面に酒が吹きかけられた事実を再確認するように手についた酒の匂いを嗅ぐと、要ではなく誠に視線を向けた。

逃げ出したい。そう思いながら平然としている要を前にただ震えそうになる足を必死になって抑え込む。

「どうしたのよ……要ちゃん」

紺色の花柄模様の振袖が似合いすぎる紺色の長い髪をなびかせるアイシャ・クラウゼ少佐の言葉に誠も我を取り戻した。軍用の義体のサイボーグであり、東都戦争と呼ばれるシンジケート同士の抗争劇の中心に身をおいていた彼女が迫力は十分とはいえただの高市の香具師にひるむはずも無かった。事実誠に向けていた視線が突然にんまりとした笑いになって要に向けられた。

「西園寺の姐さん……突然吹かないでくださいよ」

若い衆が差し出す手ぬぐいで酒をぬぐいながらオヤジはニコニコと笑って今度は自分の分の升に酒を注いだ。こうして誠の精神を鍛えるかのような宴会が始まったのは着るものによっては着物に着られてしまうようなあでやかな振袖を着込んだ要のせいだった。非正規部隊上がりで祭りと言えば混乱を利用しての暗殺かそんな暗殺の阻止と言う任務と直結して考えてしまう自分を変えたいと言い出し

た要が東都明神の祭りが見たいと言い出したのは新年まであと4、5分のことだった。最初は外惑星の貴族制国家『胡州帝国』切つての良家の子女として庶民的な出店の品々に歓喜の声を上げていた要だが、すぐにその店番や時々店を冷やかして回る堅気とは見えない面々の方に関心が向いてしまっていた。

ちょうど酒が飲みたくなった彼女はそんな一人のチンピラを羽交い絞めにするそのままこの出店を仕切っている元締めに会わせろと怒鳴りつけてその迫力に負けたチンピラがつれてきたのがこの出店の間の待合所のようなところだった。一緒に出かけてきた誠の上官のカウラ・ベルガー大尉とビニールの入り口を塞ぐシートの隙間から顔を出して道行く参拝客に目をやるアイシャもとりあえず人ごみに飽きたという感じですっかり和んで酒樽の隣に置かれた達磨ストーブの暖かさに酔いしれていた。

そんな和んでいる女性陣とは対照的にただ申し訳なさそうに立つ誠にゆらりと要が顔を向ける。

「すまねえなあ。ウケル話が届いちやって……ったく酒がもったいねえよな」

要はそう言うとき空になった升を額をぬぐい終わったオヤジに差し出す。オヤジも要の話に興味があるものの一応司法執行機関の大尉と言う境遇の要に話を持っていくのは遠慮しているらしく黙って升到酒を注いだ。

「さすがに西園寺だな。まだ飲むのか？」

カウラが呆れたようにつぶやいた。緑色の若葉を模した文様がエメラルドグリーンのポニーテールに映える。彼女もまた要が酒を飲み始めてからもう二十分が経っているのですすがに呆れてきたように同僚の飲みっぷりを眺めていた。

「ふう……、だつてよう」

ようやく升を置いてカウラに向き直る要に大きく安心のため息をつくオヤジの表情に少し笑みを浮かべる誠に話を切り出そうとする要。ひらりとその赤い絹の袖が翻るといかにも正月だと言うことが

誠にもわかる。それを見ながら改めて自分がスタジャンにジーンパンと言うありきたりな冬の服装をしていることに気づいてなんだか場違いなような感じがして思わず苦笑していた。

「だって何も無いでしょ？ 本当にすみませんね、暴力馬鹿の誰かさんに酒を盗まれた拳句顔に吹きかけられるなんて……」

アイシヤがオヤジに頭を下げるのを見てカチンと来た要がアイシヤの長い髪を引っ張る。

「痛いじゃないの！」

叫ぶアイシヤに少しばかり酔っているのか印象的なタレ目で要は長身のアイシヤを見上げた。

「痛くしてるんだよ！」

そう怒鳴る要をカウラが押しとどめる。要の手が離れて何とか呼吸を整えるアイシヤ。そして誠はいつの間にか待合室の透明のビニールのシートの向こう人垣ができているのに気がついたが何が出来ると言うわけもなかった。

「それより西園寺。突然酒を噴出す原因くらい教えてくれないだろうか？」

カウラの一言。一応要と誠を部下として巨大人型兵器、アサルト・モジュール部隊の隊長を務めているだけあって落ち着いて原因を突き止めることに決めたような鋭い調子で言葉が放たれる。

「そりゃあ……まあ……ちょっと待てよ」

要はそう言う手になっていた巾着を開く。中から携帯端末の画像投影用のデバイスを取り出し、それから伸びるコードを首筋のジャケットに差し込んだ。

「便利ね。さすがテレビ付き人間」

サイボーグの体を気にしている要に言っではいけない暴言を言うアイシヤだが、とりあえずカウラと誠、そして周りの野次馬達の間にも有るので、要は睨み付けるだけで作業を続けた。

『こちら福岡です』

画像にアナウンサーが映ったのを見ると周りの人々の視線も集ま

る。ただのテレビの画像を見せられたことで少しばかりカウラは呆れたような顔をしていた。

「西園寺さん……これのどこが……」

誠は噴出すような内容がありそうに無いテレビ番組を見せられたので少しばかりがっかりしながら周りをちらちら眺めている要に尋ねようとした。

「ちょっと落ち着いて待ってろよ……もう少し前かな？」

そう言うのと画面が高速で逆回転して行く。そして学校の入学式のような雰囲気映像が映ったところで画像は止まった。

『……魔法学院の……』

「魔法！魔法学院！出来たの？そんな素敵なお学校が出来たの？」

それまで野次馬を見回しながら要の行動を黙殺していたアイシャがハイテンションで叫んだ。誠とカウラはそのやたらとうれしそうな表情を見て目を見合わせる事になった。確かに要が噴出すはずだと納得して頷く誠を見ながらまだ理解できずにいるカウラに目を向ける。

「まあ……変な名前と言うことで」

誠のフォローにもカウラはまだ一つ乗れないように首をひねっていた。

「うるせえなあ……もう少し落ち着けよ」

アイシャの食いつきに呆れたように要は言うとお画面を拡大する。

そこには遠く離れた地球のアメリカ合衆国信託統治領日本の街の一隅にある学校の校門が映し出されていた。誠達はその中の学校の校門の横の石碑に刻まれた文字に目をやった。

「『東福岡魔法学院』……？『魔法』？」

ぼんやりと繰り返すカウラ。アイシャはついに口を押さえて大爆笑を始めた。

「アメリカさんは法術をマジックと呼んでるからな。和訳したら『魔法』だろ？」

「ああ、そうですね」

思わず腹を押さえて二つ折りになっているアイシャに周りの視線が痛いほど突き刺さるのを見ながら誠はそうつぶやいた。

「……可笑しい！じゃあここの学校の生徒はみんなマントに杖を持っているわけね！ファンタジーよ！ファンタジー！誠ちゃんも入学したら？」

「ばかばかしい」

上機嫌のアイシャの言葉をあっさり斬って捨てるカウラ。それでもアイシャの笑いは収まらなかった。そんな中、急に要が真剣な表情で誠にそのタレ目を向けてくる。

「神前はあと最低二年は必要だな、ここに入学するには」

「え？そう言う条項があるんですか」

「だってお前童貞だろ？今は23歳だから……25になるまであと二年。がんばれよ、菰田に負けるな！」

要の得意げな顔に誠は頭を掻きながら視線を画面に移した。その様子がおかしかったらしく今にも半分に折れそうな様子でアイシャは爆笑を続けていた。

「地球でも東アジア、特に日本には遼州系の人間も多いからな。恐らくそのことをにらんで準備が進んでたんだろ。まあ神前が法術の存在を示した『近藤事件』以前からいつでも行けるところまで計画は出来ていたんだろうな」

一人冷静に画面を見つめるカウラ。さすがにそんなカウラも見るとアイシャも笑いに飽き、要が再び升酒をあおり始めると周りの野次馬も興味を失ったように散っていった。

「しかし『魔法学院』はないだろ……誰かこのネーミング止められなかったのかね」

ニヤニヤしながら要は画面の中の看板に目をやっていた。

「名前が重要なんじゃない。むしろその中身が大事なんじゃないのか？一応私立の学校という話だが設立に当たりいくつかの在日アメリカ軍の外郭団体から金が流れているらしいからな。実際は米軍の法術師養成機関と考えるのが妥当だろう」

「なんだよ、カウラは知ってたのか？」

まるで自分の見つけたネタを馬鹿にされたように要が頬を膨らませる。それを見てアイシャもようやくおちついてきたというように口元を引きつらせながら立ち上がった。自分のせつかくの大ねたをつぶされたとあってしばらく要は不機嫌そうにしていたが再びいつもの意地悪そうな顔つきに戻ると達磨ストーブに乗っていた餅を手にとって口に運んだ。

「姐さん……醤油は？」

オヤジが口を挟むが要はまるで無視して味の無い餅を何度かかみ締めた後、静かに飲み込んで再び視線をカウラに向けた。

「なるほどねえ、さすがカウラちゃんは勉強熱心でいらっしゃる」

「貴様等が仕事をサボることばかり考えているからだ」

そう言うとかウラはそのままビニールシートを持ち上げてそのまま参道に出た。要は升を舎弟の若者に返すとその後が続く。達磨ストーブの前ですっかりご機嫌で温まっていたアイシャが急いでその後続くのを見て誠も我に返ってオヤジに一礼するとそのまま参道に飛び出した。

「でも僕も思いますけど『魔法学院』は無いと思うんですけどね……どう見てもやはりファンタジーの世界ですよ。人間が宇宙に飛び出してからの名前とは思えないじゃないですか」

まるで自分が仲間はずれにされていたとでも思っているようにすたすたと歩いていくカウラの後に誠もついていく。要もアイシャもその後ろからいつかカウラをからかおうというような様子で歩いていた。

「まあ東和警察だって警察学校に法術部門を立ち上げたからな。今のところは東都条約の規定により法術の軍事的使用にはさまざまな規制がかかっている……」

「一応はね。でも実際それを守るかどうかとなると別問題でしょ？」

アイシャはそう言うと言と誠の手を引いて走り出す。

「なんですか！」

「何ですかって言うことは無いんじゃないの？ せっかくの正月休み。初詣ならもっと明るい気分ですごしましょうよ！ カウラちゃんはまだじめすぎ！ もっと楽しまなくっちゃ！」

「……で？ そうすると何でテメエ等が手をつなぐんだ？」

明るく誠の手を引こうとしたアイシャの手を要は叩いて離させた。

「なによ！」

「なによって何だよ！」

いつものように要とアイシャがにらみ合いを始めた瞬間。誠は強烈な違和感を感じて立ち止まった。何か自分の頭の中をまさぐられたような不快な感触。もし三人がいなければそのまま吐き気に身を任せて口に手を当てて嗚咽したくなる、そんな感覚が回りに漂っている。

「どうした？」

要が声をかけるが誠の心臓の鼓動は早くなるばかりだった。自分の領域に何かが入ってくる。そして入って来たものの誠の力の大きさをもてあましてどうするべきか迷っているように誠の意識を弄繰り回している誰か。それを要に説明しようと顔を上げた。だが不快な感覚が脳をぐるぐるとかき混ぜる状況の中、誠は自分の言葉が出ないことに気づいた。

「おい、大丈夫か……カウラ！ 神前が変だぞ」

ひざまずいて震えている誠を要が何とか助け起こそうとするが誠の意識は要もそしてその言葉を気にして近づいてきたカウラやアイシャにも言っていないかった。

圧迫されてゆがむような視界の中、ちょうど人の群れが途切れたところには絵馬が並んでいるのが見えた。人々はそれぞれ手に絵馬を持って和やかに話をしている。だが、その中の中学生くらいの振袖姿の少女が急に足を止めたのを見て誠は頭に衝撃のような何かが走るのを感じた。

「昨日はコミケで大活躍だったから疲れてるんじゃない……」

そう言ってアイシャがそう言って手を差し出した瞬間だった。

一瞬誠の意識が飛んだ。そして参拝客が眺めていた絵馬に一瞬で火が回った。乾燥した木の燃え上がる炎に人々が驚いたように悲鳴を上げる。

「なんだ！」

驚いて振り返る要。カウラはあたりを見回し防火水槽を見つけて走り出した。

「ちょっと！何よ！テロ？テロなの？」

アイシャはしばらく叫んだ後、火の粉が移った人達に近づいて自分の紺色の振袖を振り回して火を消そうとしていた。

「おい、誠！」

「パイロキネシスト……発火能力者です」

ようやく何物かの介入がやんで力が入るようになったひざで参道の中央に立ち上がる。そしてその誠の様子を確認すると要は慌てて駆けつけてきた警備の警察官に自分の身分証明書を見せた。

「保安隊？法術事件ですか？」

驚いた太り気味の警察官はしばらく啞然とした後、周りを見回した。防火用水の隣のポンプを使ってカウラが近くの客達に助けられながら放水を開始している。

「法術犯罪の可能性がある。すぐにこの場にいる人物の身柄の確保を始めてくれ」

要の言葉に警察官と飛び出してきた町会の役員達が大きく頷いて走り始める。その中には先ほどの顔役の姿もあった。皆ただ突然の惨事に驚いて慌てて走り回る。誠は大きく息をしてしばらく立ち尽くしていた。だが火が大きく揺れて一気に逃げようとする参拝客に襲い掛かろうとしたところで自分が司法機関執行官であることを思い出してそのまま消火活動中のカウラに向かって駆け出していった。

「神前！ホースを！」

放水の為にポンプを起動している町会の役員達と共にカウラが叫んでいた。その振袖には火の粉がかかり、一部が焼け焦げているの

も見える。誠はカウラからホースを受け取るとそのまま延焼し始めた祠にホースを向ける。

「行けます！」

誠はじつと筒先を構えるとすぐに大きな反動が来てその先端から水がほとぼしり出でた。周りの人々が逃げる先には警察官に混じってちぎった袖で誘導をしているアイシヤの姿もある。誠はそれを確認すると安心して燃え盛る祠に放水を続けた。

「大丈夫か？」

応援の警官隊の配列を終えた要が何とか慣れない放水をしている誠に手を伸ばしてきた。

「本当に狙いを定めるのが苦手だな、お前は」

そう言って誠からホースを奪い取ると火の中心に的確に放水をする要。ポンプの設定が済んだカウラも顔中墨に塗られた状態で力が抜けて倒れそうになる誠を何とか支えた。

「大丈夫か？ さっきはお前にも何かあったんだな」

カウラの言葉に力なく誠は頷いた。

「パイロキネシストの力の発動を感じました」

「そうか！」

目の前ではほとんど鎮火してきたお堂に水を撒く要の姿がある。そして避難の誘導の為警官隊を指揮していたアイシヤも誠達の所に戻ってきていた。

「ああ、これじゃあまた要ちゃんに買ってもらわなきゃね」

そう言ううちぎった袖をひらひら振りながら必死に高圧の水圧のホースにしがみついている要に見せびらかす。要はちらりとアイシヤを一瞥したが、任務に忠実に無視して放水を続けていた。

要の放水は的確だった。確実に火の勢いは弱まっていく。そしてほぼ鎮火したんじゃないかと誠の素人判断で思えるくらいになったときによりやく防火服を着た消防団の面々が要と交代することになり誠達は消火作業から解放された。

しかしそれからは誠達の本業。遼州同盟司法局特別機動部隊、通

称『保安隊』の仕事の領分となった。焼けた振袖のままの要を先頭に誠達は本宮の裏手に並んでいる警察車両の中の指揮車と思われる車へと足を向けた。先にこちらで被疑者の拘束を担当していたアイシャが疲れた表情で誠達を迎える。

「容疑者は特定できたのか？」

「一応近辺にいた人達はすでに車両で移動して警備本部でお待ちいただいているわよ。パイロキネシスなんて珍しい能力だものすぐに犯人は特定できるわね……それにしても馬鹿な犯人ね。こんなに人がいるところで発動させて誰にも気づかれないとでも思ったのかしら」

アイシャはそう言うと言火事件のあった場所の状況をシミュレートしている画面を眺めている女性警察官の方に目を向けてため息をついた。

「どうした？」

「これ……」

要の問いにアイシャは火の粉で穴だらけになった青い振袖の袖を翻して見せる。

「緊急避難的処置だからな。あとで弁償してやるよ」

ため息交じりの要の一言。アイシャはいかにもやって見せたと言ような表情で誠に笑顔を向ける。

「まあ……けが人も無かったわけだからな。あとは所轄の警察の資料が上がってくるのを待とうか」

そう言うときウラはそのまま指揮車の入り口に手をかける。

「カウラ……」

「なんだ？」

要の顔を見てカウラは煤で汚れた頬を拭いながら振り向いた。

「誠の家……ウォツカはあるか？」

「は？」

カウラもアイシャも誠も突然の要の言葉に呆然とする。

「いやあ、強い酒をきゅっと飲みたい気分でさあ……」

「父は日本酒より強い酒は飲みません！母は酒を飲みません！」

「ああ……そう……」

本当に力なく、まるで抜け殻のようになりながら要はそれを見守るカウラ達に見送られながらたまたと指揮車を後にした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン）

2

「結局こうなるのね……」

アイシヤはそう言いながら不機嫌そうに紺色の長い髪を梳かす。東都の下町の誠の実家で破れた晴れ着をもったいないと丁寧にたたむ誠の母薫。無事でよかったと笑っている父誠一。彼等と今回の火事の鎮火にいかに関わったか話を大げさに話すアイシヤ。そんなところに誠達と同じ司法局の直属捜査部署である法術特捜部長の嵯峨茜警視正から今回の事件の目撃者として警察署に出頭するようにとの連絡があり、とりあえず時間をもらってシャワーと着替えだけを済ませてこうして東和東都南城警察署の取調室へとたどり着いていた。

「あんなに泣いてたら取調べにならないだろうが……」

要はそう言いながらマジックミラーの向こうを眺めていた。そこには振袖姿の少女が取り調べの警察官の前で知らないと呼びながら泣きじゃくっている。

「でも彼女以外パイロキネシス能力の適正のある人物はいなかったんだから……ああ、要ちゃんが口から火を吹いたと言う線もあるわね」

一番ここに来るまでのカウラのスポーツカーの車内で愚痴を垂れていたアイシヤが挑発するようにつぶやいた。思わず要がにらみつけるがアイシヤは手にしたコーヒートの香りを楽しみながらまるで気にしていないという表情で歩き始めてしまう。取調室ではほとんど質問を諦めたという表情の捜査官を見ながらカウラも仕方なくコーヒートをすすった。

「拘束した者の他にもパイロキネシストいる可能性はあるな。それと適性検査自体もまだ技術的に確立されたものではないからな。資料に無くても思念発火が出来る人物がいた可能性もある。西園寺、法術適正のあった連中は一通り身元は確認したんだろ？」

「そりゃあまあ……でも能力適正が低い人物は簡易検査じゃ引っからないからねえ。あの程度の火事を起こすくらい力なら他の適正で引っかけた奴の犯行の可能性も捨てきれねえな」

要はそう言うのと珍しくおとなしく手持ちの携帯端末から伸びるコードを自分の首筋のジャックに挿して情報収集を開始した。

「感覚的には……この子じゃないと思うんですけど……」

誠は直感的にそう口にしていた。要、カウラ、アイシャの顔が一齐にぼんやりと思いをつぶやいただけの誠の顔を射抜く。

「は？『あんなかわいい女の子が犯罪者のはずは無いです！』とか言い出すつもりか？ばーか」

要の馬鹿にしたような口調に誠は何も言えずに自分のために入れたもらったコーヒーを手を取った。

「そう言う意味じゃないですよ！だって法術適正反応が出るという面倒な話を聞かされるらしいじゃないですか」

「そうね、まず最初に市役所での法術発動封印の誓約書を書かされて、そのあと警察署で法術に関する諸法の講習。それに能力ごとに消防署だとか陸運局だとかに提出する書類があって……」

誠の話を継ぐアイシャ。その言葉を聞きながら再び誠は取調室の中を見た。相変わらず少女は泣くばかりで事情聴取はまるで進んでいない。

「法術の発動については何も知らない……気がついたら火が目の前に広がっていた……となると」

「能力の暴走の線が有力ですわね」

後ろから声をかけられて驚いて座っていた机から飛び降りる要。そして彼女の後ろには見慣れた東都警察の制服を着た女性が腕組みをして立っていた。

「今頃出てきやがって……人を呼び出して何してた？デートか？」

「いいえ、要さんとは違って昨日から徹夜ですの。法術に関する捜査マニュアル。すぐにでも必要になるのになかなか思うように行きませんわね」

上品そうにそう言うとそのまま取調室が見えるガラス越しまでやってきて中を覗き込む女性。

要の従妹で誠達の所属する『保安隊』隊長、嵯峨惟基特務大佐の娘である同盟司法局法術特捜の主席捜査官嵯峨茜警視正だった。いつもどおりに表情を変えずに中を一瞥した後ついてきた補佐官のカルビナ・ラーナ警部補が手にした捜査器具を取り出した。

「なんだそれ？」

要の質問にラーナは顔を上げるがまるで興味がないというように視線をおろして取り出した器具の制御をする為に端末にコードをつなぐ。

無視されて冷静でいられるほど要は人間ができていなかった。そのままつかつかとラーナに近づいて懐から取り出したコードを自分の首のジャックとラーナの端末に接続する。

「西園寺大尉！困りますよ」

「うるせえ！」

茜は一瞥して困った顔のラーナに頷いて見せて要の情報収集を黙って許した。

「演操術師の特定か……それならつじつまが合うな」

『演操術』。初めて聞く言葉に誠もカウラも目を茜に向けた。

「なんだか分からないけど面倒なことになりそうなのね」

アイシャがコーヒーを口に含んでその様子を眺めている。

「わたくし達が動く事件は大体が面倒なことなのではなくて？」

上品に答える茜にアイシャは手を広げて知らぬふりと言うような態度を示して見せた。

「確かに……今回も面倒なことになりそうだな」

カウラはそう言うのと静かにコーヒーをすすった。そんな彼女の前で茜は大げさに直立不動の姿勢をとった。カウラも気づいて敬礼する。

「嵯峨茜警視正、事件を引き継ぎます」

「よろしくお願いします」

その有様を相変わらずラーナの機械を弄りながら眺める要。アイシャはと言えば部屋の隅に置かれていた事務机にかけてあったコートに袖を通している。

「アイシャさん……」

誠が恐る恐る声をかける。その脇を安心したと言う表情のカウラが通り過ぎる。

「引継ぎは終わったわけだな……帰るか」

「いいんですか？ 事件はまだ……」

そこまで言いかけたところで茜が誠の肩を叩いた。

「初期消火とその後の対応お疲れ様。後は私達が引き継ぎますわ。正月休み、ごゆっくり」

「はあ……」

誠は自分と同じ年のエリート警察官の言葉に何も言い返せ無いことは分かっていた。そしてそのまま帰ろうとする三人の後を追って取調室を後にした。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 3

「ふう……」

警察署から見慣れた保安隊の寮までの間、ひたすら所轄の悪口を言い続ける要。それに相槌を打ちながら火に油を注ぐアイシャ。そして車を壊されるのを恐れながらハンドルを握るカウラ。三人の繰り広げるどたばたから開放されて自分の部屋に帰ってくると誠は荷物を放り出して横になってそのまま眠っていた。

夢は最後はどたばたになってしまったけれどクリスマスから正月にかけての実家での要達との馬鹿騒ぎが次々と走馬灯のように現れる。こうして早朝の光の中でいろいろと馬鹿なことをしたことばかり思い出しながらうだうだしているとなんと自然と笑みが浮かんできた。そしてそのまま寝返りを打つ誠。そんな彼もドアの外で何かの気配を感じることもくらはできなかった。

「おい、いいか？」

声の主はカウラだった。

「どうぞ、開いてますよ」

誠が起き上がるのを見ながらカウラが入ってきた。その細い体と特徴的なエメラルドグリーンポニーテールが誠のアニメ関係のグッズが並んだ部屋に違和感を与えた。誠はその違和感に耐えながら作り笑いで神妙な顔つきの上官を迎えた。

「ああ、とりあえずお茶でも飲もうと思っただけ……」

手にしたお盆から急須と湯飲みを並べるカウラ。元々そういう気の回りに縁がないカウラの行動が誠には不自然に思えた。何か言い出したいことがあるならこちらから気を利かせないと言い出せないところがある。そんな彼女の癖が分かってきた誠はそれとなく口を開いた。

「演操術師を見つけられなかった件ですか？」

誠がそう言うのとカウラは視線を手元の茶筒に落としてしまう。

演操術。他人の意識を則り操るこの地球の植民惑星『遼州』の先住民『リャオ』に見られる特殊能力。誠も先日地元のデパートでの通り魔事件でその力の恐怖を味わったばかりだった。そして誠自身も『リャオ』のほぼ純血種だということも分かっていた。それを察してかカウラの頬がこわばる。

気分を変えるように誠のフィギュアのコレクションを見ながらカウラが話し始めた。

「とりあえずあの時間に参道にいた人物の内、足取りがつかめたのが三百人だ。据え付けられた防犯カメラとか、目撃者情報を求めているが……これ以上は分からないだろうな。確認できた中にいた法術適正者には演捜術の使い手はいないらしい……しかも万が一に備えて境内に配置されていた法術発動を探知する簡易アストラルゲージの方だが……」

「反応が微弱で測定不能。増幅しても不明と言うところですか。法術の専門家のシュペルター中尉もお手上げですか」

カウラに湯飲みを渡された誠は静かに茶をすすった。保安隊は誠の配属以来法術系犯罪を追うことが主任務になりつつあった。『リャオ』の血を濃く引く誠と部隊長の嵯峨惟基がいる以上、どうしても司法機関の手に負えない法術関連事件は保安隊に押し付けるのが当たり前のように思われていた。

「でもそうするとあの容疑者扱いで捕まった娘は……」

「一応彼女の能力を誰かが利用していることがはっきりしない限り釈放はできないだろうな。しばらくは拘留だろう」

カウラの言葉に誠は肩をおろした。パイロキネシス能力は誠やカウラには身近な力だった。カウラが第二小隊の隊長を務めるまでは『保安隊の良心』と言われた穏やかな西モスLEM出身のアブドゥール・シャー・シン大尉が彼等の指導に当たっていた。その後、彼ら部隊の管理部門の責任者を経て故郷で設立される遼州同盟の軍事機構のアグレッサー部隊への転属となった。現在は西モスLEMでの部隊設立準備の間を縫っては後任の管理部門の責任者である高梨渉参

事と話し合っている姿をよく見かけていたのを思い出させる。

そんなシンが持つ力は発火能力『パイロキネシス』だった。愛煙家だがライターもマッチも持ち歩かずに灰皿を見つけるとタバコだけを持って一服するシンを二人は何度となく目撃していた。

「でも……」

「演操術師と言えば先日を通り魔の時にも出てきた。今回も同じ人物が訓練気分で実行したのかもしれない……」

力の無いカウラの言葉を聴きながら瞬時に燃え広がる絵馬堂の光景が目に見え始める。

「訓練気分でやることですか？ あんなことを……」

「やる奴はやるだろ？」

突然のハスキーな女性の声に誠は握っていた湯飲みから視線を上げた。当然のように冬だと言うのにタンクトップと半ズボンと言う姿の要がそこに立っていた。

「寒くないのか？ 西園寺は」

呆れたようにカウラがつぶやく。軍用の義体の持ち主で零下30度の中でも短時間なら耐寒装備無しで活動できる体の持ち主に向けてつぶやくには不用意な発言だった。カウラも少しばかり緊張気味に要の反応を見るが、要は気にしていないというようにそのまま誠の隣に腰を下ろした。

「鍛え方が違うんだよ」

そう言いながら無遠慮に周りを見渡す要。そんな彼女の視線が開けっ放しの扉のところで止まった。

「鍛えたも何もテメーの体は特注品の軍用義体じゃねーか」

小さな女の子が扉の入り口に手をかけて突っ立っている。その後ろにはにんまりと笑うアイシャの姿もある。

「クバルカ中佐」

保安隊副長のクバルカ・ランの登場にカウラは座りなおして敬礼をした。小柄と言うよりどう見ても小学生低学年くらいに見えるランだが、その自信に満ちた態度は誠達を束ねている保安隊副長の貫

禄を感じさせている。

「おー。別に気にすんなよ。ここじゃーアタシもただの隊員だ」

そう言いながらランが扉から手を離して誠の隣へと進んだ。そんなランにびったりと付き従うのがアイシャ。

「そう、じゃあよい子ね」

「頭なでるな！クラウゼ！」

いきがるランの頭をなでるアイシャ。まるでここが準軍事組織の寮だとは思えない光景が展開する。いつもの見慣れた光景だが、実家から帰って久しぶりに見るとおかしさが再びこみ上げてきて誠は必死になって笑いを堪えた。

「で、ちび中佐の言いたいことはなんすか？」

どっかりと胡坐をかいて居座る気が満々の要がランをにらんでいる。その様子があまりにも敵意むき出しなので誠ははらはらしながら二人を見つめていた。

「実は……内密な話なんだけどな」

ランはそう言うその後ろで立っているアイシャに目をやる。アイシャもその様子を悟って開いたままのドアを閉めた。

「先月の末だ。厚生局からの通知があったんだが……法術適正の検査基準に間違いがあったそうだ」

ポツリとつぶやくように小さな上官から出された言葉に誠達は哑然とした。

「間違い？そりゃあ大問題だぞ！下手したら……」

「西園寺。落ち着け、それで？」

大声を上げた要を制してカウラがランの幼いつくりの顔を見つめた。

「確かによー空間干渉や炎熱系なんかの派手な法術の適正は脳波のアストラルパターン分析でその能力を特定できるんだが……」

「演操系の波動は特定できないと言うことかしら？」

アイシャの問いに静かにランは首を縦に振った。

「マジかよ……じゃあ手がかりなんて何も無いじゃないか！そもそもそ

もその検査だって東和じゃ任意だ。それを通っても黒か白か分からないなんて言ったら……」

「このまま発表すれば同盟議会の議長の首が飛ぶだろうな」

叫ぶ要をなだめながらカウラはそうつぶやいていた。

「ザル検査じゃない！ やっぱ厚生局はあてにならないのよ。もしかしてわざと演操系だけ引っかからないような装置を作るように頼んだんじゃないの？」

「クラウゼよー。そこまで厚生局を悪者にするってねーんじゃないのか？」

落ち着いた様子でどっかりとランが腰を下ろした。つられるようにアイシャも誠を囲んで座り込む。

「いわゆる演操系の能力には二種類のパターンが存在するんだ。そしてその研究が始まったのはつい最近なんだ」

「へえ、アメリカさんとかは遼州入植以来の研究でずいぶんたくさん研究してたはずなんだけどな」

「要よー、それはあくまで推測だろ？ それにあそこは世論が基本的に保守的だからな。表向きはヒトゲノムの解析は一切やっていないことになってたはずが……とかいろいろ事例はあるからな。どこまであの国が法術について知っているかは大統領になって引継ぎでも受けなきゃわからねーだろうな」

話の腰を折られて口を尖らせながらランは話を続ける。

「演操系って言うときよー。どうしても操る相手の意識そのものに介入して動きを制御すると思うだろ？ 確かにそう言う能力の持ち主の割合は高けーんだけど……」

「なんだよそれは？ 操るんだから意識も乗っ取るんだろ？ それともあれか？ 意識はそのまま体だけ動かすとか」

「要ちゃん！ その能力欲しい！ そして……」

突然叫んだアイシャに誠達は冷たい視線を投げた。仕方が無いと言おうように口を押さえてアイシャがそのままうつむく。

「それじゃーねーよ。意識云々の話は能力の強弱であってここで言

う能力の種類とは違うんだ。それとなんでこの第二の演操術が分らなかったかと言う理由もそこに有るんだ」

「もったいつけるじゃねえか。ずばり言えよ」

短気な要はタンクトップの下から手を入れて豊かな胸の下の辺りをぼりぼり搔いている。思わず目をそらす誠にむっとしたような表情のカウラが映って誠も視線を落とした。

「ふー。まー分かりやすく言う与他人の能力を乗っ取るんだ」

しばらくランの言葉が理解できずに誠達は黙り込んでいた。

「どういう意味ですか？」

首をひねるカウラに少し笑みを浮かべてランは口を開いた。

「つまりだ、標的とする法術師の能力を借りて自在に操る。まー他人の禪で相撲をとるって奴さ」

ランはそう言うと言分の胸に手を伸ばしてきた要の頭を思い切り叩いた。

「何すんだ！ テメー！」

「いやあ禪とか言うത്面白くってさ」

「だ何でアタシの胸を触るんだ？」

突然の行動に顔を赤らめるラン。そして同じように手を伸ばしてきたアイシャをその凶悪そうな瞳でにらみつけた。カウラはなんとも複雑そうな笑みを浮かべながらランが落ち着くのを待って口を開いた。

「馬鹿は置いておいて。つまり、法術の存在が広く認知されるまではその能力そのものが見つからなかったわけですね……例の意識乗っ取りタイプの通り魔のように法術師を飼っている勢力が絡んでいる可能性は少ないと」

「そー言うこった。法術だけを研究している間はそれぞれの能力の関係なんて気にもかけてなかったからな。能力が存在すること自体が不思議だった時代にはそれを利用してしまいう力があるなんて考えもつかないだろーしな。となるとまったく未知の能力だ。見つかった事例も東和で二件ほどだ……ああ、その二人についてはアリバイ

があるから今回の事件とは無関係だからな」

落ち着いてつぶやくとランは立ち上がった。

「ここでグダグダ話していても始まらねーよ。飯食って屯所で話そうや」

そんなランの言葉に誠達は時計を見る。ちょうど今日の朝食当番のヨハンが得意のリゾットに仕上げの隠し味を入れている時間だった。

「じゃあ食堂に行くか？」

「要さん、何で疑問系なんですか？食べますよ僕も」

仕方なく立ち上がる要について誠も立ちあがった。アイシャはすでにドアに寄りかかって誠達を待っていた。

「それにしても他人の力を勝手に使えるってんだろ？最強じゃないか、考えてみたら」

要のつぶやいた言葉に誠も頷く。そしてそうなれば自分の空間操作能力も利用されるだろうことを考えてそれをどう使うつもりなのかを考えてみた。

「最強だろうが最弱だろうが今のアタシ等がすべきことは飯を食うことだ。とっとと行くぞ」

そう言うと気軽に手を振ってランが廊下に出て行くのに誠達は付き従った。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 4

「さてと……いいですか？」

明らかに太りすぎている技術将校ヨハン・シュペルター中尉はボードを前に誠達にレクチャーを始めようとしていた。

地球の殖民惑星遼州の政治経済共同機構である『遼州同盟』。その司法実力部隊の保安隊には『法術』と切っても切れない関係にあるといわれ続けてきた。人々は保安隊が世に最大のインパクトを残した『近藤事件』と呼ばれる事件を語る。同盟加盟国『胡州帝国』のクーデター阻止がその出動の内容だったが、そこで誠が使用した法術が一般に知られる法術の使用の最初の事例だったのは事実だった。それから人々はこの遼州に住む人々の持つ法術に関心を持ち、それを以前から軍や研究者が知っていたという事実を知ることになった。

そんな軍の法術研究の部署はかつては存在しない力を扱う奇妙な集団として扱われるか、トップシークレットとして機密の中に閉じ込められるのが宿命だった。元々外惑星に存在し、地球からの移民が圧倒的に多く研究の遅れていたゲルパルト共和国の国防軍法術研究機関出身のヨハンはよく当時の自分の研究を無駄飯食いと評した友人のことを語ることが多かった。だがその巨体を見ると本人が無駄飯食いなんじゃないかと誠ですら思うことが多かった。

ヨハンの晴れ舞台という法術に関する説明を行う会議室。だがその光景はあまりに間抜けだった。ほとんど多目的ホール扱いのこの部屋。来月に豊川市街で行なわれる予定の節分の行事のために用意された鎧兜が所狭しと並べられ、その合間には同じ日に上映される自主制作映画の為のコスチュームの入った箱などがてんでんばらばらに並べられている。これまでに無い事件を検証するにはあまりに乱雑である意味シニールにさえ見える部屋。そこでヨハンは晴れやかな表情で周りが気になって仕方が無い誠達を見下ろしていた。

「あのなあ、ヨハン。ここで本当にいいのか？」

座っているパイプ椅子を傾けながら要がヨハンにしみじみとつぶやいた。ヨハンもとりあえず半笑いで周りを見渡す。彼がどんなに自分のこれからの言葉に自信を持っているようがずらりと並ぶ着ぐるみや鎧兜の葛籠が消えるわけも無い。

「しゃーねーだろ？他の部屋は雑兵衣装であふれかえっているんだからよー」

頭をペンで掻きながらランが答えた。現在捜査の中心は法術特捜の嵯峨茜警視正だが、彼女と部下のカルビナ・ラーナはすでに5件もの違法法術発動事件を抱えて身動きが取れない状況だった。それを彼女の父親で保安隊隊長嵯峨惟基特務大佐が下請け仕事と銘打ってとってくるのはいつもの話だった。そしてそうなると本来は人型ロボットで切った張ったが商売の実働部隊が暇人だと言うことで担当させられることになるのもいつものことだった。

実働部隊長のランはしばらく自分の発表の場が余りにカオスなことにシヨックを受けているヨハンの隣からなにかメモ書きを彼に手渡していた。その先には鼻と唇の間にペンを挟んで退屈そうにランを見つめている第一小隊二番機担当のナンバルゲニア・シャムラード中尉がいる。そしてその隣でネットの海に直結した電腦デバイスの世界に逃避しているのは三番機担当の吉田俊平少佐だった。その隣、一人だけノートを持ってペンで何かを書こうとする神前誠。その両隣は第二小隊小隊長カウラ・ベルガー大尉と西園寺要大尉が座っている。

「あのー説明始めていい？」

「ヨハン、こいつ等のこと気にかけるだけ無駄だぞ。てきとーに話して終わりにしよーや」

投げやりなランの言葉に説明をするということでヨハンの低いテンションはさらに低くなる。

「じゃあ、はじめます」

「はい！」

演操術について語ろうとした話の腰を見事に空気を読まないシャムが元気に手を上げてへし折った。

「なんだ？」

「たぶんアタシわかんないから寝ててもいい？」

シャムの言葉にランは悲しげな表情で隣に座ってにやけている吉田に目を向けた。

「シャム……」

「冗談だって！ね、ランちゃん」

「冗談？いつものことじゃねえか」

明るいシャムの言葉に要が突っ込みを入れた。呆れているラン。いつもの光景にヨハンは自分の不幸を笑うような力の無い笑みを浮かべた後、モニターに画像を転送した。

円グラフ。そこにはテレパス、空間干涉、意識把握などの法術の能力名が並んでいる。

「見ての通り法術師の発生確率は一万分の一以下とされている。ほとんどが遼州系の人物だが、確立は落ちるが純潔の地球系の住民にも法術師の発生が確認されている」

「先生！いいですか？」

「なんですか？西園寺大尉」

話の腰を折られて吐き捨てるようにつぶやくヨハンをいかにも楽しそうな要が眺めている。

「血筋云々の話は別としてアタシみたいなサイボーグに法術師の発生例はあるんですか？」

「そう言えば康子さんは空間干涉の達人だったな」

要のもっともな話にカウラが頷く。

「今のところサイボーグの法術師の発生例は無いんですがね。ただ西園寺大尉がその初めての例になってもおかしくないですね」

「と言うとなんだ？」

退屈そうなランの一言に大きく頷くヨハン。

「先ほど法術師の発生に純潔の地球系でもその例が紹介されている

と言う話ですが、すべての発生例が遼州系の住民と接触する機会が多い人物に限られています。当然大尉は神前と接点が多いわけですから法術の才能が開花してもおかしいことはひとつありません」

「ふうん」

満足したと言うように要は椅子の上で伸びをした。

「それじゃあ私とその力を得ても良いわけだな？」

今度はカウラだった。説明するだけ面倒だと言うようにヨハンはニヤリと笑って頷く。ようやく話が軌道に乗ってきたので先ほどまでの憂鬱な表情はヨハンの顔からは消えていた。

「まあそれじゃーいくらでも法術師は増えるわけだな」

ランのまとめで次の話題に移る所だが、すぐにヨハンは首を振った。

「違いますね。そこそが一番今回現れた犯人の能力である『他能力制御』の肝ですから」

そう言うときヨハンはモニターの画面を切り替えた。そこには各能力とその能力がどのように発動するかの図が載せられていた。

「多くの法術は視床下部のこの部分の異常活性化を原因としていると言う説が現在定説ですが、この……」

「御託はいーんだよ。さっきの話の決着つけてくれ」

小さいランの一言に研究者としてのプライドを傷つけられたと言うように大きく深呼吸をするヨハンの姿は実に面白くて誠は噴出しそうになるのを必死にこらえた。それはすぐにヨハンに見つかり、冷ややかな視線が誠に集中した。

「手っ取り早く言うとな術師の法術発動の際の特殊な脳波は周りの人々の脳波にも影響を与えるんです」

「で？」

「逆に法術を常に待機状態にしている法術師に同じように脳波での刺激を与えれば法術は本人の意図と関係なく発現し……」

「その脳波を発した人物。演操術師の意のままに発現するってーわけか……こりゃー面倒な話だな」

ランの顔が引きつる。

「つまりあれか？ほとんどの能力の乗っ取りが可能なわけなんだな？」

珍しく真剣な表情の要。その問いにヨハンは大きくうなづいた。

「再生能力なんかの接触変性系の法術以外は発動可能です」

「接触変性？」

シヤムはそう言うと言わりを見回す。しばらく頭を掻いた後で要がシヤムの鼻を突付いた。

「お前や島田の再生能力のことだよ！再生や治療系の能力は直接触ってねえと駄目なの！」

「ああ、そうなの！」

分かっているのか分かっていないのか分からない調子で元氣よくシヤムが叫ぶのが部屋に響いた。

「どうでも良いけどよう。要するに能力を持つてる奴の能力を勝手に使うことができる能力の持ち主がいる……って結構やばいことなんじゃねえの？」

「そりゃーそうだろ。だが法術を意識して探査してそれを利用しようとする。法術を知らなきゃ使いこなせない能力だ。元々法術自体が表ざたにされていない状況ではそんな能力を持っている奴も一生法術とは無縁で暮らせたのがこれまでの世の中だ。半年前の神前の能力を見たおかげでそんな面倒な能力に目覚めちゃったってーわけなんだからな……。意外と本人も迷惑に思ってるんじゃないか？」

ランのまともにヨハンが頷く。そしてどうしようも無い重い空気が会議室中に流れた。その空気の意味は誠にも十分分かった。最初に法術を公衆の面前で堂々と使って見せた最初の人間が自分である。それは誠自身が常に自覚し、時に自分を責めている事実だったから。ランもそれに気づいて咳払いをするとなんとか部屋の雰囲気良くしようと部下達の顔を眺めてみた。

「皆さーん！元氣して……無いわね」

沈鬱な雰囲気破って現れたのはこういふときは必ず現れると言

っていい運行部の騒音製造機と呼ばれているアイシャだった。

「なんだ？オメーがここに来る用があるのか？」

当然のように重い面持ちのランの言葉に入り口で氷ついたようになるアイシャ。

「いやあ……キム少尉が制圧用兵器の試射を要ちゃんに頼めないかって言われて……」

真剣なラン。しかも元々かなり目つきの悪い悪童という感じの視線ににらまれるとさすがのアイシャも回り道せずに用件だけを口にするしかなかった。だがそれまでの憂鬱な空気にうんざりしていた要はやる気十分で立ち上がった。

「ぐだぐだ考えるのはちっちゃい姐御とデブに任せるわ。アタシは自分のできることをするよ」

「ほー、言うじゃねーか。まあ一応気にかけてくれてることだ。今回の事件は法術がらみだが初動捜査が東都警察が仕切っているからな。アタシ等の出る幕がねーほーがいいんだ」

そう言う興味心身で立ち上がるラン。ヨハンは自分の講義が中途半端に終わったことが不満なように手にした小さなディスクを机の腕でくるくると回している。

「おい！オメエ等も来いよ！」

入り口で叫ぶ要を見てカウラと誠は顔を見合わせた。

「アタシも行く！俊平は？」

「俺はちよつとヨハンの旦那に確認することがありそうだからパスだ」

そう言って胸のポケットからコードを取り出して首筋のジャックに刺す吉田。納得したようにシャムは立ち上がって要について出て行く。

「オメー等も来い。こっちの実演の方がアタシ等には重要なんだから」

戸惑っていた誠とカウラにランが声をかけてきたので二人は渋々席を立った。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 5

会議室を出ると冷たい風が吹きぬけたので誠は思わず首を竦めた。後ろに続く要はそれを見て何か言いたいことがありそうだがあえて黙っていると言う表情でそのままアイシャの後に続いて進んでいく。

「早くしろ」

ランに背中を叩かれて我に返った誠はそのまま廊下を小走りに進んで勤務服のポケットに手をつっ込んだまま足早に歩く要に迫っていた。

「制圧用の火器ってガス弾ですか？」

誠の問いにいかにも不機嫌そうな顔をして要が振り向く。そして大きくため息をついて後ろを歩いているカウラに目をやってまたため息をついた。

「そんなもん警察の機動隊がデモ隊相手に使う道具じゃねえか。うちはもっと非常事態に適したのを使うんだよ。そもそもショットガン撃ちが言うことじゃねえぞ、そんなこと」

それだけ言うと満足したように早足でアイシャの後を追う要。誠の携帯小火器は確かに9ミリ拳銃弾用に改造されたAR15アサルトライフルの下にショットガンを実装した銃であることは確かだった。誠はまだ要の言葉の意味もつかめずに彼女達の後を追った。そのまま実働部隊詰め所と管理部の前を通り過ぎハンガーの広がる景色を見ながら階段を下りる。

ハンガーでは修羅場の様相が展開されていた。部隊長の嵯峨曰く『上から押し付けられた』と表現される新型機の運用状態へ持ち込むための整備手順の確認訓練がいまだに続いていた。保安隊の制式採用機である『五式』よりもより古代遼州文明が使用していた人型汎用兵器に近いとされるオリジナル・アサルト・モジュール『カネミツ』、『クロームナイト』、『ホーンオブブルージュ』。

たった三機増えたただけだと言うのにハンガーを走り回る技術部の

技師、島田正人准尉の部下を叱る怒声はいつもよりかはるかに鋭く感じられた。

「お疲れさんです！」

誠は寮長を兼ねている島田に頭を下げた。島田はそれを見るとにんまりと笑いながら駆けつけてきた。

「おっ！皆さんおそろいで。キムの野郎のところですか？」

「なんだよ、お前等には関係ねえだろ？」

さすがに死にそうな表情で作業をこなしている部下に背を向けて声をかけてきた島田に要は呆れたようにそう答えた。

「西園寺さん。あれは次にはうちの餓鬼どもに撃たせる予約が入っているんですよ」

「へえ、お前等もあれを撃つのか？」

要の声に頭を掻いて周りを見回す島田。島田の言葉が聞こえたと思われる隊員はさらに続くだろう訓練を想像したらしくげんなりした表情で機材の影に消えていく。

「おい！西園寺！」

「無理するなよ！」

ランの怒鳴り声がハンガーに響く。要は舌を出すとそのままランのところに急いだ。

「神前、お前も呼ばれてるみたいだぞ」

二人の会話に呆然としていた誠に島田が声をかける。誠も我に返って島田を置いて技術部の詰め所が入っている一階のフロアーに駆け込んだ。

「技術部の人もやるんですか？」

誠の問いにただニヤニヤ笑うだけの要。そして先頭のアイシャは小火器の管理を担当するキム・ジュンヒ技術少尉が主を務める技術部第二分室の扉のドアをノックした。

「開いてますよ！」

キムの声が響いたのでランは先頭になり部屋に入った。

「これかよ……」

先に入った要の声に少し興味を持ちながら続いた誠だが、そこに待っていたのは明るい青色の樹脂でできたショットガンが並んでいる光景だった。そのうちの一丁を長身の作業着に汚れた前掛けをつけた士官がランに持たせて小声で説明している。ランは何度かうなづきながらその隣に置かれた弾薬の入ったケースを叩きながら振り向いた。

「模擬弾使って射的ごっこか？つまらねえな」

「模擬弾とは失敬な！一応鎮圧用の低殺傷弾入りのショットガンですよ」

それまでランと小声で話していた作業着の将校、キム・ジュンヒ技術少尉がきつい調子で要に反論した。

「威力が半端なだけになお悪いや」

頭を掻いて銃に手を伸ばす要。誠はランの手元のオレンジ色の派手な弾薬の箱に目を向けていた。

一応司法執行機関と言う保安隊の名目上、当然暴動や治安維持任務には低殺傷能力の武器の使用も考慮されており、それに適した銃も抱えていたところで不思議は無かった。事実、以前ベルルカン大陸での選挙監視活動で第四小隊と随伴した警備部の部隊が現地で活動した際の映像にも目の前の青いショットガンを抱えて警備に当たる島田達整備班長の姿を眼にしていた。

「これってどれくらいの威力があるんですか？」

弾の入っていないショットガンを手に弄り回している要に尋ねる誠。振り返った要の顔は明らかにがっかりしたような表情に変わっていた。

「あのなあ、そんな子供がエアガン買うときみたいなこと言うなよ。名前の通りの威力だ」

そう言うのと静かにガンラックにショットガンを戻す要。その隣ではこの小火器管理を担当する隊の隊長であるキムがランの手元の箱を開けてバスケットに中のオレンジ色の弾薬を入れているところだった。

「まあ当たり所が悪くない限りは打撲ぐらいで済むんじゃないかなあ……何ならお前が的になるか？」

そのままショットガンを手にとろうとするラン。誠は身の危険を感じてそのまま壁にまで飛びのいた。

「いい事言うじゃねえか。じゃあ防弾プレート入りベストを貸してもらってお前は標的役を……」

同じようにオレンジ色の銃を手にとろうとする要。

「西園寺さん！ふざけないでくださいよ！」

本当にやりかねない要を見ながら誠は泣くような調子で叫んでいた。

「それじゃあ……つとふざけてないで行くぞー」

ランはそう言う和一挺のオレンジ色のショットガンを手取る。

カウラもアイシヤも静かにそれを手にした。

「おめえはどっちにする？」

要は手にした派手なオレンジ色の樹脂製のセミオートマチックショットガンとポンプアクションショットガンを誠に手渡した。

「僕はこっちが慣れてるんで」

そう言うとな誠は迷わずポンプアクションショットガンを選んだ。

部屋を出ながらまじまじと銃を見る。派手なオレンジ色の銃が並ぶ姿は異様だった。考えれば使用弾薬が殺傷用のバックショットやスラグが入っているのと低殺傷能力の布製弾が入っている銃に見分けをつけるのは合理的だがそれにしても明らかに毒々しく塗られた銃は異様だった。

「早速訓練ですか？」

誠達を待ち構えていたと言うような表情の島田にランは思わず手にしていた銃を肩に背負った。

「おー、ちよっくら鴨撃ちだ」

「冗談よしてくださいよクバルカ中佐！」

ニヤニヤ笑いながらボルトを磨いていた部隊で二人しかいない十代の隊員西高志兵長が叫ぶ。

「くだらないことばかり言っているとボコにすんぞ！」

要の脅しに西の後ろで端末をいじっていたアメリカ海軍からの出向技官のレベッカ・シンプソン中尉が西の前に立ちほだかる。

「お熱いことで！おっぱいお化け！」

いつもレベッカの豊かな胸に嫉妬している要が叫ぶのを聞くと今度はアイシャが笑い出した。

「なんだよ！」

「いやあ、要ちゃんの反応がいつもどおりで平和だなあって思っちゃったから」

そう言うときアイシャは手にしたショットガンのフォアードレバーをガチャガチャと動かして見せた。

「早くしろ！」

すでにかなり先まで歩いていったカウラの声が重機のうなるハンガーの中で鋭く響いた。仕方が無いと言う表情で要は手にした銃を肩に乗つけたまま急ぎ足で歩いた。

「でも……オリジナル・アサルト・モジュールの出る幕なんてあるんですかね？」

誠の問いに要は首をひねりながら私に聞くなと言うような顔をして歩き続ける。ハンガーも半分を過ぎるとすでに整備を終えて待機状態の部隊の制式アサルト・モジュール達が静かにたたずんでいる。誠はその威容にいつものパイロットの誇りを思い出しながら黙って歩き続けた。

ハンガーを出ると思いきいに銃を背負って疲れ果てたような顔をしている兵士達が現れた。着ているのは都市迷彩柄の保安隊の制式戦闘服。さすがに訓練と言うことで防弾ベストやマガジンポーチの類は身につけていないがそれでもやはり保安隊が軍隊に準ずる組織であることを誠にも思い出させた。

「姐御は絞るねえ」

要が兵士達、保安隊警備部員の姿を見てつぶやく。一応中佐や大尉の階級のラン達を見つけてよろよろと敬礼する警備部員。イヤー

プロテクターをはずそうとする姿は明らかに疲れ果てて見えた。

「あ、ラン。これからそいつの訓練か？」

中で一人、きっちりと戦闘服をそろえて着込んでいる長身の女性将校が金色の髪をなびかせながら近づいてきた。警備部部长、マリ・シュバーキナ少佐。その姿を見てランはにやりと笑う。

「その様子だと的当てだけじゃなくて相当走らせたな……銃の訓練はそれからか？」

「まあ体が資本だからな、この業界は。それと銃の扱いも多少は慣れるべきだろう」

「慣れるってレベルじゃねーだろ」

ランがそう言うのももったもっただった。月に一万発のアサルトライフルでの射撃訓練。そんなことをしている部隊といえば東和には他に一つもなかった。それにいつもなら先ほどの格好に金属防弾プレート入りのベストと弾のぎっちり詰まったマガジンを持てるだけ持った状態でのランニングが訓練に加わると言う。

「ランのところが甘すぎるんだ。多少は鍛えるべきだろう？」

「予算がねーよ。うちはただでさえアサルト・モジュールなんていう馬鹿みたいに予算を食う機材を扱ってるんだ。それに茜お嬢様のお手伝いもしないといけないからな。なかなか難しいもんだよ」

そう言うところランは手を振って自分についてきた誠達をせかした。

「ちゃんと訓練をしておけよ」

マリアが明らかに誠に対してそう言った。誠も射撃に関しては自信がないこともあって申し訳ないという表情で敬礼をしてみせる。

「ついて来い！」

ぎこちない誠の腕を要が思い切り引っ張る。よろめきながら誠は射場が見えるハンガー裏手に向けて歩き出した。流れ弾を防ぐ土囊のめぐらされた通路を越えたと空薬莖が転がる射撃レンジが目に入る。先頭を歩いていたアイシャが手にしたバスケツトからショットガンの弾薬の箱を取り出すとテーブルの上に次々と弾の箱を並べていった。

「どーれ……サンドバック弾か……こいつは銃には悪そうだなー。袋が破れりゃ砂がバレルにへばりついて……キムも苦勞しそうだよこりゃ」

駆け足でアイシャに追いついたランが仕方がないというようにオレンジ色の毒々しい箱を開け始める。誠やカウラも仕方がないというようにそのまま射場に上がった。

「誠、オメエ的な」

「西園寺。冗談を言う暇があったら弾を込めろ」

カウラはそう言うとし新しい弾の箱から取り出した弾薬を一発一発オレンジ色の銃の下に開いたローディングゲートに弾を込めていく。「これって何が入っているんですか？」

実は普段から同じ構造のショットガンを銃の下にぶら下げて使用している誠の言葉に要は大きいため息を着いた。

「あのなあ、基礎も基礎だぞ。弾頭には布製の袋が入っているんだ。その中身は重量のある樹脂。約5メートルで10センチくらいの大きさに開いて目標に到達。打撃力で相手を無能力化するというのが売り文句だ」

要は呆れながら弾が全弾バレルの下のマガジンに入ったことを確認するようにローディングゲートを手でさすっている。

「実際有効性があるのが25メートルくらいだからな。かなり銃を撃つタイミングが難しい。クバルカ中佐。私からいいですか？」

言葉を継いだカウラが弾を込め終わると静かにフォアグリップを引いていた。

「おっし。口で言っても分からねーだろうからな。そこの鉄板にぶち込んでやれ」

ランがそう言うそのままカウラは10メートルくらい先の鉄板に狙いを定めた。すぐに初弾が放たれる。銃声の後、鉄板が鈍器で殴られたように大きく揺れる。

「へえ、面白いわね。じゃあ私も」

そう言うときアイシャはシャムが使っているショットガン、サイガ

と同型のオレンジ色に塗られたショットガンの重厚を30メートル先のペーパーターゲットに向けた。

三発の銃声。そして着弾点で上がる土煙。

「面白いわね」

ニコニコ笑いながらアイシャはテーブルに置かれていた拡大鏡に手を伸ばした。

「ああ、当たってるわね。私すごいわ」

満足そうに頷くアイシャ。その同じ方向を要が見つめている。サイボーグらしく望遠機能を使用しているようで静かに額に右手を当てている。

「……当たり前だ、こんな距離」

「じゃあお手本を見せてよ」

口を尖らせるアイシャに対して笑みを浮かべてオレンジ色の銃にのフォアグリップを引く要。すぐさま五連射。すべてが15メートル先のこぶしほどの大きさの鉄板に命中する。そして満足げに全弾撃ちつくしたと誇るように誠達を見回す要。

「さすがよねえ。これは一応褒めとくわね」

再び拡大鏡を手にとると頷きながらアイシャは鉄板を眺めた。おそらく当たった際に飛び散った袋の中の樹脂の塊が染め上げたのだろう。誠から見ても要の放った弾丸が全弾鉄板に命中してそれをオレンジ色に染め上げた事実を確認することが出来た。

「じゃあ私もやるか……」

カウラがそう言って初弾を装てんしたところでランがカウラの銃に手を置いた。

「オメー等射撃ごっこしているわけじゃねーんだ。全員そこに並べ」

仕方ないと言うようにカウラは銃口を上に向けて要達が使っていた射撃レンジに立った。要もアイシャも小さいとはいえ上官のランに逆らうわけには行かずに隣のレンジに移る。

「あのー僕は？」

「神前は撃ち方自体がおかしいから。ここでアタシの撃ち方を見てろ」

そう言うのと130cmに満たない小さな体には大きすぎるショットガンの銃口をターゲットに向ける。

「まず反動は普通の殺傷弾よりでかいからな。こうしつかりホールドするわけだ」

「まずアタシは普通の人間よりちっこいからな。こうしてしつかり銃にぶら下がるわけだ」

ランの声まねをする要。思わず噴出しそうになる誠だが上官相手とあって必死になってこらえる。

完全に要を無視していたランが初弾をターゲットに命中させる。そして驚いている誠に見せ付けるようにして短い手で起用にポンピングしながら5発の弾丸を発射して見せた。

「こうやるもんだ」

「小さいからな。よくできたなあ」

「西園寺。一度死んでみるか？」

殺気立つラン。その元々にらんでいる様な顔がさらに殺気を帯びる。

「とりあえず見本だ」

カウラはそう言うのと等間隔で五発の連射を行なう。ターゲットの金属プレートが煙に覆われる。

「低殺傷能力でもこれは危ないんじゃないですか？」

誠の言葉に要が心底呆れたという顔をしている。

「『低』だからな。オメエが三ヶ月前まで使ってた22LR弾だって当たり所が悪ければ人は死ぬぞ。こいつも同じだ。頭とかに当たれば場合によっては十分死ぬからな」

「そんなものよ。まあ警棒を振り回すよりは文化的でしょ」

要は機械のような動きで一発つつ確実に、アイシヤは銃を裏返してバレルの下弾倉にオレンジ色の派手な色のショットシェルを押し込んでいる。

「なんやかんや言いながら嫌いじゃないんだなお前等も」

カウラはそう言うのと呆然と突っ立っている誠のひじを小突いた。仕方なく誠も不器用な手つきで弾倉を開いてショットシェルを押し込んでいく。

「遊びじゃねーんだからな。狙う対象は暴動に発展しそうな興奮状態の暴徒。それを一撃で殺さずに行動不能に陥らせる。それを頭の中でシミュレーションしながら撃てよ」

ランもまた装弾を開始していた。バスケツトの中の弾は五箱。実銃の射撃訓練に比べると明らかに少ない。

「これも高い弾なんですか？」

弾を全弾装てんしてフォアエンドを引いて薬室に弾を込める誠。

「まーな。結構な値段だがスラグ弾やバックショットとはかなり弾道が違うぞ。急激に初速が落ちるからかなり狙いより下に当たることを考えろよ」

親切なランの言葉を聴くと誠は銃口をターゲットに向けた。

「ボスン」

誠の撃った初弾はあっさりと出たがターゲットの手前で着弾した。「もっと銃口を上げろ。初速は普通のスラグなんかよりぜんぜん遅いんだからな」

ランの言葉に少しばかり焦りながらポンピングをする。

そして狙う。照準装置の無いショットガンでは感覚で着弾点を覚えるしかないことが誠も知っていた。

「ボスン」

今度はターゲットを飛び越えて白い弾頭らしきものが飛んでいくのが見える。

「ったく……お前本当に東和軍の幹部候補の課程を通過したのか？」

呆れる要に首をひねりながら再びショットシェルを込めて銃口をターゲットに向ける。

「ボスン」

ようやくターゲットの中央に弾が当たったのが分かる。人型の鉄板が揺れて着弾を表している。

「ボスン、ボスン」

四発撃ち尽くして誠は大きなため息をついた。

「誠ちゃん。もう少し練習しようね」

アイシヤもさすがに呆れたと言うように誠の肩を叩く。仕方が無いとうつむく誠を見ながらカウラは自分の銃に弾を込めていた。

「まあ神前には剣があるだろ？ どうせこの距離くらいでの衝突だ。警棒で対応できれば文句は無い」

「その警棒で対応できないからこいつを使うんじゃないか？ 甘いねえ、隊長殿は」

カウラのフォローを台無しにする要。誠はいつものことなので逆に開き直って銃に弾を込め始めた。

「とりあえずこいつを消化しろとのお達しだ。特に神前は構えるところからはじめる必要があるな……西園寺！」

「はい！」

ランの言葉に要はニヤニヤ笑いながら誠の銃に手を伸ばす。誠はこのまま何時間かこの樹脂製の割りに重い銃の構え方を繰り返し返させられるかと想像して大きなため息をつくのだった。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 6

すでに訓練用に持ち込んだ弾はもう残りわずかだった。だが誠の銃の構え方が遅いとランと要からの指導は続いていた。銃口を下に向けターゲットに正対して立つ。そして合図とともに銃口を上げてすばやくターゲットに照準を合わせる。その繰り返しがもう100回以上繰り返されるとなれば体力には多少の自信のある誠でもさすがに腕に痺れが来た。それを見ながらニコニコ笑うアイシャ。カウラは厳しい表情を崩さない。誠はさすがにギブアップすべきかと考えながら銃を再び胸の前に構えた時だった。

「どうだい、進んでるか？」

突然背中から声をかけられて誠はびくりと振り返った。

そこには部隊長嵯峨惟基特務大佐がいつものようにタバコをくゆらせていた。

「こー言うところじゃ火気厳禁じゃねーんですか？」

「厳しいねえ、さすが鬼教官殿だ」

ランの注意に仕方がないというように嵯峨は啞えていたタバコを落として踏みしめた。

「こー言う事もうちのお仕事だからさ。神前にも一応体験しておいてもらわないとね」

「体験……まるで遊園地かなにかに行くみてえだな」

「まーそんな感じに思えて来るねー、このぼんぼんにものを教えていると……じゃあとりあえず装填」

ランの言葉に誠はテーブルの上の箱から一発ずつショットシェルを取り出すと銃の下の方のローディングゲートから装填を始めた。

「何度も言うがどの銃でも基本は同じなんだ。狙って標的に当てる。簡単だろ？」

カウラの教えも射撃にコンプレックスを持っている誠には逆に堪える言葉だった。静かに冷静に。そう言い聞かせながらフォアグリ

ツプを引いて弾を薬室に叩き込む。

「ボスン」

引き金を絞ると何とか25メートル先の標的が銃撃を受けて揺れた。

「なんだよ当たるじゃねえか」

「叔父貴。そりゃあ止まっている的だからな。これで外したら間抜けとしか言えねえぞ」

興味深げに標的を見る嵯峨に要はそうつぶやいた。

「でもさっきは外したよな」

再びのカウラの言葉にがっくりと誠は肩を落とした。

「叔父貴。何しに来たんだ？」

元々要の生家である胡州大公西園寺家の三男から大公嵯峨家へと養子に出された嵯峨惟基。血縁では要の叔父に当たるのは誰もが知るところだった。

「仕事がさあ。ちょっと煮詰まってね」

それだけ言うとは足元にもみ消したタバコを再び踏みしめる。その様子はいつものものにらんでいるような目のランの監視の下に行なわれていた。

「分かったよ、拾うよ」

めんどくさそうに吸殻を拾う嵯峨に大きなため息をつくカウラ。

「仕事って……また法術関係の話っすか？」

ランはそう言うとはショットガンのセフティを解除してターゲットに狙いを定める。

「ボスン！ボスン！」

発射された弾丸が正確にマンターゲットの首の辺りに命中する。

「まあな。結局は史上最初の法術のデモンストレーションをやった俺達だ。そのことに関しての問い合わせは年中無休だ。本当に体がいくつあってもたりねえよ」

「元々質問とかに答える気はねえのに何言ってるんだか……」

要はそう言うと同じようにランと並んで射撃を始める。

「そう言えば先日の火災事件では大変だったらしいな」

「今更……」

カウラは諦めたように肩を落として弾の装填を始める。誠も仕方なく彼女をまねるように装填を始めた。

「演操術ねえ……。面倒なことにならねえといいんだけど」

心配そうにそう言うのと嵯峨は背を向けてそのまま土囊の合間に消えた。

「何しに來たんだ？あのおっさん」

そう言うのと撃ちつくした銃をラックに置いてのんびりと伸びをする要。視線を向けられてカウラもアイシャも首を振る。

「あの人も結構大変なんだからよー。少しは汲んでやれよ」

「それは副隊長のお仕事じゃないですか？私達がどうこうできるところじゃないし……ねえ誠きゅん！」

アイシャに話を振られて薬室に弾を装弾したばかりの誠はうろたえながら頷いた。

「あぶねーだろーが！」

素人同然の誠が射撃をしようとしているところに声をかけたのを見つけてランがアイシャの頭を小突く。舌を出しながらそのままアイシャは椅子に腰掛けた。

「ボスン」

また誠がショットガンを撃つ。再びマンターゲットの足元に煙が立ち込める。

「神前よー。少しはまともに当ててくれよ。お前の弾が当たった辺りでアタシ等が戦闘中かも知れねーんだぞ」

ランの言葉に静かに頷く。そして今度は少し銃口を上げてターゲットに向かう。

「ボスン」

今度は腰の辺りに着弾する。白い布状の弾丸が展開しているのがよく見えた。

「そうだ。忘れるなよその感覚。慣れてくれば狙いをつけなくても

軽くあれくらいの場所に当てられるんだ」

そう言うところランも弾を込め終えた銃を持って射場に立った。

「バス！バス！バス！バス！」

四連射。マントーゲットの腹部に何度となくぶつかる弾丸。

「ようやく調子が出てきたところで弾がなくなつて終了……か」

そのランの言葉にほっとしている誠。その表情に要とアイシヤはにんまりとした笑みを誠に向けてくることになった。

「でもなんだかお巡りさんみたいでいいわね」

アイシヤの何気ない言葉に先ほどの嵯峨の言葉が思い出された誠。

「今回の事件。うちに協力依頼が来ることは……」

「あるんじゃないか？筋から言えば東和警察の領分だが……連中には法術の知識なんてあつて無いようなもんだからな。依頼がまだ来ないのはあつちにも面子があるからな。まずは鑑識のデータを茜の嬢ちゃんのところへ送つて分析依頼くらいが同盟嫌いの警察官僚のできる最大限の妥協だろうな」

ランはつぶやきながら手にした銃の銃身を何度か触つてそれがかなりの熱を持っていることを確認していた。

「それって余計惨めになるだけじゃないのかしら？データ貰つても解析できる部署は限られてるわよ。自前の研究施設にデータの解析を頼むにはあまりにも小さい事件だもの」

「アイシヤの言うとおりだな。厚生局事件クラスなら本庁一丸となつてと縦割りの垣根を無くして見せるが被害が小さければあのかぼちゃ頭は動きやしねえよ。瑣末な事件扱いで警察署単位の捜査本部を置けばまだましな判断じゃねえかな」

要の皮肉を込めた笑み。だがそのタレ目は笑っていない。

「演操術の異質性を教えたところで動くには東都警察の組織は大きすぎる。そうになると専門家にいつものように外注に出すわけだ」

カウラの顔を見てまた厄介ごとに巻き込まれると思つて誠は銃を握り締めながら大きいため息をついた。

静かに書類に目を通す男。何度と無く黒ぶちの眼鏡を掛けなおす。その姿からその眼鏡が老眼鏡だと言うことは誰の目にも明らかだった。手にしている役所の書類は『法術適正確認書』と呼ばれる書類だった。何度と無くその書類の能力の欄が空欄になっていることを確認し、それでいて適正が有りになっている事実には首をひねる。

「法術適正はあるけど能力が無い……本当に？」

狭い不動産屋のカウンターで広がってきた額に手をやる店主。書類を見るのに疲れて老眼鏡を外しながら目の前の若干天然パーマぎみの疲れた表情の男の顔を覗き込んだ。

男は何度と無く同じ質問を受けてきたのでさすがに口を開くのもばかばかしいと言うように頷いた。実際法術適正検査が任意で行なわれているということになっている東和。だが、実際こうして部屋を借りようなどと言う時には法術適性検査で未反応だったと言う証拠が必要になると知ったのは最近だった。そしてこうして部屋を探すことになることも最近までまるで考えにも及ばなかった。

そんな男の部屋探しの連続面接行事だが、三件目の30くらいのきつい近眼の眼鏡をかけた女性の担当者などはかなりひどかった。法術適正はあるかと聞かれ、証明書を出すとそれを投げつけて貸す部屋などないと言い放つ姿には逆にすがすがしささえ感じてしまった。

「それにしても……学生って……おたくいくつ？」

「三十二です」

「で、大学生？」

「法科大学院ですけど……」

店主は灰色の背広の袖を気にしながらそのまま振り返り端末に案件を入力していく。

天然パーマに眼鏡、黒い時代遅れの型のジャンパーを着こんでい

る姿は他人から見れば確かに相当滑稽に見えるだろう。そう水島勉は思いながら店主の苦々しげな顔を覗き込んでいた。入力を終えた店主はこの店に入った当初、まだ水島が法術関連のことに言及する前の親しげな表情に戻ると手を打って笑顔を向けてきた。

「ああ、法科と言うと明法大だね？」

「ええ、そうですけど」

これもまた何度も繰り返された話題だった。法学部で数多くの司法試験合格者を輩出している名門。この豊川市にキャンパスがある以上、それが自然な話と納得するのも当然のことと言えた。

「それにしても最近はこの能力があるなんて……放火魔がパイロキネシス能力を持っていたりしたらどうなるんだろうねえ」

世間話のつもりで親父がつぶやくのを聞いて水島は正直うんざりしていた。これまでこんな会話をどれだけ聞いてきたことだろう。法術適正の無い連中の無神経な一言がもちたくも無いのに力を持っていることが分かってしまった自分達をどれほど傷つけているか。たぶん彼等には死ぬまでわかることはない。そう思いながらもなかなか検索結果が出ない時代遅れの端末をそれとなく覗き込む水島。だが店主は自分の世間話に何も反応しない水島をいかにもひどい男だと言うような表情で見つめてくる。仕方なく水島は口を開いた。

「でも……存在が発表される前にも能力はあったんですよね」

店主の反応は冷ややかだった。そんなことは知っているよと言いたげに口を曲げるとそのままようやくデータが映し出された端末に目を移す。

「それはそうだけどさあ……あ、これなんてどう？」

親父はそう言うと言水島の前の画面に1Kの物件のデータを表示した。

「8畳一間で……キッチンとユニットバス……それで8万は高いですか？」

水島の抗議にしばらく自分の提示した案件に目を通す店主。

「確かにねえ……でも最近はおーナーの意向で法術適正のある人間

は止めてくれっていう話が多くてね……いや、私はそんなことは気にすることじゃ無いって言っているんだけどね……」

店主のあからさまに気持ちの入っていない言葉。また水島は不愉快と付き合うことになる時間を過ごす自分を見つけることになった。恐らくは法術適正のある人間には多少の無理を言っても聞くだろうと言う計算がアパート経営者の間でも広まっているのだらうと改めて感じた。

海のものとも山のものとも知らない力。そんなものを抱えている人間に部屋を貸すのはギャンブルに等しい。自分にもし力が無ければそう考えたかもしれない。そう思いながら水島はとりあえず考えさせてくれと言うタイミングを計っていた。

「この案件も……法術適正を問わないとなると……すぐ決まっちゃうかもしれないな。明法大の推薦入試の結果は一昨日出たところだからねえ。昨日も親御さん連れて法術適正の書類持った高校生が来てね。結構苦労してたよ」

そう言う店主は顔を上げてニヤリと笑う。

明らかに今決めろ、貴様にはそれしか道は無い。そう言っているように水島には見えた。

「ちよつと……詳しいことを教えてもらえませんかね」

水島はその彼の言葉に一気に晴れやかな表情になってデータ検索を始める店主の後姿を見つめていた。そしてただ分けも無く自分を取り巻いている周りの環境に対する恨みをまた一つ腹に抱え込んだ。

「平日だねえ」

要はそう言う自転車漕ぐ。隣を走るのはカウラと誠。二人とも毎日夕方の3キロマラソンのラストと言うことで疲れを見せながら冬の空の下で走り続けていた。

「いつまでも……正月……と言うわけじゃないだろ？」

カウラはそう言う目に見え始めたゲート目指してスパートをかけた。誠にはそれについていく体力は無かった。そのまま消えていくカウラ。

「オメエも根性見せろよ。男だろ？」

自転車を悠々と漕ぐ要。彼女は脳の一部以外はすべて人工的に作られた素材を組み合わせたサイボーグである。そもそも体力強化のランニングに付き合う必要は無いのだが、最近は気分がいいようであるとしてその度に自転車をきしませながらついてくる。

「ベルガー大尉……みたいには……」

「そうか？じゃあアタシは先に行くから」

要はそれだけ言うで一気に力を込めてペダルをこぎ始めた。すぐにその姿はゲートへと消える。

「がんばれ！あとちょっと！」

ゲートの手前でコートを着た女性士官が叫んでいるのが見えた。警備部部长、マリア・シュバーキナ少佐。『保安隊四大姐御』の二位と呼ばれる存在の彼女の登場に誠は苦笑いを浮かべながら足を速めた。

保安隊で単に『姐御』と言うと技術部部长で階級も部隊長の嵯峨と同じ大佐の許明華大佐のことを指すのは隊の常識だった。そして勇猛果敢な警備部の猛者達を仕切るマリアは第二位とされた。そして運用艦『高雄』の艦長鈴木リアナ。あの突拍子の無い副長アイシヤを抑えている彼女は姐御と言うより『お姉さん』と呼ぶのが隊の

常識だった。

「おーい。報告書終わってねーぞ！」

ゲートを通り抜けた誠の目の前でシャムに駆り出されて大根を一輪車に載せて運んでいるクバルカ・ラン中佐は『小さい姐御』と呼ぶのが一般的だった。

「わかって……ますよ」

「分かってるならシャワー浴びて来い！」

ふらふらの誠に向けてそう言うと言ランはそのまま一輪車を押してハンガーに向かう。誠も仕方なくそのまま正門へ向けて歩き始めた。「なんだ？」

思わずつぶやいてしまった誠の目の前にはシャムが背を向けて立っていた。その手には茶色いものが握られている。そしてよく見るとその足元には冬の夕方の弱い光を全身に浴びようと言うように転寝をする大きなゾウガメの姿があった。そしてシャムの目の前には巨大な茶色い塊が奇妙なダンスのようなものを踊っていた。

「ナンバルゲニア中尉！何をしているんですか？」

誠が声をかけるとシャムはめんどくさそうな表情で振り向く。そして彼女が玄関口に立つ大きな熊に何かを教えようとしていることが分かってきた。

「芸を仕込んでいるんですか？」

しばらくシャムの嫌な顔を無視して玄関に届いているほどの巨大なコンロンオオヒグマの子供のグレゴリウス13世に目を向けた。

すぐにグレゴリウスが手に何かを持っているのが誠にも分かった。そしてそれがアイシャが原作を書き、それなりにネットで流通しているボーイズラブ小説をシャムが漫画化した本であることに気がついた。

「何やってるんですか？」

呆れながら真剣な表情の小さなシャムに目をやる。身長は140センチに届かない小柄な少女。実際は誠よりもはるかに年上で遼南内戦ではエースとして活躍した歴戦の勇士である。彼女の凄みを利

かせた目は最近では誠もその恐さが分かってきたところだった。

「誠ちゃんも……アイシャの小説読むでしょ？」

真剣な顔でつぶやくシャム。誠はいくつかの短編をアイシャに読まされた上に漫画を描かされたのを思い出して渋々頷いた。

「男の人が読むと……どんな感じ？」

シャムの目はじっとグレゴリウスに注がれている。シャムが大好きな彼だが当然文字が読めるわけでもなく、人が読むのをまねして本を開いて覗き込んでいただけだった。

「それが知りたくてこうしてグレゴリウスに読ませているんですか？」

投げやりにつぶやいた誠を見ると今度はいかにも軽蔑するような視線で誠を見つめてくるシャムがそこにいた。

「グレゴリウスは熊だよ。漫画なんて読めるわけ無いじゃん」

馬鹿にした口調のシャム。時折こういうことを言われると温厚な誠もさすがにカチンと来る。

「じゃあどけてくださいよ。入れないじゃないですか」
「？」

文句を言った誠にしばらく呆然と視線を送るシャム。そしてワテンポ遅れて納得したと言うように手を打つと手にしていた干し肉をグレゴリウスの口に投げ込んだ。グレゴリウスは器用にそれを口に咥えると本を放り出してそのまま自分の小屋がある車両置き場に向かって歩き始める。

「それ、プレゼントだから」

のろのろ着いていくシャムがそうつぶやく。隣の亀の亀吉もゆっくりとそれについていく。仕方が無いいかにも怪しげな半裸の美少年達が描かれた同人誌を手にとるとそのまま正面玄関から部隊の宿舎に入った。

「あれ……？あれ？」

そこで誠は大きなため息をついた。目の前には紺色の長い髪の少佐の勤務服を着た女性士官。一番この手の本を手に行っている時に出

会いたくない上官のアイシャ・クラウゼだった。

「それ……シャムちゃんの……もしかして使用済み？」

「使用って何に使うんですか！」

「だって冬なのにそんなに汗をかいて……」

「ランニングが終わったんです！」

「ふーん。つまらないの」

そう言うのと誠から関心が無くなったというように振り向いて彼女の本来の職場である運行部の部屋の扉に手をかけた。

「ああ、そうだ。シャワー浴びてからでいいと思うんだけど……」

今度はうって変わった緊張したまなざしを誠に向けてくる。いつものこういう切り替えの早いアイシャには誠は振り回されてばかりだった。

「ええ……なんですか？」

そう言う誠が明らかに自分を恐れているように見えてアイシャは満面の笑みを浮かべた。

「茜のお姉さんが来てるのよ。何でも法術特捜からのお願ひがあるみたいで」

アイシャはそう言うとそのまま階段下のトイレに消えていった。

「嵯峨警視正が？」

誠は予想されたことがやってきたと言うように静かにうなづいた。ようやく間借りしていたこの保安隊豊川基地から東都の司法局ビルに引っ越した法術特捜の責任者である彼女の忙しさは誠も良く知っていた。司法局のビルには最新設備がある。データもすぐに同盟本部や各国の軍や警察のデータがかなり機密レベルの高いものまで閲覧できる権限を有しているのが売りだった。

だがその筋の専門家の吉田に言わせると『ハッキングして下さいといってるみたい』と言うメインフレームを使っていると言うことで、茜はあまりそのことを喜んでいないようだった。事実、こうして時々保安隊に顔を出しては吉田が設計したメインフレームを使用している保安隊のメインコンピュータを利用して手持ちのデータの

すり合わせなどの地味な作業を行うことも珍しくなかった。そしてその時に人手が足りないとなると一番暇と呼ばれている誠の第二小隊がその作業を担当させられることが多かった。

そしてそんなデータの照合作業を断れない案件には今回ばかりは誠でさえ思い当たるところがある。

「面倒だなあ」

そう言いながら運行部の詰め所を抜け、シミュレータ室の前を通り過ぎて待機室の手前にある男子用シャワー室に誠はたどり着いた。先着の人物がいるらしくシャワーの音が響いていた。誠はそのまま静かに服を脱ぐと手前のシャワーの蛇口をひねった。

「神前曹長！」

隣から目だけを出している褐色の顔の持ち主に誠はびっくりと飛び上がった。

第三小隊三番機担当のパイロット、アン・ナン・パク。このまだ19歳の小柄な人物が誠の苦手な人物の一人だった。

「なんだ……アンか……」

「僕だと不満ですか？」

そう言いながら近づいてくるアンに思わず後ずさりする誠。その少女のような瞳で見られると誠は動けなくなる癖があった。

「神前曹長はいつも僕を避けていますね」

アンはそう言うとき悲しそうにシャワーを浴び始める。確かにそれが事実であるだけに誠は頭から降り注ぐお湯の中に顔を突っ込んでそのままシャンプーを頭に思い切りふりかけた。

「そうですね。僕なんか嫌いですよ。僕みたい……」

そこまでで言葉を切るアン。

『おい……もしかして男が好きだとか言い出すのか？まじで勘弁してください！神様！仏様！』

アイシャの小説を読まされ続けて蕩けてきた脳が妄想を開始する。大体が立場は逆で長身の上官がひ弱な部下を襲う展開が多かったが、一部には逆転している作品もあったのでボーイズラブの世界に落ち

込むのではないかと恐れつつ時が経つのを待っていた。

「僕は……」

アンがそういうのとシャワー室の扉が吹き飛ぶのが同時の出来事だった。

「神前！ いい加減に出て来いや！ いつまで待たせんだ！」

怒鳴る、そして壊す。これは西園寺要の十八番である。男子シャワー室に一応女性の要が乱入してくるマナー違反よりこのままアンと二人きりで時を過ごすことを想像していた誠にはありがたい出来事だった。

「もう少し待っててくださいね……なんとかしますから」

弱弱しい誠の声を聞いた要が近づいてくるのが分かる。だが何か入り口の辺りで衣類をかき回すような音が誠の耳にも響いてきた。

「おう、アンと一緒に……」

しばらく沈黙が支配する。誠は息を殺して立ち尽くしていた。その隣では不安そうにちらちら誠の顔を覗き見るアンの目が動いているのが見えた。

「……もしかして……」

背中にシャワーを浴びながら立ち尽くしている誠。周りは見えないうが明らかに要の気配は近づいている。しかしその様子がぴたりと止まった。誠が隣のシャワーを見るとアンの姿が消えていた。

「なんだよアン？」

「西園寺さん！ 非常識ですよ！」

どうやらアンがシャワーを出て要の前に立ちはだかっているようだと言うのが目をつぶっていても分かった。誠は全身全霊をかけてアンに言いたいことがあった。

『変なことは言うなよ』

だがそんなアンに要がひるむわけも無かった。

「なんだ？ 上官に意見か？ いい度胸だ。そして付け加えると前くらい隠せ」

それだけ言うと明らかに要の足音は遠くになって行く。続いて蹴

って外れた外の扉を直している音が響いてくる。誠はとりあえずの危機を脱したと大きく深呼吸した。

だが安心は出来ない。しばらく誠は沈黙していた。

「大して汗もかいてねえんだろ？とっとと上げれよ」

扉を直している要の叫び声が響く。好奇心に負けて外を覗いて見ると目の前で食って掛かるには相手が悪すぎるとうつむきながら自分の個室に戻るアンがいた。彼の視線が責めるように誠に突き刺さる。それにどう答えるか迷っているうちに扉を抱えている要と目が合った。

「でも……西園寺さん。非常識ですよ。男子用シャワー室に乱入なんて」

「は？いつも飲むたびに股間の汚えものを見せ付けて踊っている奴のいうことか？」

その言葉に誠は何もいえなかった。酒は弱くは無いが飲むと記憶が飛んでしまう誠の無茶な飲み方はどうにも治る気配が無かった。そして気が付くと全裸と言うことが何度も繰り返されていた。何も言い返せなくなった誠はルールに扉を乗せようと動かしている要を一瞥するとそのまま蛇口を最大にひねって無駄にお湯を出すと髪を激しい水流で洗い流した。

「僕は……」

「黙ってろよ」

アンにそう言うと言はシャワーを頭から浴び続ける。だんだん体中の石鹸の成分が抜けていくような感覚がなぜかいらだった気分を切り替えてくれていた。

「おい、終わったからな外で待ってるから」

そう言うと言は扉を取り付けなおした要はドアを閉めた。しばらくシャワーの水の音だけが部屋に響く。

「よし」と

誠はお湯を止めるとそのまま廊下に出てあることに気づいた。

「あ……勤務服は更衣室だった」

その一言にシャワーの上から顔を出すアン。だがドアの外にはさらに耳に自信のあるサイボーグの要がいた。

「おい、取ってきてやるからそこにいろよ。ロッカーのバックの中か？」

「ええ、勤務服は吊るしてありますから」

要の気配がドアから消えた。

「やっぱり西園寺大尉のことが好きなんですね……不潔ですよ」

アンはそう言うとそのままシャワー室のかごの中のタオルで体をぬぐい始めた。

「不潔って……」

「だってそうじゃないですか！ クラウゼ少佐とホテルに入った所を菰田曹長が見たって噂ですよ！」

「は？」

誠は呆れるしかなかった。菰田邦弘主計曹長。管理部門の経理部主任の事務方の取りまとめ役として知られる先輩だが、彼は誠の苦手な人物だった。ともかく彼の率いる誠の上官カウラ・ベルガー大尉の平らな胸を褒めたたえる団体『ヒンヌー教』の教祖を務めていて部隊に多くの支持者を抱えていた。

カウラも明らかに迷惑に思っているが、それを利用して楽しむのが運行部のアイシャ・クラウゼ少佐の日常だった。間違いなくでっち上げたのはアイシャ。そしてそれに乗って騒いでいるのが菰田であることはすぐに分かった。

「あのさあ。そんなこと信じてるの？」

体を拭き終えてパンツをはき終えたアンに尋ねてみる。そのままズボンを履くと気が付いたように誠に顔を向けた。そしてしばらく首をひねった後、アンの表情が急に明るくなる。

「そうですね。そんなことやる甲斐性は先輩には無いですからね」

「甲斐性が無いってのは余計だよ」

そこでにやりと笑うアン。誠もしばらくは笑顔を向けていたが、

そのアンの表情が次第に真顔に変わるのを見て目をそらした。

「本当に僕のこと嫌いなんですね」

悲しそうにそう言うとなんはワイシャツのボタンをはめ始める。

沈黙。これもまた誠に重く押し掛かった。

『早く来てくださいよ！西園寺さん！』

心の中で願う。一秒が一時間にも感じるような緊張が誠に押し掛かる。そんな彼に熱い視線を投げて着替えているアン。

「おいこれ！」

引き戸が開き要が誠の勤務服を投げてきた。

「有難うございます！」

「はあ？濡れちゃったみたいだけどういのか？」

誠は要の到着を確認すると涙を流さんばかりに自分のシャツに手を伸ばした。

「まあいいか。アン！楓が探してたぞ！」

「ああ、すいません」

着替えの終わったアンは要の言葉にはじかれるようにして飛び出していった。

「あのー西園寺さん」

「なんだ？」

「パンツを履きたいんですけど」

シャワーのブースの中でじっとしている誠を見て要は急に顔を赤らめた。

「散々見せられてるから平気だよ。さっさと着替えろ」

「ふーん。こうして一步誠ちゃんと仲良くするわけね」

突然の言葉に誠も要も驚いて入り口に視線を向けた。満足げな表情のアイシャが全裸の誠をまじまじと見ていた。

「クラウゼ少佐……」

「さっき要ちゃんが言った通りじゃない。私も見慣れてるから平気よ」

「僕が平気じゃないんです！」

「へ？」

呆れたような顔に変わったアイシヤの表情。明らかにそれが作つたような顔なので要はその頭をはたいた。

「痛いじゃない！」

「くだらねえこと言っでねえで仕事しろ！資料を取って来いとか言われてたろ？」

「それは要ちゃんも一緒じゃないの。このまま全裸の誠ちゃんを押し倒して……」

「誰がするか！」

入り口でにらみ合う二人。誠は仕方なく飛び出してバッグから換えのパンツを取り出し無理に履いた。体を拭いていないので体に付いたお湯が冷えて水になってパンツにしみこむ。

「誠ちゃん風邪引くわよそんなことしている」と

「お二人が出て行けばこんなことはしなくて済んだんですよ！」

「もしかして私のせい？」

要と誠にそれぞれ視線を向けるアイシヤ。二人が頷くを見ると次第にすごすごと入り口に向かうが、当然のように要の袖を引いている。

「外で待つてるからとつと着替えろ」

それだけ言うと言は入り口の引き戸を閉めて外に出て行った。

一人きりになりようやく安心してズボンに足を通す誠。そのままワイシャツを着てボタンをつける。

「まだかー」

「まだですよ」

待ちきれない要が外で叫ぶ。その隣であくびをしているアイシヤの吐息が聞こえる。誠はワイシャツの腕のボタンをつけてさらにネクタイを慣れた手つきでしめると上着を羽織り、バッグを片手に扉を開いた。

「よし、行くぞ」

ようやく出てきた誠を一瞥すると要はそのまま歩き始めた。

「本当に気が短いんだから」

「何か言ったか？」

「ベーツーに……」

振り返る要にとぼけてみせるアイシャ。いつものように運行部の扉の前にある階段を上がり、医務室と男女の更衣室が並んでいる二階の廊下を歩く。誰もいない廊下に足音が響き。誠達はそれを確認しながら会議室の扉の前に立った。

アイシャがノックをする。

「どうぞ」

澄んだ声。嵯峨の双子の娘の姉、嵯峨茜警視正の声が響く。そのまま開いた扉の中を見れば振り返るカウラと法術特捜担当ということで呼び出された実働部隊長のクバルカ・ラン中佐の幼い顔があった。

「なんだよ神前。髪の毛濡れたままじゃねーか……。西園寺。そんなに神前を急かす必要なんてねーんだぞ」

ランの言葉にむっとした表情のまま彼女の隣の椅子にどっかと腰を落ち着ける要。その大人気ない様子にカウラは大きくため息をつく。

「さあ、皆さんそろったんですから……」

なんとか和ませようと中腰で仲介するのは技術部の整備班長の島田正人准尉。隣にいるアイシャの部下のサラ・グリファン少尉も雲行きの怪しい誠達のとぼっちりを避けたいというように頷きながら要を見つめていた。

「そろったと言うことで」

ホワイトボードの前に立つ茜が室内を見回す。

「まあな。それじゃあ何のためにアタシ等が呼ばれたか聞かせてもらおうか」

要の声に微笑みで返す茜。

「実は最近演操術系の法術を使用しての悪戯のようなものが多発していますの」

紺の東都警察の制服が似合う茜。以前の主にこの豊川保安隊駐屯地に詰めっぱなしだったときの東和陸軍と共通の保安隊のオリブドラブの制服とは違う新鮮な姿に誠は惹きつけられていた。

「例の件か……結局アタシ等にお鉢が回ってきたわけだな」

要の苦笑いを見ながら茜はなにやら端末を叩いている助手のカルビナ・ラーナ警部補に目を向けた。

白いボードに何かの映像が映る。焼け焦げた布団。ぱっさりと切り裂かれた積み上げられたタイヤの山。ガードレールが真っ二つに裂かれているのにはさすがの誠もぎょっとしてしまった。

「ごらんのように小火や器物の損壊で済んでいます……」

「おい待てよ」

話を進めようとする茜を要が不機嫌な表情で止めた。

「なんだよなんだよ。アタシ等の知らないところでこんなことまでやったのか？」

「お前は馬鹿か？同一犯とは決まったわけじゃないだろ？」

立ち上がって叫ぶ要にポツリとつぶやくカウラ。要は完全にカウラの言葉に切れていつものように一触即発の雰囲気が漂う。島田とアイシャはとりあえずいつ要がカウラに飛び掛ってもいいように身構えているのが誠からすると滑稽に見えて噴出してしまう。

「神前君。不謹慎よ」

同じくにやけながら噴出した誠をサラがいさめる。

「どれも容疑者として上げた法術師はそんな意識は無かったと容疑を否認しているって訳だな……神前達が出会ったのもそんな事件の一つってことだな」

一人離れた場所からこの様子を見ていたランの言葉に茜は大きく頷いた。

「恐らくはそうでしょう。ですが……」

そう言うと茜は従姉に当たる要に目を向けた。要は首筋のジャックにコードをつなげてネットワークと接続している最中だった。

「どの事件も発生場所は東都東部に集中しているな。それに時間も

夕方6時から夜中の12時まで。唯一の例外が正月のアタシ等が出会った小火。同一犯の犯行と考えるのを邪魔する要素はねえな」

「馬鹿にしないでください。それくらいのことは捜査官もわかってお話しているんです！」

不愉快だと言うようにラーナが叫ぶ。茜は彼女の肩を叩いて頷きながらなだめて見せた。

「でもそれならうちよりも所轄に頼むのが適当なんじゃないですか？　うちは豊川ですよ。どんなに急いでも半日は無駄にしますから。それに先日の厚生局事件の時に活躍した東都警察の虎の子の航空法術師部隊を待機させてローラー作戦でもやれば一発で見つかるですよ？」

アイシャの言葉にもっともだと誠も頷く。

「反対する理由は無いな。クラウゼの言うことが今のところ正しく見えるのだが……」

カウラも同意しているのを見て要はやる気がなさそうに端末につないでいたコードを引き抜く。

「オメー等の言うとおりだが一つ大事なことを忘れてんぞ。東都警察がこの種の事件に興味を持っていればって限定が入るんじゃないのか？　アイシャのような捜査手法をとるにはさー」

ランの一言。見た目は8歳くらいにしか見えなくても保安隊副長の肩書きは伊達ではなかった。そして自分達が遼州同盟の司法捜査官であり東都警察の捜査官と違うと言う現実が目が行った。

「確かに東都警察は解決を急ぐつもりは無いようです。どれも他愛の無い悪戯程度で済んでいますから……でも得てしてこういう愉快犯はいつか暴走して……」

「要は大事になる前に捕まえろってことか？　面倒だなあ。どうせならこっちに引越して来てくれるといいんだけど」

「そんなに都合よく行くわけ無いだろ？」

要の言葉に突っ込むカウラ。そのいつもどおりの情景に誠はいつの間にか癒されるようになっていた。

「でもあれだぜ。あの正月の事件以来同種の事件は発生していねえからな。もしかすると……」

周りを見渡してにんまりと笑う要。だが全員が大きなため息をついて白い目で彼女を見つめた。

「西園寺さん。もしかして犯人は現在引越し準備中で豊川近くに部屋でも借りに来ているとでも言うつもりですか？」

それまで沈黙を黙っていた島田の一言。隣では彼に同調するように赤い髪サラが大きくうなづいている。

「でもあれだぞ！今の時期は年度末を控えているいろいろ引越しとか……」

「だとなんで豊川市に引越して来るんだ？」

呆れるを通り越して哀れみの目で要を見つめるカウラ。追い詰められた要は必死に出口を探して頭をひねる。そして手を打って元氣良く叫んだ。

「そりゃあ法術を最初に展開して今みたいな状況を作ったアタシ等に復習するため！」

「あのなあ、西園寺。その発想は шамレベルだぞ……まあいいや。もし隊長の許可が出たら司法局に第二小隊を詰めさせるから。それで勘弁してくれよ」

ランの言葉に茜はうなづくとテーブルを整理始めた。周りの面々もそれぞれに立ち上がり持ち場へと急ごうとする。

「何だよ！テメエ等！寄ってたかってアタシを馬鹿にしやがって！」

怒鳴る要の肩にそっとランが手を乗せる。

「まあ良いじゃねーか。要は犯人を捕まえれば分かるってわけだ」
これ以上無い正論を言われてさすがの要も参ったというように肩を落とす。誠もカウラもこれから先彼女と付き合っただ捜査を行うだろう今後を思いやりながらそれぞれに席を立った。

低殺傷火器（ローリーサルウェポン） 9

ショットグラスに満たしたウォッカを飲み干した要は大きくため息をつくと嘆くように口を開いた。

「で？なんでアタシがオメエの愚痴を聞かなきゃならねえんだ？」

誠達にとってそこは本来リラックスできる溜まり場だった。お好み焼きの店『あまさきや』。いつものように報告書の修正が終わるとランから声がかかる。そして下士官寮の住人の誠、要、アイシャ、ラン、そしてその時々で都合のいい隊員で連れ立って豊川市市街のこの店に立ち寄るのが定番となっていた。そこに今日は第二小隊に演操術系法術発動事件の説明をし終えた嵯峨茜の姿があった。

町のお好み焼き屋と言う風情のどう見ても上品に見えない貸し店舗の一階。地球産の紫色の地の小袖を着た上品そうな顔立ちの茜は明らかに浮いていた。優雅な手つきで猪口に注いだウォッカを口に運ぶと一息に飲み干して切れ長の目を要へと向ける。

「そんなことおっしゃっても……麗子さんの担当は要さんじゃないですか？」

「いつからアタシがあゝの馬鹿の世話係になったんだ？」

いつもならこういう席を避けて東都の山の手の閑静な住宅街の嵯峨家東都別邸に帰る茜がラーナを帰らせて誠達に付き合うと言い始めたところで誠も嫌な予感を感じた。茜はその上品な物腰とは正反対に思えるほどの酒豪だった。父親の嵯峨を考えてみると彼女がウワバミのように酒を飲むことは不思議には思えない。

だがそれが絡み酒になると分かっているから始末が悪い。しらふなら黙って済ましている和服の似合う美人で済むが、彼女の酔い方は独特でこの人はと言うターゲットを見つけると徹底的に絡みながら際限なくこの物静かなペースで飲み続けるのだから最悪だった。そして今日のターゲットは要。四人がけのテーブルに差し向かいに要を座らせるといつもの絡み酒を繰り広げている。

今日も早速遼州同盟司法局本部の調整担当官秘書の大河内麗子少佐への愚痴を要に向かってもう三十分も続けていた。

「彼女が語学が得意なのは分かりますよ。確かに胡州の高等予科学校から海軍大学校に直接入学なんて十年ぶりの快挙なのも分かっています。でも……」

「だからあいつはアタシの担当じゃないんだよ」

要は右ひじを握り締めながら体内プラントでアルコール分解ができるサイボーグの自分とほぼ同じペースでウォッカを飲み続ける茜に辟易していた。それもそのはず、そのウォッカは要のボトルキープしている酒である。茜はまるで意に介さずに次々と手酌で杯をおる。

「いいんじゃないの。聞いてあげなさいよ。タコ中佐も困っているみたいだから解決したら何かおごってもらえるかも知れないわよ」

さつきから茜の酔い方が面白いので烏龍茶に切り替えて観察を続けているアイシャがつぶやく。

「あいつが？ 駄目駄目！ あのおっさん明華の姐御と婚約してからはすっかり尻に敷かれてるじゃねえか。もしおごってくれたとしても後で姐御にその分催促されるんじゃないかねえの」

タコ中佐ことランの先任に当たる実働部隊部長の明石清海中佐が調整担当官をしており、その秘書の麗子の傍若無人なお嬢様氣質に時々泣き言を漏らすのを誠も聞いた事があった。

「茜……まあ仕方ねえじゃないか。同盟の各部局の中でも司法局は人材的には隔離病棟扱いされてるからな。ああいうテストは得意だけど実際の運用はまるで駄目。その癖へ理屈は一人前の達者な人間が送り込まれても黙って耐えなきゃならない時もあるんだよ」

そう言うときびしいに要はグラスを傾けた。保安隊の『瞬間核融合炉』と呼ばれる短気到手足を生やして歩いているような要の口から『耐える』と言う言葉が出てきたので黙って聞いていたランとカウラが顔を見合わせた。アイシャは噴出すのを必死で堪える。

「本当に……要さんの言葉は一般論」

そう言うと茜はまた空になった猪口に勝手にウォッカを注いだ。

「あのなー。そんな強い酒割らずに飲んだら胃が焼けんぞ」

さすがに黙っていられなくなったランの言葉。まずいと思って頭を下げたラン。だがすでに茜は満面の笑みを浮かべて茜が振り向いていた。要を生贄にして誠、カウラ、アイシャとまるで通夜のように静かに息を殺していた自分の苦労が泡と消えたことに気づいたランの頬のほろ酔いの紅色が瞬時に醒めていくのが見える。

「だってせっかく蒸留して濃くなったアルコールですよ。そのまま飲まないともったいないと思いませんか？」

言っていることがだんだん支離滅裂になってきているが表情はまるでしらふの時と変化が無い。ランはうわばみと化した茜にじっと見つめられながら三人に目をやる。当然誠達は関わってたまるかと言うように目を伏せる。

「あ……そーだなー……もったいないねー」

小柄で舐められるとどんと構えているいつもの威厳はどこへやら、まるで子供そのものののように両手で掴んだグラスで慌ててビールを飲み干すラン。誠もこの奇妙奇天烈なやり取りに噴出しそうになるのを必死に堪えていた。

茜はそんな腫れ物に触れるようなランの態度が気に入らないと言うように自分の目の前の鉄板に目を向ける。すでにつまむ物は食べつくして何もなくなった鉄板の上のこてをかんかん鳴らして見せた。

もう限界だった。そんな時の度胸はアイシャが一番なのは誠も知っていた。

「茜さん……もうすぐ看板だと思えますから……」

「良いのよクラウゼさん。これで要さんがまたボトルを入れてくれればうちも助かるもの」

そう言って気を利かせて女将の家村春子がビールを運んできた。誠とランはまだ二杯目。アイシャとカウラは相変わらず烏龍茶を飲み続けていた。

「なんですか？皆さん黙り込んで。今日はわたくしのおごりにしますからどうぞ頼んでいただいて結構ですよ」

「じゃあアタシの入れるボトルもか？」

要の一言にキッと目を向ける茜。

「すいません、警視正……」

「いいんですよ。焼酎なら入れてあげる」

「アタシは焼酎は飲まないんだけどなあ」

急に機嫌が良くなる茜。多少はアルコールが回っているらしい。

誠達はやっと一息ついた。誠はビールを飲みながら先ほどの茜の絡み酒の間に冷えてしまったたこ焼きに手を伸ばそうとした時だった。茜の通信端末が呼び出しの音楽を奏でた。

「ちよっと待ってくださいね」

そう言う茜は周りを気にするようにして立ち上がりそのまま店の奥のトイレへと消えていった。あまりに突然で自然だった。あれだけ飲んでくたを巻いていた茜が一瞬で酔いを醒まして見せたのかと呆れて誠達は顔を見合わせる。

「どうした……事件か？」

そんな中で要は一番に正気を取り戻していた。そして手にしたシヨットグラスに満たしたウォッカをあおる。

「まあ法術特捜の捜査官はいまだに嵯峨警視正一人だからな。代わりがないのはつらいんだ」

カウラの言葉に誠も頷く。同盟司法局と警察庁の関係は決して良好とは言えない。三年前に設立されたばかりのよそ者がうろちよろしていることを同業者がいい顔をするはずが無いのはどの業界でも同じことだった。だがこれまでは東都警察もこと『法術』に関しては保安隊など司法局貴下の組織に一日の長があることを認めていた。法術に関して遅れをとっていた東和警察も、ここ半年で各警察署に署員の法術適正検査を行って適正のあるものに片っ端から召集をかけて独自の法術犯罪対応部隊を設立していた。さらに先月には一般からの法術師の応募にまで踏み切っている。法術犯罪のノウハウ

はほとんど無いが人間の数は揃えたと自慢げで捜査は任せろと言わんばかりの東都警察の上層部が法術師を同盟司法局に出向させてくれることなど夢のまた夢の話だった。

捜査には慣れているが人の足りない司法局。頭数は多いが操作方法に関してはずぶの素人もいいところの東都警察。お互いの足の引っ張り合いは司法局の一員である誠から見てもあまりに無様だった。「でも茜ちゃんだからいいのよね。私なんかあんなに飲んだら倒れちゃうわよ」

「ありゃあ特別な血族だからな。楓も叔父貴も酒はいくらでも飲みやがる」

要の言葉にさすがのアイシャも同意するように頷いた。

トイレから出てきた茜の表情はほとんどしらふとっていい状態だった。

「すみませんけど豊川警察署までのタクシーを手配していただけません?」

そのあまりの変わりように再び呆れる誠達だが茜の真剣なまなざしがすでにおちゃらけた言葉を吐けるような雰囲気抹殺してしまっていた。

「普通のタクシーでいいんですか? できれば助手とかになってくれる人も乗れるような車のあてがありますよ」

アイシャがそう言うと後ろの椅子においてあった自分の黒いポーチに手を伸ばした。すぐに端末を取り出すと耳にあてがい相手が電話に出るのを待つ。

「またパーラか……かわいそうだな」

要が同情するのも当然だった。運用艦『高雄』の火器管制官パーラ・ラビロフ中尉。アイシャやカウラと同じ人造人間の『ラスト・バタリオン』として生を受けた彼女の一番の不運は保安隊設立時に当時操舵手だったアイシャといつでも行動を共にすることになったことだった。

趣味に関してはいくらでも暴走する。問題を起こしても要領よく

一人だけ切り抜ける。そして徹底的に人使いの荒いアイシャとの腐れ縁は隊員達の多くが同情するところだった。

「いいじゃないの。あの子の車だって走って何ぼでしょ？……ああ、パーラね！今どこ？……」

さも車をパーラの運転で借りることが当然というような顔のアイシャ。誠達は何も知らないパーラがまた慌てて自分の四輪駆動車に走るのを想像して同情の笑みをこぼすことしか出来なかった。

「豊川警察署か……島田君がいたら逃げ出すわね」

自分のピンク色の髪をなでながらパーラは後部座席に乗り込む。誠達を見ていたがその目は笑ってはいなかった。バイク乗りで何度か免許停止を食らっている島田。そんな他人のことも口に出さなければ疲れて帰ってきたところにいきなり呼び出されてこんなところまで車を走らされたことに怒りが爆発しそうなんだろう。明らかに人造人間と分かるその髪の色、持ち主のいつものさわやかな笑顔が、誠にはどうにもそんな感情を押し殺したもののように見えた。

そんなパーラの思いなど関係ない。そう言いきる様にアイシャは済ました顔で助手席に乗り込んだ。運転席の後ろには茜、付き合うようにランとカウラが乗り込んだ。誠は要に三列目のシートの奥に押し込まれる。

「別に交通課に私達はお話がある訳ではないですもの。これもお仕事。割り切ってもらわないといけないですわね」

パーラの言葉の意味も知らずに運転席の後ろのシートで茜がつぶやくのにアイシャが大きくうなづく。しかしそんな茜のパーラや隊の日常を知らない一言のおかげで、誠達はこれが尋常ではない何かが起きているのではないかという事実に気づいた。

「お仕事……？ 私達が豊川警察署に向かうってことは例の他人の法術能力を使って悪さをする暇人が何かこの近辺でやらかしたとか？」

アイシャの問いに答えずにそのまま前を向いてしまう茜。そしてカウラがシートベルトを締めるのを確認するとパーラはゆっくりと車を出した。

「ちゃんとベルトはしてくださいね」

そう言った相手が要なのは誠もすぐに分かった。いそいそと要がシートベルトを締める。

「何をしたんですか？……いいえ、何が起きたんですか」

カウラの問いに一度ためらった後、茜は口を開いた。

「今度は時空間制御系の操作ですわ。能力者は70代の女性。自転車で走っていたところで急に自転車が増速しているように感じられて下りてみたら時間がずれていて転倒って話よ」

聞いてみればあまりに小さな事件だった。確かに東都警察にとっては『こんな程度』の事件なのだろう。誠が横を見れば要は明らかに事件の小ささに不満げな表情を浮かべている。しかしそれが法術を使ったものだと言うことで自分も法術師である誠の酔いはすでに醒めていた。

「なんだよ婆さんが転んで怪我でもしたのか？それでも事件かよ」
我慢できなかったと言うように要がそうはき捨てるように口走った。一瞬その言葉に茜は身を翻して要をにらみつけた。それは先ほどあれほどウォッカを飲み続けていた人物と同じものとは思えない。誠は横で見えていてその視線に背筋が凍るのを感じた。

そんな茜の恫喝に平然の嘲笑で答える要。茜はあきれ果てたと言うように前を向いてしまう。パーラはそんな車内のごたごたに関係したくないというように警察署に続く大通りへと大型の四輪駆動車を進めた。

「一応法術の発動に許可が必要になったのは皆さんもご存知ですよね。神前曹長！」

「はい！」

同い年とはいえ一方は司法局のエリート。誠は士官候補生崩れの新米下士官。呼ばれたら答えるしかなかった。

「法術の発動は市街地では自衛的措施以外は原則として全面禁止。違反した場合には30万円以下の罰金か6ヶ月以下の懲役が科せられます！」

「……ということですね。もし演操術系の法術師の介入が認められなかったら罪も無い哀れなお婆さんが無実の罪に服することになるわけだけど……。どうやら要さんはそんなことはご自分には関係

ないとおっしゃりたいわけね？」

先ほどあれほど飲んでいたのが不思議に思えるくらい平然と茜はそう言って振り返った。

「……別に……アタシは……そんなことを言いたいわけじゃ」

口ごもる要。茜は自分の理屈での勝利に満足することなく大通りの左右に目をやった。市役所を越えればそこは警察署の中庭。深夜だと言うのに機動隊が入り口を固めて、その三階建ての見慣れたビルは一瞬城砦のようにも見えないことは無かった。

「厳戒態勢だな……やりすぎじゃ無いのか？」

正門からパトランプを点灯させて走り出すパトカーを見ながら要がそうつぶやいた。誠もその意見には同感だった。そのまま二台のパトカーをやり過ぎて正門を通れば早速警棒を持った警察官に止められた。仕方なくパーラは窓を開いた。

「済みませんが……どちらの……うわっ！」

窓に突っ込んだきた警官は思わず車内のアルコールのにおいに驚いたようにのけぞった。

「ああ、私は飲んでませんから！」

「そんなことよりも……これ、身分証」

厄介者を見つけたという表情の警官に茜が身分証を差し出す。その中を見るとすぐに警官は身じまいを整えて敬礼した。

「失礼しました！そちらの奥が空いています！」

「有難う」

警官の態度の豹変に楽しそうな顔をしながら茜は着物の襟元を調える。誠が振り返れば先ほどの警官が同僚になにやら耳打ちしているのが見えた。

「法術師一人に機動隊を全員召集か？過剰反応だな」

「うちが鈍感なだけよ。結構法術に対する誤解はあっちこっちであるものなのよ。たぶんこの署長はこの面々でも足りないと思ったから渋々茜さんの所に連絡してきたんじゃないかしら」

カウラの言葉をアイシャがたしなめた。誠もこの警察署の対応が

ある意味今の東和を象徴しているような気分になってきた。法術は意識を介して発動する力だと言うことは訓練でさんざん叩き込まれてきた。自分が力があることを意識すること。それがあって初めて法術は発動する。決して恐れるような類では無い。でも力を持たない人には力を使える可能性があること自体が脅威に感じられる。そんな力を持たない人々の数の暴力を正門の前に整列する機動隊の中に誠は見えていた。

「はい、到着」

署長の公用車らしい大型乗用車の隣に車を滑り込ませたパーラ。その一言に早速二番目の席のランとカウラが飛び出していく。続いて静かに反対側のドアを開いて茜も車を降りて署の建物に向かう。

「元気だねえ」

そう言いながら要はカウラが座っていた二列目の席を倒すと目の前のなかなかドアを開けようとしないアイシャの後頭部を小突いた。「何するのよ！痛いじゃないの！」

「そりゃそうだ。痛くしてるんだからな」

いつもの要とアイシャの小競り合いに苦笑いを浮かべながら誠は仕方なく茜の座っていたシートを倒して反対側のドアから外へ出た。夜だというのに警察署の明かりはかなり煌煌と夜の空を照らしていた。

「それじゃあ行きましょう」

着物の袖を気にしながら助手席から降りた茜の案内で誠達は署の建物に向かう。

「何度も言うけどさ、婆さんがひっくり返って軽い怪我をしただけでこの始末か？」

「彼等にとっては法術と言うのは未知の存在だからな」

カウラの言葉を聞き流すように要は一人入り口で立ち止まった。

「アタシはタバコを吸っているから先行ってろよ」

「仕方ないですわね」

いつものことなので慣れているというように茜はそのまま入り口

の戸を押して署に入る。

「法術特捜の方ですか？」

茜の紺色の落ち着いた風情の和服。確かにこの姿は一目見れば誰でも記憶に残るものだ。入り口でのアルコール臭吹きかけ騒動も報告済みのようで、すぐに警部の階級章をつけた初老の捜査官が声をかけてきた。要以外は全員が170センチ以上の長身の女性の集団である。しかも島田が免許取り消しになった時などに顔を出していたのでアイシャやパーラあたりの顔はそれなりに知られているようで周りの署員は驚いた様子も無くこの奇妙な集団を無視してそれぞれの持ち場へと歩み去っていく。

「それにしてもお早いお着きで。しかも保安隊の方も同行されるとは」

明らかに下手に出てやるという慇懃無礼な態度に、誠は要がこの場にいないことにほっとしていた。

「この様子はちょっと意外ですわね」

「なあに。ようやく東都警察も法術に関するノウハウを得たのですからこれからは反転攻勢に転じますよ」

明らかにこちらを舐めているような態度にカウラが頬をひきつらせている。

「どうせ特殊法術部隊の受け売りじゃないの。当てにしているのかしらねえ」

小声でアイシャが陰口をつぶやくのも誠が見ても当然の話だった。「ウオホン！」

初老の警部の咳払いに陰口をやめたアイシャだが、その目は完全に東都警察には法術師関連の事件捜査はできないと決め付けるような生温かい目だった。

「じゃあわたくしにも見せていただけませんでしょうか？実地の検分等は済ませたんですわよね？」

茜が口を開くが猛烈なアルコール臭に警部は眉をひそめる。

「それはしらふに戻ってからのほうが……」

「これくらいはたしなむ程度ですの。それにこういう事件は初動捜査が犯人逮捕の鍵と言うのが信念ですから」

そう言うのと茜はそのまま捜査官達がたむろしている階段へ向かうとする。必死になって警部が止める。

「その……酔いが醒めるまで……少し仮眠を取ってから……」

慌ててしがみつこうとする警部の手が袖にかかるのを嫌うように茜は身を翻した。

「そうですね。お酒が入っているのは事実ですものね。それじゃあ明日早朝にはお伺いしたいので資料などをそろえておいていただけません？」

明らかに茜は狙っていた。誠はそう確認した。法術犯罪解決の手柄が欲しい東都警察がすんなり資料を渡さないのは彼女も経験で知っているのだろう。

「ええ、揃えますから！ですから！」

土下座でもしかねない相手に軽く笑みをこぼすと茜は呆然と突っ立っている誠達の所にやってくる。

「ベルガー大尉」

「は？」

「お部屋に泊めていただけませんか？」

突然の茜の申し出にぽかんと立ち尽くすカウラ。そしてその横ではニヤニヤ笑っている要とアイシャの姿があった。

「自分はいけません……寮は狭いですよ。妹さんのお部屋はかなり……」

「あの子は駄目。知っているでしょ？あの子の性癖」

大きくため息をつく茜。そこにタバコを吸い終えた要が飛び込んできた。

「おい、行かないのか？おう、そこのおっちゃん捜査本部は知らねえかな？」

態度のでかい要に先ほどまで下手に出ていた警部が急に姿勢を正して要をにらみつけた。

「西園寺！テメー！」

「痛え！」

ランが思い切り要の左足のつま先を踏みしめた。そのまま要はうずくまる。

「ああ、こいつが酔っ払いです」

「つれて帰るので、資料をよろしく」

アイシャとカウラがそのまま立ち上がろうとする要を羽交い絞めにして引きずって警察署の玄関まで連れ出した。

「何だよ！アタシが何か……」

二人を振りほどいて体勢を立て直そうとする要の顔の前には茜の顔があった。明らかに不機嫌なそれ。ようやく要は自分が何かへまをしたらしいことに気づいて頭を掻きながらさっさとパーラの車に向かった。

「ともかく、ベルガー大尉。よろしく」

今度は打って変わってのお嬢様の笑顔。カウラは仕方なく笑みを浮かべてそれに応えることしか出来なかった。

水島勉はようやく部屋にたどり着いてコタツにもぐりこむと大きくため息をついた。そして自分が何をしたのかようやく分かってきて沸いてくる笑顔がとめることができなくなっていた。

「法術師……悪くないな」

久しぶりの自分の笑顔になんだか楽しくなってくるのが分かる。

半年前。会社を突然解雇された。理由は半月前に社で強制的に受けさせられた法術特性が陽性だったからだだった。組合に入っていた同僚達はそのまま団体交渉に入ったが、組合というもののアレルギ―を持っていた彼は一人で退職して半年間は寮に居住できるという条件と割り増しの退職金の支給という条件で満足した。そのときは少しばかり高い退職金にすっかり得をした気分でうきうきしていたことを今でも思い出すことが出来る。

しかし、退職手続きを終えてから急に区民会館に呼び出されて行われた検査の後で様相は変わり始めた。実際後で聞いてみれば自分の反応は他の法術師の反応とは違うということだった。なんでも空間に介入して時間軸や状態を変性させる能力や思考を読み取ったりする能力があるという話だが、彼にはそんな能力があるわけではない。その結果が社に伝わると退職金の半額の返納請求書と見たことも無い書類とそれに押された自分の実印を目にすることになった。書類の内容は寮からの一週間以内の退去に同意しているので荷物をまとめて出て行けという内容だった。

怒りは無かった。ただ頭の中が白くなったのを今でも覚えている。退職をほとんど当たり前だと言う調子で告げた上司もさすがにこの決定にはばつが悪かったらしく、彼の友人が経営している湾岸地区のアパートに三ヶ月だけ住まわせてくれると言う約束を取り付けて急いでそこに移った。

職業安定所に行く気にはならず、有料職業紹介の会社に何度か連

絡を入れたがすべて門前払いを受けた。手元の退職金はそれなりの額がある。町工場を経営していた父の残した遺産もある程度あり数年は食うに困らないのは分かっていた。

焦る気持ちと諦めかけた気持ちを切り替えようと工事の騒音が響くアパートの一室で水島は学生時代の教科書を引っ張り出して法律の勉強を始めた。

再就職を諦めたのは正解だったと水島は思っている。

実際、その後もネットや人材業界の友人に仕事を貰おうと電話をかけてようやく今の自分の現状が見えてきた。法術師を歓迎しているのは軍と警察くらい。どちらも年齢制限で彼が応募できるわけも無かった。それ以前に人事一筋の彼が犯罪者相手に渡り合えるなどとは自分でも思っていなかった。そんな彼にも転機が来た。

いつものように彼は勉強の疲れを癒そうとコンビニに入りビールを買い、そのまま会計をしようとレジへ向かった。湾岸地区はあまり治安がいいとはいえない。事実その時どう見ても堅気には見えない若者が勢いよく扉を開けて入ってきた。その時だった。いつもなら目を合わせることすらできずにレジで硬くなっている自分が何かを脳で感じた。

まさに脳で感じたという状態だった。いつものように秋になったばかりの蒸れた空気の中の昼過ぎのコンビニには工事現場の作業員が並んで雑誌を読む姿があった。釣りを受け取りながらその群れに目をやると紫色のニッカポッカの若い男に目が集まった。

『なんだ?』

水島はしばらくなんてその男から目が離せないのか理由が分からなかった。髭面で焼けた肌だがどちらかと言うとその日焼けは仕事でついたと言うよりもその荒れた茶色い髪が意味するようにマリンスポーツでも楽しんだ結果の日焼けのように見えた。

『なんで俺はアイツを見ているんだ?』

再び自分に尋ねてみた。理性では理解できないがその男が他の作業員達とは明らかに違う何かを持っている。自分の中の何かがそう

こたえている気がした。

『……嘘ばっかじゃねえか。パチンコは根気。一万二万で大当たり？無理無理！……』

突然自分の中で他人の声がした。水島は受け取った小銭を落としてかける。店員は慌ててそのコインを拾うと再び水島の手に乗せようとしている。だがそんなことは水島にはどうでもいいことだった。

『何かあるんじゃないか？君には……』

心でつぶやく。その瞬間茶色い紙を振り乱し雑誌を手を左右に見回す男。店員の不審そうな視線もその時の水島には気になるはずも無かった。

『気持ち悪い……なんだ？声がしたけど……先輩かな？』

男の思いが読めたと分かった瞬間。水島の頭の中に何かが引っかかるのが分かった。

周りの男達と自分が心を読んでいる男との決定的な違いはその引っかかりだ。理由も無く水島はそう確信していた。そして心の中で叫んだ。

『はじけろ』

彼にとってはそれだけだったが、次の瞬間に起きた出来事は水島の予想を超えたものだった。

紫色のニッカポッカの男の髭が火で覆われた。何が起きたか分からないというように呆然としたあと、男はそのまま顔を抑えてのた打ち回り始めた。明らかに何も火の無いところから火が回り転げまわる男。

助けを呼ぶ仲間、レジから飛び出していく店員。その様子を驚き呆れて見つめるだけの他の作業員。そんな中水島はただ一部始終を眺めていた。

消化器を持ち出した店員が薬剤を男に噴射して何とか火は収まった。そしてその様子を見ていた客はそれぞれに手にしていた端末などで連絡を取り始めた。その混乱にまぎれて店を出る水島。

誰も自分の知らない力がこの騒動を引き起こしたことなど気づい

ていない。

『俺の力なのか？これが法術なのか？』

心の中でそう思いながら店から出て歩き出す水島。気づくと自分の顔に久しぶりの笑いがあることに気がつく。法術適正があるが何の能力も無い。そんな思い込みがその瞬間から変わっていくのを水島は感じていた。

それから言うもの同じように水島の心の中に『引っかかる』何かを持つものが山といることが分かってきた。街を歩けばそんな『引っかかり』、世に言う『法術』の使い方も分からずに力を持ち腐れさせている多数の人間に出会う。そして何度かその能力を使ってやるうちに、そんな自分の行為が自分に与えられた義務ではないかと思い始めていた。パイロキネシストがいれば近くのごみ置き場に火をつけてやった。空間干渉能力があれば近くの立ち木を切断して見せてやった。

『みんな色々できるんだぜ……俺達を見限った連中に一泡吹かせるくらい楽なもんだ』

にやける頬を引き締めながら水島はいつも思っていた。

この世界は力の無いのと力のあるものがあるというのは不完全な認識だと彼は考え始めた。

『力があっても使わなければ意味が無い』

そう言う訳で司法大学院の勉強の傍ら町を徘徊して彼等の力を使った。小さな小火で十分だった。ちょっとした車のタイヤを割ることで納得できた。

この世界が法術師を生んだのならそれにふさわしい待遇が必要になるはずだ。能力の上に眠るものに何の権利も無い。そう思いながら日々散歩を繰り返していた。

ただ最近警察の目が気になり始めていたところだった。司法試験を目指すだけあって警察が単純に能力者の摘発だけをしているうちは安心できた。

正月前、テレパシー能力のある暇そうな警邏隊員の思考を読み取

ってみれば『法術機動隊』だの『法術特捜』だのという単語が浮かんでいるのに気がついた。

例の法術と言う存在を知らしめた外惑星での軍事衝突以降の法術の認知の広がり。それを考えると水島も法術の研究が自分の思う以上に進んできていることを実感していた。恐らくこのまま行けば自分の能力が特定されてきても不思議ではない。瞬間的な恐怖が水島を支配した。だが今のささやかな楽しみと化している通行人の『能力の解放と言うボランティア活動』は麻薬のように水島を虜にしていともう止めることができなかった。

幸い水島は豊川市の司法大学院に入学することができた。これで田舎の自分の力を知らない連中だけを相手にすれば良いとなると気が楽だった。

『さて、次は何をしようか』

部屋の中で大の字に寝転び天井を見上げながら湧き出す笑顔に耐え続ける。

『そう言えば豊川といえば保安隊……法術を最初に使った空氣の読めない馬鹿がいたな』

そんなことを思い出すと近くに寄ってみたいというような酔狂な気分になる水島だった。

『きつというんな力が眠っているんだろうな。待ってろよ。起こしてやる。これ以上無い位はつきりとな』

笑いの堰は切れてそのまま水島は声を張り上げて部屋の中で笑い転げた。

ハンガー奥の用具室の中。並んでいるのが源平絵巻の大鎧だという時点ですでにかなりシユールだった。それでも室内の隊員達はまるでそれが当然のことのように神妙な顔つきで作業を続けている。

「目撃者無し。証拠物件も挙がらず……まあ元々期待はしていなかったがな」

大鎧の盾を誠に外してもらいながらカウラがつぶやいた。節分の時代祭りでの武者行列。保安隊が設立されてから豊川市の時代行列の源平合戦武者行列は一気に歴史マニアに注目されるイベントになっていた。

基本的には士官は大鎧で馬に騎乗し、下士官以下は腹巻姿でそれに従う。

しかし、馬との相性が最悪のカウラは他の士官達が最低でも隊から貸し出した胴丸を着た乗馬クラブの係員に引いてもらいながらよたよたと騎乗を続ける中。去年は一人重そうな大鎧を着こんで一人歩いて行進していたと言う。今日のグラウンド一周の練習の時も嵯峨の顔で借りた乗馬クラブの馬との相性の悪さを再確認させるようにそもそも馬の轡に触れることすら出来ないで少し落ち込んでいるように見えた。

すでに自分で緋糸緘ひいとおどしの西園寺家伝来の縁の大鎧を脱ぎ終えて狩衣姿の要が扇子を翻しながらカウラを冷やかすタイミングを計っていた。

わいわいと年に一度のイベントと言うことでお互いの胴丸姿を写真に撮り合っていた警備部の金髪の隊員達。さすがに飽きが来て部屋の間で鎧をしまっている運行部の女性陣の手伝いを始めて視界が開ける。すると要の表情は一気に呆れたようなものになる。

「それにしても……アイシャ」

扇子を懷に収めると要が大きくため息をつく。その目の前には他

の隊員とはまるで違う鎧姿のアイシャがいた。

「なに？要ちゃん」

「その鎧やっぱおかしいだろ？おかしいと思わないのか？」

「いいじゃないの。これは私の私物なんだから」

そう言って鉄でできた胴を外すアイシャ。彼女だけは戦国末期の当世具足姿だった。剣術道場の息子で多少そういう知識もある誠も違和感を感じはするが、どうせアイシャに何を言っても無駄なのは分かっているのだでただ黙ってカウラが鎧を脱ぐのを手伝っていた。

「そう言えばシャムは？」

要は床机に腰をかけて一月の寒さを身に受けながらも平然と扇を弄っている吉田に声をかけた。

「あいつか？馬の世話だよ。それにしてもなんだ……お前等の追っている事件」

「別に追ってるわけじゃねえよ」

「なら気にならないわけだな」

そっけなく言う吉田は立ち上がった。

「いや……アタシ等の担当じゃねえけどさ。気になるじゃねえの。他人の能力で相撲を取る卑怯者……うちは法術とは因縁があるしさ……何か知っているのか？」

明らかに素直さに欠けるいつもの要の姿を見ると満足したように吉田は再び床にどっかりと腰を下ろす。

「なあに、今回の事件の情報に関しちゃ俺の知ってることと茜のお嬢さんの知ってることの差なんてほとんど無いよ。ただ……」

「ただ？」

もったいぶった吉田の態度に誠に背中中の紐を緩めてもらうために身動きできないカウラ。彼女もいらいらしながら吉田に話を促すような相槌をいれた。

「こう言うイカレタ連中を相手にしてきた経験が長い者から言わせて貰うとだ。急に犯行の場所が飛んだことにはそれなりの理由があるはず……と考えるのが自然だな。犯人の拠点が東都西部に移った

……たまたまこちらに来て悪戯の虫が騒いだとしてこちらに来る特別な何かの理由があるのか……」

「吉田少佐。もしかして住民認定の記録を全部見たんですか？」

呆れたように口を挟んだ誠に頷く吉田。

「でもなあ……法術関係の資料は極秘扱いだ。俺でも簡単には開けない。そこで法術特捜の名前で捜査令状を……」

「無茶をおっしゃらないでいただけます？」

そこにはいつの間にか鎧兜の並んだ部屋にふさわしいような和服姿の茜が立っていた。

「あっお嬢さんいらしたんですか？」

吉田は胡坐の姿勢からさっと立ち上がると平安武者の臣下よろしくさっと片膝をついて茜に伺候する。

「吉田少佐。そんなに卑屈にならないでいただけます？」

いつものように優雅に空いた丸椅子に腰掛ける。当然のようにその隣には荷物を持ったラーナが立っている。

「卑屈にもなりますよ……捜査に関しては嵯峨のオヤジさんが助けを呼ぶまで手を出すなって言われてますし」

「じゃあさっきの話だとすでに手を出しているみたいですわよね」

いつもの氷のような流し目で吉田を一瞥して黙らせるところは茜の父が遼州一の悪党と呼ばれる嵯峨惟基であることを再確認させた。冷たく澄んでいてそれでいて見ているものを不安にする何を考えているのか読めない見せ掛けのような微笑を作る技。誠はいつ見てもその表情の作り方に親子の面影を見て感心させられていた。

「法術絡み。特に調査がほとんど及んでいない能力を持った馬鹿が相手だぜ？多少法の目をくぐって無茶をしてもさっさとあぶりだすのは得策じゃねえのか？今は人死にが出ていないんだ。そのうち暴走してどうなることやら……」

要の言葉には誠もカウラも頷くしかなかった。

「でもそうなれば東都警察は面目丸つぶれよね。またマスコミからうちの暴走を止められずにそれどころか手柄まで持ってかれたなん

て……。まあ、『税金泥棒』の称号がうちから東都警察に移るのは結構なお話だけど……」

鉄製の重い胴を外して伸びをしながらのアイシャの言葉。誠はやはり自分が組織人であることを再確認した。

「よくわかつているじゃねーか」

そう言って歩いてきたのはすでに勤務服に着替えを終えて半分笑顔を浮かべているランだった。

「今回は多少は東都警察に活躍してもらわなきゃなんねーんだ。きついぞ、人に手柄を取らせるってのは」

頭を掻きながら部屋の隅の折りたたみ椅子を小さな体で運んでくるラン。

「クバルカ中佐！お願いがあるんですが！」

「アイシャ……萌えたから抱きしめさせてくれってーことならお断りだかな」

アイシャを警戒するような瞳で見つめるラン。それをみてカウラが噴出しそうになる。

「信用無いですねえ。私」

「まあいつものことだからな」

そう言いながら要は小手を外す作業に取り掛かった。

「それよりクラウゼ。お願いはどーした？」

ようやく話を戻そうとしたラン。しばらくアイシャは話を振られたことを気づかないように突っ立っていた。

「早く話せよ。くだらねー話ならぶん殴ってやるから」

指を鳴らしながら小さなランがすごんで見せる。誠から見てもその光景はかなり滑稽だった。ランの身長は128cm。一方のアイシャは180cmに近い。小学生がプロスポーツ選手を脅迫しているようにしか見えない。つい笑いがこみ上げてくる。

「私達を派遣してくれませんか？豊川署に」

『は？』

時が止まったようだった。誰もがアイシャの言葉の意味を理解で

きずにいた。ただ一人吉田は納得したように頷いている。

「あれか。法術関係捜査の実績はあるからな。その経験を生かしての助っ人と言うことなら……受け入れてくれるかもしれないねえ」

吉田の言葉によく全員がアイシャの意図に気づく。そしてその視線は自然と法術特捜の全権を握る茜へと向けられた。

茜は襟元に手をやりしばらく考えていた。

「別にはったりじゃないですし……実績ならありますよ。厚生局事件の報告書は豊川署でも閲覧できるはずですから」

アイシャの言葉に小首をかしげて考えにふける茜。その肩をランがぽんと叩いた。

「アタシは無理だが……クラウゼにベルガーに西園寺に……神前。これで十分だな」

「え？ 島田君達は？」

そんなアイシャの言葉に首を振るラン。彼女も一応この部隊の主である技術部部长、許明華大佐の部下に隊を離れる命令は出せないことは誰にも分かっていた。

「お前等経由なら色々情報も豊川署に流してやれるし……あちらも所轄の玉石混交とはいえそれなりに膨大な資料を扱っているんだ。俺等の知らないことも知ってるはずだしな」

なんとも他人事のように吉田はそう言うと言ち上がった。

「いいんですか？ 隊長の許可は……」

カウラの言葉ににんまりと笑うラン。その笑顔は頼もしく『アタシに任せろ！』と太鼓判を押しているとこの場の誰もが思っていた。彼女はそのまま何も言わずに満足げに頷くと足袋を脱がないでいるカウラの足に手を伸ばした。

「おい、ちょっと足を上げろ」

いきなり手を出されて驚いたカウラはランに言われるままに足を上げた。そしてそのまま椅子の横棒に載せた右足の旅をとめている紐を緩め始めるラン。

「実は……おやつさんから言われててな。今回の件。誰か志願する

奴がいれば捜査に当たらせてやれってよー」

器用に紐を解いていく小さなランの姿を見ながらアイシャが少しだけ目を潤ませていた。

「ランちゃん……」

「おやつさんのお考えだ。それと今アタシのことを抱きしめてみる……ぶっとばすからな」

そう言われるとアイシャはがつくりとうつぶいてしまう。それを見ながら黙々と作業を続けてワイシャツに袖を通してゐる要が大きく頷いていた。

「まあ叔父貴だからな……裏で何を考えているのやら……まあアタシも今度の事件の馬鹿野郎には着物代を弁償してもらわないといけねえからな」

「要ちゃんも手伝ってくれるの？」

目を潤ませて手を合わせるアイシャ。要は思わず引き気味にうなづくとそのまま無視してランに目を向けた。

「で、現在の豊川署の捜査担当の部署は？」

「あそこは捜査二課だそうだ。しかも専従捜査官はいねーそうだ……危機感があるのかねーのか……当日は相当な騒ぎだったみてーじゃねーか？」

ランは顔を上げて要達を満足げに見上げる。そしてカウラの右足の足袋を脱がせると今度は左足に取り掛かる。そしてそんなランの言葉に予想通りだというように要は口笛で応じた。

「大山鳴動して軽犯罪ですか……まああれから連続して小火騒ぎがあれば本庁から捜査官でも派遣されたんでしょうが……法術の違法発動だけならそんな感じですよね」

誠も胴丸や上半身の小手などを自分でとって足袋を脱ぎ始める。その様子を確認するとランはそのままカウラの左足の足袋を脱がせた。

「まあそんなところだ。危機感が足りねーんだろうな。この前はあれほど大騒ぎしたのに被害が小さければなかったことにする。まっ

たぐお役所仕事って奴さ」

「アタシ等もお役所ジャン」

「くだらねーことやってねーで早く着替えろ！」

ランの言葉に舌を出すと要はすばやく鎧の胴を元の箱に戻した。

「でもさっきの派遣任務の話は本当と受け取っていいんですよね」

「当たり前ーだろ？くだらねーこと言ってねーで着替えろ！」

ランの怒鳴り声に一斉に隊員達は着ている鎧を脱ぎ始める。誠も自分の胴丸の背中に手を伸ばしながらこれからの任務に緊張の気持ちを隠すことが出来ずに引きつった表情を浮かべながら結び目の紐を捜した。

沈黙。それを自分が破ることを先ほど指示された誠は額に汗を掻きながらそのタイミングを計っていた。要もカウラもアイシヤもその時を待っている。そして目の前に現れた人影を確認して四人が立ち上がって敬礼した瞬間誠は口を開いた。

「私が……専従そっさかつの……」

「馬鹿！ 噛むんじゃない！」

ゆつくりと会議を終えたと言うことで難しい顔で所長室に入ってきたずんぐりむっくりの豊川警察署の署長。悠然と誠の前に現れたその姿を前にして誠は緊張のあまり挨拶すらできない有様だった。そんな誠は明らかに怒りの骨髄反射を起こした要に足の親指をパンプスのかかとで踏まれた。

飛び上がりたい痛みに耐えながら挨拶を再開しようとする誠。その痛々しい姿を見て表情を緩めた署長は笑みを浮かべながら口を開いた。

「まあ緊張しなくても……まあかけてくれますか？」

署長は小太りで白髪が混じってはいるが良く見れば20代後半と言う感じに見えた。でこぼこコンビの大きい方という感じにも見える妙に張ったえらが特徴の角刈りの副署長。こちらは明らかに敵意で武装して誠達を見ながら自分の中で値踏みでもしているように見えた。

「ほら、座ってくださいよ」

丸顔をさらに丸くしたように笑う署長はリラックスして応接ソファーに誠達を座らせた。

出向メンバーとして選ばれたのは誠、要、カウラ、そしてアイシヤだった。運行艦の運用研修がまだ途中のはずの艦長代理のアイシヤ。だが、いつものように自分の上官で運用艦『高雄』艦長のリアナの頼みに弱いことを利用して渋るリアナを説得してなんとかこの

メンバーに紛れ込んだと言う話だと誠は聞いていた。そしてどこか落ちつかない誠達の中で一人、悠然と座って小太りの署長に色目を使うところはいつもとどおりのことだった。

「法術となると……うちでは素人捜査しかできないものでね」

署長のその言葉に明らかに不機嫌そうな顔をさらにゆがめる副署長。署長は本庁からの出向のキャリア組み、副署長は上級職からの現場叩き上げと言う経歴。誠も保安隊に配属以降、なんとか警察に出入りしているうちに相手の持っている雰囲気やしやべる内容で相手の経歴がある程度わかるようになってきていた。

副署長の『我々にも法術に関する資料があれば十分に捜査活動は可能なんです！』と言いたそうな顔を十分時間をかけて眺めた後、ゆっくりとアイシャは話を始めた。

「法術に関しては未だ未解明な部分が多いですから。正直な話、警察署に閲覧権限が無い法術関係の資料を我々が所持していることは否定しません。ですがそれは上層部の決定によるもので私達の一存ではなんとも出来ません。ですので今回私達が専属捜査官としてこちらにお世話になって、それらの情報も十分駆使して解決のために全力を尽くすことに決まりました」

同じことを要が言ったらたぶん副署長は怒りに任せてその場を立ち去っていたことだろう。誠は言いにくい話をさらりと言うアイシャの技術に感心しながら話を聞いていた。

文句は山ほどある。そんな顔の副署長を見るとアイシャは大きくため息をついてカウラに目をやった。カウラもそれが多少へりくだって見せろと言うアイシャの意図だと悟って静かな調子で口を開く。「こちらはまだ捜査のノウハウを蓄積している段階です。市民社会への法術の情報提供はまだ各地で論議の最中ですが、残念なことに情報の漏洩や一部在野研究者による情報リークが進んでいるのが現状です。これからはさらに凶悪化、組織化が予想されますからできるだけ早く対応することが必要になります」

「とうちの責任者は申しております」

カウラの穏やかな言葉に茶々を入れた要。その言葉に明らかに不快そうな顔をしたのはそれまで穏やかな表情だった署長の方だった。キャリアの署長。その言葉自体要の気に入る要素は無い。誠はなんとかこの場を乗り切ろうと考えはじめた。

最初は穏やかな言葉で場の雰囲気を作ったアイシヤだが、彼女は当てにならない。おそらく彼女も要とこの小太りの署長の相性の悪さには気づいているはずだった。一応義理は果たしたと言う顔をしているアイシヤの本来の行動原理は『面白ければそれでいい』である。引っ掻き回しにかかれたら誠も分が悪い。一方カウラはそんな相性などは考えることもない。ただ今回の事件が本当に豊川市に舞台を移したのかを知りたいと言う職業倫理に基づいて動くだけ。

「で……この署に法術適正者は何人いるんですか？」

早速カウラが尋ねる。実務的な話ならと、それまで不機嫌だった副署長の方がこれからの捜査で主導権を取ろうと話を切り出そうとした。だが彼も組織人である、隣の署長に目をやった。署長はなにやら複雑な笑みを浮かべて黙って要を見つめていた。要は目をそらさずにそれに答えて卑屈そうな笑みを浮かべる。この様子に先ほどの不快感が吹っ飛んだようで慌てて副署長が口を開いた。

「法術適正はプライバシーの問題がありますから。それに法術師で無いと捜査官が務まらないとは到底思えません」

犯罪捜査について持論を延々と展開したいのを我慢しているのが誠にも分かるように言葉を選んでの副署長の一言。署長も特にとがめるようなことを言わなかった部下に満足したようにうなづくとそのまま最初に誠達に向けた笑顔をわざとらしく作って話し始める。

「法術の検査は政令に定めるとおり、警察署においても任意の検査が原則となっているので。それに適正者で能力的に貴重な人材はすべて本庁の機動部隊に転属になって……」

「つまり手駒で使えるのはいない確立が高いと……使えねえな」

要の言葉に署長の米神が痙攣するのを見て誠の胃がきゅるきゅると痛んだ。

誠の予想通り要の『使えない』に副署長まで怒り心頭という感じで膝の上の両の手をぎゅっと握り締めているのが自分を威圧しているように感じられる。誠は口の中が乾いていくのを感じていた。

「申し訳ありませんね、どうも。うちの仕事は荒事ばかりですから。後でしっかりその点は指導しておきますので。では私達はどこに行けばいいんでしょうか？」

アイシャも要の暴走が予想より早く始まりそうに思えたようになんとかこの場を治める決意をしたようだった。目の前の二人の警察官僚も別に喧嘩をしたくてここにいるわけではない。早速副署長が立ち上がるとそのまま署長の執務机に置かれた電話機に手を伸ばした。

「一応、結果は期待していますので」

言葉の頭の『一応』に力を入れてつぶやくと署長は立ち上がる。部屋のドアが開くと二人の女性署員が現れる。

「とりあえず着替えをお願いしますよ。その格好だと軍の人間だと思われそうですから」

まだ要の言葉を引きずっていると言うような副署長の表情。誠は顔を引きつらせながら立ち上がる。

「あ、神前曹長。男子更衣室まで案内します」

見た感じ四十手前と言う黒ぶちの眼鏡の女性署員。彼女の言葉につられて誠は一足先に廊下に出た。

四階建ての警察署の最上階。人氣が無くて物寂しくていつもシャムなどが走り回っている保安隊の隊長室の前の廊下とはまるで風情が違った。

「こちらです」

女性署員はそのまま階段を小走りで駆け下りる。誠は慌ててその後ろに続いた。三階を通過するとそのまま二階。当然のようにそこで廊下へと進む速度についていくのが誠には骨が折れた。

「こちらです。そしてこちらに着替えてください。すでにロッカーには名前が貼ってありますのでそちらをお使いください」

それだけ言うと一礼して去っていく女性署員。誠はすでに眼鏡以外の顔の特徴を忘れたほどに個性の無かった女性署員から受け取った階級章の無い制服を手にロッカールームに入る。真昼間。誰もいない。誠はさっさと着替えてしまおうと幸い目の前にあった『神前』と書かれたロッカーを開いた。

長いこと誰も使っていないかったのか防虫剤の強い刺激臭が誠を襲う。誠はしばらく扉を開けたままそこに立ち尽くした。

『あの人達……大丈夫かな』

考えれば考えるほど事態が悪いほうに進んでいくように感じられる。誠は仕方なく急いで着替えに取り掛かった。東都警察と東和陸軍の制服の徽章を変えただけの保安隊の制服。着替える要領は同じなのであっさり着替えは終わった。

『神前曹長』

調度そのタイミングで今度は男性の声がロッカールームの外から聞こえた。

「はい！着替えが終わりました！」

そう言って飛び出した誠の前には背広を着た中肉中背の男が立っていた。

「こちらになります」

誠の顔に目も向けずに振り向くと男は先ほどの女性署員と同じような早足で歩き始める。誠はそのまま彼に従って冬の弱い日差しで陰になっている二階の通路を歩き始めた。

左側に並ぶ部屋はそれぞれ捜査関係の部署らしく私服、制服の署員がひっきりなしに出入りを繰り返していた。男はその部屋をまるでそんなものが存在しないと言うようにまん前を向いたまま歩き続ける。

なかなかたどり着かなかったが、エレベータールームを通り過ぎて人氣がなくなると男の足取りは急に遅くなった。いくつかの閉まったままの扉。そのどれを開くか迷っているように何度か身を翻した後、その中の真ん中の一番地味な扉を男は開いた。

「おう、来たか」

すでに東都警察の制服に着替えていた要。黙っていれば制服が似合う彼女らしく襟に警部補の階級章を光らせている。

「そういえば大丈夫？ 神前……一応巡査部長扱いでよかったんだな」

カウラから誠に巡査部長の階級章が手渡された。

「それにしても……私は似合う？」

カウラと要が警部補の階級章をつけているのに対し、アイシャのそれは警部のものだった。

「おい、とっちゃん坊や。何でこいつが警部なんだ？」

誠をつれてきた男に喧嘩腰で食って掛かる要。誠は止めようと手を伸ばす体勢で話を聞いていた。

「いやあ、僕は事務方だからねえ……」

「事務屋だと現場のことがわからねえって言う気か？ うちでさえ管理部門の大將はアタシ等の行動も把握済みだぞ。なんだか東都警察も……」

「黙れ、西園寺」

カウラが思い切りテーブルを叩く。

「一応、それでも仲がいいんですよ……ねえ？」

さすがに要の暴走が予想を超えていたのでフォローを入れるアイシャだが、にらみ合う要とカウラを珍しそうに眺める男の目に浮かんだ軽蔑のまなざし。こう言うことに敏感な要は怒りのようなものを覚えているらしいことは誠にも分かった。

「まあ……とりあえずこちらの部屋を使用してください。それと連絡は杉田と申すものが担当しますので」

それだけ言うと男は出て行った。いつもの面々だけになると誠達は部屋の様子を思い思いに見回した。

「用具室か。結構片付いているんだな。うちの部隊とは……」

「でも人のいることじゃないんじゃないの？」

カウラは何とか自分を納得させるようにつぶやくがそれをアイシ

ヤがぶち壊す。確かに何もなかった。端のほうに書類のダンボールが山積みになれ、とってつけたようにいつのころの時代のものかと聞きたくなる端末が置かれた机と椅子が四つ並んでいる。

ノックの音がした。

「どうぞ」

アイシャが当然のように答える。入ってきたのはかなりくたびれた背広を着た定年間際と思われるやせぎすの男だった。

「杉田さんですね」

アイシャの言葉にそれまでの無表情が人懐っこいものへと変わる。「ええ、まあ」

杉田の返事に満足げにうなづくアイシャ。要は相変わらず不機嫌そうに周りを見回している。

「ひでえ部屋だな」

「実は……上からの指示でね」

杉田氏が口を開くまでもなく誠達はこの惨めな有様が東都警察上層部の意図だと言うことを理解していた。

同盟厚生局事件。一応外面的にはテロリストによる法術データ強盗事件と言う発表で落ち着いているが、三ヶ月前のその事件は厚生局による違法法術研究の事故が原因であり、その為に東都警察と保安隊が対応に当たったことは司法関係者なら誰もが知っていることだった。

その時、虎の子の法術対応即応部隊を投入しながら何一つ点数を稼げなかった東都警察が、暴走する実験体を対峙して見せた誠達に明らかに嫉妬していると言う噂は散々聞いていた。

そして結果が目の前の哀れな現状だった。仕方がないというように顔を怒りで引きつらせながら椅子に座るカウラ。要はもう怒りを通り越して呆れてそのまま窓から外を眺めている。

「空調はちゃんと効くのね」

そう言いながらそのまま奥の空調機を確認するアイシャ。誠はただ黙って杉田の顔を眺めていた。

「ご不満でも？」

急にそれまでの杉田の柔和な表情が緊張する。一応は東都警察の警察官。しかも見るところベテランであることは間違いない。にらみを利かせるように言われればただ黙って頷くしかない誠。

「……捜査関係の資料は閲覧できるのですか？」

「当然です。ただし……プロテクトがかかっている部分については……」

「安心しな。ハッカー吉田は本隊でお寝んねだよ」

半分やけになったように要は叫ぶとそのまま近くの席に腰を下ろした。

「それではよろしく願います」

そう言うのと杉田は見放すようにドアを閉めて消えていった。

「予想したよりはかなりましなんじゃないの？」

早速端末を起動させながらアイシヤがつぶやいた。

「でもなあ」

「西園寺。結果で示せばいい事だ」

カウラの言葉に渋々うなづく要。誠はただ不安で一杯になりながら自分の襟に巡査部長の階級章を取り付けていた。

散々な一日。誠達はすぐに自分が外野に置かれていることに気づいた。

資料のほとんどは確かに見ることが出来た。茜から渡された同一犯と思われる事件資料の他にも東都警察が独自にまとめた目撃情報、被害者の共通点を調査した資料、発生時刻に近くを巡回していた警察官の氏名まですべて知ることが出来た。

ただその結果分かったことは、『東都警察の資料では絶対に犯人にはたどり着かない』と言う確信と『別の資料を本庁が隠して独自に捜査を始めている』と言う断片的な証拠だった。

各資料を閲覧するには毎回違う暗証番号が自動的に振り出されることに気づいたカウラが要に探らせたところ、本庁の捜査一課と警備部のいくつかの端末から頻繁にデータベースへのアクセスが行われていることがわかった。

東都警察は今度は保安隊を笑いものにする準備を整えている。帰りのカウラのスポーツカーの中でアイシャはきわめて雄弁だった。ロッカールームで破壊活動に走ろうとする要。それをどうやって自分が身を挺して抑え込んだかを切々と語る。誠はその苦笑いを引き摺ったまま風呂に入り、眠り、目覚めてこうして朝の寮の食堂にたどり着いた。

「本当にこうしていいんですか？」

七草粥を食べ終えた誠の言葉に同調するように要も頷いている。勤務地が変わっても保安隊の寮の生活は変わらなかった。いつものように朝食を食べ、早出の技術部の隊員達がどたばたと階段を駆け下りるのをのんびり食堂で聞きながらお茶を飲む。

「東都警察も多少は経験を積んでるんだからね。多少はうまいこと調べてくれないと私達だって体は一つなんだから」

「まあ……そうですね」

余裕のアイシャを見ながら誠が苦し紛れにそう答える。

「なに？まるで私達の出向が無駄だったって一日で決め付けているみたいじゃない。でも実は茜お嬢様からの資料じゃ分からないデータも手に入ったわよ」

アイシャはそう言うとおもむろに目の前のどんぶりを横にどけて腕の携帯端末の映像を拡大投影した。

「ずいぶんと細かい資料だな……なるほど。乗っ取るのが得意な法術の種類か……」

「茜もまだまだだな。関与の疑いのある事例を検索にかければそれなりに資料としてまとまるじゃねえか」

カウラと要はアイシャの作った東都警察の違法法術能力発動事件に関わるデータを眺めて感心した。

「パイロキネシスが半数。空間干渉や空間制御が続いて……当たり前前だけど体再生機能発動は無し」

「やっぱり放火魔みたいな奴なんだろうな。火事はなんとなくすきつとするからな！」

「それは要ちゃんの好きな法術の種類でしょ。もしかしてあなたが犯人なんじゃないの？」

「ちげえよ！」

要が軽くアイシャの頭をはたく。誠が回りを見れば二人の人物が誠達の行動を監視していることに気がついた。

一人はカウラのファンクラブ『ヒンヌー教』の教祖を名乗る菰田邦弘主計曹長。回りにアイシャから『キモイ』と呼ばれている隊員達を引き連れながら真剣に画面を見るカウラに萌えていた。そしてもう一人。

「今回は俺の出番は無いんですかね……」

明らかに不満そうに声をかけてきたのは技術部特機整備班長の島田正人准尉だった。

「なにか？死なないって言うだけで捜査に参加できると思うなよ」
要の一言に明らかにカチンと来た様に頬を膨らませる島田。彼は

純血に近い遼州人であり、意識で体細胞の再生を行なうことができる再生系の法術適正の持ち主だった。

「そんなことは分かっていますよ！」

「おい、その面は『俺は厚生局事件の時も付き合ってたんですよ！今回だって！』とでも言いたいのか？あ？」

ニヤニヤと笑いながら要のたれ目が島田を捉える。おずおずと頷く島田。そしてそこにランが当然のように現れたのでおっかなびっくり島田はランに敬礼した。

「おっと、ずいぶんシリアスな展開だったみてーだな。菰田、今日は粥か？」

どう見ても小学生にしか見えないランを見ると喜んで菰田のシンプアの一人が厨房に駆け込んでいく。その様に呆れたと言うようにため息をついた後、平然とランは誠の向かいの椅子に腰掛けた。

「島田。アタシの判断が不服みてーだな」

「不服と言うか……一応自分にはアサルト・モジュール整備班長としての責任がありますから……」

「おー。それが分ってりゃいいんだがね」

そう言うランは七草粥を受け取り静かに食べ始めた。その様子に菰田の取り巻きの一部にある秘密結社『エターナル幼女同盟』の会員達が萌える瞳でその様子を眺めていた。

「島田よー。アタシ等の仕事の目的はなんだ？」

「市民の安全を守ることです」

即答する島田に満足げな笑みを浮かべてランが頷く。彼女はそのまましばらくスプーンを握りながら考えるようなポーズをとった。

「おい、そこ。写真を撮ったら金よこせよな」

密かにランの萌えるポーズを写真に撮ろうとした菰田の隣の技術下士官に鋭い目つきを送るラン。

「すいません！すぐ消します！」

「消すくらいなら最初から撮るんじゃないよ」

苦笑いを浮かべながらそう言うとき再びランは静かに食事を再開し

た。その様子をただ待たされ続けると言うように経ったままランを見下ろしていた。

「一番必要な場所に一番適した人物を配置する。アタシは隊長からその権限を委託されて副隊長をやってるんだ。テメーの力が必要な死にそうな状態でも引つ張り出すからな」

「まあ島田は死なないけどな」

ランの言葉に茶々を入れた要をランは殺気がこもっているかのような視線でにらみつけた。

「ともかく島田。オメーは明華にもらった仕事をちゃんとしろ。終わったらアタシが明華に話をつけてやる。それでいいか？」

ランに見上げられれば島田も断れなかった。ただ力なく頷く島田を見て満足げにランはさじを進めた。

「しかし……次の事件はこっちで起こるんですかね？ たまたま気まぐれでこっちで事件を起こしてまた都内に帰っちゃったとか……」

「心配性だなアイシヤ。それならそれでいいんだよ。アタシ等の管轄の外の事件と言うことになる。茜の嬢ちゃんがこれまで作った隊長のコネを使って捜査一課だろうが警備部法術機動隊だろうが犯人を挙げてくれれば儲けものだな」

淡々とランがつぶやく。そしてその言葉が響くたびに菰田達のボルトージが上がるのが嫌でも見える。ささやき、つぶやき。その中に『少女』と言う言葉が混じっているのदैいつ爆発するかと誠は気をもんでいた。

「ああ、それと菰田！」

「はい！」

ランに呼びつけられてシンパに守られながら立ち上がる菰田。だがその回りの連中は明らかにそんな命令口調のランの態度に萌えていた。

「飯食ったら出勤だろ？ 無駄話してるんじゃないよ！」

「了解しました！ 菰田曹長、これより駐屯所へ向かいます！」

さすがにランの怒りが爆発するまでに去ろうとするが、Mっ気の

ある隊員が残ろうとするのを何とかなだめすかして食堂を出て行く。
「アイツ等何しにここに配属になったのかわかってんのかねー」

そう言うとき最後の一口を口に運ぶラン。さすがの誠もその姿には
萌えを感じざるを得なかった。

「誠ちゃん。私達のフィギュアよりもランちゃんの方が売れそうよ
ね」

「クラウゼ。つまらねーこと言ってるとはたくぞ」

そう言いながらランはテーブルの上の粥のどんぶりを持って立ち
上がった。

「期待してるからな」

そう言って振り向いたランの笑顔はいつもの鬼の副長ではなく無
垢な少女の笑顔に見えてつい誠は自分の心がときめくを感じてい
た。

「ロリコンが……」

カウラはそれを見て大きなため息をつくのだった。

「ったくなんであの餓鬼だけ寮に住み着いてるんだ？」

寮を出たときから要の機嫌はあまりよくなかった。そしてこうしてつい三日ほど前までは倉庫だっただろう豊川警察署の北側の狭い与えられた部屋を見回すと余計今朝のランの言葉が気になるように伸びをしながらそう要がつぶやいていた。

「それを言うなら私達もじゃないの。あそこは一応男子下士官寮なんだから。私もカウラちゃんも要ちゃんも『男子』でも『下士官』でもないんだから……」

「それなら私達には神前の護衛と言う任務があるんだ。例外として認められるだけの理由がある」

口を挟んだカウラをにやけたたれ目で見つめる要。

「おい、珍しいなあアタシと同意見とは。あれか？それは建前でなにかすごい深い理由が別にあるのか？」

「深い理由？」

しばらく無表情で黙っていたカウラが急に頬を染めて目をそらすと自分の端末を起動した。

「やっぱり下心か……むっつりスケベは手に負えないねえ」

「どっちもどっちじゃないの」

「なんだ？アイシャ！言いたいことがあるならはっきり言えよ！」

要の声が急に怒声に変わる。それを見てカウラはなぜかホッとしたように吐息を漏らすと起動した端末に目を向けてキーボードをたたき始める。

誠はこれ以上の騒ぎはたくさんだと先ほどのランの話題に話を持つていこうと口を開いた。

「クバルカ中佐はあの格好だとどうしても部屋とか借りるのが大変だとか言っていましたよ。小学生低学年の一人暮らしなんて誰も部屋を貸してくれませんから」

要は怒るのも馬鹿馬鹿しいとそのまま椅子に腰を下ろす。それを見ながら自分の机に腰掛けたままのアイシャが指を頬に当てて少し考えていた。

「そらそうよね。あんな小さくてキュートな女の子を見つけたら私だって付いて行っちゃうもの」

「恥ずかしげもなく言うな」

アイシャの言葉に一言突っ込むと再び画面に向かうカウラ。しばらくカウラのキーボードを叩く音ばかりであたりを沈黙が支配した。突然要が手を叩く。全員の視線が何事かと彼女に向かった。

「おい、神前。もう一回言ってみろ！」

「驚かせないでくださいよ！何をですか！」

要の大声に誠は椅子からずり落ちそうになった。なんとか耐えながら要を見る。その表情は歓喜の色を湛えている。

「だからだ！もう一回！」

そのまま要は今度は立ち上がって襟首をつかんで引っ張りあげる。驚いたアイシャが要の手にすがりつくが誠はとりあえず要が怒ってはいないらしいと言うことで安心しながらもその強力なサイボーグの怪力におどおどしながら何を言えいいのか迷いながら彼女のタレ目を見つめていた。

「なによ、要ちゃん。ランちゃんが部屋を借りられないのがどうしたのよ」

アイシャの言葉を聞いた要は誠の襟首から手を放した。そのままどすんと自分の椅子に落っこちる誠。そんな彼の目にはまるで子供が宝物にでも出会ったように満面の笑みを浮かべる要が映っていた。「そうだよ！馬鹿だなあ。アタシ等がこのちんけな部屋から出るにはそこからはじめなきゃならなかったんだ！」

「うるさいぞ、西園寺。そんな何かつかめる糸口でもあれば苦労しないと思わないのか？」

カウラにまで言われると憤慨したように要はカウラの脇にずかずか進んでいく。

「何をする！」

カウラの声もむなしく要は彼女のを占領した。そして取り付かれたように凄まじい速度でキーボードを叩いてデータを入力し始めた。「気が付かなかった……馬鹿だった……」

「要ちゃんが馬鹿なのは昔から知ってるけど」

そんなアイシャの一言にチョップを入れると要は画像を表示させた。

「不動産情報？ 賃貸物件の契約状況……？」

誠は不思議そうにどうだと言わんばかりの要の表情を見ながらつぶやいた。

得意げな要。それとは対照的に誠もカウラ、そしてアイシャもぽかんと彼女の笑顔を見つめた。

「要ちゃん……出て行くのね……。うるうる」

アイシャのわざとらしい演技にため息をついた後要はさっと端末の画面を指差した。

「勘違いするんじゃない！ 賃貸契約の全容を把握するんだよ！ もし今回の星がこちらに拠点を移したとなれば部屋でも借りると考えるのが自然だろ？ 今のご時世法術師の入居はいろいろ面倒が付きまとうはずだ」

要はそう言うとう度はポケットからコードを取り出し自分の後頭部のジャックに差し込んで端末とつながる。意識が途切れたように首が折られるがそのまま画面には検索モードの様子が映っていた。そしてそれを見てカウラが手を叩いた。

「そうか。法術師が部屋を借りる。大家も限られるしうまくいけばどこかで足が付くか」

「そう？ 検査なんて東和は任意じゃないの。法術適正を受けている人間が犯人と決まったわけじゃないでしょ？」

アイシャは半分期待はしていないと言う感じだが、その視線は明らかに要の検索の模様を眺めているものだった。

「法術適正を受けている人間の犯行だと僕は思いますよ。人の能力

を横取りして発動させるんですから。法術に興味のない人物の犯行だとはとても思えないですから」

「でも最近東都の都心からこちらに引っ越してきた人間なんて山ほどいるじゃない。いちいち調べるの？」

「しかたねえだろ……235世帯か……所帯持ちは外しても156件」

要の言葉にうんざりしたと言うような顔のアイシャ。だが彼女の肩をカウラが叩いた。

「何万人と言う豊川市の人口から比べればわずかなものだ。四人で見回れない数じゃない」

「でもその中に犯人がいると言う保障はあるの？そもそも法術適正検査は匿名で行なわれてるのよ。その156人だって一人も法術師がいないかもしれないじゃない。いたとしても嘘をつかれれば……どうせ捜査令状は下りないんだから」

そんな言葉を吐くアイシャをケールを首から外した要が哀れむような目で見上げる。

「なによ……要ちゃん」

「お前。馬鹿だろ」

「馬鹿は要ちゃんでしょ？」

いつもの挑発合戦にうんざりした顔でカウラと誠は見詰め合った。「アタシ等はこの豊川に犯人が来ていたときに意味があるから出向してきたんだ」

「そうよ。当然じゃないの」

「はー……」

アイシャはまだ分からないと言うような表情をしていたがその曖昧な顔が突然ゆがんだ。明らかにアイシャも要の言いたいことがよく分かったようだ。彼女が要に頭を下げるつもりがないことは誠にもよく分かる。

「その為にわざわざ出向してきたのよ。もしこの町に犯人が転居してきたのならそいつを捕まえないきゃ意味がないんじゃないの」

「犯罪抑止が最低任務であって、逮捕は私達の仕事の範疇じゃ……」

「カウラちゃんは黙っていて！」

八つ当たりを食らったカウラが口をつぐむ。誠は噴出しそうになりながらいらしているアイシャを眺めていた。

「なんだよ。別に戸別訪問をしようというわけじゃないんだ。すべての転居に関わった不動産屋を訪ねて回れば自然と犯人のめぼしはつく。容疑者を限定できればそいつをはっていれば事件にたどり着く。そしてそこを現行犯逮捕ってシナリオだ。なんでそんな簡単なことが分からねえかなあ」

「そんな……相手の不動産屋さんはド素人よ。犯人らしい人物かどうかなんて分かるわけ無いじゃないの。それに一応不動産業者も個人のプライバシーに関することについては……」

そう言いながらアイシャは頭を掻いた。元々そう言う任意の捜査においてはかなり高圧的に対応して結果を残すのが得意な要である。プライバシーとか守秘義務などという一般社会の常識は要の捜査にはありえなかった。それに他に何か捜査の方法があるのかと要に聞かれれば思いつく方法はアイシャには無かった。

「おう、抗議するんだろ？ さっさと見えよ」

「む……」

膨れるアイシャだが、カウラの携帯端末が着信を注げたことで誠達の興味はそちらに移った。

「はい、ベルガーですが」

端末に出たカウラ。要は卓上の画面を操作して相手の画面を映し出す。そこには先日この部屋に誠達を押し込めた杉田という刑事の顔があった。

「今度はパイロキネシス暴走です。場所は……」

誠達は顔を見合わせた。捜査の手がかりを探す段階は過ぎていた。「とりあえず文句は後だ、現場に行くぞ」

要はそう言う椅子に掛けていた制服の上着に手を伸ばす。アイ

シヤも渋々自分の机の上の帽子に手を伸ばした。

「事態は動いているんだ。私達の想像以上に早くな」

端末を終了して立ち上がるカウラの言葉を聞いて改めて自分達が明らかに後手に回っている事実に気づきながら誠は飛び出していく要の背中を追って部屋を飛び出した。

「怪我人も無し。いいことじゃねえか」

全焼した廃屋を見上げながら要がつぶやいた。すでに能力暴走を起こしてパニック状態に陥ったパイロキネシス能力者の豊川商業高校の女子生徒は警察署へ向かうパトカーに乗せられて消えていた。

あたりは消防隊員と鑑識のメンバーが焼け焦げた木造住宅の梁を見上げて作業を続けていた。

「これでもう例の犯人は豊川市に拠点を移したと考えるべきかな……」

「カウラちゃんが珍しいわね。ちよつと結論急ぎすぎじゃないの？」

「まあ私も『近藤事件』以降は考え方も変わったからな。法術に関してはどんどん先回りして考えない……と被害が大きくなってからでは遅いんだ」

黄色いテープを持ち上げて現場に入るカウラ。アイシャや要、誠もその後に続く。焦げ臭い香りが辺りに漂っていた。現場の鑑識の責任者らしい髭面の捜査官がカウラに敬礼をした。カウラ達も敬礼をしながら辺りを見回した。

「ああ、保安隊さんからの出向している方達ですか」

「よくご存知で」

鑑識の男の笑み。専門技術者らしく署長はじめとする豊川署の警察官僚の含むところのある笑みとは違う頼りにしていると云っているような笑顔。久しぶりに誠も警察の人間の言葉をそのまま信じてみることができるような気分になっていた。

だがすぐにその顔は周りの生暖かい目で見る刑事達と同じ色に染まり始める。組織の壁はやはりどこでもとてつもなく高い。

「まあ……うちは狭いですから……それに噂はかねがね」

含むところがあるというような笑みにカウラもあわせて乾いた笑

顔を浮かべた。

「連れていかれた女の子が……いわゆる『被害者』と言う奴ですか？」

誠の言葉に頷きながら鑑識の男は辺りを見回した。彼が口を開くより早く、現場の責任者らしい頭頂部まで禿げ上がった髪が目立つ定年間近と言う風な感じの巡査部長は誠の階級章を見ながら頭を掻きながら前に出てきた。その姿を見て鑑識の髭の男はそのまま先ほどまで続けていた燃えた廃屋の前の道路に散らばった家の破片を集める作業を再開した。

巡査部長は余計なことを鑑識が言わなかったかと威圧するような視線で髭の男を見送ったあと明らかに面倒な相手をあしらうような口調で説明を始めた。

「今のところパイロキネシストの能力を使用しての放火と考えるのが妥当ですな。事実、我々が探し出した宅配便の運転手の証言でこの道路から見える壁が一気に発火したと言うことが分かりましてね。物理的にそう言う燃やし方をすれば出る科学物質の反応もないですから……すぐに非常線を張りましたから他にパイロキネシストがいたとは考えられません。まず間違いなく彼女のパイロキネシス能力が利用されてこの建物が燃えたのは事実だと……」

いかに自分達がこの捜査の主役か強調したいと言う意図が満々の口調に明らかに要は苛立ちを隠せない様子だった。アイシャの押しとどめる手を叩き落としてそのまま同じくらいの背の警部に挑戦的な視線を送っている。

「で、その餓鬼が何か言ってたのか？」

警部補の階級章の要に見つめられると頬を緊張させながら巡査部長が頭を掻く。

「まあかなりパニック状態で……本部で改めて調書を作成したときに……」

「悠長だねえ。その間にまた一つ二つ事件がおきるんじゃないの？」

要の言葉にはいつもの凄みがあった。言っていることにも間違いが無いだけに巡査部長はどきまぎしながら言葉を続ける。

「聞き出せたことは……自転車でこの道に入ってしばらくしたら意識が朦朧として気が付いたらこの廃屋が燃えていたと……」

「ほう？ 気が付いたら？ 放火の意図があったかどうかは確かめて無いんですか？」

やけに丁寧口を挟む要にむっとした表情を浮かべる鑑識の責任者の巡査部長に誠はいつの間にか同情していた。

「ですがこれは都内で昨年から続いている……」

「んなこと聞いてんじゃねえんだよ！」

口答えをする相手に要が切れた。突然の恫喝の声。先ほどまで誠達の相手をしていた禿の鑑識が驚いて振り返りあんぐりと口を開けている。

「あの餓鬼が嘘ついているとか考えたことがねえのか？ あ？」

「しかし……それじゃああなた達はただの無駄飯食い……」

思わず本音が出て口をつぐむ鑑識の隊長。要はそれを見て満足げに頷く。

「要ちゃん。いじめはいけないのよ」

さすがにアイシャはここで要を止めにかかった。このままならいつまでも要は目の前の巡査部長をつるし上げるばかりで話が進まない。

「いいだろ？ 合法的なストレス解消法だぜ」

「まったく趣味が悪いな」

いつものことなのでアイシャもカウラもニヤニヤと笑っていた。その様子が薄気味悪いと言うように巡査部長は襟を揃えんと去っていった。見てみるとそこにはようやく到着した幹部と思える背広の警察官がいてすぐに敬礼すると誠達が入ることすら許されなかった廃屋の敷地へと彼等を案内している。

「間違はなくこっちに来たんだな。人の禪で相撲をとる馬鹿が」

これ以上の詮索はただの無駄。そう判断して振り向いた要のその

言葉に一瞬で真顔に戻ったカウラとアイシャが頷く。誠はただいつものように彼女達が暴走しないように見張っていた。

「でも……放火魔ってこう言う野次馬の中にいることが多いんですよね。それにさっき法術師はすべて調べたなんて態度でしたけど法術適正は任意でしょ？」

誠は話題を変えようと野次馬達に目を向けた。何名かの警察官が時々野次馬に声をかけて質問をしているようだが、時折逃げていく人物もいるのでとてもその質問が役に立っているようには誠には見えなかった。

「まあね。本来法術について知らなかった現場の捜査官の認識なんてそんなものよ。あの連中じゃまず犯人逮捕は無理ね」

住宅街のお化け屋敷が延焼したことで遠くを見るとさらにこの騒動を見ようと人が集まっているのが見える。

「しかもここの捜査官の調べてるのは実際に火をつけた人間ばかりだ。この事件の主犯は火をつけるんじゃないくて火をつけさせるんだからな。放火魔みたいいつまでもこの現場にいるかどうか……なあ、アイシャ」

「私に聞かないでよ」

迷惑そうに要に向かって言うアイシャ。誠はただ訳もなく野次馬達が増えていく様を眺めていた。

「ともかく例の不動産屋めぐりを始めねえとな。いつ人死にがでるかわからねえ」

要の言葉に誠達の顔に緊張が走った。法術関連の事件は誠がその存在を示して見せた半年前の『近藤事件』以来、増加の一途を辿っていた。好奇心で受けた法術適性検査で突然自分に力が宿っていることを告げられた人物が暴走する話。そんな事例は法術特捜の首席捜査官の茜から嫌と言うほど聞かされていた。

ほんのちょっとした好奇心でそれは始まる。それがいつの間にか人を傷つけるようになり、さらに重大な事件を起こすことになる。そんな典型的な法術関連事件。今回は趣が違うが確かに自分の力の

使い方が来るって着ているという意味で同じ様相を呈してきた。

「じゃあ私達の捜査を始めるとするか」

すでに車を運んできていたカウラ。その銀色のスポーツカーに誠達は乗り込む。後部座席に押し込まれた誠が現場検証中の刑事達を見れば、まるで哀れんでいるような薄笑いを浮かべて誠達が車を出すのを眺めていた。

細い路地を抜け幹線道路へと車は進む。

「愉快犯ですかね」

誠の一言ににんまりと笑う要。そして次の瞬間誠の足は要のチタン合金の骨格を持った右足に踏みしめられた。

「痛いですよ！西園寺さん！」

「当たり前だ。痛くしてるんだからな」

要のそんな言葉に振り向いたアイシャが苦笑いを浮かべている。カウラはまるで聞いていないと言うように変わる信号の手前で車を止めた。

「まだまだ小手調べ程度の気分だろ。この前の婆さんを標的にした時は珍しく空間制御で時間軸をいじると言う大技を使ったが、まだ空間制御系の法術を借りて何かをするって所までは考え付いていないみたいだからな。アタシなら次は干渉空間展開能力のある奴を見つけて宝飾品店に忍び込んで……」

「ずいぶんリアルね。自分でやる気？」

アイシャが茶々を入れたので身を乗り出そうとした要だが、カウラはうんざりしたと言うように車を急発進させた。

「おい！ベルガー！」

後頭部を座席にしたたかぶつけた要が叫ぶ。だがカウラは振り向くこともしない。

「お前さんがさっき作ってたハイキング表の通りに行くつもりだがいいか？」

「カウラちゃんはクールねえ。上官命令、それでいきましょう」

要は複雑な表情で頷く以外にすることは特になかった。再びカウ

ラは左にウィンカーを出すと一方通行の横道へと車を乗り入れた。表通りから見えるビルの裏は曲がりくねった道。かつての街道筋のままの細い道の両側に狭い店舗が続いている。

「まったく再開発はまだなのか？」

「要ちゃんのお小遣いで何とかすれば？」

「やなこった！」

要とアイシャのやり取りについて噴出す誠。すぐに要のタレ目が威圧するように彼をにらんでいく。店が終わると今度はトタンでできた安っぽい壁ばかりが並ぶ平屋の家々の中へと道は進んだ。

「その横丁を……」

「西園寺。私が知らないとしても？」

カウラはやけになって左にハンドルを切る。大きく車体は傾き、カウラのエメラルドグリーン色のポニーテールが揺れる。とつぜん現れた近代的な建物。誠にもそれがどうやら不動産屋の店舗だと言うことが分かった。カウラはそのまま車は駐車場に乗り付けられ再び思い切り急停車する。

「カウラちゃん……もっと丁寧に」

アイシャは自分の紺色の長い髪を掻き揚げながら苦笑いを浮かべた。その座席を後ろに座る要が蹴り上げる。

「人の車だと思って……」

ため息をつくカウラはドアを開けて外に出る。アイシャもつられるように出て助手席のシートを倒す。何とか要、誠が狭い後部座席から降車した。

「ここが一番か」

カウラの言葉に要は苦笑いを浮かべながら頷いた。

周りの家々がどう見ても建て替えの費用が無くて修理に修理を重ねて住み続けているという平屋ばかり。そのなかでコンクリート製の築一、二年と言う二階建ての店構え。しかもどんと立つ店の看板は磨き抜かれたように光沢すら放っていた。

「こんなところで商売ができるんですか？」

誠は半分呆れながら白地に金の字で『豊和不動産』と書かれた看板を見上げていた。

「まともな営業をしている不動産屋ならな。でもまあ……その筋の人間なら話は別だ。それに後ろ暗い法術師が住処を探すならこう言うところのほうがぴったりだろ？」

そう言う要の視線の先には黒塗りの大型高級車が止まっていた。

「まるで明石中佐の車ですね」

誠はそういいながらこの不動産屋が要担当のその筋の人間の経営するものであることがわかった。

誠の言葉に一度ほくそえんだ要はそのまま自動ドアの前に立った。

『いらっしやいませ！』

店内に声が響いた。店員達が一同に立ち上がり誠達に頭を下げている。民間企業での仕事の経験などは学生時代に工場で鉄板を並べていたくらいの誠には異様な光景に見えて思わず引く誠。

『あんなあ。その筋の絡んでる店ってのはみなこんなもんだぜ。妙に愛想が良くて……ああ、あそこを見な』

小声で要がつぶやくその視線の先には大きく張り出されたスローガン。『負け犬は死ね』と言う筆で書かれた文字が壁に張り出されていた。

「あの……」

入ってきた要の着ているのが東和警察の制服だったことに気づいた受付の女性が一番声がかけやすそうに見えたアイシヤに語りかけてきた。誠も声をかけた小柄な長い髪の受付嬢の化粧が一般のOLのそれより明らかに濃いのが目に付いてなんとなく要の言いたいことが分かったと言うようにアイシヤに目をやった。

「ああ、お仕事の邪魔かもしれないけど……ちよつとお話を聞きたいの」

明らかに回りに聞こえるような声でアイシヤが口を開いた。その様子におどおどと受付の女性は背後の事務所を見る。そこにはどう見ても回りの緑の制服を着た事務員達とは毛色がまるで違う黒い背

広の恰幅のいい男の姿があった。

『やっぱりこれは西園寺さんの担当だな』

男が仏頂面で立ち上がるのを見て誠も納得する。以前の誠ならその男の威嚇するような視線におびえて足が震え始めるところだったが、この男と同類の前副部隊長の明石が同じような格好をしていたのでとりあえず要達を盾にして後ろで男と目が合わないように天井を見上げる程度で落ち着くことができた。

「申し訳ありませんね。うちは……個人情報の遵守をモットーにしていますから……見てください」

男は受付にたどり着くと背後のついたてを指差した。不動産業の営業許可証の隣には個人情報保護基準達成の証書が飾られている。だが要はまるで臆することはない。彼女が得意な腕っ節でなんとかなる相手に遭遇した時独特の笑みを顔に浮かべて受付に手を着いた。「そりゃあ殊勝な心がけですねぇ……まったく頭が下がる納税者さん。応援していますよ……納税者さん」

要が二回『納税者』という言葉が続けるとなぜか悪趣味な背広の男はこめかみに手をやって誠達を一人一人値踏みするような視線を向け始めた。

「あんたら本当に警察の人？」

真顔で聞いてきた男の視界から突然要が消えた。誠も黙っているうちに男はそのまま要に組み敷かれて床に転がっていた。

「おう、良かったな。アタシ等は現在東都警察に出向中の保安隊の実働部隊員だ……まあアタシの身分は今でも胡州陸軍のコマンド部隊にあるけど……なんなら試してみるか？」

その言葉。そして生身とは思えない動きと重さで口を要に押さえつけられている男がうめく。その顔を見て要の表情がさらに残酷そうな笑みにゆがんだ。

「ほう……アタシは何度か租界でテメエの顔を見てるけど……出世したもんだなあ。鉄砲玉君」

要の立て続けの言葉に何かを思い出したように動きを止める男。

明らかに要を見るその顔は驚きと恐怖が男を支配しているのが分かる。要は納得したように立ち上がりスカートの裾をそろえる。

「なんだと思ったら……西園寺のお嬢ですか……そうならそうで……って納税？」

「そう！アンタ等が今年の売り上げの約40パーセントを……」

「お嬢！勘弁してくださいよ！何が目的ですか？なんか事件でも追っているんですか？胡州の官派の残党狩りですか？」

泣き出しそうに跪く男に誠は哀れすら感じた。恐らく要はこの不動産屋の裏帳簿をネットで拾って脱税の記録でも見つけたんだろう。さらにまともな不動産屋のすることではない違法な活動の証拠も握っているかもしれない。彼が振り返るとカウラもアイシャも要のすることがはじめから分かっていたようににんまりと笑みを浮かべている。

「じゃあ、オメエの事務所。そっちで話そうか。ここじゃあ拙い話も出てくるんだろ……あ？」

とても遼州一の名家の令嬢とは思えない顔つきで男をにらみつける要。男も仕方なく立ち上がると事務所の職員が失笑を浮かべているのにいらだちながら立ち上がった。

「じゃあ……二階で」

そう言う男は静かに横にあるドアを開いた。要が誠達を振り返りにんまりと笑うとそのまま付いて二階に上がる。カウラとアイシャも誠を引き連れてその後ろについてあがった。

桐の見事な柱の通った二階。まるで雰囲気が違う部屋にはまともな企業には似つかわしくないような雰囲気何人かの若い衆がタバコを啣えて雑談をしているところだった。そこに現れた憔悴しきった兄貴分。当然のように鋭い目つきがその後ろを歩いていた要に注がれることになった。

「客だ！話があるから出てけ！」

男の言葉に若い衆は男に続いてくる東都警察の制服を着た誠達を不審そうな目で眺めながら奥の部屋へと消えていった。そしてその

まま誠達は応接室のようなところに通された。誠は贅を尽くした部屋の調度品に目を奪われた。社長の机の後ろには金の額縁に古そうな書が入っている。その手前にはなぜかその書を邪魔するように日本刀が飾られている。両隣の壁は高級そうな木製の棚になっており、中にはこれも磨きぬかれたのが良く分かるグラスや誠が見たことも無いような高そうな洋酒が並んでいるのが見えた。

「おい、儲かるんだなあ……不動産屋は」

要の嫌味にただ乾いた笑いを浮かべながら男はソファーに腰掛けた。

「ああ、お嬢と……連れの方」

男は手でソファーに座るように合図する。にんまりと笑った要はそのまま中央にどっかりと腰を下ろした。

「忙しい中来てやったんだ。茶ぐらい出せよ」

「わ……わかりました」

そう言う男は振り返り大きすぎる社長の机の上のボタンを押した。

「お前さんなら聞いたことはあるんじゃないか？ 噂じゃあ法術師適正のある人に部屋を貸すのを拒否している業者があるそうじゃないか」

悠然とタバコを取り出す要。カウラとアイシャが嫌な顔をするが男は気を利かせたように応接セットの大きなライターに火をつけて要に差し出す

「ああ……この業界もいろんな人がいますからねえ」

「どう見てもやくざに見える人とか？」

アイシャの皮肉に男の米神がぴくりと動いた。

「なあに。私達は書類上は法令通りの商売をしている善良な市民に迷惑をかけることはしないわよ……ねえ、要ちゃん」

「そうだな。それは別の部署のお仕事……それでだ」

曖昧な相槌の後で要は手持ちの端末をテーブルに置いた。そして画面を起動させるとそこには豊川市内の不動産業者の一覧が表示さ

れた。

「豊川はなんと言っても菱川系企業のお膝元だからな。不動産屋も系列が多い。そしてなぜかこの系列のお店は法術師がお嫌いに見えるアタシの耳にも入居拒否や転居要求の話が届いてきている」

「なんだ……お嬢も知ってるんじゃないですか。大手はそういうところには敏感ですからね。特に菱川は政府とつるんでいるから法術の危険性は熟知しているんでしょう。でも基本的に大手は法術師の入居には寛容な方ですよ。付き合いのある中堅クラスの社長とかは法術師は絶対取り次がないとか言ってたのがいますからむしろ中小の業者の方がハードルは高いと思いますけどね……あれですか？法術師の差別の調査をされているとか？」

タバコをふかす要がリラックスをしているのを見て男は安心したように笑みを浮かべてそう言った。すぐに要の目が殺気を帯びる。余計なことを聞いた。修羅場をくぐったことのあるらしい男はすぐに黙り込んで静かに腕を組んだ。

「お嬢の目的はさて置いて。まあそんな状況ですから……大手に割高な仲介料を払えない連中となると……駅前の三件はかなり法術師にはつらいですからね」

男はそう言うのと静かにタバコを取り出した。嫌そうな視線を向けるカウラだが、要がそれへのあてつけのように自分のジッポライタ―を取り出す。

「すみませんね……」

「アタシのこんなサービスはテメエじゃ無理だったろ？うれしいか？」

要がかつて胡州陸軍特殊部隊員として東和の沿岸部の租界での非合法物資の取引ルートを巡る利権争い『東都戦争』で潜伏して娼婦として情報収集を行っていたことを誠にも思い出させた。

「となると……南商店街の二件」

「ああ、そこはうちじゃないですが……堅気じゃない連中が関わってますから」

「おう、参考にするわ」

要は男の指定する店にしるしをつける。そしてそのまま画面に映る商店街の店を眺めながらスクロールさせた。

「かなり絞り込めるな……今回の事件の犯人。手口からして素人。そうなるここみたいな危ない経営者のいるところは避けるだろうから……」

「姐さん。危ないは止めてくださいよ。うちはこれでもまっとうな商売をしているんですから」

淡々と自分を斬って捨てた要に泣きを入れると静かにタバコをふかす。

「でも私もそうだけど分かるの？不動産屋のどれが危ないとか、どこが法術師には紹介しないとか」

アイシヤの言葉に一瞬要の手が止まった。心底呆れたと言う顔。それが今の要の顔に貼り付いていた。

「オメエ……この店の経営者がこいつだって分からなかったのか？」

「そういう事がすぐ分かるのは西園寺くらいの経験が必要だろうな」

そう言うとかウラは自分の顔に向けて流れてくるタバコの煙を仰ぐ。そして要はしばらく放心したように黙り込んだ。

「つまり……やっぱり駅前の二件も捜査対象か。まあいいや」

要はそう言っ頭を掻きながら男を見つめた。

「うちには法術師とわかる客からの物件の紹介はしていませんよ」

少しばかり焦った調子の男。それを見ると要は視線を誠に向けた。

「だってよ！良かったなあ、寮があって」

誠はただ訳も分からず頷いた。そして要のしぐさを見て男の表情が曇るのがすぐに分かった。

「こいつ……いや、この兄さんは法術師？」

うなづく誠。そこには先ほど要に向けたのとは別の恐怖の瞳があった。理解できない奇妙な生き物に突然であったとでも言うような

目。誠も時々こう言う目に遭遇することがたまにある。法術と言う理解不能な存在が明らかになって生まれた溝をそのたびに誠は実感する。

「そう言う事。それどころかこの『法術』と言う言葉を生んだあの『近藤事件』で暴れまわった奴」

要の言葉にさらに男は明らかに緊張していく。それを見ると誠の脳裏に何かが流れ込んできた。恐怖、侮蔑、敵意。それらの感情が目の前の男のものだとすぐに誠には分かってきていた。

「こんなに……」

「どうしたの？ 誠ちゃん」

アイシャの言葉に自分がしばらく敵意の視線で男を見ていたことに気づいて誠はうつむいた。

「いつも言ってるだろ？ 下手な力の有無は敵意を生むだけだって……なあ」

要の言葉におびえるように頷く男。確かにこうしておびえられるに足る力を自分が持っていることを誠も自覚していた。

「でも……お兄さんが顔色変えたくらいじゃ法術師かどうかなんて分かりませんよ。俺だって知らなかったらつい貸しちゃうかも知れないじゃないですか」

「そうか？ なんでも一部の同業者が入居の条件に法術適正試験の受験を課しているそうじゃねえか。同業者だろ？ 知ってるんじゃないか？ たとえばさっき言ってた社長とか」

そう要に詰め寄られると男はただ静かにうつむいてタバコをくゆらせるほかはなかった。

「……」

男が黙るのを聞いて要の顔はサディスティックな笑みにゆがんだ。その様子はカウラも察したようですばやくかな目の前に手を出してきた。

「安心しな……じゃあどこなら法術師の客を扱うことになる？」

大きく深呼吸をする要。アイシャもいつ要が暴走しても良いよう

にと鋭い目つきで彼女を見つめていた。

「駅前の三件は法術師の適性検査の陰性が紹介の条件です。それ以外だと……菱川以外の大手ですがそこも担当によっては大家が法術師嫌いだったりすると適性検査を強要するような話もありますし……」

「結論言えよ」

いらだつ要。男はさらにうつむいて話し出す。

「規模の大小に関わらず担当者に恵まれるまで何度も通うしかないんじゃないですか？まあ小さいところは親父一人でしょうからそこは一発で分かるかもしれませんが」

明らかに殺気を帯びている要に少し驚きながら男は静かにそう言った。その言葉を聞くと要は立ち上がった。

「姐さん……」

「分かった。とりあえずお前が知ってる法術師に部屋を貸しそうな業者のリストをあとでアタシのところまで送れ」

「ホントなの？担当者次第ってことは全然絞られなかったってことよ！要ちゃん全部見て回る気？それに大手なんかだとプライバシー保護が……」

アイシャが文句をつけるのをタレ目でにらみ付けで黙らせた。

「仕方ねえだろ！足が資本だぜ、捜査ってのは！」

そう言うとそのまま一人で出て行く要。誠は男に頭を下げるとそのまま要を追った。

「西園寺さん！待って下さいよ！」

誠の言葉を見無視してそのまま階段を駆け下りる要。誠は一階のロビーにたどり着くとそのまま全員が立ち上がって要を送り出す様に遭遇し違和感を感じながら外に出た。

「畜生！」

要が空を見て叫ぶ。

「仕方ないじゃないですか。狙いは良かったんですから……なんなら安そうなアパートを全部回って……」

要はキツと誠を振り向いた。明らかに自分に対する怒り。危ない橋をわたっている人間を追い詰めることには慣れてきた自信が有るだけに今回の法術師を紹介する不動産屋を絞り込むと言う策には自信があったのだろう。

「そんな問題じゃねえよ！今でも犯人の野郎はどこかでニヤニヤ笑ってるんだぞ！そう思うと……」

そう言いながら要はようやく店から出てきたカウラにドアの鍵を開けるようにと指差した。

「慌ててどうなる」

「悠長にしているほど人間できちやいねえんでな」
自嘲気味に笑う要。

「仕方が無いわね。乗りかけた船だもの。付き合うわよ」
助手席のドアを開けながら微笑むアイシャ。要は自分が許せないと言うように無表情を装いながら車に乗り込んだ。

水島はしばらく震えが止まらなかった。すでに暗くなりかけた部屋の中。静かにうちから湧き出てくる笑みを我慢していた。突然の火に驚いて自転車から転げ落ちる女子高生の顔が頭の中をぐるぐると回転しているように感じる。

もし覚醒剤にでも手を出すと言う感じを味わえるのだろうか？そんな思いが頭をよぎる。しかし、水島にはそんな麻薬に頼ってまで高揚感を高める必要は無い。今は力があつた。

「そうだ……俺は神にもなれるかも知れないんだ……」

これまで彼が『力の使い方を教えてやった』連中の驚いた顔が次々と頭をぎる。そうすると妄想が膨らみさらに笑みが広がるのが感じられる。

最初のうちは偶然に見えていると思った他者の能力が意識して見えるようになったのはほんの最近。しかもそれも偶然だった。

年末。朝からの法律の勉強で疲れていた水島は参考書を持って日がとつぷりと沈んだ都心のビル街を歩いていた。通り過ぎる車の列。かつてそんな営業車の一台に自分が乗っていたことを思い出すと石でもあれば投げたくなる衝動に駆られていた。

『どこかにカモがいないかね』

そう思いながら湾岸地区へ走る地下鉄の駅へ急ぐ水島。

そんな彼の目の前に立体駐車場の出入り口が目に入った。ビルの隙間に申し訳程度に付けられた事務所の横では足元に空き缶を置いた警備員がタバコをくゆらせていた。

『なんだろう、こいつは』

いつもならそのまま目をそらして通り過ぎてしまふところだが水島は男から眼が離せなかった。男の手の中のタバコの赤い光が強くなったり弱くなったりを繰り返している。そんな男に水島は意識を集中してみた。

突然警備員の意識が自分に流れ込んできた。倦怠感、疲労、妬み、快楽、嫌悪感、嫉妬。そんな混乱した他者の意識に触れた瞬間、水島は恐怖のあまり手にしていた参考書を取り落としそうになった。

『なんだ！脅かすな！』

声にならない叫び。そしてその意識の端にいつも法術を持つものに出会うと感じる独特の引っ掛かりがそこに感じられた。

『これは使えるな』

男の前を通り過ぎながら水島はニヤリと笑った。すぐにその力、パイロキネシス能力を発動させてやる。

「熱！なんだ！熱い！」

背中で男の叫び声が聞こえた。水島はとりあえず男の手にしていたタバコを消し炭にすることでこの場は満足して足を速めた。

もしそれだけで終わっていれば、これからも機会があれば悪戯する程度で済んでいたことだろう。だが次の瞬間。街の人々のさまざまな意識が流れ込んできていた。

誰もが敵意を意識の下に抱えていた。彼とすれ違う高いヒールを履いたやせぎすの若い女は何か憎悪を燃やしているのを必死に理性で押し殺しているのがすぐに分かった。信号待ちでまわりをきよろきよろと見ているタクシーの運転手にはあからさまな前の客への怒りが見て取れた。道端で大きな腹を見せびらかしながら商談相手との挨拶のため大げさに頭を下げているサラリーマンには頭を下げる相手への苛立ちばかりが目についた。

自分が失業をしてから世間に対して自分だけが持っていると感じていた感情のすべてが街に満ちていた。

『こんなに人は負の感情で動いているのか……』

ただ黙って歩いていてもその感情に飲み込まれそうになる自分。そしてその目の前を歩く少年の姿を見て水島は驚愕した。

少年。八歳ぐらいだろうか。すでにどんな格好をしていたかは覚えていないが、その表情は妙に老成しているような印象を水島に与えた。

「じろじろ見るなよ……そんなに法術師が珍しいのか？」

明らかに自分に向けて投げられた言葉にしばらく水島は呆然と立ち尽くしていた。

「意識の覗き見なんてずいぶんと趣味が悪いじゃないか」

続けて少年から吐かれた言葉。今でもその時の衝撃は忘れていない。

そこは水島が住む湾岸地区へ向かう地下鉄が入っている東都新開地駅西口。

再開発のビルと雑居ビルが混じった混沌の街での二人の出会い。それを思い出すたびに水島の心は震えた。

「おじさん……今何かやったね」

その言葉を聴いて水島は体の力が抜けていくのを感じた。明らかに誰も知らないはずの自分の力を見られた。初めての体験で混乱する意識の中でも彼は少年が自分を告発しようとしているのではないかと思っただけ身を翻して早足で逃げ始めた。

「逃げなくてもいいじゃない。別に責めてるわけじゃないんだから」

少年はついてきていた。水島の心臓は高鳴った。誰も自分に關心など持たないと思っていた都心の繁華街。その中に明らかに自分に興味を示してさらに水島の悪事の一部始終を見物していた少年がいる。握り締めた法律書にも冬だというのに汗が染み出てきた。

「僕もおじさんの意識を読ませてもらったけど……。失業中か。つらいよね。そうだ、できれば就職先でも世話して……」

「いい加減にしたまえ！」

しつこい少年の追跡に振り向いた水島はついに少年を怒鳴りつけていた。少年は頭を掻きながら立ち止まり、そして大きく深呼吸をした。

「なるほど……ご自分の力の意味をご存じないようですね」

「力？ なんだねそれは……」

水島の声は震えていた。ただ警備員の力を利用してその男のタバ

コを燃やして見せた。しかも自分の能力を使ったわけではない。だと言うのになんで少年からつけられねばならなかったのか。そしてなんでその水島の力の使い方を少年は知っているような口ぶりなのか。水島はただ何もできずに少年を見下ろしていた。

目の前で少年はそんな水島を見ながらしばらく考え事をするように腕組みをした。通り過ぎる人々は親子か親戚が何かでもめているだけでも思っているようで、無関心のまま通り過ぎていく。

そんな中、少年はいい考えが浮かんだというように目を輝かせて水島を見上げてきた。

「OK。それならちよつと僕の友達になってくれないかな……」

少年の言葉に水島は言葉を失った。どう見ても8歳くらいの少年。先ほどの感覚からして相当な法術適正の持ち主のようだがあくまで子供だった。気まぐれか、それとも何か狙いがあるのか。水島の心が猜疑心で満たされていく。

「友達？」

オウムのように繰り返す。それでも少年の笑顔は絶える事が無い。「そうだよ。じゃあ端末を貸して」

手を伸ばしてくる少年にまるで操られるように水島は自分の携帯端末を貸していた。

「これ、連絡先」

そんな少年の言葉に水島は端末を手にして操作してみた。

「アメリカ陸軍東都情報管理局第三分室……住所はアメリカ大使館？」

足が震えた。自分の行動や心理をすべて見通していた事実を見れば少年の能力は明らかに自分よりも優れているのは明らかだった。そしてそんな彼の連絡先は軍の関係の施設だと言う。しかも所在地はアメリカ大使館の敷地の中である。

「別に気にしないでいいよ。ただの見たまんまの子供だから。住所が大使館なのであって……」

まるで当然の事実のようにしゃべる少年。その態度にさらに水島

の鼓動が加速していく。

「それでも十分すごいことなんだけどね」

「そう？それでもないと思うけど」

少年が怪しげに笑う。

「じゃあ気が向いたら連絡くれるとうれしいな」

少年はそう言うとそのまま手を振って立ち去ろうとする。

「なんなんだ君は！俺を……」

水島の搾り出した言葉に気がついたように振り替える少年に驚きの表情が浮かんでいる。

「十分法術を使えるようになったらお話聞かせてもらおうよ。それまで練習していてね」

満足げに微笑む少年。水島の手はついに参考書を地面に取り落としていた。その音に気がついたように少年が再び振り返る

「ああ、あくまでも軽い練習くらいにしてくれないと困るよ。警察なんかの世話にならない程度にね」

にんまりと笑う少年の顔。その妖しげな姿に水島は飲まれていた。そして自分の言いたいことはすべて言ったと言う表情で少年は人ごみの中に消えていった。

たぶん周りの通行人は二人が何を話していたのかなどは気がつきもしないだろう。そして自分の力も去っていく少年以外には関心のほかの出来事だった。

「練習か……」

なぜか気が付けば水島は自分の右手を見つめていた。そして思い出して落ちた参考書を拾い上げた。

そして再び自分の手を見つめる。その手は今もこうして変わらずに水島の目の前にあった。

端末を叩くのと本のページをめくること以外得意なこととは何もない手。

『突然の出来事か……必然の出会いか……』

今は豊川市のアパートでこうしてその『練習』を終えた満足感で

満たされた状態で一人部屋で横になっている。

『まあ練習は続けるさ。こんなに面白いんだから。それに俺を誰も止められないんだから』

そう思うと水島の顔に笑みが自然と浮かんでくるようになっていた。それを感じると水島はあれから自分が笑うことが多くなっている事实に気づいて少しばかりあの名乗らなかった少年に感謝の言葉を送りたいようになっていた。

「令状がなきゃアタシ等は動けねえのはおんなじなんだ……でもなあ、捜査会議にも出れないってのはどういうことなんだ？犯人逮捕する気あるのか？あの連中は！」

部隊の溜まり場、あまさき屋。店に来て三十分も経たずにすでに要は二本のラムの瓶を空けていた。誰もそれを止めない。カウラは黙って烏龍茶を啜る。

要の怒りももつともだった。署に帰った誠達を待っていた杉田。彼はぼそぼそとつぶやくように愚痴り始めた。現場を見た後に勝手に行動を開始するな。そんな連中には捜査会議に出る資格は無い。会議の結果どおり後で動いてくれ。要がそれを聞いて暴れださなかったのが今考えても不思議なくらいだった。

「まあ東都警察は当てにならないことは分かったものね……完全に私達には情報は流さないつもりよ」

「意地でも自分の手柄にしたいんだろうな」

アイシャもカウラも黙ってはいるがそのはらわたは煮えくり返っているのが痙攣しているこめかみや口元を見れば誠にも分かった。誠も確かにほとんど監禁状態でトイレに行くのにも係員がついてくる豊川署のやり方には腹に据えかねるものがあつた。

「私も言われたから一応吉田さんにも頼んでみたけど……法的にはネットの情報は改竄がいくらでもできるから証拠としては弱いんですって。それに住民登録関係のセキュリティは吉田さんでも足がつくのを覚悟しないと個人名の特定まではできないって言われたわよ。東都警察ばかりか東都都庁まで敵に回すのはごめんだから証拠探しには足を使えって」

呼び出されたアイシャと同じ人造人間で保安隊運行部員のサラ・グリファンとパーラ・ラビロフは暗い表情でたこ焼きを突付いていた。

「二人にも迷惑かけたわね……特にパーラ」

「何よ。迷惑かけたのが分かってるならこれからも付き合わせなさいよ」

パーラはピンクの長い髪をなびかせながらたこ焼きを口に頬張る。店に着くなりアイシャのマシガントークの洗礼を受けた上にこれまでの東都警察との確執を知る二人は完全に捜査に参加する気だった。そのあまりにもやる気が前面に出た姿に誠も少しばかり困ったように店の奥で心配そうにこちらを眺めている女将の家村春子に目をやった。

要が三本目のラムに手を伸ばした。

「西園寺さん。飲みすぎですよ」

つい口を出していた誠。目の前のグラスばかり見つめていた要の鉛色のタレ目が誠に向かってくる。肝臓のプラントの機能を落としてわざと泥酔している要のにごった瞳。そこには自分の失敗を悔いる色が嫌と言うほど見て取れた。

「いいアイディアだと思ったんだけどなあ……不動産屋の線から犯人へ直行。今頃は警察の連中も人海戦術で同じこと始めてるだろうし……そうになったら察しのいい犯人なら対応策を練られるぞ。それでパーだ」

そう言ったただけですぐに要は目の前の空のグラスに酒を注ぐ。

「金の無駄になるぞ」

「いいんだよ、たまには。こう言うときは思いっきり飲ませろよ」

カウラの言葉に顔も上げずに要は酒を飲み続ける。

「まるで通夜よね……私も正直騒ぐ気にはなれないわ」

そんなアイシャの言葉に誠もただ乾いた笑みを浮かべるだけだった。手がかりは見つけては消え、ただ時間だけが過ぎる。同盟司法局の捜査責任者である茜のコネで手に入れた東都警察の警察官の捜査権限。しかし出が保安隊と言うことで警戒する東都警察からつまはじきにされて定時に仕事を終えたらこうして酒を飲むより他にすることが無い。また何か動いて豊川署の捜査官と衝突すれば今度は

東都警察上層部の介入も容易に想像できた。

「焦ってきますね」

誠のその言葉に全員が大きいため息をついた。

「たのもー!」

突然の突拍子もない叫び声に店の客達は入り口に目を向けた。

そこには黒く巨大な影と、少しだけ入り口を開けたところに立っている少女が見て取れた。

「シャム……」

要が呆れたようにつぶやく。赤いパーカーを着た少女、ナンバルゲニア・シャムラード中尉の能天気な笑顔にそれまでの自分が浮かべていた仏頂面を思い出して一同に自然と笑顔が浮かんだ。

「師匠! お散歩ですか?」

店の奥から飛び出してきたのはエプロン姿の家村小夏。女将の春子の一人娘でシャムを師と仰ぐ女子中学生だった。

「おう! お散歩だよ! そしていつもの!」

シャムの言葉に小夏はそのまま厨房に消えていく。

「しかし良いのか? グレゴリウス13世は……一応猛獣だろ?」

入り口をふさぐ巨大な影。それがコンロンオオヒグマの子供のグレゴリウス13世であることは全員が分かっていた。

子供だと言うのに地球の最大級の熊と同じくらいの大きさの巨体。一応繁華街であるあまさき屋の前にやってくるのは不自然を通り越して異常だった。

「知らないの? 要ちゃん。このまえ豊川FMで紹介されてたわよ。」

街の人気者だって」

アイシャの言葉に要の顔がゆがむ。

「マジ? いいの? ロープも鎖も無えんだぞ?」

そこまで言ったところでシャムの頭の上にグレゴリウスの顔が飛び出してきた。

「なんだよ……やる気か?」

「西園寺。熊と同レベルでの喧嘩はやめてくれ」

諦めたようにカウラがつぶやく。そして厨房からは大きな鉢を持った小夏が現れた。

「はい！グリンのおやつですよ！」

そう言う小夏は入り口になにやら赤いものが入った鉢を置く。誠は以前、小夏からこの店にはシャムの下宿している魚屋で出た魚のあらをグレゴリウスの餌として蓄えていると言う話を聞いたのを思い出した。すぐに顔だけ出していたグレゴリウスはそのままシャムの足元に顔を持ってきて鉢の中に頭を突っ込んだ。

「やっぱり動物がご飯を食べるのは和むわねえ」

「和んでる場合かよ」

アイシャの言葉に思わず要は突っ込みを入れていた。だがシャムとグレゴリウスの闘入でそれまでの重い空気が吹き飛んだのは事実だった。

「そう言えば、中尉。基地からここまで歩いたんですか？」

「アホか……そうか！吉田はどこだ！」

要が立ち上がるとパーラとサラも立ち上がった。そしてそのまま三人は二階の座敷に駆け上がっていく。そんな三人を確認すると静かにシャムの背後から吉田が現れた。

「あいつ等馬鹿じゃねえの？いつも俺が二階に現れるとは限らないんだよ」

「吉田少佐……日ごろの行いじゃないんですか？」

カウラに言われて頭を掻きながら吉田はどっかりと椅子に腰掛けた。

「どうだい、捜査の方は」

突然吉田から聞かれてため息をつくアイシャ達。

「まあ慣れない捜査活動だ。成果が出る方がどうかしてる……って言うけど茜のお嬢さんも前回の厚生局の件で味をしめたからなあ……そうそういつもいい結果が出るわけじゃないのに」

そう言う吉田はアイシャの頼んでいた新しい烏龍茶を手にして飲み始めた。

「分かっているなら教えてあげたらどうなんですか？ 私達は捜査のプロでは無いんです」

「まあ言うなって人っていうやつは失敗をして学んでいくもんだよ。あの人も多少は痛い目に会わないとね。それにお前等も多少はこう言う頭を使う仕事をした方が後々伸びるよ」

カウラに聞かれて答える吉田の顔は少ばかり悪戯をした子供のような雰囲気があった。

「そんな悠長なことを言っている段階ですか？ こうしている間にもあの違法法術発動事件の犯人は……」

「はいはいはい！ ちょっと待てよ。落ち着けよ。俺達も腹が減ってるんだ」

そう言う吉田は店内に入ってきてパーラとサラの座っていた席の向かいの席に腰掛けた。

「とりあえず烏龍茶と生中」

「吉田さんは烏龍茶ね」

吉田の注文を受けた春子が厨房に消える。入り口ではシャムと小夏が楽しそうにグレゴリオスの食事を眺めていた。

「おい！ 吉田！」

二階から降りてきた要達を満面の笑みで吉田は迎えた。

「すまないな。たまにはまともに入りたくなるんだ」

「ったくよう」

愚痴りながら要は席に戻る。付いてきたパーラとサラも仕方がないというように席に戻った。

「お待たせしたわね。シャムちゃんのビールはどこに置くの？」

「俊平の隣でいいよ」

春子が生ビールを置くとシャムはうれしそうに席に戻った。

「俊平、何食べるの？」

「そりゃあ俺はイカ玉だな。お前は豚玉三倍量か？」

「うん！」

闖入者のおかげで誠達は完全にペースを乱されていた。何を話す

べきだったか忘れてしまったかのように渋々烏龍茶を啜るカウラ。
アイシャは自分の紺色の長い髪の枝毛を探している。

「何か作戦会議でもしてたんだろ？ 続けるよ。なんなら意見してやってもいいぜ」

吉田は自分が原因だと分かっているくせにニヤニヤ笑いながら誠達を面白そうに眺めていた。

「続けるって……よう」

要はそう言うのと再び酒の入ったグラスに手を伸ばす。吉田はそれを奪い取った。むっとした表情の要だが、すぐに彼女はいつもどおりつまらなそうに視線をそらすとそのまま立ち上がろうとする。

「酒に逃げるんじゃないって話だ。限界なんだろ？ 通常の捜査なら……」

「令状無しじゃ何にもできねえんだよ！ 犯人は確実に東都都心からこっちに移って来た！ しかもこの一月の間でだ！ そこまでわかっていながら……」

そこまで言うのと悔しそうにとっかかりと腰を下ろす要。同じようにカウラとパーラが頷きながら唇を噛み締めていた。

「まあな。起訴してからの裁判のことを考えなければ転居関係の情報違法に閲覧してついでに住民票を本人に成りすまして確認、そして特定した容疑者に何かしら脅しをかけて聴取をたのんで……と言うのが俺のやり方だが……どれも今は無理だな」

あっさりと言う吉田。誰もがハッキングのプロで彼なら警察上層部に知られずに楽に不動産取引のネットワークに侵入して情報を得ることができることは知っていた。だが犯人を闇に葬ることが目的の非正規作戦任務ならともかく警察官の身分の誠達にはどれも無理な話だった。

「それに今回はたまには足を使うことも必要だって嵯峨のオヤジに言われてね。できるだけヒントを与えるだけにしろって」

「叔父貴が？ アイツはサドだな」

要の言葉にサラとシャムが目を合わせて噴出す。要がにらみつけ

るが迫力不足のようで二人は相変わらず笑い続けていた。

「大変みたいね……私のおごり」

厨房から出ていた春子が刺身の盛り合わせを持って現れた。

「いいんですか？」

誠の言葉に笑みを浮かべて春子が頷く。母親の甘さに鉢の中を嘗め回すグレゴリウスを眺めていた小夏がいつものように要をにらんだ。

「ええ、色々大変なんですよ？でもいつでも吉田さんや嵯峨さんの力を借りてばかりじゃ駄目でしょうしね」

「あー！頭にきた！」

そう言いながら要は立ち上がると厨房に飛び込んだ。

「大丈夫かな……要ちゃん」

アイシャの心配そうな声だが厨房ではまったく音がしなかった。

誠達が黙っていると無表情の要が手に取り皿を持って現れる。そしてそのまま一同に配り始めた。必死に怒りを押し殺している。その要の奇行を見ながら誠にはそんな彼女の思いが痛いほど分かった。

「そうカリカリするなよ」

吉田はそう言うのにんまり笑う。その表情にあわせるようにシャムそして小夏が笑みを浮かべる。

「なんで笑ってるんだよ」

そう言いながら要は刺身に一番に手をつけた。うまそうに頬張りまた酒を口に流し込む。

「捜査の基本は……餅は餅屋だ。真摯にお巡りさん達に教われればいいだろ？豊川署の連中が信用なら無いなら茜警視正からラーナでも借りれば良いじゃないか」

吉田の一言はまるで天啓のように一同を驚かせた。

「そう言えばいたわね。影の薄い捜査官が」

「今頃くしゃみでもしてるんじゃないか？」

アイシャとカウラが笑顔で顔を見合わせる。誠はようやく明るい兆しが見えてきたのでおいしく見えた白身魚の刺身に箸を伸ばした。

「何事も一人で解決するのはなかなか難しいぞ……まあ俺も隊長と出会うまでは一人で何でもできる気でいたからな」

「吉田少佐にもそんな時期があったんですか？」

口に刺身を入れたまま誠がつぶやいた言葉に仕方がないというように頷きながら烏龍茶を飲む吉田。

「まあな。その時に隊長に腰ぎんちゃくみたいにくつついてた馬鹿について感化されて今の俺があるわけだ」

「腰ぎんちゃく？私はおまけ？」

シャムは刺身をほおぼりながら笑顔で吉田の言葉に抗議した。

「そうよ。相談すれば知恵も出てくるものよ。だから皆さん元気出してね」

「ガンバレー！」

春子と小夏の言葉になんとなく癒されながら誠はビールに手を伸ばす。

「善は急げだ。とりあえずメールくらいはいいだろう」

そう言いながらカウラは端末に手を伸ばす。

「なんだか忙しくなりそうね。なんなら私も運行部の非番のメンバーにも招集かけるわよ」

「サラ……それは勘弁な」

要はそう言うと言った。誠もようやく捜査の核になる人物が現れると言うことに最後の望みをつなぐことに心を決めた。

「それじゃあ……方針はそれで決まったわけだから行こうじゃねえか」

要はそう言うのと東都警察の紺色のジャンバーを肩に突っかけるようにして立ち上がる。とりあえず誠達が始めることにしたこと。それは新規の住民登録を行なった人物をすべて見て回ると言う地道な行動だった。

「しかし……本当にお巡りさんは大変よね。拳銃とショットガンだけ？」

「ゴム弾入りの非殺傷弾入りだ。しかも一発撃ったら始末書一枚だそうだ」

アイシヤもカウラも顔色は冴えない。保安隊の丙種装備よりも落ちる装備に不満を言いたい気持ちには誠にもよく分かった。相手は法術師の能力を乗っ取る化け物である。空間制御系の法術を使われればショットガンなどお守り以下なのは嫌というほど分かっている。

「でも準軍事行動じゃないんですから実弾は……」

不満そうな女性陣を落ち着かせようと口を開いた誠。そんな彼を明らかにあざけるような視線で要が見つめてきた。

「奇麗事は良いけどよう。オメエは租界で撃ちまくらなかったか？」

「撃ちまくるのは誠ちゃんじゃなくて要ちゃんでしょ？それ以前に誠ちゃんの下手な鉄砲を市街地で撃ちまくられたら私も困るわよ」

入り口に立ってニヤニヤ笑っている要を押しつけるようにしてアイシヤはそのままドアを出た。そしてそこで何かとぶつかってよろめく。

「ごめんなさい……ああ、ラーナちゃん」

大柄なアイシヤはよろめく程度で済んだが走ってきた小柄なラーナは廊下に倒れてぶつけたひじをさすっていた。ラーナはすぐに手

にした荷物が無事か確認すると申し訳なさそうにアイシャを見上げた。

「あまり廊下は走るものじゃないな……」

「すみません！ベルガー大尉！」

カウラを見つけてすぐに立ち上がって敬礼をするラーナ。さすがに司法局法術特捜本部の捜査官と言うこともあって警察の制服はしっかりと板についている。彼女ならこの手詰まり状態を打破してくれると誠は期待して彼女を見つめていた。

「神前曹長……」

「ああ、こいつは巡査部長だそうだ」

「そうなんですか？」

ニヤニヤ笑っている要から話を聞いてラーナは少しばかり得意げに誠を見上げていた。

「まあ無駄な挨拶は抜きにして、失礼して……」

そう言うのと慣れた手つきで中央のテーブルに腰をかけたラーナは、手にした大きなバッグから携帯端末を取り出すと、手早く立体画像表示システムを起動した。すぐに近隣の交番のデータがオープンになり、その近辺のアパートの状況を表示する画面が移る。

「やはり捜査の基本は地道な聞き込みです。恐らく犯人は年明け前後にこの豊川に転居していると思われるので各交番に新規の入居者のいるアパートやマンションを訪問する指示を出します」

「良いのかよ……簡単に言うけど。アタシ等は捜査会議にも出れない身分なんだぜ。それに訪問するって言ったって用件はどうするんだよ。『あなたは犯人ですか？』とか聞いてまわる気か？」

パイプ椅子に腰を下ろすと、自嘲気味な笑みを交えてつぶやく要にラーナはこともなげに微笑んで見せる。

「訪問の名目については問題ないと思いますよ。防災関係の書類を持たせて訪問させる形をとりますから。それに先程ここに来る前に刑事課に寄ってきましたからすでに話は通っています」

要の不安そうな顔に淡々と答えるラーナの顔が面白くて誠が噴出

しそうになる。それに殴るポーズをする要。それを無視してラーナは端末の画面を切り替えた。

「現在15万件分のアパートやマンションが対象になりますが、犯人が法術適正のある人物と仮定した場合、正直あまりいい物件には出会わないでしょうから……」

そう言うとともに画面が検索中のものに切り替わる。そして豊川市内の地図に赤い点と青い点が点滅する画面へと切り替わった。赤い点はどちらかといえば駅の周りや旧街道の周りという再開発前の古い町並みの中に集中している。一方青い点は新開発の公営団地や新しく延伸された私鉄の路線近辺に散らばっていた。

「この赤い点がかつて警察が捜査のために入ったことのあるアパートやマンションです。一方青いのが捜査を受けていないマンション。青い点の方は正直あまり当たりが無いと思ったほうが良いでしょう。警邏の担当者も都合がありますから赤い点から優先的に聞き込みを開始します」

事も無げに言うラーナの言葉に誠達はただ感心しながら聞き入るしかなかった。

「あれか……建ててから年数が経つてるとか、駐車場が無いとか……条件が悪くてあまり入居者を選ばない物件の方が当たりを引く可能性が高いということか？」

あごに手を当てながら納得しながらカウラがうなづく。

「ベルガー大尉。さすがですね。悲しいですが入居条件の緩いところのほうが犯罪発生率が高いですから。そこでさらに念を押す意味を込めてこの赤い物件に関しては直接私達が訪問します」

ラーナはそう言うとき今度は地図から表へと画面を切り替える。

「おい、ラーナ。ずいぶん簡単に言うけど……それなりに数があるぞ？」

あっさり『直接訪問』などと口にするラーナを慌てたような声でいさめようとする要。だがラーナはまるで動じることなくそれに答える。

「西園寺大尉も心配性ですね。この前の同盟厚生局の事件に比べたら調べる範囲は半分以下ですよ。しかも私達は司法局から法術関連の専門家ということで捜査に参加しているんです。率先して捜査活動を行わないと行けないのは任務上仕方ないことですよね」

思わず笑いを漏らしているラーナ。アイシヤも納得がいったように腕組みをしながら頷いている。

「当然分かれての捜査になるな。全員でまわるのは効率が悪すぎる」

カウラはそう言うと言と誠達を見回した。

「西園寺と神前。それにカルビナで回ってくれ。私とアイシヤで行動することにする」

「えー！なんで私とカウラちゃんなの？それになんでカウラちゃんがそう言うことを決めるのよ。私は警部！カウラちゃんは……」

まるで子供のように抗議するアイシヤにカウラは穏やかな笑みを湛えながら続けた。

「お前はサボるからな、ほっとくと。それに保安隊では階級はあまり意味は無いってことになってるだろ？先に決めたほうが勝ちだ」

カウラはそう言うと言と自分の小型携帯端末を胸のポケットから取り出しラーナの情報のダウンロードを始める。

「さてと……犯人め！見つけたらギトンギトンに伸してやる」

「西園寺さんそれだけは止めてください」

パンチのポーズをとる要を誠がなんとか眺める。そんな誠達の様子を端末をしまいながらラーナは楽しそうに眺めていた。

慣れない事をすれば誰でも疲れるものだった。

「これで何件目……」

「カウラさん始めたばかりじゃないですか」

いつもの運転席に乗り込むカウラの顔は疲れていた。

初日。すぐに動き出したカウラ、誠、ラーナ。とりあえず防犯の呼びかけのポスターを手に五件のマンションを回ったが、捜査よりも戦闘のために作られた人造人間であるカウラの忍耐力はすでに限界を迎えていた。

「午前中はこんなもんでしょう。これからお昼。いかがですか？」
後部座席で腕組みをしているラーナは静かにそう言う。幼くも見えるようなおかつぱの髪を掻き上げた。

「午前中でたった五件でこれか……と言うか午前中か……」
カウラの声がかすれるのも無理は無かった。すでに三時を過ぎようとしている。住宅街の食べ物屋は多くが準備中になっている時間帯。

「訪問がこんなに疲れるものだとは……」
そう言いながらカウラは赤いスポーツカーを動かす。狭い路地を縫うようにして車は進んだ。

「まあ……こういう地道な積み重ねが大事ですから。それと市民と向かい合う時はいつも笑顔で。ベルガー大尉はまだ今ひとつですね」

「はあ」

ラーナに駄目だしされて少しばかりカウラは肩を落としながら狭い道を進む。両脇に続く家並みはすべて平屋。二十年前の第二次遼州大戦の時の特需以前の貧しさを感じるような家々が続く。

「でも……もしかしたら僕達が回った家の中にすでに犯人の家もあるんじゃないですか？」

思わず誠はそう言っていた。不機嫌になるだろうと振り向いたラーナ。だが誠をまっすぐに見つめるその顔には別にいつもの落ち着いた物腰のラーナの親切そうな表情が写っている。

「それで良いんですよ」

「え？ 良いのか？」

カウラはようやく大通りに出る入り口の信号で車を止めながら驚いたように静かにつぶやいた。ラーナは再び助手席で正面を向くと教え諭すような口調で話を始めた。

「もし私達が警戒していると分かればそれだけで犯罪に対する抑止力になります。確かに犯人逮捕も大事ですがこうして未然に犯罪を防ぐことも任務の一つですから」

警戒感を解くような笑顔を向けるラーナ。いつも茜の助手として付いて回っていると言う印象しかない誠には、そんなラーナの穏やかな表情が非常に新鮮に見えた。カウラも頷きながら大通りに車を走らせる。

「それは分かった。じゃあ西園寺とアイシャは……」

『おいおい、特殊部隊上がりを馬鹿にすんじゃないぞ』

車の固定端末のスピーカーから響くのは要の声だった。彼女の脳には常に通信端末が接続されている。そんな彼女にとってこの車の会話を盗聴することなど手数にも入らないことなのはまこと知っている。

「なんだ聞いていたのか……悪趣味だな」

『陰口を言おうとしていた奴に言われたくねえよ！』

そう言うとしばらく雑音が響く。そしてすぐに車のコントロールパネルの画面に映像が映った。そこでは要とアイシャが並んで寿司を食っている場面が映し出された。多分端末の一つをカメラのつもりでテーブルの端にでも置いているらしい。

「そちらも今昼飯か。それに寿司か……回転寿司とは考えたな」

『まあしかたねえだろ？ 今の時間は開いている店が限られるんだから』

満面の笑みでトロを頬張る要。それを見ながら時々画面を見つめつつ、アイシャはかっぱ巻きを続けて口に運んでいる。

「そうだな。カルビナ、寿司でいいか？」

「できれば安いところが良いんですけど……」

いつもの控えめなラーナに戻る姿が滑稽で誠は思わず噴出した。

「じゃあ……この近くならハンバーガーの店があったろ？」

「チェーン店ですか？」

「確かそうだよな」

カウラのいう通りなので誠はうなづいた。

「ならそこで良いですよ……神前曹長もその方がいいでしょ？」

カウラは誠が頷くのを見ると笑みを浮かべてアクセルを吹かした。「そう言えば……西園寺はラーナの意見に特に反論しなかったな。

それとなにやらラーナの端末にアクセスしていたみたいだが……何か掴んだのか？」

そんなカウラの質問にウニを頬張りながらタレ目の要は大きく頷いた。

『当たり前だろ？アタシを誰だと思ってるんだよ。そんな作業でも並行してやっていなきゃなんでこんな奴と……』

『要ちゃんひどい！こんな奴なんて！』

アイシャの声だけが端末に響く。思わず誠も苦笑しながらラーナを見てみた。彼女はと言えば相変わらず自分の端末を叩いて作業を続けていた。

「で……結果は？」

『焦るなっつての。そんなに簡単に行くわけ無いだろ？とりあえずラーナのデータは正確だったってことはよく分かったよ』

「有難うございます」

ラーナはついでのように答えた。それが気に入らないと言うように要はかっぱ巻きを口の放り込む。

『アタシも豊川の街をこうして回るのは初めてだが……まあ予想以上に複雑だわ、この国も』

「実のところ本当の意味で東和が大国になったのは先の大戦のあとの復興景気以降だからな。それを考えて見ればこういう地方都市の矛盾と言うものも見えてくる」

『難しいこと言うじゃねえか。まあそんなことはどうでもいいとして……今回の事件。誰が犯人でもおかしくない気がしてきたよ。特に旧市街のアパート住人と旧住人の軋轢は昔から酷いもんだっတာしいや。それが今回の法術の存在の発表。火に油を注いだようなもんだ』

そう言いながら再び要は回転するベルトから高そうな寿司を手にとった。

「以前は市民団体やら市役所の担当窓口やらが仲介に入ってたのか騒ぎにはならないでいたらしいが……すでに何軒かの訴訟が起きている。ほとんどが法術がらみだ。アタシ等が法術師を探して歩くと言い出すかも知れない以上、豊川署の連中が会議から締め出した理由は読めてきたよ』

「恐らく法術師をめぐるトラブルの話題が会議でも取りざたされるだろうからな。うちが法術師なんてものを世の中に発表する機会が無ければよかったと言うお決まりの愚痴も叩けなくなるだろうからな」

納得したようにうなづくカウラ。誠はすぐにラーナに目を向ける。誠もラーナも法術適正のある法術師である。恐らく同じように部屋を探したりアパートに暮らしたりすれば同じように差別や嫌がらせを受けることはすぐに想像が付く。そしてそんな世の中にした法術の存在の顕現化を行なったのは他でもない『近藤事件』での誠の法術による敵アサルト・モジュールの撃墜だった。

「西園寺。そこらへんは後で話す」

誠の動揺がカウラに見透かされていたようでカウラはすばやく話を変えると端末を消した。

「気にするな……と言っても無理か」

そう言うとかウラはハンバーガーショップの駐車場に車を入れた。

そしてそのまま車をドライブスルーの場所に移動させる。

「食べていけないんですか？」

訪ねてくる誠にカウラは疲れたような笑みを浮かべるだけだった。
「そう……だったな。カルビナはどうする」

駐車場にハンドルを切ろうとしたときに助手席のラーナが思わずカウラの左手を押さえた。

「私はどうも……お店で食べるのは慣れてなくて」

「むしろ地球人の顔は見たくないか……」

ラーナの言葉を聞くとカウラはそのまま運転席の窓を開ける。

『いらっしやいませ！ご注文をどうぞ』

明るい店員の女性の声が響く。ラーナはなぜかうつぶいたまま自分の端末を呆然と眺めていた。

「全員Aセットでいいな……じゃあAセットを三つ。ドリンクはブレンドコーヒーで」

『かしこまりました。Aセット三つ、お飲み物はブレンドですね』
明るい声だが、誠もなぜか相変わらず違和感を感じていた。

「見ただけじゃ分からないのに……やはり壁は感じますね」

そうつぶやいた誠に情けないと言うような笑顔で答えるラーナ。

彼女は遼南難民出身で純血の遼州人だった。誠も名前こそ日本風だが遺伝子検査では地球人との混血はほとんど無いと判定されていた。

「人はそれぞれ違うものだと言うが……あれだけ違うとな」

カウラがそう言ったのは最後のアパートの男子大学生との会話を思い出したからだだった。

『迷惑なんですよね……法術適正？そんなの受けなきゃいけない化け物に生まれたつもりはありませんよ』

無精髭が目立つ小太りの男子大学生はそう言うとならナが差し出したチラシを受け取らずにドアを閉めた。まるで自分は関係なく、地球人の直系の人種だと言うことを特に証拠もなく信じている若者が増えていくことは誠も知っていた。だがそれにしてもその死んだように誠達を見つめる目。自分の差別意識に露ほども疑問を感じて

いないその鈍感な管制に誠は衝撃を受けていた。

「近くに運動公園があるな。そこで食べるか」

そう言いながらカウラは商品の受け取り口のある店の裏手へと車を進めた。誠もラーナもただ何もできずに黙ってカウラの言葉になづくだけだった。

「なんで？」

ドアを開けた要がそう言ったのも当然だった。足を棒にして一日歩き回って豊川警察署に与えられた部屋に戻るとそこには私服のランが一人で茶を啜っていた。彼女の座っているアイシャの席の端末は起動済みで彼女が誠達が集めた情報を先ほどまで見ていたらしいことがわかる。

「どうだ？え？捜査って奴は。アタシもオメー等と一緒に素人だからな。それにしても……カルビナが加わってからかなり進んでるみたいじゃねーか」

「餓鬼は帰って寝る時間だぞ」

要の皮肉にもまるで答えずランは平然として茶を飲み続ける。要とこんな日常には慣れっこのラーナ意外はすでに口を開く気力もなくそれぞれの席に腰掛ける。ランに自分の席を占拠されたアイシャもそれをとがめる力も無いというように空いていたパイプ椅子に腰を下ろした。

「でも……この数。256件か？データで見るのと一軒一軒訪ねるのはずいぶん違うんだろうねー」

ランは手にした湯飲みを置くとそのまま端末ににらむような瞳を送った。

「でも僕達はこんなことをしていいんですか？司法局からの出動要請とかがあっても……こんな状態じゃ対応できませんよ」

疲れから誠は本音を口に出していた。それを見て少しがっかりしたと言うようにランはため息をつくと再び湯飲みを手にして茶を啜りこむ。

「いいんだよ。今のオメー等は目の前の仕事だけしてろ。05式のデータ収拾はアタシとシyamで大概のことが済むからな。今のところ各種情報機関からの連絡じゃー、ベルルカン大陸の状況も平穩無

事。まあ何かあったらアタシが署長に掛け合って何をしている場面だろうが帰ってきてもらうだろうからな。その時は仮眠時間を最低2時間やるからそれでなんとかしろ」

ランの言葉に頷きつつそのまま要は自分の端末を起動させている。ランと誠達との会話の間もラーナは自分の席で聞き込みの最中に手にした情報を記録したデータを彼女が持ち込んだ小型端末にバックアップを取っていた。果然とその有様を誠達は見詰めている。

「カウラ。ラーナばかりに頼らずに自分のデータはちゃんと自分の端末に落としとけよ」

「西園寺に言われることは無いんだがな」

カウラはエメラルドグリーンの前髪を疲れたような手で軽く撥ね退けた後、皮肉を言う要に力ない一瞥を送る。そして机においてあったポーチから携帯端末を取り出すと、机の固定端末に接続してデータ移行を開始した。

「でも……かなり法術の存在は嫌われていますね。これほどとは僕も思っていますでした。まるで法術師は罪人かさもなければ人を食べる害獣扱いですよ」

それが本音だった。法術と言う言葉を聞いただけで住人の大半は嫌な顔をした。時にはいかに法術師が危険で抹殺すべき存在なのかと言う極論を展開し始めて冷静なはずのカウラがこぶしを握り締める場面もあったくらいだった。

「神前。言わなくても分かるってーの。あの事件以来この国に……いや、地球圏も含めて宇宙は猜疑心で一杯だ。あいつは俺の心を読めるんじゃないか、あの通行人はうちに火でもつけるんじゃないか。そんなありもしない疑惑。どれも荒唐無稽なだけだな。法術を使いこなすとなるとそれなりの訓練かオメーみたいに戦場に放り込んで極限状態まで追い詰めることが必要だ」

そこまで言うと言ランはのどを潤すように湯飲みの茶を啜る。

「そこに今回の事件だ。悪意があれば何でもできる能力を保持した連中が悪意の赴くままに暴れているんだ。これまでの法術師への恐

怖が憎悪に変わったところでそんな考えの持ち主を責めるわけにも
いかなーしな。それでもアタシは法術師だ。正直良い気分はしねー
な」

そう言うところランは立ち上がる。襟巻きを強く巻きなおし、周りを見
回す姿は誠にはどう見ても小学校低学年の姿にしか見えなかった。

「じゃあ、アタシは上がるわ」

「なんだよ……付き合い悪いじゃねえか」

見た目は疲れて見えないものの表情に力の無い要。そんな彼女を
ガラの悪そうな三白眼で見つめると、ランは愛想笑いのようなもの
を浮かべて出口へと歩いていく。

「見たとおり餓鬼なんですね。8時も過ぎたら眠くて」

要をからかうようにそう言うとそのまま出口の扉に手をかける。

そのまま出て行くのかと見ていた誠だが、ランは気がついたよう
にマフラーに手を当てながら振り向いた。

「そうだ、カルビナ。茜が合格点だとさ」

「え……有難うございます！」

ランの珍しく柔らかい口調にラーナは飛び上がるようにして立ち
上がるとランに敬礼をした。

その滑稽な姿に満足すると、ランは軽く手を上げてそのまま外に
消えていった。

「アイツもああ見えて副長らしいところがあるじゃねえか」

感心したように要がつぶやく。カウラの端末からのデータ転送が
終わったことを告げる画面を見ながら誠はラーナを見つめていた。

いつまでも呆けたように立ち尽くす少女の面影の残る法術専門捜査
官。

「さっさと今日取れた情報の整理をしましよーよ！」

アイシャの言葉で我に返ってラーナは腰を下ろした。そんなラー
ナの姿に誠達は疲れも忘れるような暖かい微笑が浮かんでくるのを
感じていた。

二日目は冷たい雨だった。出勤時の要の悪態とアイシャの大きな嘆きを苦笑いとともに聞いたことが懐かしく感じられる。すでに誠の勤務用の革靴の中は中敷までじつとりと冷たい雨に濡れてつま先の神経が悲鳴を上げていた。

「法術師なんぞ知るか！」

眠りを中断されたらしい下着姿で戸口まで来た若い女性が扉を思い切り閉めた音がアパートの踊り場に響く。それでもラーナは困ったような顔で誠に目を向けた後そのまま隣の部屋へと向かう。

「失礼します！」

呼び鈴を押しながらラーナがインターフォンに向けて言った。

『何？』

声からして相手が酩酊していることはすぐに分かった。

「警察の者ですが……」

『悪いことはしてないよ。帰ってください？』

「近くで事件が多発しているので……少しお話を聞きたいんですけど……」

『事件？』

言葉とともに出てきたのは50前後のがっちりとした体格の男だった。すっかり白髪に覆われた頭の下には皺とシミでまだらに染まった顔に赤く色づいた鼻がぶら下がっている。

「事件？何？」

無遠慮な男が親切そうな物腰のラーナの後ろで棒立ち状態の誠とカウラに目をやる。

「この辺でこの半月で放火事件が連続して起こってるんですが……」

「知らないなあ……俺には関係ないし」

すぐに部屋を閉めようとする男だがその視線がカウラに集中するとその手は自然に力が抜けていった。

「あんたも警察の人？」

「ええ、まあ」

カウラはあの菰田より露骨にいやらしい視線に驚きながら呆然と立ち尽くしていた。ラーナはそれを無視して手にしていたバッグからポスターを取り出した。

「一応、犯人は法術師らしいので、もしそう言った情報がありましたらよろしくお願いします」

ラーナからビラを受け取ると男は老眼らしくしばらく遠くにかざしてビラを眺める。

「法術師なんて……知らないなあ」

「じゃあ最近転居してきた人の心辺りがありますか？」

食い下がるラーナ。だが男の関心はビラでもラーナでもなく明らかにこの男の視線を不愉快に思っただけを始めたカウラにあった。

「あ、あんた！」

部屋の置くから若い女の声が響いた。言葉尻からこの男の妻らしさが、出てきたネグリジェ姿の女はどう見てもラーナより年下。ただしその濃い化粧はラーナと彼女がまるで別の世界に生きていると言ふ現実を示しているように見えた。

「そう言えば隣のアパートに引っ越してきた人。少し変だったわよ」女はそう言いながら亭主からビラを奪い取った。むせるような女の吐くタバコの臭いに思わず誠は顔をしかめた。

「隣の……どちらですか？ 大通り沿いか、裏通り沿いか」

「ああ、どっちにもいたわね、変なの。大通り沿いに来たのは三ヶ月前でその年の割りにいつも私服で日中に行動しているし、裏通りのはもう一回り年上で見るからに堅気じゃないっていう感じ」

「なるほど」

ラーナが相槌を打つと女は気をよくして黙っている男の胸のポケットからタバコを取り出すと火をともし。

「どちらも夕方になると出かけるのよね……私が店に出るのに出か

けるバスには二人とも乗ってるわよ。暇ならで良いんだけど……調べてくれないかしら？」

明らかにラーナを探偵か何かと勘違いしたような言葉に誠も苦笑いを浮かべる。

「ああ、参考になりました。もし分かったことがあったらお知らせしますね」

「よろしくね」

女は誠に色目を使うとそのまま扉を閉めた。ラーナはそれを確認すると会話の要点を端末に入力していく。

「カルビナはたいしたものだな」

カウラはそのまま階段を降りながらつぶやいていた。

「要は慣れですよ」

冷たい水溜りが並ぶ砂利道を飛び越えながら狭い空き地に止めたカウラのスポーツカーに三人は飛び込んだ。カウラは早速気分を変えようと運転席でエメラルドグリーンの髪をそろえなおしていた。

「これも仕事ですから。それにこれで15件ほどにターゲットは絞れて来ましたね」

「でもまだ全体の50パーセントくらいしかまわっていませんよ」

誠の言葉に納得したように頷くラーナ。そしてカウラが駐車場から車を出そうとした瞬間に緊急用の端末が起動して事件の発生を告げた。

『豊川駅東口で傷害事件発生！各員現場に急行せよ！繰り返し……』

「どうしますか……」

誠の顔を見るとすぐにラーナは自分の端末を起動させる。すぐに近くの防犯用のカメラの映像が捉えられた。

そこには右肩を握り締めて転げまわる男性の姿が映っていた。よく見るとその隣にはちぎれたばかりの腕が転がっている。

「こんな手口は……」

「空間を切断しての殺傷事件。ついに起きましたね」

モニターの中、うめく男。その暴れまわるタイルの敷き詰められた地面に真っ赤な血が広がり始める。

「決まりだな」

答えを待たずにカウラは車を発進させた。ラーナも淡々とダッシュボードからパトランプを出して窓を開いて屋根につけた。

「間違いなく法術関係なんですか？」

誠の水を差すような言葉。恐らくこの場に要がいたら殴りつけられていたことだろう。

「ともかく起きたばかりの傷害事件ですから調査はすべてに優先します。しかもモニターを見る限りあれだけきれいに腕を切り落とすのは素人にはちょっと……。ただし法術師なら可能です。そう考えれば今回の事件との関係性も考えられます」

「そういう事だ」

ラーナもカウラも乗り気で車を目的の駅前に向けて走り出させていた。

『おい、そっちも現場に向かうのか？』

画面が開いて要の活気に満ちた表情が目飛び込んでくる。

「こういう時は生き生きしているんだな」

『余計なお世話だ』

要の言葉にこちらも妙に生き生きしているカウラは車を緊急速度で走らせて行った。

「事件が起きてくれるのを待つなんて……」

「感心できませんね。でも起きてしまったことは取り消せませんから」

自分に言い聞かせるようにつぶやくラーナ。誠もそんな言葉に大きくうなづいた。

誠達が到着した時はすでに現場は所轄の警察が縄張りして捜査を開始しているところだった。昼下りの地方のターミナル駅での怪事件。すでに人だかりができていて誠達が現場にたどり着くまでに何度と無く恐怖と好奇心を顔一杯に浮かべた人々の波を潜り抜けてきた。

「よう、遅えじゃねえか」

すでに到着していた要がそう言うのと雨に濡れながらロープをくぐってきた誠達に呟く。あと三十メートル行けば東口駅の庇の下に入るような駅前の広場の一角。それを取り巻く野次馬達は傘の下から好奇の目を誠達に投げつけてきていた。

「駅前だ。渋滞もそれなりにあったしな……そう言えば、アイシヤはどうした」

「ああ、アイツなら車だよ。なんでも調べ物があるんだと」

要は東都警察の制服の上のコートからタバコを取り出す。しかしすぐに捜査官と周りの『市民』達の目に気が付いて仕方が無いと言うようにそのまま仕舞いこむ。

目撃者の一人らしいコンビニの店員の制服を着ている男に捜査官が傘の下で話を聞いていた。カウラはそれに加わるつもりで歩き出すがその手をラーナが押さえた。

振り向くカウラ。首を振るラーナ。所詮は部外者。その事実が誠達を包む。

「私が行ってきます」

そう言い切るとラーナは尋問中の青い傘の方ではなく、駅の庇の方へと歩き出した。見れば何度か豊川署の廊下ですれ違った覚えのある『係長』とか呼ばれていた刑事が制服を着た捜査員からの話を黙って聞いている姿があった。

「なんでもな、突然銀色の板みたいなのが現れたと思うとそのま

ますごい勢いで移動を始めて、気づいたら大学生のあんちゃんの腕がもげてたそうだ。さっき連れて行かれた掃除のおばちゃんが言ってたよ。あれだな……そのおばちゃんが今回利用されたみたいだな」

そう言うと言は駅の入り口近くの公衆便所を指差した。鑑識が流れて広がるとする血液を必死に集めている地点からはおよそ二十メートル。

その距離を目算で測りながら機が付いたようにカウラが口を開いた。

「被害者に法術適正は？」

カウラがそう言った所で髪に合わせたような濃紺の傘を差したアイシャが渋い表情で登場した。

「被害者は宮野信二。二十二歳大学生。法術適正は無し……これ以降は後で教えるだって」

「つまり自作自演は無し。完全な他者による傷害事件なわけだな」
そう言うと言は誠達は駅の庇の下に眼をやった。『係長』に頭を何度か下げるラーナ。『係長』もあまりに下手に出る若いラーナに気が引けるのか苦笑いを浮かべながら二人は話し込んでいた。

何もすることが無い誠達。彼等がラーナを見つめているとようやく『係長』もラーナに合わせるように頭を下げ脇で話を聞いている制服を着た部下と何かを話しながらそのまま公衆便所の前で地面にはいつくばっている鑑識に向けて歩き出した。

誠達に近づいてくるラーナは少しばかり収穫があったというような笑顔を手を浮かべていた。

「皆さん、やはり例の他人の法術を操作する法術師の犯行だと豊川署は見ていますね。こちらにも資料が欲しいと言ったら近隣のアストラルゲージのデータを本部に転送してもらおうことにしてもらいました」

ラーナはそう言うとそのままだカウラが車を止めた駅前ターミナルに向けて歩き始める。

「おいおい、もうお帰りか？ 何しにきたんだよ、アタシ等は」

そんな要の皮肉にすぐに振り返りむっとした表情を浮かべてラーナは立ち入り禁止のテープの前で立ち止まった。だが相手が要だけに下手に行ってもごねるだけとわかって少し言葉を選びながら話し始めた。

「繁華街でのアストラルゲージ設置のお話をご存知ですか？」

ラーナの腫れ物に触れるような態度が気に食わないのか、要はざわざわ騒ぐ野次馬達に威嚇するような視線を何度か送ったりしながら立ち尽くしていた。

「西園寺！」

カウラが急かすとうまく要が俯きながら言葉をつむぐ。

「知ってるよ。法術の違法使用を防ぐ目的であつたという間に広がったからな。元々民間企業にまで法術の噂が広がってたとか言ってるマスコミが大騒ぎしたあれだろ？」

「ええ、そのあれです」

そう言うとならナは街灯を指差す。LEDの電灯の下に小さな見慣れない箱が誠にも見えた。

「この反応のデータを転送するならわざわざこんなところに来なくても……」

「西園寺大尉。捜査の基本は現場を見ること。これは覚えていてくださいね。すべてにおいて……」

「分かったよ！ つまりアタシ等にここを見せたかったんだろ？ 雨がきついんだから帰るぞ」

そう言うときまだ不満そうに要は立ち入り禁止のロープをくぐる。野次馬達もその剣幕に押されて遠慮がちに彼女のための道を作った。アイシャも同じく納得できないと言う表情でそのまま要についていく。

集まる群衆にパニックが始まるのを予防するべく、警防を振って通行人を隣の中央口に誘導する警察官の姿が見える。誠は周りを見ると自分達が何とか雑踏から脱出できたことを確認した。

雨は強くなる。すでに三人とも胸の辺りまで冷たい水が染み込んできていた。

「もしかして僕が来るのが重要だったんじゃないですか？」

そのまま急ぎ足で駅前ターミナルに並んでいる警察車両を見回しているカウラの後ろで誠が呟いた。肩の水滴を払っていたラーナは驚いたような表情で彼を見上げていた。

「法術使用の場合、アストラル系の変動の残滓が残るらしいからな。神前ならそれを見分けられると踏んだのか。見たところ無駄だったようだが」

自分の車を見つけたカウラはそれだけ言うとそのまま車に向けて走り出した。誠とラーナも遅れまいとその後に続く。

カウラの車にはそれを不審がる警官が一人張り付いていた。スポーツカーに誠達、東都警察の制服を着た人間が乗り込むのを見ると彼は合点が行ったというようにそのまま路線バスの通行の妨げになっているテレビ局のマイクロバスの運転席めがけて走り始めた。

低い車高の車に誠達は体を押し込んだ。しばらくホッとして濡れた上着をどうするかというように顔を見合わせた後、ラーナはシートベルトに手を伸ばした。

「鋭いですね。今回は一人の人間が重傷を負う事態になりましたから。これまでよりも大きな精神波動があったと予想されます。ですからもしかしたら波動の残滓が残っていればと思って……最低でも能力発動を引き起こした人物の思考特性の特定くらいはできるかなあと思って……」

「なら無駄にならないように神前の感想を聞こうか」

エンジンをかけたカウラが誠を振り向く。

「特に……すいません。役に立たなくて」

体を折り曲げながら狭い後部座席で呟く誠の言葉。ラーナは少しばかり残念そうに頷くとそのまま正面に点滅するパトカーのテールランプに目をやる。

「気にすることは無いですよ。これまでは人的被害が無かったと言

うことは元々犯人はそう言うことを望んでいる人間では無いらしいという風に思っていました……：：：それでも無い。これが分かったことでさらに犯人像が出来上がってきましたから」

自分に言い聞かせるように呟くラーナを思いやるような視線で見つめたカウラ。車はそのままロータリーを出て豊川署への道を走り始めた。

「よし……ラーナの資料のアストラルデータから神前のアストラルパターンを抜き取れば……出た！」

豊川署の狭い部屋。要の叫びにカウラとアイシャが一気に要の端末に顔を寄せる。

「狭い！」

「文句ばかり言うな！」

「そうよ、狭いのは部屋だけで十分……間違いないわね」
表示されたアストラルパターン解析の結果。そこには明らかに強力な法術師の存在があったことを示すアストラル波動の揺らぎが見て取れた。

「神前の登場で揺らぎが増幅されて浮き上がったわけだ。まったく持って神前のおかげだな」

要が快活な笑顔で突っ立っている誠を見上げる。誠はそのタレ目を見ながら面映い気持ちで頭を掻いた。

「神前曹長のパターンは特徴的ですからね。まだ仮説なんですけど他者の能力をコントロールするということは、強い法術反応があればきつとかすかな残留波動でも増幅されるんじゃないかと思いました……当たりました！」

ラーナは端末の画面を指差してニヤリと笑う。その表情に誠も安堵の息をついた。

「この資料の意味するところは、あの場所に間違いなく法術師、しかも特殊な能力を持った人物が事件発生時刻前後に確実にいたと言えうわけだ……」

「近くの防犯カメラの映像。これを証拠に開示を頼むことはできないの？」

要もアイシャもすっかり乗り気でラーナを見つめる。

「任意になるでしょうが……事件が事件ですからね。自治会とかに

は私が手を回しておきますよ。まあ私達でなく所轄の仕事になると思いますが」

ラーナは安堵の表情を浮かべながら力なく呟く。自信を持って誠達の質問に答えているように見えた彼女もこのようなケースの対応は初めてなんだろう。何処と無くそのやわらかそうな頬が紅潮している。

「所轄任せになるのはしかたねえな。それにアタシが知っているだけでも引ったくりの発生で有名な場所だ。何台有るか分からんが、監視カメラはそれなりの数があると思うぞ。それとアタシ等が歩き回って見つけた要注意人物と照らし合わせればかなりの確立で容疑者を絞り込めるんじゃないかな」

要もラーナにあわせて椅子の背もたれに体を任せてだらしく伸びをしている。

だがカウラはすぐに冷静さを取り戻したように難しい表情を浮かべていた。

「希望的観測だな」

そんなカウラの言葉に一番に反応してにらみ付けたのは意外にもラーナだった。だが彼女も捜査官である。カウラの言葉に一理あることは十分承知している。

「う……るせえよ。何か？文句でもあるのか？」

要の声は怒りに震えていた。だがカウラの表情は変わらない。

「確かにカウラちゃんの言うとおりかもね。希望的観測。最初だって不動産屋をまわれればすぐに犯人に行き着くって思っただけ失敗したじゃないの」

「確かに」

アイシャに駄目を押されて落ち込んだように頭を垂れる要。でもそれは本気でしょげているというよりもふざけているように誠には見えた。事実そんな要を見るカウラの表情は真剣だが暗いものではない。そんな上司達を見ながら誠もこれまでの手探りで何もできないと思っていた自分達の手に入れたものがそれなりの手柄かも知れ

ないとわくわくする気持ちを抑え切れなかった。

その時不意にドアを開くものがいた。

「あの……」

それは杉田と言うこの署と誠達との窓口、つまりあてにならない男だった。

「なんですか？ 定時を過ぎたら帰ってくれとか言うんですね」
珍しく強気に構えるラーナ。だが杉田は首を振って否定した。

「いえ、証拠が揃ったのは知っていますから」

その言葉に誠は嫌な予感がした。

「証拠が揃った？ まだ容疑者も……」

「容疑者が自首して来ましたから」

杉田の突然の言葉に誠達は呆然として立ち尽くしていた。

「自首マニアじゃねえのか？ 下らねえ！」

「いえ、ちゃんと法術適正が出ていますし……」

杉田の言葉に要はいらだったように足踏みをする。その高圧的な態度に白髪の混じった頭を掻く杉田。

「法術適正でもその能力の方向性はかなり違うはずですよ。検査されたんですか？」

そんなラーナの言葉にぽかんとする杉田。

「でも法術適正がありますから……」

「その当たりを深く判断できる専門家の意見は？」

カウラの言葉にまた杉田はぽかんとする。

「でも……法術……」

「杉田さん……出て行っていただけます？」

珍しい殺気がこもったアイシャの言葉。それを聞いて杉田はしかたがないというように部屋を出て行った。

「馬鹿かアイツは」

「西園寺大尉、馬鹿は無いですよ。まあ……地方の警察官僚からしたらあの程度で済んでるだけましですよ」

そう言うところラーナは気がついたように立ち上がり、そのまま急に

自分の機の端末に飛びつく。だがすぐに呆然と天井を見詰めて黙りこんだ。要も目の前の端末を見た。そこにはデータの切断を意味する表示が映るだけ。先ほどの操作データはすでに消えていた。

「止められたか、メインコンピュータとの接続が」

カウラの言葉で先ほどの杉田の言いたいことが誠にもようやく理解できた。

東都警察の制服を貸与されて勤務している誠達も所詮は同盟司法局という外様の組織の人間である。メインコンピュータのデータとの接続と言う特権はできるだけ与えたくない。そんな要達が警察署の重要機密とも言えるアストラルデータ監視システムにアクセスしている。正直気分が言い訳は無いだろう。

そこに今、とりあえず容疑者が自首してきた。これを口実に捜査をすべて東都警察が行なうことの大義名分ができたことになる。とうぜんそうなれば外様の誠達に情報を流す必要もなくなる。そんな風に初日に顔を見せた喰えない署長が判断したのだろう。

「でも……本庁の連中が動けばその自首した人間が犯人かどうかなんてすぐに分かるわよね。本庁の法術関連の科学的資料はそれなりのものだもの」

アイシャの言葉に頷くラーナ。そしてなぜかその言葉を聞いてカウラが端末に飛びつき操作を始めた。

「どうする気だ？ 署のデータバンクのアクセスはできないんだろ？」
机に突っ伏せて顔だけ上げて要が呟く。ただカウラの表情は決して暗いものではない。むしろ何か名案が思いついたとでも言うように誠には輝いて見えた。

「なあに、私の人脈を使うだけだ。隊長の真似というところかな」
エメラルドグリーンのポニーテールを何度か撫でながらカウラは本庁の機動隊への通信の為の準備を始めていた。

「機動隊か……確かお前と同じロットで生産されたのがいたんだっけ？」

要の言葉を見捨ててカウラはキーボードを叩き続ける。

「諦めなければどうにかなるものさ」

カウラの頬にはいつもなら要に浮かんでいるような悪い笑みが浮かんでいたのを誠は見逃さなかった。

屈辱の日の翌日。誠達は全員非番だった。朝目覚めて着替えを済ますと誠はそのまま階段を降りて寮の食堂に向かった。もしかしたら要辺りがすっかり出勤するつもりでいて、寝癖をつけたままぼんやりしている自分を怒鳴りつけてくるかもしれない。そう思いながら食堂に入ると、そこには普通にうどんを食べている要の姿があった。いつも休日の時に見られる冬だと言うのに黒いタンクトップにジーパンを履いた姿でリラックスしてうどんを食べている要と眼があう。

「おはようございます」

誠の言葉にしばらく呆然とした後、要はどんぶりをテーブルに置いた。

「なんて顔だよ。ははーん。その顔はアタシが一人で暴走するとも思ってた顔だな」

タレ目で一度誠を見た後、要は再びどんぶりを手に取った。もみ上げの辺りが長めになっている髪型のせいでそのままうどんの汁に付きそうになる髪の毛を気にしながらうどんを啜る。出勤組の整備班員が書き込むようにうどんを食べた後、カウンターにどんぶりを置いて駆け出していく中。誠はただうどんを食べ続ける要を見つめていた。

「どうしたのよ、誠ちゃん」

背中に声を受けて誠が振り返る。そこには朝のシャワーを浴びてすっきりしたような顔のアイシャがいた。こちらも紺色のスタジャンに短めのスカート。出勤の時のアイシャは大体スーツを着るので休日の捜査など考えに無いという感じでそのまま要の前の席に座って誠に手を出す。

「何ですか？」

「お茶」

当然のようなアイシャの言葉に誠はカウンターの手前に置かれた湯飲み三つと番茶の入っているポットを持ってアイシャの隣に座った。

静かにお茶を入れてアイシャに差し出す。彼女はそれを受け取るとひじをついてずるずると音を立てながら啜り込む。

「下品な飲み方をするんじゃないねえ」

「下品なのは要ちゃんだけで十分なものね」

にらみ合う二人。なだめる気分にもなれずそのまま誠はうどんを食べ終えてくつろいでいる要に湯飲みを差し出した。

「皆さん……今日は」

「今のところカルビナ待ちだ。揃ったら出かけるからすぐに食事を済ませろよ……ほら、カウラも来やがった」

緑色のセーターが食堂の入り口に見えた。エメラルドグリーンの髪を後ろで纏めながらカウラが歩いていく。そして彼女はそのまま厨房に足を向ける。

「でも……非番だと……」

「非番だからなんだよ」

誠の口答えに番茶を飲みながら要がにらみつけてくる。

「いえ、なんでもないです」

「嘘よね。何かある顔よ」

そう言いながらアイシャも紺色の長い髪をなびかせながら立ち上がる。

「うどん二つ！どちらもカウラちゃんより多くね！」

うどんを受け取って歩き始めたカウラを意識したようにアイシャが厨房の中に叫ぶ。カウラは苦笑いを浮かべながら要の隣に腰を下ろした。

「上官にサービスさせるとはいい身分だな」

言葉は皮肉めいているがカウラが言うのと皮肉に聞こえない。そんなことを考えている誠を無視してカウラはうどんを啜り始めた。

「はい、どうぞ」

うどんをゆつくりと啜るカウラを見ていた誠の視界に突然現れたアイシャはそう言いながら誠の目の前に大盛りのうどんの入ったどんぶりを置いた。

「食べちまえよ。さっさとな」

要に言われるまでも無く誠もテーブルの中央に置かれた箸に手を伸ばす。

「でも非番の日に捜査なんて……」

「普通はやらないけど……うちは普通じゃないでしょ」

すごい勢いでうどんを啜り上げた後、満足した表情でアイシャが呟く。それを見ると誠も急いで食べなくてはと言うような義務感に駆られて一心不乱にうどんを啜り上げ始めた。

「遅れてすいません！」

食堂に集う寮の住人達にざわつく気配を感じて顔を上げた誠の耳にラーナの声が響いた。

「良いわよ私達も見ての通り食事中だから」

私服の皮のジャケットを着たラーナはいかにも申し訳ないというように再びうどんを啜り始めたアイシャの正面に腰を落着けた。

「どうせ命令の範疇を超えた話になるんだからもう少し楽にした方がいいな」

「おい、カウラ。いつからそんなに話が分かるようになったんだ？以前なら『捜査は捜査だ。非番だろうが関係ない』とか言い出す奴だったのに」

要の皮肉にこめかみをひくつかせながらカウラは無視してうどんの汁を啜る。

「話が分かるも何もベルガー大尉には本当に感謝ですよ。東都警察機動隊の端末を経由して本庁のサーバーにアクセスできればかなり詳細な分析結果を見れますから」

「機動隊？サーバー？」

突然のラーナの言葉に誠は吸い込んだ麺を吐き出すところだった。「機動隊の隊長をしているカウラちゃんの友達のエルマさんがいる

でしょ？その人をお願いしたら上には内緒と言うことで手配してくれたのよ」

「でも良いのかねえ……機動隊のパスでサーバーに入るってのは本来拙いんじゃないのか？」

誠よりも早くうどんを食べ終えたアイシャの強気な言葉。そんなアイシャに言った要の一言に周りが凍りついた。

「要ちゃん……いつも要ちゃんがやるようなことじゃないの。それとも気付いてないの？」

「西園寺が鈍いのはいつものことだ。自分がやっていることが命令に即していないと言う自覚が無いんだろうな」

アイシャとカウラの皮肉に明らかに気分を害したと言うように要は立ち上がると冷えたどんぶりと番茶の半分ほど入った湯のみを持って厨房に向かう。

「でも……機動隊の端末を弄るとなると東都警察の本部に行くんですよね。入館証とかは大丈夫なんですか？」

今度は誠の言葉にアイシャ達はきょとした顔で誠の顔を見つめた。

「馬鹿だろオマエ。端末のところまで行かなきゃ情報が見れないなんて……いつの時代だよ。うちの冷蔵庫から機動隊の端末にアクセスして本庁のサーバーにログインしてそのまま今回の事件のアストラル波動計測のデータを覗くんだよ」

戻ってきた要はそう言うと言番茶の入ったポットに手を伸ばすがすでに湯飲みを返してきたことを思い出してすぐに手を引っ込める。カウラがその様子をうどんの汁を飲み干しながら見つめている。そしてその視線に気付いた要が威嚇するような顔をするのを見て苦笑いを浮かべると、満足したようにどんぶりを置いた。

「それと……ついでと言ってはなんだが、これまで何度か豊川署のデータベースにアクセスしたときに見つけた私達の知らないデータもあるからな。そちらも見てみるのもいいかもしれないな」

要とカウラの言葉に今ひとつ納得が行かないまま誠は静かにどん

ぶりの底に溜まった汁を啜り始めた。

「それにしてもさあ。いけ好かない下衆野郎が必死で隠している秘密を探るってのはさあ……わくわくしねえか？」

「貴様は子供か？」

「子供で結構！」

ノリの悪いカウラを馬鹿にするように要が手を振り回す。驚いた整備班員がかわそうとするがよけきれずにそのまま顔面にサイボーグの怪力でのパンチが入った。

「あ……」

よく見ればそれは部隊最年少の整備班員の西高志兵長だった。出勤時間間際。食事を終えて安心しきっていたところへの一撃に思わず西はうづくまる。

「ごめんね……馬鹿が暴れて」

まるで誠意の感じられないアイシャの謝罪。

「ええ、大丈夫です……鼻血も出ていないみたいですし」

西は顔を抑えながらもなんとか自力で立ち上がった。鉄の規律と結束で知られる整備班員はその様子を見ながらもニヤニヤ笑って見せるだけ。まるで助ける様子も無い。そこには日ごろの西への整備班員の嫉妬があった。

第四小隊。保安隊設立時の発起人の一人、胡州海軍中将赤松忠満のコネクションで出向してきたアメリカ海軍の軍籍を持つ異色の部隊。そこに配備されたアメリカ海軍最新式アサルト・モジュールM10担当の技術士官。それがレベッカ・シンプソン中尉だった。ほんわかとした見た目に似合う眼鏡と金色の柔らかい髪が似合う美女。そして部隊最大で要に『おっぱいお化け』と呼ばれる彼女は西とは非情に仲がよくいつも行動を共にしている。

整備班員にとって女性隊員といえばその異常にタイトで長時間にわたる勤務の繰り返しにより、技術部長の神と崇め奉られている許明華大佐の姿が脳に刷り込まれていた。高圧的でサディスティックなまさに『保安隊最高実力者』。彼女を絶対神として信仰すること

に慣れてきたところに現れたやさしい女神のような存在をあつさり部隊一の若輩者にさらわれたと言うことで腹の虫が収まらないのは当然の話だった。特に明華から早出が義務付けられていない部隊設立からの古参の下士官達にとってははらわたの煮えくり返る事実だった。

「誰か助けてあげなさいよー」

明らかに助ける気の無いアイシャの言葉。

「べ……別に大丈夫ですから」

西はそう叫ぶとそのまま鼻を押さえて食堂を飛び出して行った。快かなとそれを見送る古参兵達をアイシャは白い目で眺める。

「それじゃあ行くか！」

「後で西に謝って置けよ」

「アタシは上官だぜ……面倒くせえ」

要が呟くようにそう言うとアイシャもカウラも呆れたような視線で見上げる。

「要ちゃん誤りなさいよ。大人でしょ？」

そんなアイシャの一言に要の顔がゆがむ。

「分かったよ……後で謝っておくから」

「ちゃんと謝るのよ……」

アイシャはそう言うとそのまま立ち上がる。手にはどんぶり。誠も今度はアイシャの手を煩わせまいと自分のどんぶりを手に取る。

「行きましょ」

そのままどんぶりをカウンターに返すとそのままアイシャは出口へと向かった。

「そうだ、ラーナ。飯は食ったか？」

いつの間にか手に湯飲みを持ってくつろいでいたラーナに要が話題を振る。突然のことに戸惑うように視線を泳がせた後、静かにうなづく。

「ええ、まあ」

「食べたのならしいけどな。神前。アタシはおやつが食べたい」

突然の要の一言。誠は先週警備部の新人が買ってきた月餅が厨房の冷蔵庫にあることを思い出して立ち上がる。

「ああ、誠ちゃん私のも！」

アイシャも叫ぶ。誠はそのまま厨房に飛び込んだ。

食事当番の管理部の面々が冷たい視線で大きな業務用冷蔵庫に飛びつく誠を迎える。

「女ばかりで……うらやましいねえ」

洗い場で背中を向けている菰田の言葉に肝を冷やしながら誠は月餅を取り出すとそのままカウンターに走る。先ほど慌てて要が湯飲みを返したことで、カウラの湯飲みが無いことを思い出した誠はそれをトレーに乗せると急ぎ足で要達の所に辿り着いた。

「ご苦労」

「ありがとうな」

当然のことのように受け取る要。カウラはすぐさまポットに手を伸ばす。

「本当に……神前曹長、いつもお疲れさまです」

そんなラーナの気遣いの言葉を聞いて苦笑いを浮かべる誠。

「いつものことですから」

「そうだな、いつものことだ」

要はそう言うとうまそうに月餅を口に運ぶ。

「そう言えば機動隊のパスでサーバーにアクセスするんだよな。機動隊の部隊長権限でどこまで入れるんだ？」

カウラにポットから番茶を注いでもらったものに手を伸ばしながら要が呟いた。

「まあある程度限定されるでしょうね……でもねえ。要ちゃん。何の為に要ちゃんがいるのよ。そういう時は……」

「おい、アイシャ。アタシを犯罪者にしたいのか？」

アイシャの明らかにハッキングしろと言う態度に苦笑いを浮かべる要。だが冷たくなった番茶を啜りながら誠はどうせ証拠が見つかるまで止めても要がやたらとアクセスする光景を予想して苦笑いを

浮かべた。

「じゃあ、皆さんよろしいですか？」

「茶ぐらい飲ませろよ」

月餅を頬張りながらの要の言葉。アイシャは大きくため息をつく。

「なんだよその態度。潰すぞこのアマ」

アイシャと要の掛け合い漫才を見ながら仕方が無いと言うように笑うカウラと誠は立ち上がった。要も湯飲みを置くとそのまま静かに立ちあがる。

「神前、かたしておけよ」

要はそういい残してラーナ達と一緒に食堂を出て行った。置き去りにされた誠は厨房の当番の同僚達から冷ややかな視線を浴びながら仕方なく湯飲みを手に洗いものの棚に運んだ。

その事件から一日経ってようやく水島の心は落ち着いてきていた。駅前を歩いていた水島。突然彼の目の前をトイレ掃除を終えた女性が通り過ぎようとした。

ぶつかりそうになったのは最近は突然現れたアメリカ陸軍の関係者を名乗る少年のことを考えていたからだ。だがそのおかげであることに気がついた。

『まったく……あんなに汚して誰のものだと思っているのかしら……』

女性の思考とともに流れ込んだ強力な力を示す独特の引っかかり。水島の悪戯心を最大限に刺激するそんな引っかかりの魅力に水島の意思はすでに決まりきった作業のように動き出していた。

『起きろ』

それだけ念じただけだった。銀色の板のようなものが突然女性の三角巾の後ろから現れた。

「うわ！」

それが自分に眠る力によるものだとも知らずに女性はそのまま腰を抜かして倒れ込む。ふわふわと移動していた銀色の鉄板。女性の叫び声に気付いた通行人はその奇妙な物体に目をやる。しかし、彼らがそれを目にすることができたのは一瞬だった。

そんな通行人の一人、眼鏡を掛けた大学生風の男の肩に向けて回転するように飛んで行ったその板のような存在は彼の周りの空間と一緒に腕を捻じ切るとそのまま蒸発するように消えた。

しばらく腕を捻じ切られた青年は何が起きたか分からないと言うように立ち尽くしていた。次第にさっきまで彼の腕が生えていたところから血が噴出す。それを見てようやく男は気がついたように叫び声を上げた。そのまま倒れこみうめく男。

ここまで来て通行人達はそれが尋常ならざる事件であることに気

付いた。慌てて駅の係員を呼びに走るサラリーマン。血を見て驚きその場にしゃがみこんで泣き始める女子高生。茫然自失という感じでただ立ち尽くしている老人。

そんな中、水島は一人起きた出来事をじっと眺めていた。そのままパニックを起こして逃げ去ろうとする群衆にまぎれて走り去らなかったのはほとんど奇跡だった。

そして先ほどの法術の発動源である女性に目をやった。まだ女性は座り込んだまま事態の重要性に気がついていない。それを見た水島の気は大きくなっていった。

「大丈夫ですか？」

水島は何も知らない通行人を装って倒れ込んでいる女性に手を差し伸べた。

「あ……ありがとうございます」

50は越えているだろう。今の出来事への驚きからさらに年上に見える彼女を助け起こしながら水島は自分が起こした出来事があまりにも大きい事実によりやく気付いていた。

そしてようやく辿り着いた駅員の姿を見ると水島は群衆にまぎれて雨の町を歩き回った。

しかし知らない町。足はいつの間にか見慣れた通りに辿り着き。いつの間にか自分の部屋に辿り着いていた。

驚きと恐怖。しかし慣れない力を操った疲れはそのままコタツに入り込んだだけの水島を眠りに導くには十分なものだった。

「やっぱり……同盟も東和政府も何かを隠しているんだな……」

目覚めてコタツの上の法律書を眺めていてもそのことばかりが気になってくる。

人体発火は以前から都市伝説として知られていた。最近では一部のテロ組織は法術の存在を知っていてそのことを同盟機構が隠蔽していたことがマスコミで騒がれていた。何度となく起きた不自然な自爆テロ。それを法術の発動と知りながらもみ消していた事実は自称良心的市民達を激怒させるには十分な事実だった。

そしてまた最近の話題となっているのは意識介入。いわゆるテレパシーについてもその後のプライバシー対策の為に成立した法案を見れば政府は知っていたと考えるのが自然だった。あまりにできすぎた隙の無い法律文章。一応法律家を目指す水島にもそれはその文章を想起した人間が完全に意識介入能力を理解した上で作ったものであることは一目瞭然だった。

昨日水島が見た空間を切り裂く銀色の平面。それについては水島も初めて見るものだった。

まるで知らない法術の発現。そしてそのもたらした効果の絶対的な威力。腕がなくなってからその事実が信じられないように落ちた腕を見下ろしていた青年の恐怖の表情が今でも頭の中を駆け巡っている。

「しかしあの切れ味……色々使えそうだな」

突然湧き出てくる独り言。その能力が強力でありながら簡単に発動する。その事実。不意に水島の顔には笑みが浮かんできた。

「色々使える……色々使える……」

笑みが止まらない。行政訴訟に関する判例集は次第に水島の『色々使える』と言う言葉に埋め尽くされていく。鉛筆を持った水島の手。まるで意思を持ったように同じ言葉を書き連ねていく。

人の腕の骨を切り裂くのにまるで抵抗など無いというようにあの銀色の板は動いていた。そして切り裂いた後は何事もなかったかのように蒸発していた。

「どんな武器より強力で便利。本当に最強じゃないか！」

水島は自分がいかに得意げな表情をしているか想像しただけでも楽しくなってきた。

その時だった。

「もしかしたら神にでもなったつもりなのかな」

突然の背中での声に水島は驚いて振り返った。

そこには当然のように以前東都で出会った例の少年が立っていた。ヤンキースの帽子。噛み続けるガム。それらの遼州の民衆が考える

典型的なアメリカの少年に似た姿はあまりに滑稽に見えて、突然の
闖入による恐怖よりも笑いが出てきそうになるのを感じていた。

何しろこちらには力がある。その自信が水島にこの驚いても仕方
の無い少年の登場と言う出来事を平然と受け入れる度量を生み出し
ていた。

「ずいぶん変わったね」

少年は自分の登場をあまり驚かない水島に気を悪くしたように口
を尖らせて呟いた。今の水島にはそんなことすら些細なことに思え
ていた。ここにいるのもアメリカ陸軍の情報網とやらのおかげだろ
う。少年が現れたのもきつと自分が回想によっていたからだろう。
そう言い聞かせると少年に対していくらでも強気に出れる気がして
きた。

「その割には僕が何ができるかわからないみたいだね」

再び心を読まれたと言う事実。そして少年の言葉は水島の痛いと
ころをついていた。確かに水島は少年が何ができるか分からない。
思考を探ろうとしても他の法術師のようにあっさりと侵入できる隙
すらない。

「そう、オジサンはそこまでなんだよ。僕はオジサンより強い。た
だそれだけ」

少年はそのままガムを噛みながら水島を見つめている。この来
てようやく水島は本気で少年の意識を探ろうとした。

「無駄無駄。やめたほうがいいよ。それより知りたいんだろ？」

「何が……」

いくら意識を集中しても一切思考が読めない少年に次第に恐怖を
感じながら水島は呟いた。

「あの切れ味とあの力で何ができるか……僕も試したけどあれはい
いものだよ」

「つまり……君も使えるのかな？あれを」

冷静を装いつつ水島は声を絞り出した。一瞬少年の心の中に触れ
た気がした。そしてそこにあると感じたのはあの掃除の女性のもの

と同じ感覚。ただその力は水島がいくら意識を集中しても微動だにせず何も起こりはしない。

水島に意識の進入を許してもなお笑顔でガムを噛み続ける少年。彼はただニコニコと笑いながら水島を見つめている。すでに先ほどの優越感水島には無かった。ただ恐怖。具体的に目の前に見える少年に対する恐怖だけが感情のすべてだった。

「ど……どうするつもりだ……」

動揺する水島の様子に少年はようやく自分の勝ちを認めて満足そうになづいた。しかし明らかに少年にしか見えない目の前の化け物に負け続けるには水島のプライドは高すぎた。すぐに小さな反撃を思いつく。

「靴で人のうち上がるのは感心しないな」

「おっと……大使館の私室からなので……失敬！」

そう言うときすばやく靴を脱いだ少年はそのまま腰を下ろす。

「アメリカ大使館で暮らしている……信じろと言われても……」

「よく覚えていたね。それにしてもなんだか難しい本が一杯あるね。勉強家なんだ、オジサンは」

少年はそのまま身を乗り出してコタツの上を覗き込む。

「一応法律家を目指しているからね」

「オジサンが？」

そう言って笑う少年の頬には悪意が見て取れて水島はそのまま黙り込んだ。少年の悪意の正体は『侮蔑』だった。届出が無く、緊急性の認められない法術の発動に懲役を含む刑罰が科せられる法律が施行されてもう三ヶ月以上が経つ。それに水島がやってきたのは放火、器物破損、そして今回は傷害である。

「それより僕についてくれば厚遇してもらえと思うのにな」

少年は笑みを崩すことなくそう言った。だが水島も恐らく少年の意図する自分のが予想できないほど愚かでは無かった。

「モルモットとしてだろ」

水島のつぶやきににんまりと笑う少年。そして彼はそのまま腕の

通信端末を開いた。

「見てごらんよ。オジサンが能力暴走を引き起こした人。死んじやったよ」

少年の言葉に水島は彼の端末も開いた。しかしそのような情報は何度検索しても出てこない。

「警察の発表はまだだからね。こう見えても僕のは一応ネットしている範囲が広いんだ。担当の警察官に直接指示を出せるレベルにも親切に情報を送ってくれる人がいるからちよつと検索すればすぐ結果が出てくるんだ。便利でしょ？」

淡々と語る少年。水島は少しばかり諦めたように肩を落として少年の端末に移る箇条書きの被害者の死を知らせる文書を眺めていた。「まあ僕は……と言うか僕達はすごく心が広いんだ」

少年はそう言うのと立ち上がる。水島は被害者の死と言う事実困惑したまままだ立ち上がれずにいた。

「オジサンのような犯罪者でも役に立つ場所がある。いいことだと思ふよ。でもね。時間と言うものは有限だから。それに僕達もそれほど気が長くは無いんだ」

少年の目の前にあの女性が作り出したのよりも遙かにはつきりとした銀色の板が現れる。水島は何もできずにそれに手を伸ばす少年を眺めている。

板の中に少年の腕が引き込まれた。あの死んだ青年のように千切れるわけも無く少年はにこやかな笑みを浮かべたまま水島を見つめている。

「ゆっくり考えて結論をね。よろしく」

少年はそのまま銀色の板の中に飲み込まれた。そして彼のジャンパーが飲み込まれると同時に銀色の板も当然のように蒸発した。

水島はただ自分がとてつもない出来事に巻き込まれたことを理解していた。そしてそのきっかけを作ったのも自分自身だと気付いて力が抜けていくのを感じていた。

「ついに死人か……」

突然の着信があった通信端末を覗き込んでいた要の顔が緊張する。保安隊豊川基地。そのコンピュータルームに着いた誠達はその二ユースに眉をひそめた。

「いつかは出ると思っていただけ……早かったわね」

「クラウゼ、そういう問題じゃないだろ。それじゃあ……西園寺。」

そのまま普通に東都警察警備部機動隊第三中隊にアクセスしろ」

アイシャの緩んだ笑いもカウラの緊張した言葉に吹き飛んだ。ラーナと誠が見守る中、要はそのまま端末の前に腰掛けると首筋のジヤックにコードを挿して端末を起動させる。

「普通にそのままログインすればいいんだな？」

「安心しろ、エルマも多少はサポートしてくれるはずだ」

そんなカウラの言葉ににやけた笑みを浮かべる要。その目の前の端末がとても追えない速度で切り替わり始める。

「機動隊……第三中隊つと」

要のつぶやきと同時に飾り気の無い画面が映し出される。青い地に数字と枠。この画面について知識のない人間の入力を拒むかのような画面だが、要にとっては慣れたものだった。

「そのまま右下の空欄に……」

「8954356か？アタシでもパスワードが拾えるんだからかなり楽勝なんだな」

「そう言いながら枝は残さないでよ。見つかったらそれこそ私達全員論旨解雇よ」

アイシャに茶化されたのも気にせず要は本庁の資料室にアクセスした。

「法術系の……アストラルゲージ……とりあえず配置でもみてみるか？」

要はそう言うのと相変わらずの無愛想な画面にキーワードを入力していく。画面が急に地図と言う個性を持つとようやく誠も安心できた。

「ずいぶんと数だけはあるのね……半年でこれだけ配置するなんて準備がいいこと」

東都一円を示した地図には満遍なく設置されたアストラルゲージの位置が示しだされた。それはほとんど一つの町内に一個と言う数のものだった。確かに準備が良すぎるが誠達は警察もまた法術の存在を隠蔽してきた組織の一つだと思って納得していた。

「これだけ設置して犯人が捕まらないのか？職務怠慢だろ、東都警察は」

「法術適正がある人が通ればある程度反応しますから。同じパターンのすり合わせなどの技術は同盟司法局も東都警察には教えていないので……」

「縦割り行政の弊害って奴か？少しはサービスしてやれよ」

ラーナの言葉に苦笑いを浮かべる要。彼女はそのままこれまで演操術による法術暴走が起きた場所近くのアストラルゲージを指定していく。

「とりあえずパターンが読めれば何とかなるか？」

素早くすべての指定を終えると要はパターン検索の指示を出した「かなりノイズがあるんじゃないのか？」

ラーナもまた手元の司法局のデータベースにつながる端末で照合を行っていた。証拠になるのは昨日の殺人と変わった法術暴走事件の現場で取れたアストラルパターンデータ。そこで採取されたアストラルパターンデータはすでに法術を乗っ取られた掃除のおぼさんの空間干渉能力発動の時に発生した波動を取り去ったものがすでに採取済みだった。

要の操作していた画面にそれぞれの事件当時のアストラルパターンデータが表示される。まるで共通点のないグラフの波に要は顔をしかめた。

「こりゃ……共通項を見つけるのはかなりの手間だぞ」

ラーナももう少しそれぞれが似た波形をしていると思っていたように難しい表情で再び自分の端末に視線を落とす。

「神前曹長やナンバルゲニア中尉クラスならすぐに分かりますが……」

誠がラーナの携帯端末を覗き込むと誠やシャムの顔と棒グラフが並んでいる画面が移っているのが見えた。

「急ぐことは無いだろ。慎重に進めてくれ」

カウラはそう言うとそのままドアに向かう。

「カウラちゃん？」

「ああ、コービーでも入れてこようと思ってな」

その言葉に目を点にするアイシャ。だが次の瞬間には満面の笑みいつもの流し目が顔に浮かんでいた。

「進歩したのね、カウラちゃん」

「馬鹿にしてるのか？」

捨て台詞を置いてカウラが出て行く。要とラーナはそれぞれデータの照合作業を続けていた。沈黙。要は絶え間なくその中でキーボードを叩き、首筋のジャックに挿したデータ出力端子から情報を送信している。

「やっぱりノイズが多すぎるな……本当に法術師の発生割合は2パーセントなのか？」

二度目のフィルターをかけたアストラルパターンデータだが、まだそれぞれはかなりの違う波形をしているばかりだった。

「一般人でも感情の起伏によってアストラルパターンの異常は起きますから。どうしてもそういうものまで拾っちゃうんですよ」

要の泣き言に付き合うラーナ。誠とアイシャはただ次々と流れていくアストラルゲージを眺めているだけだった。

「でか……」

突然の要の言葉にラーナの手が止まる。そしてすぐに要が検索した四件目の放火事件の現場のパターンに目をやった。考えられる法

術師のアストラルパターンを除去したのにもかかわらず巨大な波がそこに残されていたのが見える。

「何ですか？これは……でも大きすぎますよ……嵯峨大佐でもいたんですかね」

「アタシに聞くなよ」

誠も目にしたパターン。それはアストラルゲージが完全に振り切れるほどの反応を見せていた。

「それは別件でしょ。次に行って頂戴よ」

投げやりにそう言ったアイシャに要はにらむような表情で見つめ返した。

「いいのか？」

「良いも悪いも私はその法術適正者には関心が無いもの」

「関心が無いって……」

「止めておけ」

いつの間にか戻ってきていたカウラがコーヒーの入ったカップを配りながら要をにらみつけた。マイペースのアイシャはそれを受け取るといかにもおいしいというように目を閉じて黙り込む。二人の間に立ってカウラは苦笑いで隣で作業中のラーナに目をやった。

「クラウゼ中佐の意見の法に理がありますね。私達の任務はすべての法術適正者を監視下に置くことじゃありませんから」

「そ……そうだな」

要の視線が誠に向かう。誠はただ頭を掻きながら作業を続けるラーナを見つめていた。

「もう少し夾雑物を抜けば見えてくると思うんですが……演操術系のパターンは特徴的ですから……」

それだけ言うとそのまま自分の作業を続けるラーナ。要も仕方なくアストラルゲージを眺め始めた。

「共通項って……どうやってら分かるの？」

「β波が特徴的です。一般人の約一万倍の強さで出ますから。パイロキネシストや領域把握系の法術ではほとんど通常の人間との差

異は見られませんが空間干渉系の法術発動時にはそれなりに出ます。ですから今回のように空間干渉系の法術の事件が他にも起こっていればなかなか共通項を見つけ出すのは大変だったかもしれませんが、そういう話もないですから」

ラーナはそう言う間にも自分の手元の端末を弄っている。誠は黙って要の目の前の端末の画面に映るグラフの変化を見つめていた。

「ふうん……それって法術発動時以外にも出るの？」

「他の法術と違って意識しないでもある程度発していますから……出た！」

ラーナの叫びに視線が彼女に集中した。

「港南区の放火未遂事件。ちゃんと出てますよ」

そう言うのとラーナは画面を事件直後の映像に切り替える。ごみの山が半分ほど焦げた状態の現場と結局は不起訴になった容疑者の顔写真が映し出される。明らかに悪人と言うような表情の頬に傷のある男。思わず誠は苦笑いを浮かべた。

「おい、こいつが犯人じゃねえのか？」

「違いますよ。意識をトレースした結果この人物が放火をしたという意識の残滓はありませんでした。それに彼にはこの場所で放火をする理由がありませんし……」

「意識トレースか。実用になっているんだな」

法術の研究の急激過ぎる発展で得ることができた脳反応をトレースしての意識を読む技術。おかげで警察の取調べの手間はかなり少なくなったと誠も聞いていた。

「で……一箇所じゃ決まらないだろ？ 続けんぞ」

要は感心することも無くそのまま自分の端末に目を移して作業を開始した。

「……でデータ照合はできた。後は……」

すでに夕方だった。要は食事もとらずに検索を続け、ラーナは何とかパンをかじりながら端末で地味な照合作業を続けた。そして東京都の一連の法術暴走事件が一人の法術師によって引き起こされたこと、その人物は豊川で死者を出す法術使用を行なったことがデータの上では証明することができた。

「さてと、後は本人を見つければ話は済むんだがな……まあ裁判所がこれを証拠として採用するかは別問題だ。とりあえずのこの資料の使い道は豊川署の馬鹿共にとたきつけるとすっきりするくらい……だな」

静かにカウラはそう言った。誠達も結局そうなることはわかっていたものの、これまでの労力を考えると憂鬱な気持ちになる。

そんな時にコンピュータールームの電源が突然落ちた。周りを見渡す。独特の気配に誠達は嫌な予感に襲われていた。

『俺の仕事になりそうだな！』

聞き慣れた叫び声がすべてのスピーカーから響いた。

「吉田の馬鹿か……」

『馬鹿？それなら手を引くぜ俺は。豊川署の署長はそいつを有効に使ってくれるかどうか……微妙なんだけどな……』

「いえ！すみません！調子に乗っていました……馬鹿少佐」

相変わらずの減らず口の要。画面が戻るとそこには額タオルを巻いている姿の吉田俊平少佐が映っていた。

「農作業？」

『仕方ないだろ？シャムがやるって聞かないんだから。今のうちに土と肥料をなじませないと来年の実りは保障されないんだそうな』
背後に耕運機のエンジン音が響く。思い切り脱力しながら誠達は画面を覗き込んだ。

「今更出てきて何するつもりだよ」

要の言葉は冷たい。確かに以前から何度と無く協力を頼んでは断られていただけに誠も吉田の真意が図りかねた。

『法術適正の際に採取した法術師のアストラルパターンデータ集が東都の住民管理局に眠っているわけだが眠っているだけじゃもったいないからな。それと照合すれば完全に裏が取れる。まあデータの件数は俺クラスじゃないと扱えない規模になるだろうけどな』

「また無茶なことを……それにそんなところにアクセスするにはそれなりのパスが無いと無理なんじゃねえのか？」

要の言葉に得意げな吉田は話を続ける。

『そんなものは必要ないね。同盟厚生局とやりあったときに貸しを作ってくれたのはお前等だろ？そのとりたてとしてみれば安いものさ』

要の問いに答えながら吉田はいい顔で額の泥をぬぐっていた。

「強引にねじ込む訳か……」

「本当にいいんですか？」

心配そうなラーナ。だがすでに画面の中ではすっかりやる気の吉田がいる。彼がやると言ったらやるだろう。

「止めても無駄みたいね……じゃあお願いするわね」

アイシャの声に吉田が嫌な顔を浮かべていた。

『まあ……さっさと帰れよ。俺が何とかして明日には結果を出せると思うから』

端末の画像が途切れる。カウラが大きいため息をついた。

「ベルガー大尉。所詮我々でのローラー作戦なんて無意味ですから」

「分かっているが……なんだか気になってな」

カウラはそう言うと言の首のネクタイを緩める。

「何でも自分で背負い込むのは止めた方が良いわよ」

「なんだよ、アイシャ。ずいぶんと知った風を気取るじゃねえか」

そんな要の言葉にやりと笑うと端末を仕舞うアイシャ。カウラ

や誠も端末の終了作業を行なっている。

「で……簡単に分かるものなのか？」

ネクタイを外したカウラの問いに苦笑いを浮かべるラーナ。

「証拠として採用できる範囲の情報があるかどうか……」

「そうだな。吉田のおっさんは犯人を見つけましたというかもしれないが証拠が無ければ逮捕と言うわけには行かないからな」

「あら、要ちゃん。『疑わしきは罰せず』と言う刑法の基本も知ってるのね」

再びチャカしたアイシャの細い目を要がたれ目でにらみつけている。

「お二人とも！とりあえず終わりにしましょうよ」

誠の言葉で二人は舌打ちしながら離れていく。気分が悪いと言うように要は終了した端末から首につながるコードを抜くとそのまま立ち上がり出て行った。

「単純！」

うれしそうに笑いながらアイシャはエラー画像が出た誠の端末を軽くいじって終了させてやっていた。

軽い打撃音が何もない意識の中で大きくなるのを感じていた。それが次第に具体性を帯び、そしてそれが寝ている自分の部屋を叩いている音だと気づく。そんな中、誠は目を覚ましていた。

「なんだよ……」

相変わらず寮の誠の部屋のドアを叩く音は続いている。だがすぐにそれがカウラが誠を起こそうとしているのだと直感した。誠も半年近くあの三人と暮らしていれば要やアイシャならこういうときは怒鳴り込んできているはずだと言うことくらいわかっている。

「すみません……ちよっと待って……」

そう言って布団を払いのけて立ち上がったところでドアが勝手に開いた。

「のんびりしやがって……」

呆然と立ち尽くすカウラの隣の要。誠もいつものことながら無然とした表情で要を見つめていた。すでに二人とも出勤前の身支度は済んだという感じで、パジャマ姿の誠を見下すような感じで見つめている。

「……吉田さんの調査が終わったんですか？」

誠はまだ半分眠っている頭に浮かんだ言葉を口に出してみた。二人とも顔を見合わせて大きなため息をついた。

「まあ、そんなところだ。とっとと着替えて食堂に来い」

要はそれだけ言うのと立ち去る。立ち尽くしていたカウラ。ようやく布団の上にあぐらを掻いた誠の間に気まずい雰囲気があった。体がまだ睡眠の余韻に浸って言うことをきかない誠は何とか立ち上がろうとする。

「まあいい、ちゃんと起きてから食堂に来い。それに……そのパジャマ。ちゃんと洗濯しろ。臭いぞ」

それだけ言い残し消えていくカウラ。

「ドアぐらい閉めてくれても……」

誠は直感でそのままドアに伸ばした手を止めた。すぐにその手は何物かに強く握られている。

「クラウゼ少佐……」

ドアの影のアイシャの紺色の長い髪に誠はため息混じりにその口を開いていた。

「びっくりした？」

「いえ、慣れましたから」

「そうつまらないのね」

誠の手を離してそのまま消えていくアイシャ。誠は仕方なくそのまま戸を閉じると着替えることにした。とりあえず黒い量販店で値段だけを見て買ったパジャマを脱いで美少女戦隊モノのTシャツに袖を通す。

「はあ……吉田少佐の検索結果か……」

ため息をつくと今度はジョーンズに足を通した。そのまま寒さに耐え切れずにセーターに袖を通す。一月も終わり。地球と同じだと言う公転周期を持つ遼州の日差しもなぜか冷たい。

これも量販店で買ったジャケットを羽織ると誠はそのまま廊下に出た。住人に整備班員の占める割合の高い寮は出勤時の騒動の中にあつた。廊下を歩いても誠の隣を駆け抜けていく技術下士官が三人もいた。

「僕も急ぐかね」

そう言つて誠は階段を駆け下りる。そして途中で洗面所に立ち寄つた。

「おはようございます！」

突然の大声に眠っていた誠の意識が瞬時に醒める。見てみれば技術部に先日転属してきた胡州帝国出身の技術兵だった。年は確か誠よりも二つくらい上。額のほくろが特徴で時々それをアイシャに弄られているのをよく見かける。

「ああ、おはようございます」

誠はどうにも年上に直立不動で敬礼されるのがむず痒くなって、無視してそのまま顔を洗っていた。その間も技術兵は敬礼の姿勢を崩そうとしない。

「すいません。そんなに畏まれても……」

「我が隊のパイロットに対する当然の礼儀であります！」

「うっちゃあそう言うのはやりませんよ……西とかを参考にしてください」

「了解しました！」

大声で叫ぶ技術兵の迫力に閉口しながら、誠はいつものように誠は食堂のドアにたどり着いた。

「遅い！遅い！」

カウラが珍しく大きな声で誠に叫ぶ。彼女の隣には要とアイシャ、そして都内のアパートから来たらしいラーナの姿もあった。

「緊張感が足りないんじゃないですか？」

ラーナのきつい一言に頭を掻きながらカウラ達の座るテーブルに席を確保する。

「結果は出たんですか？」

そんな誠の言葉にカウラ達は顔を見合わせた。

「法術適正があつて定期的に豊川付近に移住している人物のピックアップはできたんだが……」

一冊のファイルのカウラが手にしているのが見える。表には写真と経歴。ぱつと見たところでページ数は二三十ページという風に見えた。

「でもだいぶ絞り込まれてきたじゃない。ローラー作戦とかをやると思えば労力は雲泥の差よ」

「まあ……確かにそうだ」

浮かない顔のカウラ。納得したようなアイシャ。要は今ひとつ納得できないと言うように腕組みをしている。

「ともかく対象はかなり絞られました。後はそれぞれのアストラルパターンを検出。そして符合した人物の行動を追っていけばいいん

ですよ」

「簡単に言うなあ、お前さんは」

ラーナの言葉に要が眉をひそめる。そして誠も今ひとつ理解できずについ朝食の乗ったトレイを持って珍しそうに自分達を眺めている島田と目があった。

「俺は……とりあえずしばらく無理だから」

本心では先月の厚生局の法術違法研究が露見した一件のように参加したい気持ちでいっぱいなのだろう。島田は味噌汁の椀を手に持ったまま恨めしそうな視線を誠に向けてくる。

「あてにしてねえよ」

そんな島田の気持ちをあえて踏みつけるようにつぶやく要。なんとも雰囲気の良いくないことで誠も少し状況が読めてきた。

「それでもまだ人数が多すぎるんですね」

手にした冊子を手渡そうとするカウラを制して、ラーナは端末の画像を誠にも見えるようにしてみせた。そこには15人の男女の写真と経歴が並んでいるのが見えた。

「この全員に『警察のものです……失礼ですがアストラルパターンデータの計測をお願いできますか?』と言って回るわけか……殴られるぞマジで」

要の言葉。そしてアイシャがため息をつく。

「でも……任意の調査でお願いすることは……」

誠の一言に全員の生暖かい視線が誠に向けられた。

「おい、この元となる資料。もし星を検挙して証拠に使うつもりか? どれもあのロボ少佐の違法なアクセスで見つけた資料だ。証拠どころかアタシ等が大悪人に仕立て上げられて終わりだよ」

「さすがの西園寺もそのくらいは分かるんだな」

「そのくらいって何だよ」

カウラと要がにらみ合う。誠もようやくこの15人を一人に絞り込むことの難しさに納得した。

「じゃあ……全員の行動を」

「だから！誠ちゃん。なぜこの15人なのかを知られたら拙いわけよ。それに下手をすれば他の組織が動き出しているかもしれないしね」

アイシャの言葉に場の空気が不意に冷えてきたのを誠は感じていた。先ほどは完全に要に拒否されてへそを曲げている島田。彼も『他の組織』という言葉を聞くと、箸を止めてしばらく考え事をするようにテーブルに茶碗を置いてこちらの様子をうかがっている。

「それはあるかもな」

要はそう言うとはほとんど食べ終わっていた茶碗に湯飲みの番茶を注いだ。食事を終えようとする彼女を見ても誠に食欲はわいてこない。極めて嫌な予感がある原因であることは誠にもわかっていた。

「最近聞く……例の『ギルド』ですか？」

誠の言葉に一同は沈黙する。

法術の威力は明らかになればなるほど恐るべきものだと言うことが知れ渡ってきていた。各国の政府機関や軍がそれぞれに法術の研究を行っている。だが、そんな中、司法局に提供される資料の中で法術師の互助会的な組織の存在が指摘されることが増えてきていた。政府機関関係者の間で『ギルド』と呼ばれるその組織はすでにタブロイド紙に目的不明のテロ行為を行う団体が存在すると言う記事を書かせるほどの活動を始めていた。

「『ギルド』だけだと思う？」

いかにも含むところがあるというようなアイシャのつぶやき。彼女も直接は口にはしないが地球諸国や外惑星のネオナチ組織、さらに以前の同盟厚生局のように同盟組織内部でもこの事件の主犯の力に関心を持っているのは間違いない事実だ。そう思うと誠はこの事件の捜査が極めてデリケートに行われなければならないと言う事実を痛感した。

「つまりだ。アタシ等の仕事はこの15人の全員の身柄を安全に保ちつつ、その中でこの前のアストラルパターンを持った人間を特定して生きたまま逮捕することだ。分かるだろ？」

要の言葉に誠はつばを飲み込む。要人略取や暗殺を主任務とする胡州陸軍特殊部隊出身の要にそう言われるとさらに事件の解決へのハードルが上がるような気分になる。

「この人数で15人を……無理じゃないですか？」

「無理だろうが何だろうがやるしかないの。わかる？」

アイシヤはそう言いながら味噌汁をすする。それに頷きつつおかずの鰯を口に咥えているカウラ。見た目は緊張感の無い光景だが、周りの隊員はすべて誠達の話聞きながらいつでも捜査協力に立候補するようなそぶりを見せているのが誠にもわかった。

「とりあえず測定可能な場所まで近づくのが一番だろうな。今回の違法法術行使はすべて同一犯の犯行と言うことはアストラルパターンデータで分かったんだから」

茶碗の中の茶を飲み終えた要は覚悟を決めたようだった。

「でも本当にそうなの？このデータ自体に問題が無いと言い切れるわけ？今回だって私達のところに演操術の存在が知らされるまでタイムラグがあったわよね」

アイシヤの何気ない指摘に突然要の表情が変わった。彼女の言葉で味噌汁を飲んでいたカウラの顔色も変わる。

「能力演操のデータは少ないですから。それが同じ人物によるものかはなんとも……」

ラーナの言葉に全員が言葉を呑んだ。これまで同一犯と思っていた事件が複数による犯行なら……そう考えるとすべての捜査が無駄になるように思えてきた。誠達は黙り込む。この人数で事件解決することはできない。その結論が出ようとしているときだった。

『そりゃあねえな。自分の調べたデータだろ？もう少し自信を持てよ』

突然端末のスピーカーから聞こえてきたのは嵯峨の声だった。いつもの嵯峨の監視癖を思い出したが誠が周りを見渡せば要もアイシヤもカウラも救われたような顔をしていた。

『吉田から聞いたよ。演操術系の法術のデータなら今そちらに送っ

たぞ。これはかなり長期の研究の成果だからな信憑性が高いからな。まあこちらでも証拠としては使えない某国の秘密実験データのコピーだから犯人の特定以外の役には立たないがな。つまり犯人を逮捕して自白させない限りこの事件は解決しないわけだ』

「叔父貴！アタシ等を踊らせて楽しいか！」

腹に据えかねたように要が叫んだ。顔にこそ出さないがカウラもアイシャも同意見というようにラーナの端末に映る部隊指揮官の顔を睨み付ける。

『怖い顔するなって。お前等も俺やクバルカが支えてやらなきゃならねえほど餓鬼じゃねえだろ？自立してもらわねえと俺も困るんだよ……じゃあ期待してるから』

そして突然のように嵯峨の言葉が終わる。

誠にも意味は分かった。状況証拠が揃っても意味が無い。犯人を特定するだけでも無駄。すべては生きている犯人を逮捕して自白をさせ、それにあつた承認や証拠を別にそろえなければ事件は解決しない。

「蜂の巣にはできないわけだな」

要は私服を着ても懷に下げている愛銃を叩いた。その滑稽な動きにカウラが微笑む。

「そう言う事です。多少の捜査の工夫が必要になると言うことで……ちよつとこのデータを嵯峨茜警視正に送りたいのですが……」

遠慮がちなラーナの言葉に要とカウラが大きく頷く。ラーナはそれを見ると再び端末にかじりついた。

「茜のお嬢さんのプロフィールが終わるまで……時間が惜しいな。どうする」

要が周りを見渡す。すでに彼女の言葉が分かっているカウラとアイシャが頷く。

「とりあえず15人の現在の住所を確認。見つからない程度にその現状を観察していつでもプロフィールの結果に対応できるシミュレーションを行なう」

「カウラ。それだけわかってりゃ十分だ。神前。飯を食え」

要は満足げに握りこぶしを向けてきたカウラの右手に自分のこぶしをぶつけた。誠は一斉に出勤準備を始めた隊員達を後目に自分の朝食を取りに厨房の前のカウンターに向かって歩き出した。

「隊長は悪人ですね……」

早朝、まだ部隊には人影は少ない。そんな中『ゴミ屋敷』の異名のある保安隊隊長室で通信端末の電源を切る嵯峨惟基の姿があった。それを横目で見ながら少し前までコンピュータ室にいたシステム担当部長である吉田俊平のにやけた顔がある。

「まあな。あいつ等も少しは成長してもらわにやらねえよ。特に神前には期待してるんだけどね。アイツは意外と伸びるよ……まあ使い物になるのは五年先か……十年先か……」

「ずいぶんと気長ですね」

そう言いながら手で器用に作っていたココアの中にお湯を注ぐ吉田。ミルク無しでは飲みたくないと言うように嵯峨は吉田が入れてあげたカップから目をそむけて立ち上がった。

「なあに気長なもんか。俺の本音じゃまだまだアイツ等の成長は遅すぎるよ。これじゃあ百年経ってもお襦袢のまんまだ」

嵯峨が伸びをするのを見ながら吉田はぬる目のお湯でココアを溶いたものを口に含んだ。

「美味くないだろ？」

「ええ、まあ」

咳き込みながらつぶやく吉田をにんまりと笑いながら嵯峨は眺めていた。

「ですが本当にゲルパルトや『ギルド』は動かないんですか？」

吉田の問いにしばらく考えた後嵯峨は椅子に腰掛けて目をつぶって腕組みをした。

「ゲルパルトについては現在数名の法術師を抱えてその調整にてんてこ舞いだと言う情報があってね。それを考えれば元々遼州人を信用しない連中のことだ。手を出す可能性は少ないな。それに対して『ギルド』は法術師集団だ。人に自分の力を使われるのは面白い話

じゃないだろ？」

そう言うのと口寂しいのかそれまで無視していた吉田の入れたカップに手を伸ばした。すぐに顔を顰める嵯峨。その表情が面白くなつてつい吉田は吹き出していた。

「っふ！つと……冗談はこれくらいにしてと。それにしてもずいぶん情緒的な話ですね。信用するかどうかと言うかゲルパルトの連中の場合は好き嫌いの問題でしょ？アイツ等だって情勢分析ぐらいしてるんじゃないですか？それこそ隊長のゲルパルト感がにじみ出ますよ。いつも情緒で政治を語るのは最悪の馬鹿野郎と言っている口から希望的な観測が聞けるとは……こりゃあ傑作だ」

そんな皮肉に嵯峨は苦笑いで答える。

「俺だって連中が介入しない確証は欲しいんだけど……それほどはつきりと動きを見せてくれるほど甘い連中じゃないしな。そして俺は地球勢力については何も言ってないぜ」

嵯峨はそう言いながらゆっくりと二杯目のココアを口に含む吉田を見つめていた。

「隊長、飲みたいんですか？」

吉田の問いに嵯峨は大きく頷いた。

「飲ませて」

「じゃあさっきまでみたいないひどい顔はしないでくださいよ」

吉田はそう言うのと渋々嵯峨が差し出すカップを受け取った。

「地球勢力の動きは……あるんだか……ないんだか……」

カップに注がれるお湯を見ながらつぶやく嵯峨の表情。それはただ先ほどのココアの何かが欠けた味を反芻しているように歪んでいた。

「東和のそれぞれの公然組織に動きがないのは確かですが……裏では相当動いているでしょうね」

「当然だろ？」

嵯峨は吉田からカップを受け取ると静かにお湯をすすする。そして再び顔を顰める。

「地元の理のあるアイツ等だって今回の犯人の目星がついちやいな
いんだ。もし今回の犯人がいたずらをしようとする現場に出くわし
てもしない限りクラウゼ達の方が先に犯人に巡り会うことになるさ」

そう言いながらさすがにしばらく休むというようにカップを遠く
に置く嵯峨。目を何度もパチパチと動かし。ただ黙って吉田を見つ
めている。吉田はと言えばようやく口に慣れてきたココアをゆっく
りと啜っていた。

「ああ、それにだ」

嵯峨は気がついたように自分の金属粉で覆われた机の上に汚れる
のもかまわず身を乗り出してきた。

「なにかあるんですか？」

「接触ができたところで法術師を山ほど抱えている『ギルド』以外
はそう簡単には手が出せないさ」

確信があるという嵯峨の目。吉田は首をかしげつつ、それまでに
なく目を輝かせている自分の情感を見つめた。

「何か理由でもあるんですか？」

「法術師の力を操る化け物が相手だ。相当の手練れが動くならそい
つは自分の能力を組織で高く評価させるためにすぐには実力行使に
は出ない。もしその時返り討ちに遭えば自分の評価ががた落ちにな
るからな」

満足そうな嵯峨の顔を見て吉田は大きくため息をついた。

「じゃあそんなことを考えない馬鹿が動いたときは？」

「なんでそんな馬鹿の心配を俺がしなきゃならねえんだよ。そんな
奴は返り討ちに遭うか、驚いた犯人が大暴れして嫌でも俺達の出番
になるさ」

嵯峨の口元にはいつもの騒動を待ち望むときの悪い笑みが浮かん
でいた。

四月から始まる法科大学院の授業に向けて、水島勉は予習に怠りが無かった。

元々今度入学する明法大学より格上と思われているが大学同士の交流が盛んな城北大学の社会学部出身と言うこともあり、時には明法大の法学部のノートを見せてもらったこともあったのでなんとなく雰囲気はつかめているような気がしていた。

とりあえず初歩的な憲法を中心とした研究書の気になったところにラインを引いていく作業が続いている。そんな彼の隣ではテレビが音も無く光っていた。とりあえず勉強の合間にちらちら見る。それが昔からの水島の勉強法だった。そしてそこに先日 of 異常な法術を展開して腕が取れるのを目撃した自分の能力の被害者の姿を見て少しばかり筆を休めた。

「死んだのか」

あの名前も知らない少年からその事実を知らされてから二日。それでも実感が沸かなかった。実際水島にすれば異常な法術の力を制御できずに慌てていた。それまでのパイロキネストやテレキネシス系の能力者を操るときのような操縦ができない感覚。発動する瞬間のまるで意識をそのまま持って行かれるような感覚がまだ頭から離れない。

全く初めてで予想ができなかった感覚。近くにいたテレキネシス能力者の脳を通じて感じた被害者の感じた驚き。そして突然訪れた激痛とそのまま自然に叫び声と全身の筋肉が硬直していく感覚が頭の中に流れ込んできてしばらく動けなかったことを覚えている。

水島は気分を変えることができなかった。そのまま手元にあった携帯端末で半年前の法術の存在の発表と同時に制定された法術使用適正化法の文面に目を通す。

『第六十三条、許可無く法術を使用した場合には科料と課す』

『第九十二条、法術の発動の責任は発動した法術師が負うものとする』

「これは違法法術展開罪が適用対象だな。僕はただ……」

思わず独り言でも言い訳をしている自分。水島は偶然掃除婦の頭の中を覗いただけだった。それが違法な法術発動であることは確かに彼も認めざるを得なかった。だが青年の腕を切り落とした能力を発動したのはその掃除婦。

水島は何度となく法律の文面を口の中で小声で繰り返す。

「大丈夫。俺は悪くない。俺は人殺しじゃ無い……」

言い聞かせるだけ惨めになるのは分かっていた。それでもそう言い聞かせなければそのまま中断していた憲法の授業の予習に入れそうになかった。いや、そんな自己暗示のような無駄な努力をしなくてもしばらくは勉強などできる気分にはなれそうになかった。

自然に水島の考えは仕方なくあの自分の能力を買っているらしいアメリカ大使館付きの武官を名乗る少年についてに移っていた。まるで見下すような笑みを浮かべて水島を見つめるどちらかというと線の細い少年。彼は水島を必要としているという。法律が想定していなかった特殊な能力を買うというにはあまりにも頼りない存在に見えた少年の不思議な存在。

少年の言葉も正直、昨日の闖入が無ければ信じてはいなかった。

閉ざされた部屋の中に少年は突然現われた。そして少年はそのままあの掃除婦が作り出したのと同じような銀色の平面の中に飲み込まれて消えた。まるで異次元への入り口を作り出したかのような少年の能力。その力は水島のこれまで聞いていた法術の能力のどれとも違うものだった。自然と彼の心臓の鼓動が恐怖に高鳴っていくのが感じられる。

テレビのニュースが切り替わり天気予報が始まる。それを見ると再び水島はもうやる気は出ないことくらい分かっていたが、無理矢理参考書に目を落とした。

文字が見えなかった。

自分が殺人者だと指摘する理解不能な力を持った少年の存在。何度となく少年の言葉の中の『死』という言葉が頭の中で繰り返されていく。元々、友人を作るのが苦手で孤立しやすいところからリストラを食らった自分の人生を考えると、人の死に出会ったのは父が去年全身に転移したガンで死んだ時くらいの記憶しかない。

「簡単に死ぬんだな、人は」

まるで水島の学生時代にこの惑星遼州を覆った大戦の時の胡州あたりの将校が言いそうな台詞だと自分で行っていて思った。水島の母国、この東和は戦争の惨禍とは無縁な国だった。むしろ学生時代は軍事物資の工場でバイトをした時の景気のいい話ばかり思い出す。そんな人の死とは無縁だった水島が初めて見た突然の死。それが自分でもコントロールできない能力との遭遇による事故だといくら思い込もうとしても無理な話だった。絶え間なく訪れる不安感。どうにも耐えられずにただじっと放心するほか無い。

「人が死んだんだ。もう警察は動いているだろうな……でもこんな能力はそう無いんだ……法術犯罪で違法発動が決められている力にはこんな力はないし……」

もう何度目の自問自答だろうか。明らかなのはすでに自分は勉強をできるような心理状態では無いことだけだった。

水島はそのまま立ち上がると押し入れから布団を取り出しにかかった。

睡眠という仮の死だけが自分を解放してくれる。そう思うほかに水島は今の不安感を解消するすべを知らなかった。

「計十五名……ですか」

杉田と言う老刑事はどうか言葉を絞り出したと言う体でつぶやいた。

それまでなんとかこの十五人の共通点を提示して見せたカウラの言葉。そんな彼女の苦勞に誠はただ黙って賛辞を送るだけだった。だが明らかに杉田の表情は気に入らないことばかりという風にしか見えなかった。

狭い元倉庫の豊川警察署の誠達の詰め所。空気はどんよりと重い。吉田の自治体のサーバへのハッキングの事実がこのデータを裏付けているは言うわけにも行かず『同盟厚生局の資料』と言う言い訳で何とか説明しようとしたが、明らかに杉田は胡散臭い目つきでモニターを動かすカウラを眺めていた。

「同盟厚生局がどんな資料を持っているか知りませんが……そんなよく分からない資料で絞り込んだ十五人を名指して指定して捜査を進めると？ 問題にならないですね。馬鹿馬鹿しい」

そんな杉田の一言に要が飛び掛りそうな勢いで立ち上がろうとするのをアイシャが何とか制した。しかし誠も要の気持ちはよく分かった。

「犠牲者が出てしまったんですよ……」

「それは分かっているんですが……万が一、この資料が正しいとしましょう。それではこの十五人を呼んで任意で聴取を取るとして、根拠は何ですか？ 伺った限りではその呼び出しをかける資料が同盟機構の持ち出し禁止の資料らしいじゃないですか？ そんなものに頼って呼び出したところで弁護士を立てられたら即、証拠不十分で即釈放ですよ」

「んなことは分かってんだよ！」

要はついに切れて机を叩き折ってしまった。その轟音と迫力でさ

すがの杉田も飛び上がってあとづさる。杉田を殺気を込めた瞳で睨み付ける要の前にさっと出たアイシヤが要の壊した机をそのまま脇にどける。そして何事も無かったかのように元の椅子に戻った。

「確かに。私達も起訴が難しいことは十分予想していますよ。でもね、杉田さん……もしこの事件の犯人に興味を持つ人物が悪意を持ってこの十五人の中にいるだろう犯人と接触を図ったとしたらどうします？」

悪いことを考えている顔だ。笑みすら浮かべて机に頬杖をついてつぶやくアイシヤを見ながら誠はそう思った。

「クラウゼ少佐……いや、警部。言っている意味が分かりませんが……」

杉田の表情が明らかに曇っている。誠は直感した。杉田はアイシヤの言うことが分からないんじゃない分かったくないんだ。事実杉田の手元の湯飲みに伸びる手は震えていた。アイシヤは当然のようにたたみ掛ける。

「杉田さん。私はあなたはそれほど愚かだとは思っていませんよ。分かりませんかじゃなくて分かりたくないって意味なんじゃありませんか？」

切れ長のアイシヤの目が凡庸な顔立ちの杉田を捕らえた。しばらく目をそらし、頭を掻きながら考えた振りをしている杉田。その様子がさらに要をいらだたせて立ち上がる口実を与える。そして当然のように驚いた杉田が椅子を後ろに下げた。

「実際前の『同盟厚生局事件』を見れば分かるようにゲルパルトの非合法テロ組織やベルカンや東モスレムのイスラム原理主義勢力による法術師の開発や取り込みの動きがあるのはご存知ですよね」

アイシヤの落ち着いた言葉遣いに何とか要におびえる心を奮い立たせるように杉田は椅子を元に戻した。そして口を開こうとするとここでアイシヤはそれを制するように言葉を続けた。

「現在、私達同盟司法局でも他者の法術適正を発動させると言う今回のような能力を持った例を確認してはいません。我々にとっても

また今回の容疑者の能力はきわめて興味深いんです。それはどの組織にとっても同じことだと言うのが専門家の一致した見解です」

『専門家の一致した見解』と言うアイシャの言葉に鬼の形相だった要が思わず噴出しそうになる。単にここに座っている誠達と吉田の意見をそれらしく修飾した『専門家』と言う言葉。その意味を知って必死に笑いをこらえている要の姿がおかしくて誠は思わず噴出したが、冷酷そうに見えるアイシャの細い目ににらまれてそのまま黙り込んだ。

「つまり……法術に関心を持つ組織が本当に実在するとして、彼等がこの十五人との接触を図ると言いたいんですね」

さすがにここまで言われて杉田は苦々しげに話しの序の口に当たる前提条件をようやく認めてみせた。彼も警察組織の一員である。法術師を研究対象として集めている組織が多数あることも杉田は知っているだろう。集める手段も多額の報酬を払っての自発的協力から誘拐まで様々あることも十分分かっているはずだ。

それでも治安の守護者である警察が勝手気ままにテロ組織や他国の工作員に自分の庭を荒らされている事実を身内ではない保安隊に認めるわけには行かない。そして組織人である杉田もまたその事実を自分の口から吐露することだけは避けたいというように表情をゆがめて座っている。

「本当に実在するかどうか？ 認めなく無いのは警察だけだろ？」

また怒りがふつふつと煮えてきたのか要がつぶやく。その言葉に不快感を隠そうとしない杉田。カウラは要の肩に手を伸ばすが要は心配するなと言うようにそれをふりほどいた。

「別にそれらの組織に対する警察の内偵の実情まで知りたいわけはありませんから。それに東都警察お得意の別件逮捕や予防検束をお願いするつもりは無いですよ。人手を必要とするような戸別訪問も必要ありません。我々に与えられた時間は少ないですが……司法局は警察の面子をつぶすのが仕事ではありませんから」

アイシャの言葉に大きく安堵のため息をつく杉田。それを見てま

た要が噴出しそうになっているのが誠の腹筋を刺激する。

「今までお願いしていた警邏隊の巡回活動をこの十五人を重点的に行っていただければ結構です。それと……」

そう言って立ち上がったアイシャは部屋の隅の大きな箱に向かう。誠も見ることが無いいつの間にか置かれた上下一メートルほどの箱をアイシャが持ち上げようとする。

「ちょっと！その怪力二人！」

「誰が怪力だ！」

誠はアイシャの助けに向かうが売り言葉で挑発された要は叫ぶだけで立ち上がる気配も無い。仕方なくアイシャと箱を持ち上げようとしてみた。結構な重さと中に入った多くの小箱が箱の上から見えた。

「菱川精密機械……」

誠は隙間のラベルを見て読み上げる。二人で運ぶ大きな箱に杉田は興味を示しているようだった。

「これが……新型の演操術系法術反応対応の簡易型のアストラルパターングージです」

テーブルの横に箱を置くとアイシャはその中の一つ。二十センチ四方くらいの小箱を取り出した。思わず立ち上がる杉田。そしてアイシャは彼の興味深そうな瞳を一瞥した後その一つを取り出し開封した。

緩衝材に包まれた小型の弁当箱のようなものが誠の席からも見えた。そして渡された杉田はいくつかのモジュラージャックとディスプレイのついたアストラルゲージをまじまじと眺める。

「これまでの順路を多少変えて、警邏隊にこれを持ってパトロールさせるくらいのことはできますわよね」

これ以上は妥協できない。そんな意志のようなものを感じる鋭い視線が杉田を捉えていた。

「ええ……そのくらいのことなら……」

そう言いながら珍しい機械に興味深げに見る杉田。彼としてもア

イシャの提案は呑めないものでは無かった。

「これでこれまでのすべての犯行現場で観測されたアストラルゲージの値と一致する人物を特定していただければ結構です。後はうちのお仕事ですから」

「はあ」

アイシャの自信に満ちた言葉。杉田は興味のある機械を眺めながら曖昧に頷いた。

杉田の視線は興味深い機械に向けられていた。ただ黙り込み、じっと考えを巡らす老刑事。確かにアイシャの提案は呑めないものは無い。それでもそんなに簡単に十五人から一人の犯人を特定できる装置が開発されていたなどと言う寝耳に水の話を用意しているのかどうか。

沈黙は長く、永遠に続くかに思えた。そしてその一つを手に取り、ようやく心を決めたというように杉田は立ち上がった。

「それでは警邏の担当者と話を決めますので……この機材は……持つて行ってもいいんですか？」

「すべてお持ちいただいてもよろしいですよ……なんでしたら運びましょうか？ 警邏課まで」

「いえいえ……」

アイシャのサービス精神に杉田はきびすを返すとそのまま部屋を出て行った。先ほどまでイライラを溜め込んだ表情をしていた要がにんまりとタレ目をさらに酷くしている。

「なに？ その顔」

「いいじゃねえか」

要とアイシャ。二人ともニヤニヤしながら席に戻った。カウラは何とか乗り切ったと言うように慣れない東和警察の襟の形を気にしながら席に戻る。

「これで一段落……と言うかしばらくはすることがなくなるわね」

「そうか？ いきなりドカンと本命にぶち当たるかもしれないぞ。それにしてもこの機械……使えるのか？」

「さあ……」

首をひねるアイシャに要は呆れた表情を浮かべていた。

「使えるかどうか分からない機械で何する気だ？」

思わず叫んだ要の肩をアイシャが叩いた。

「いい？要ちゃん。相手はこれまでのいたずら以上のことをやってのけた。違う？」

「まあな。人が一人死んだんだ」

「じゃあこれまでに以上に警戒感が強くなってるわよね。当然身を守るべく法術を発動する可能性は高くなる。これも理解できる？」

子供をなだめすかすような調子のアイシャの言葉。要も筋は通っているアイシャには頷くしかなかった。

「地道な市民との協力関係を築いている豊川警察署の皆さんの情報網。多少はあてにしましょうよ。そして十分な事前調査をした後には……あれの出番が来るかもしれないしね」

そう言って先ほどの箱の隣の黒いケースを指差すアイシャ。そしてその姿から誠も中身が大体想像がついた。

「ショットガンですか？」

「低殺傷性のね」

誠の質問にあっさり答えるアイシャを見るとすばやく要が立ち上がる。慣れた調子でその一番上のケースを運んできてテーブルの上でふたを開く。

「相変わらず派手な色ね。警察も」

「実弾入りと区別がつかないところでも困るんだよ。元々低圧の制圧弾やゴム弾を使用するんだ。実弾入りのショットガンと同じ色だと最悪バレルが破裂なんてことにもなりかねないからな」

そう言う要はショットガンを取り出しすばやくそのフォアエンドを握り締めて引く。要の顔が何か引っかけかかるといふように曇る。そしてそのまま同じ動作を何度か繰り返してから銃をまじまじと見つめていた。

「弾はここの装備課からの支給になるな」

カウラの一言に手にしていた銃を抱えると要は明らかに不満そうな顔をしていた。

「弾も警察持ちか？弾のトラブルでバレルが破裂なんて洒落にならねえぞ」

要の言葉にカウラも頷きつつも複雑な顔をした。

「一応これも東都警察の借り物だ。違う系統の弾丸の使用許可など出ないだろうな」

そう言うカウラを無視して銃を構える振りをする要。その表情は冴えない。

「確かにキム君の選んだ弾なら信用できるけど……元々こういう非殺傷銃器の扱いなんて素人の東都警察の下っ端のこの署の銃器担当者を選んだ弾でしょ？いざと言う時不発で泣くのは私達だからねえ……」

アイシャの表情も冴えない。誠はわけも分からず目の前に置かれたオレンジ色の塗装が施されたショットガンを眺めていた。

「そんなにトラブルとかが多いんですか？低殺傷性の銃弾って……」

「オメエははじめはリムファイアの22LRのルガーを使ってたかな。あれよりはましだと思うが……」

要はショットガンをテーブルに置くとそのまま座って分解を始める。

「元々低圧力の稼動ということで調整されているはずだけど……場所によっただだ色を塗っただけのを支給しているところもあるのよ。そう言うのでセミオートで撃てばこの銃この銃を撃てばさっきのバレルの破裂は大げさとしてもガス圧が安定しなくて……」

「排莖不良ですか？それとも……」

「全部だね。銃で問題になるような出来事はいくらでも起きうる。

キムの奴のメンテナンスは伊達じゃないんだ」

珍しく人を褒める要を見て誠は小火器担当にして部隊の二番狙撃手であるキム・ジュンヒ少尉のごつい顔を思い出していた。

「それじゃあ今回も……」

「神前。そんなに気にするな。とりあえず手動で対応すれば不発はそのまま無視して排莢すれば問題ない」

「カウラ。甘ちゃんだぞ。相手は必死の法術師。どうなるかなんて読めないんだからな」

要の顔はいつもの残酷さを帯びたまま銃を解体していく。

「どう、要ちゃん」

「油はちゃんとさしてある……っていうかこいつは一回も撃ってないな……部品のエッジが立ってやがる。慣らしでもやらないとどうなるか分からねえぞ」

「勘弁してよ……こいつをセミオートで撃ったら絶対トラブル起こすわよ」

「ならポンプアクションのみで対応しろ」

「冷たいのね、カウラちゃんは」

アイシヤはそう言うと言分の銃をまじまじと眺める。

「犯人の特定は人任せ。特定できても獲物はこれ。できれば自首とかしてくれないかしら」

ポケットから取り出した銃器用の携帯工具入れを取り出す。そしてそのまま要が指でこじ開けた銃身の下にある弾倉部分を開きにかかった。

「そんなに簡単に話が済むなら警察はいらねえな」

警察官の制服を着ている要がつぶやくと誠から見てもかなり滑稽な光景に見えた。

「奴等もかなり本質に近づいてきたみてーで……ひと安心だよ」

それは見た目がどう見ても7、8歳の小柄な少女が言う言葉では無かった。ただし彼女の着ているのは東和陸軍と同型の制服。その襟章に中佐の階級章と胸にいくつもの特技章を見れば軍の人間なら彼女がただの少女ではないことはすぐに分かるはずだった。特にそんな勲章の中でも今は無き遼南共和国十字騎士章の略章のダイヤモンドが光っているのは誰もが目にするところだった。その勲章の受章者はたった一人。共和国のエースクバルカ・ラン中佐本人以外にそれを付けて許される人物はいない。

「クバルカ中佐。こちらこそラーナにはいい勉強をさせていただいておりますわ。感謝しなければならぬのはこちらの方かも知れません。法術専門の捜査官が急に増えることは考えられませんもの、ああ言った捜査指導はこれからはラーナには必須になりますから」

こちらは東都警察と同じ制服。襟の階級章は警視正。ここが東都の遼州同盟司法局ビルの最上階の食堂のラウンジでなければ誰かが声をかけるだろうというような美貌。そんな警視正、嵯峨茜はゆつくりとコーヒーを啜った。

ふと気が向いたように茜が街を眺める。昼下がりの東都の街並み。二千万人という人がうごめく街は地平線の果てまで続いていた。ランもまた和やかな表情で街並みに目を遣った。

「話が変わるが……それにしても例の馬鹿。やっぱり見つからねーか。うまく隠れているもんだな。まあこんなに広い街だ。すぐに見つかる方がどうかしてる」

ビルの続く東和共和国の首都の街を二人は眺めた。ビルと道路とそこにあふれる車と人。ランの故郷である遼南の低い建物が続く街並みに比べて明らかに無機質で複雑に見えた。

「確かに人が隠れるには街が一番ですものね。それにしても辻斬り

なんていう古風な犯罪。できる人物が限られていると言うのに……。司法局の上層部はこんなイカレタ人間一人見つけられないのかと、私達を無能と思っているかも知れませんか」

要は長い髪を静かに掻きあげると再びおさげ髪の少女に目を向けた。ランは見た目とは違ってまるで自分より年下の子供を心配するような視線で茜を見上げている。

「そんな自分を責めるんじゃないぞ。あの化け物……桐野孫四郎か。簡単に捕まるなら司法局の出るまでもなく所轄の連中が誇らしげに連れてきているはずだろ。しばらくは我慢するしかねーよ。それにこの一月被害者が出てねーんだ。これも茜の手柄と言っていーんじゃないのか？」

乱暴だが余裕のある言葉遣い。それが見た目は子供でもこの人物がいくつもの経験をつんだ古強者であることを証明しているように見える。

ランは静かにコーヒーのカップを置くと平らな胸のポケットから端末を取り出して画像を表示した。

「オメーの指示であいつ等がようやく捜査に区切りをつけたらしいや」

表示された立体映像には十五人の容疑者の映像が映し出される。満足げに頷く少女ランと茜。

「実働部隊隊長……いえ、保安隊副長としては感無量なんじゃないて？」

「まあな。あいつ等も多少は使えるようになってきたわけだ」

思わずランの頬に笑みが浮かぶ。それを見て茜もうれしそうな表情を作る。

「さて、これからどう事件を纏めるか……期待してるぜ」

ランはそう言うのと立ち上がる。

「あら、クバルカ中佐」

「いやあ、実はこれから教導隊の連中と打ち合わせだよ。ったく面倒な話さ、人を育てるってのはよ」　らしくないと言うように肩

をすぼめたランはそのまま周囲の関心を引きながら手にしたコート
を纏めて持ってそのまま食堂から出て行った。

そんなどこかはかなげな少女を茜はほほえみで見送っていた。

「できれば人斬りと今回の事件が無縁でありますように」

茜はそんな独り言を残して立ち上がりそのままランの後を追って
行った。

相変わらず暖房の効きが悪い豊川署の詰め所。じっとしていることが性に合わない要がうろうろと歩き回っていた。

「どうだい」

十分に一度のペースの話だった。要はそう言うところまで見つけているモニターを覗き込んでいた。そこには警邏隊のアストラルデータの値がグラフで表示されている。

「そう簡単に見つかれば楽できるんですけどね」

そう言うところでは椅子の背もたれに体を預ける。軋む椅子。その音に驚いたようにラーナは背筋を伸ばした。

「ある程度絞り込めれば後は私達でもどうにかなるだろう。いや、正確につかめない方がいいな。素人の警察の連中でも分かるデータが出てしまえばこれまでの怒りの持って行き場が無いからな」

さすがのカウラもこれまでの警察のやり方には腹に据えかねるものがあったのだろ。そんな珍しい感情的な言葉にアイシャも頷く。いつもなら合いの手を入れる彼女が浮かない顔で黙っているのを見て誠はアイシャのモニターを見た。そこではネットオークションで同人漫画を落とそうとしているらしい様子が見て取れた。いつものことだ。誠は大きいため息をついてつまらなそうに画面を終了するアイシャを見つめていた。

「他人任せってのは……どうもねえ。しかもその他人に手柄を取られるのはどうしても避けたいとなるとこれもまた……」

そんな要の言葉に全員が同意するような雰囲気をかもし出している。誰もが部屋に閉じ込められてこうしてデータだけを与えられる状況に飽きてきていた。

「あと定時まで30分か……あまさき屋を冷やかすか？」

「それはいいんだけど……よかったのかしら。支給されたショットガンをみんな隊に送っちゃって。確かに慣らしも済んでいない銃じ

やあ使えないのはわかるんだけど……でも後でチェックされたらどうするの？」

アイシャの言葉にカウラとラーナの視線が要に向かう。要はめんどくさそうに椅子に腰掛けると端末を起動していた。

「犯人に逃げられたら終りだろ？ 良いんだよ。名人は道具も選ぶもんさ」

「誠ちゃんも名人に入れる訳？」

冷やかすようなアイシャの声に誠は要に目を向ける。要は一瞥した後大きくため息をついた。

「そんな……僕だって多少は上手くなったんですよ」

「多少はな……だかそれじゃあ本番にはどうなるかわからねえ」

相変わらず誠をからかう調子の要。誠にも多少は意地があるむっとしてタレ目の要を睨み付けた。

「そんなに気になるなら……西園寺。突入の時は神前と組んだらどうだ？」

カウラの冗談に要はいかにもめんどくさそうな表情を浮かべる。

その顔を見て誠はいつもどおり落ち込んだ。

「それもこれも……ちゃんと犯人が見つかったからの話ですからね」

相変わらずラーナは画面に張り付いたまま手にしたせんべいを口に放り込んでいた。

「アストラルパターンデータ。便利ですよねえ」

突然のアイシャの言葉に視線が彼女に集中する。

「だってそうじゃないの。確かに法術の研究は誠ちゃんが全世界的に存在を示しちゃった『近藤事件』の前から進んでたけど……それにしてもなんだかどんどん対応製品が出てきて……恐くならない？」

「まあな。その筋の専門家はうちじゃあヨハン・シュペルター中尉殿だが……。実際法術研究はどこまで進んでるのか表にまるで出てこないからな。あいつも実際どれくらい自分が知っているのかなん

て絶対に言わないからな……そんなに秘密ばかり抱えてるからあんなに体が膨らんじゃうんだよ」

アイシャに言った要の言葉の中のヨハンのことを思い出して誠が噴出す。外惑星の国家、ゲルパルト共和国出身の若干成人病が気になる体型の大男を思い出すと自然と誠は笑いが浮かんできってしまった。だがヨハンが法術に関する専門家だと知ったのは『近藤事件』での胡州海軍の演習空域で誠が叛乱軍の近藤中佐貴下の部隊と衝突する直前の話だったことを思い出した。それまではただの技師。要達もそう教えられていたとこの後で聞かされた。それほど法術の存在は丁寧に隠蔽されてきたものだった。

一度気になり出すとどこまでも疑問が膨らむ。

「やっぱりどこまで研究が進んでるのか……気になるな」

エメラルドグリーンのポニーテールの毛先を弄っていたカウラが目があった誠につぶやいた。

「あら、カウラちゃんもそういうこと気になるわけ？意外と『研究が進んでるんだから良いじゃないか』とか言い出しそうなのに」

「そうでもないさ。私だって想像の範疇を超えた力が存在してその力がどのように使用されるか分からないと言うのは不気味に感じるものさ」

「ふーん」

カウラの言葉に納得してみせたアイシャの視線は自然と誠を向いた。

「僕だってこんな力は知ったのは例の事件の直前ですよ」

「私は知ってましたよ」

モニターに目を向けたまま手を上げるラーナ。その突然の行動に要が立ち上がる。

「どこでこいつが法術使いだって……」

「一応トップシークレットですから」

「けっ！つまらねえな」

ラーナの事務的な反応に舌打ちをした要を見て笑みを浮かべるア

イシヤだが、その目は笑っていなかった。

「ラーナちゃんが知っていたことは……その筋の人の間では誠にちゃんて有名人だったの？」

「さあ……」

またとぼけるラーナ。相手を読めるアイシヤは何を聞いても無駄だと思っただけのまま黙り込んで席に体を押し付けた。

「僕の力の話はここですることじゃ……」

誠の言葉に不思議そうな顔をする要がいた。めんどくさそうに一度視線を外した後ため息をつく。

「ここまでの話の流れと事件の容疑者の能力で分からないか」

カウラのその言葉。ようやく誠は結論に行き着いた。

「僕を外すと言うことですか」

ある程度は誠にも分かる話だった。相手は法術師の能力を奪って暴走させることで世間に何かを伝えたいと思っただけの愉快犯であることが想像できる。ならばその法術師の再発見のきっかけを作った誠の能力を暴走させることが犯人の最大の喜びにつながるだろうことも想像できた。

「でも……外したら隊長がこの面子で東都警察に私達を出向させた意味が分からなくなるじゃない。私としても誠ちゃんが外れた方がいいと思うけど……隊長の意向もあるしね」

「叔父貴の都合か……そうだけだな」

アイシヤのフォローにもただ要の表情は曇るだけだった。誠の能力は干涉空間展開と領域把握能力の二種が確認されていた。干涉空間を展開し、その中の存在を有る程度意のままに操れる。それは先日死者を出した事件を見ればかなり危険な能力だった。そして領域把握能力をハッキングして他の隊員のことを読み取られてしまえば逮捕どころの話ではなくなる。

「法術師を使いこなせ……相手が誰でも……そう言いてえのは分かるんだけどさ」

再び要がこめかみの辺りの長い髪を掻きあげる。沈黙がその場を

支配した。

「でも私も法術師ですけど？」

ラーナは相変わらずモニターから目を離さずにそうつぶやいた。思い出したような要の表情。そしてアイシャがうれしそうに頷く。

「要ちゃん。ラーナちゃんも捜査から外すつもり？」

「こいつは慣れてるから良いんだよ！」

「慣れてるって……この種の法術師が発見されたケースはほとんどありませんけど」

そんなラーナの言葉に要はさすがに頭に來たようで手を上げかけたものの静かに右の握りこぶしを静かに下ろした。

「ああ、ようやく我慢を覚えたか」

「うるせえよ」

カウラにチャカされて要は苦笑いを浮かべていた。

監視されている。水島はこの二日三日でそう思うことが多くなった。

豊川市の中央図書館。ようやく住民登録も済ませて利用のパスを手に入れた彼だが明らかに視線のようなものを感じていた。

視線だけではない。明らかに自分の力に何かが反応しているのが感じられる。

その感覚は突然彼を襲う。頭の奥をくすぐるような微かदैてそれでいて確実な感触。最初は歩いていて驚いて立ち止まるほどだった。通り過ぎたパトロールカー。運転朱にも助手席の警察官にも力は感じない。それでも明らかに自分の中の力、脳はそのパトロールカーに何かを感じていた。

それからは何度となく同じ感覚に襲われることがあった。昨日は夜中に三度目が覚めた。脳に残る確かな接触の感覚。

『誰も知らないはず……』

結局は昨日の不眠が祟って睡魔に襲われ続けて勉強どころではない。それでも日常に変化を付けること自体が何かに負けたような気がする。水島は休憩室の周りの無神経な高校生達の違いな声に苦虫を噛み潰しながらそのまま奥の自習室へと向かう。社会人失格の烙印を押された自分が彼等を注意することなどできない。

そう思いつつ周りに法術師を探している自分がいた。いらだちはいつものように紛らわせばいい。だがそうだろうか？自問する自分。『今はあまり力は使うべきじゃないな』

先日の能力の暴走と死を知って少しばかり臆病になっている自分を思い出して苦笑いが自然と湧き出てきた。

「おじさん」

突然背中から声をかけられる。そこには見慣れた少年の姿とはじめてみる女性の姿があった。

「君……」

自分の言葉が震えているのが分かる。二人ともアジア系。それだけはなんとなく分かった。女性の黒い長い髪とそれに似合う黒いオーバーコート。暖房の効いた室内だと言うのに汗一つかかず黙ったまま自分を見つめている。

「紹介するよ。僕の姉役のキャシーだよ」

「初めまして……」

女性が思ったよりも若いことが声を聞いて分かった。仕方なく水島も軽く頭を下げた。

「キャシーも僕等と同類だから」

気軽にそういう少年だが、その顔を見た瞬間に頭の中に違和感を感じて水島はよろめいた。

「……彼女は……」

「おじさんと同類だよ……僕の能力すら勝手に使うことができる力がある」

少年の笑みが残酷に広がる。水島はきつめの視線が特徴のキャシーと呼ばれた少女に目をやった。

「キャシーさんのことはいいとして。君の名前を僕は知らないんだけどな」

水島のおどおどした調子のつぶやきに少年は大げさに驚いてみせる。

「そうだっけ？」

「そうだよ、一度も聞いたことがない」

しばらく考えた後、少年は思い出したように手を叩いた。

「そうだそうだ。確かに教えてなかったね。僕の名前はジョージ。ジョージ・クリタ」

「ジョージか……」

「何か文句があるの？」

「いや……」

水島には少年の名前に違和感を感じていた。以前、ニュースで少

年と同じ顔をした人物を見たような気がしていたのがその原因だった。だがその見たという時期があまりに古く。それに比べて少年はどう見ても幼すぎた。

そんな少年を見つめている自分を少女は明らかに不機嫌そうな表情を浮かべつつ見つめていた。

「悪戯をされると困りますから。私が忠告をしに来ました」
たまりかねたような一言だった。

『忠告』。確かにそんなものがいつか来るのは予想がついていた気がする。そしてその言葉が意味する巨大な権力の陰。思わず水島は手にしていたバッグを取り落とした。

ゴトリと落ちる布の音が響いた後、開けたバッグの中から転がり出た筆入れなどが床を転がりけたたましい軽い音が廊下に響いた。キャシーはまるで氷のように一瞬だけ笑みを浮かべると水島が取り落としたバッグからこぼれたノートと筆入れを取り上げた。

「僕の行動はすべてお見通しという訳か……いい訳するだけ無駄か」

『そうですわね』

突然頭の中に介入してきた思考に水島は驚いて手にしていた本を落とした。すぐ拾い上げながらもその目は口を閉じている少女に向かっていた。

『あなたにはもう選択の余地は無いんです。分かりますか？』

キャシーの目は冷たく水島を見つめていた。はじめてみる感情の死んだような女性の目にただ呆然と座り込む水島。誰もが奇異の目で見るが立ち上がる気力は沸いてこなかった。

『演操系の法術は使用するタイミングによっては前回の様な悲劇につながります。きちっとした訓練とそれを行なえる組織。それが今のあなたには必要なんです』

「米軍につけと言うのか？」

ようやく言葉を搾り出した水島を断罪するようにキャシーが頷く。だが水島は彼女が明らかに不自然な存在だと言うことに気づいてい

た。それは隣でガムを噛むクリタ少年にも言えた。

『実験動物にされる……ごめんだよそんなのは』

『何度も言っているではないですか。あなたには選択の余地は無い……まあ考える時間は必要かもしれませんが』

それだけ脳に直接語りかけたキャシーは足早に図書館の外へと続く廊下を歩いていく。そのぶっきらぼうな態度に辟易したような表情を浮かべた後、クリタ少年はにんまりと笑ってそのまま少女の後に続いた。

気を締めていなければそのまましゃがみ込んでしまうところだった。水島は気を取り直して落ちたバッグにキャシーから渡されたノートなどを入れて一息ついた。誰も水島が恐怖に震えるような脅迫を受けていたことなど想像もできないと言う表情で人々は通り過ぎていく。

『米軍でモルモットになるか……遼州で犯罪者になるか……』

自分が後戻りできないところに来ていることによりやく水島は気づいていた。そしてアメリカ軍以外にも自分の存在が知られているのかもしれないと想像した。

『米軍が監視してくれているなら安心だな。とりあえず考える時間はくれたわけだ。その間にどう言う要求をしてくるのか確認するのも悪くない』

そう思いなおして水島はそのまま荷物が手に図書館の自習室に向けて歩き始めた。

待つ。これが苦手な人が多い。

誠は目の前の頭を掻き毟って暴れだしそんな女性を見ながらその事実を再確認していた。

「なんだよ」

「なんでもないですよ」

「その面がなんでもない面か？」

「止めなさいよ！要ちゃん！」

アイシャの声に立ち上がりかけた要が息を整えるように深呼吸をして誠の目の前の席に腰を下ろす。誠はそれを見てようやく安心して目の前の端末に記されているアストラルゲージのグラフに目を向けた。

「西園寺。気持ちはわかる」

「わかって貰いたかねえよ！」

気を使ったカウラの言葉にも不機嫌に対応する要。誠も思わず苦笑いを浮かべるがすぐに察してにらみつけてくる要の視線を避けるように身を伏せる。

すでに警邏隊の巡回が始まって二日。いや、まだ二日と言うべきだと誠は思っていた。直接の接触を避けながらのパトロールでのアストラルゲージチェック。そう簡単に犯人への道が開けるとは誠も思っていなかった。苛立ちの絶頂の中にいる要も理性ではそのことは分かっているだろう。しかし彼女の『待つ』と言う言葉に耐える限界はすぐそこまで来ているのは間違いなかった。

原因は昨日からこの捜査方法を提案したラーナが東都の同盟司法局に呼び出されていることだとは誠にも分かっていた。本来は彼女は同盟司法局法術犯罪特捜本部の捜査官であり、その部長嵯峨茜警視正の補佐が任務のはずであり、茜が追っている連続斬殺犯に関する情報があればいつでもそちらに出張することが誠達の豊川署への

出向の条件でもあった。連続斬殺犯などという派手で腕っ節が強そうな相手を聞いて黙っている要ではない。こちらの容疑者の十五人。男性9人、女性6人の構成だがどれもひ弱そうな面構え。法術が無ければ要に取ってはどれも相手に不足がある存在なのだろう。

要が急に伸びをした。重量のある軍用義体に耐えかねて椅子が悲痛なきしみ声を上げる。

「うわー疲れるな！」

「何もしていない人は黙っていてよ！」

「なんだ？アイシャ。アタシとやろうってのか？」

「ホントに要ちゃんは脳筋ね……付き合ってらんないわ」

「なんだと！」

今度はアイシャに喧嘩を売る。さすがにモノクロの画面でグラフの針の動きばかりを追っていて疲れたのは要ばかりではなかった。アイシャもいつもなら聞き流す要の啖呵につい乗ってしまった自分を恥じるように静かに席に着いた。ラーナのような捜査の専門家がここにいれば説得力のある説教で二人を何とかなだめることはできるのかもしれない。

困ったような顔でカウラが誠を見つめる。彼女も軍用に作られた人造人間である。軍務については培養液から出るまでに多くの知識を刷り込まれていたが、その中には警察の捜査活動はあるはずもなかった。たとえあったとしても今の二人には机上の空論と笑われるだけだ。カウラはただ黙っていらだつ二人が暴走しないかどうか監視するほかに手はなかった。

「でも、なんだか引くかかるんだよね……」

相変わらず要は冴えない表情で画面を見つめていた。豊川市の主要道路を走る警邏隊のパトカーの位置が彼女の画面の正面で展開している。何度とない要のため息に誠もカウラもうんざりしたような表情を浮かべていた。

「引くかかるも何も……これ以外に方法があるなら教えてくれ」

さすがに頭にきたカウラは手を後ろに纏めたエメラルドグリーン

の髪に持つていくとそうつぶやいた。呆然と顔を上げる要。その目にはこういう時らしく生気が無かった。

「アタシ等の使っている計器。当然小売はしてないよな」

「私に聞いているの？」

アイシャが驚いたように目を見開く。そしてしばらく考えた後ようやく口を開いた。

「当たり前じゃないの。東和きつての財閥の切り札よ。そう簡単に売れる代物じゃないわよ」

アイシャの回答に画面から目を離さずに満足げに要は頷く。そしてそのまま誠の顔を一瞥すると再び画面をモニターに向けた。

「法術関連の学会とかでは話題になっているのかな、このアストラルゲージとかは」

「それは当然じゃないの……！」

要の質問に気づいたことがあるというようにアイシャが顔を上げる。その様子でカウラは大きく頷いて要を見つめた。

「法術関係の研究をしている国の機関ならどこでも同程度の製品は作れる。そして事件を取り上げた新聞に目を通す程度の余裕のある東都の大使館の武官を抱えている国なら……」

「私達より先にターゲットにたどり着いてもおかしくないな」

要とカウラ。二人の言葉に誠はようやく結論を知ることになった。

「それじゃあ……急がないと」

誠が立ち上がりかけたところでアイシャがそれを制した。

「だからこれが一番早い方法なの！焦っても仕方ないわよ」

「クラウゼ少佐……」

泣き顔で誠はアイシャに目をやるがアイシャはかまうつもりは無いというようにそのまま画面に目をやっていた。

「後は天運だけだ」

カウラもまた誠をフォローするつもりは無いと言うように画面を眺めながら冷えたコーヒーを啜っていた。

「いっそのことその人斬りとやらがこの犯人を見つけ出してぶった

斬ってくれば話が早ええのにな」

「不謹慎なことを言うわね、要ちゃんは」

アイシャが要の暴言にぽつりとつぶやく。しかし誰も本気で反論する気はない。

すでに二日目で誠達は警察官僚の忍耐強さに感服させられていた。

一人。黒いトレンチコートを着た男がベンチに腰掛けていた。

冬晴れの空。誰もが着ているコートやマフラーを押さえて北風に耐えている。そんな中ではトレンチコートを着た男の存在は決して目立つものではない。そんな周りの無関心の中、男は長細い筒を持ったままじっと目の前の鳩に菓子パンをちぎっては投げる動作を延々と続けていた。いつからその動作を始めたのか、いつまでそれを続けるのか。誰にもそのことは分からない。その濁った目の中に狂気を見た者は自分を納得させてその場を立ち去るだろう。それほどに男の目は濁りつつも奥に不気味な光を湛えて目の前の鳩をただ眺めていた。

「旦那！桐野の旦那！」

派手なラメ入りの赤いスタジアムジャンパーを着たリーゼントの男が彼に声をかけた。だが桐野と呼ばれた男は無視して鳩にえさを投げ続けた。まるで人違いだというように無視を決め込んで菓子パンをちぎる。

「いやあ、冷えますね」

だがいくら無視されてもスタジャンの男は笑みを絶やすことはない。それどころか桐野と彼が呼んだトレンチコートの男に話を振ると手にしていた暖かい缶コーヒートを差し出した。

「冬は冷えるものだ。胡州が懐かしいと俺が言い出すと思ったのか？北川君」

桐野はようやく気が済んだというように菓子パンを粉々にして空にばらまいた。鳩達はそれまでの奪い合いから一気に増えた餌めがけて争うようにして飛びかかる。桐野孫四郎はその様を満足そうに見ながら缶コーヒートのプルタブをゆっくりと引き上げる。カチンと響く音に驚いたように鳩が一度桐野の足元から去るが喰い残しのパンを見て再び彼の前にたむろする。

北川公平はしばらくその様子を確認した後、どんな言葉も桐野の関心を引けないと諦めて自分の分の温かい紅茶の瓶のふたを開ける。「豊川市……保安隊のお膝元。嵯峨惟基……いやあの遼南皇帝ムジヤンタ・ラスコー陛下の地元ですよ。乗り込んだのは良いが……」北川も嵯峨に興味のある人間の一人だった。彼が遼州民族主義グループのセクトに属していたときから反地球運動の旗手たる遼南皇帝ムジヤンタ・ラスコーは信奉すべき政治家の一人と思っていた。突然の退位宣言とそれを拒否した遼南を捨ててこの東和に移った彼を迎えるべく同志とともにゲバ棒を片手に東和南港に向かったことも懐かしく思い出される。

ただ、今の嵯峨惟基は同盟と言う自分の作った檻に飼われる人懷つこい猛獣と化したと北川は思っていた。いや、猛獣ですらない。牙を抜かれ、自分の資産にものを言わせて作った『保安隊』と言うおもちゃでじゃれるただの大きな愛玩動物と言うところだ。

北川はそのことを嘆きつつも、自分の隣にいる明らかに未だに猛獣であり続ける男をちらちらと眺めていた。そしてそんな自分も法術と言う牙を持った猛獣でしかも飼い主がいるという皮肉な事実を改めて理解すると自然と笑みがこぼれてくるのが不思議だった。

「……別にあの男がいようがいまいが関係ない。ただ……手ぶらで帰れば御前が悲しむからな。仕事がしやすいように知り合いに部屋を借りた」

濁った目の下に薄ら笑いを浮かべて北川を眺めてくる桐野。何度見てもその目は心臓に悪い。そう思いながら北川は何とか軽口で自分の心を安定させることに決めた。

「へえ……旦那に知り合いか？よくそいつで斬られなかったもんだ」

満面に皮肉を貼り付けた表情の北川が桐野の手の横に置かれた筒に目をやる。その中身、備前忠正の存在を知っている北川は桐野のリアクションを諦めて彼の前にたむろする鳩に視線を落とした。北川がびしびしと背筋に感じる桐野の放つ殺気。鳩はまるで無関係だ

というように桐野のまき散らしたパン屑を拾い集めることだけに執心している。その様がちょうど二人に関心も持たずに通り過ぎる東和の人々に似て見えて北川はいつもの人懐っこい笑みを取り戻した。「そう言えば、我々にとっては不愉快極まりない法術演操術者……大人気のですよ。アングラサイトにその情報を売り渡した南米の工作員崩れの死体が港北に上がったそうです」

北川の言葉を聞いているのかいないのか。ただ桐野は黙ってコーヒーを啜っている。北川としても昔のコネクションで手に入れたそれなりに新鮮な情報を無視されて気分がいいわけもなくわざとらしく大きく咳き込んで見せた。

「遊びか……何かのメッセージがあるのか……ともかく会って見るのも悪くないな。その法術師」

ようやくあった桐野の言葉。とりあえず桐野が彼と因縁のある嵯峨のいるこの街に居を構えたらしい法術師に関心があると分かって北川も少しだけほっとしてほえんだ。そしてそのまま鳩に目をやると一羽の鳩が突然もだえ始めた。

鳩は声も立てず、何かに首の辺りを握り締められたよう羽をばたつかせる。北川が驚いて桐野の表情を見るがそこにはもぬけの殻のようにじっとその鳩を見つめている悪鬼のような男の姿があった。

「桐野の旦那……」

北川が口を開いた瞬間。目の前でもだえていた鳩の首がぽとりと落ちた。

思わず北川は周りを見渡した。駅近くの公園だが寒さと平日の日中と言うことで誰も異変に気づいたものはいなかった。

「旦那！」

「なあに、ちょっとした悪戯さ。貴様もやってみろよ、気分が少しは楽になるぞ」

そう言うと桐野は立ち上がる。北川は言いたいことは山ほどあったが口の中にそれを飲み込んで歩き出した。外惑星『胡州帝国』の少年兵上がりで嵯峨の部下だったこともあるらしい。北川が桐野に

ついて知っていることはそれくらいだった。それ以上は知る必要もないし、知りたくもなかった。

ただこうして目的の一つにして行動しているだけに言いたいことは山ほどある。

「『太子』もご立腹ですよ。旦那が東都に来て何人斬ったと思ってるんですか？」

小声でつぶやいては周りを見回す北川。そのおびえた表情に余裕のある笑みを桐野は返す。

『太子』。北川の今の飼い主であり、法術の公表以前から活動が続けている非公然法術師集団『ギルド』の長。自分が法術師であることを教えたその身元もしれない人物に付き従うようになってから長い、そんな中でつきあった相棒の中で桐野は一番手に負えない人物なのは間違いなかった。

周りを気にして小声で話す北川をあざけるような表情で一瞥した後、桐野は手にした缶コーヒーの残りを一気に飲み干した。

「俺は人が斬れるから太子に飼われてやっているんだ。斬れなくなればおさらばさ」

そう言う桐野に北川は大きくため息をついた。そして周りを見渡すが豊川駅前南公園。ベットタウンの日中。しかも真冬と言うことで長い筒に黒いトレンチコートと後ろに纏めた黒い長い髪と言う明らかに異質な桐野の姿。通りを急ぐ中年女性やランドセルを背負った小学生も関わり合いになるまいと避けている分だけ彼等の異常さには気がついていないようだった。

「それより……悪戯をしている馬鹿。見つけたとして……斬ってもいいのか？」

赤信号に立ち止まった桐野の言葉に北川は頭を抱えた。

「いいわけないじゃないですか！ どうせ自分の力の価値も知らない馬鹿ですよ。先日の政府の愚策の法術適性検査の無料化で受けてみたら適性があって、社会に牙でも向いているつもりなのが見え見えですよ。そんな奴……」

北川はそこまで言って桐野を見上げてみた。自分の言った言葉の半分以上は北川自身にも当てはまるという自覚はあった。桐野の目が笑っているように見えるのはその自覚のせいだろう。桐野には元々自分のことなど見えていないのだから。

「別にどんな奴でも良いんだ。斬って良いのか？」

桐野の笑み。それを見ると何を言っても無駄だと分かりながらも北川は彼に答えを出すしかなかった。

「駄目です」

北川の言葉に何度か頷いた後、桐野は信号が変わったのを確認して歩き出した。いつもの気まぐれか、北川は諦めかけながらも小走りに桐野の後をつけた。

「旦那。どこに行くつもりですか？」

「どこ？別にどこでもかまわんぞ」

「はあー……」

淡々と答える桐野の言葉に北川はため息をつくそのまま桐野のポケットに突っ込んでいる左手を取った。

「とりあえず協力者の所に行きましょう。旦那はただでさえ目立つんだから……」

そのまま腕を引っ張る北川を死んだ表情で見つめながら桐野はそのまま繁華街のアーケードの方へと歩き出した。周囲の視線が気になるが、そのようなことは桐野には関係ないことは知っていたので北川はあえて無視して自分の足が一刻も早く協力者の自宅に着くことだけを祈っていた。

「よー！仕事は順調か？」

定時丁度。どう見ても小学生のピンクのダウンジャケットを着た少女の声で誠は我に返った。

「姐御……隊は良いんですね」

豊川警察署の古びた建物の奥の暗い部屋。そんな場所には似つかわしくない満面の笑みの上官クバルカ・ラン中佐に要が声をかける。「おー。問題児がここに集まってくれたからな。静かなもんだよ……ラーナ。調子はどうだ」

昼過ぎに帰ってきてからラーナはほとんど画面から目を離さずにじっとしていた。何か本局で分かった事実があるのかどうか。誠達は気にはなったが声をかけられる雰囲気では無かった。無表情を顔に貼り付けたまま黙って各移動車両データを検索している。

緊迫した表情のラーナを見つけたランも、ただ苦笑いを浮かべるばかり。手にしていた袋から缶ビールを取り出したあと、静かにプルタブを引いて口に運ぶ。そんな小さなランの視線の先では画面から目を離さない緊迫したラーナの姿があった。

「いいのかよ、餓鬼が部下の出向している警察署で飲酒してるぞ」

「余計なお世話だ馬鹿野郎」

要にチャカされてもランは上機嫌にぐくりぐくりとビールを飲む。誠は彼女が戸籍上は39歳であることを以前書類で見せられたときの衝撃を思い出した。確かに物腰や貫禄はその年齢の方がふさわしいところがある。確かランの前の実働部隊長の明石清海中佐も39歳だったはずなので年功序列を重視する東和軍の影響力の強い司法局の人事としてはそれが的確に思える。

そんな誠の考えとは別に相変わらずランはにやにや笑いながらラーナを眺めていた。

「何か良いことでもあったんですか？」

さすがにこういうことには厳しいカウラがさらにバッグから二本目の缶ビールを取り出すランを見て苦笑いを浮かべながら声をかける。

「まあー吉田の野郎との賭けに勝ったからな」

「あの電卓と賭け？ そちらはずいぶんと暇そうだねえ」

「そりゃあオメー等がないのはでかいよ。アタシも自分の仕事はかどって……毎日定時退勤だ」

「うらやましいねえ……」

要が思わず本音を口にしていた。戦闘用に調整された義体のサイボーグの要もその精神まで強化されているわけではない。戦闘用に遺伝子操作で生み出されたアイシャやカウラも、慣れない『待つ』と言う任務に疲れてすでに集中力の限界を迎えていた。誠が目を向けても三人とも憔悴しきっているのが分かる。それを見抜いたとも言えるような笑みを浮かべたランは二本目の缶ビールのプルタブを引いた。

「さっきの吉田との賭だが、今回の捜査でいつオメー等が正しい捜査手法にたどり着くかってのを賭けたんだ。アイツはラーナと西園寺がいつかは喧嘩すると読んでたが……茜の読みどおり西園寺は自分の専門じゃ無いことではおとなしいからな。おかげで今日は運転手付きで飲みにいける」

あれだけ協力をしておきながらまるで信用がなかったことが分かって膨れる要。そのタレ目をご機嫌なランを睨み付けた。

「勝手に飲んでろ！ 餓鬼！」

そう叫ぶと要は自分の席の端末に首筋のジャックからコードをとしだして差し込もうとした。だがその手をランの小さな手が握り締める。

「おいおい、根詰めすぎだぜ。これから長いんだ。今日は終りにして飲みにも行こうじゃねーか」

「それランちゃんのおごり？」

アイシャが飛び上がるようにして立ち上がる。それを見たランは

満足げに頷いた。

「ならいいか！」

突然立ち上がる要の行動は誠達にすでに予想されていた。にんまりと笑いながら誠に絡みつく要。さすがにカウラやアイシャの目があるのが気になるが暴力サイボーグに逆らう度胸は誠には無かった。「いいわけ有るか！いつ犯人が特定されるか分からないんだぞ！」カウラの言葉にアイシャも頷きそのままビールを飲んでいる少女のように見えるランを睨み付ける。

「オメー等……自分が立てたプランをちゃんと把握しておけよ。神前、犯人が特定できたとしてどうする？」

ランの鋭い視線に誠は驚いて口ごもった。ため息をつきながらランは言葉が続ける。

「オメー等の資料は法的には何の資料的価値も無い代物だ。司法局のデータバンクは本来門外不出で外部に出ることはあり得ないことになっている。各自治体の法術適正結果も同様だ。オメー等が十五人を絞り込んだのはこの二つの資料をつきあわせた結果だろ？任意で出頭を求めるにしても担当は豊川署の捜査課になる。オメー等の仕事にやらねーよ」

「クバルカ中佐のおっしゃるとおりですね。たとえば容疑者が特定されても捜査権限は豊川駅前法術殺傷事件の捜査チームにありますから」

ランの言葉に頷きながら端末を終了するラーナ。そして彼女が顔を上げたときに彼女の同盟司法局法術特捜での上司に当たる嵯峨茜警視正が狭苦しい部屋に入ってきた。

いかにも珍しそうに古ぼけた机や痛んだ壁を眺める紫色の着物が似合いすぎる茜に誠達は見とれていた。

「皆さん……あまさき屋は抑えましたわよ。急ぎましょう」

「けっ！」

明らかに場違いな格好と上品な物腰は対極に立つ要の声と同調して全員をアフターファイブモードへと切り替えていた。

「じゃあ……ラーナちゃん。先に着替えてるわよ」

アイシャはそう言うのと恐る恐る端末を終了しているカウラを引っ張って廊下に向かう。要もニヤニヤ笑いながらその後が続いた。

「クバルカ中佐、神前曹長。ちよつとラーナと話がありますから」
遠慮がちにつぶやく茜の言葉に棒立ちの誠の腕を撮ってランが誠を廊下に連れ出した。

「あいつ等も色々あんだよ。とりあえず着替えて来いや」

そう言われた誠は不承不承定時ということで更衣室に向かう事務職員の流れに続いて建物の奥の男子更衣室に向かった。

明らかに異物のように思われている誠。それぞれに楽しそうに雑談を続ける署員から離れて一人更衣室で着替えをしていれば、さすがにホームだった保安隊の隊舎が恋しくなってくる。

「それで……うちの家内がな……」

囑託職員のような白髪の男性署員が年下の巡查部長に身の上話をしていた。最年長が46歳の嵯峨と言う保安隊では味わえない空気を感しながらジャケットを羽織る誠。そんな中で突然派手に扉を叩く音が誠の耳に飛び込んできた。

『出て来いよ！神前！』

あまりの激しいノックに驚く署員。そしてその視線は必然的に誠へと注がれた。驚いた誠は慌てて着替えを済ませると走り出す。

「すみませんお騒がせしました……西園寺さん！」

「なんだよ遅いテメエが悪いんだろ？」

迫力のある面持ちで誠を見上げる要。その隣には髪を結びなおす途中で出てきたと思われるカウラとコートの襟を整えているアイシヤがいた。

「そんなに急いでどうするんですか！」

「いいんだよ。酒が飲めるんだから」

「アタシはオメーのボトルまで頼まねーからな」

満面の笑みの要に突っ込みを入れるラン。周りの帰宅しようとしている女性署員の痛い視線が誠に向かってきていた。どれも殺気が

感じられて誠はひたすら居づらい感覚に襲われる。

「でも……本当にいいんですか？」

「何がだよ」

相変わらずビールを飲んでいるラン。誰も小学校低学年にしか見えない彼女を注意しないのが不思議に見える光景に誠は少し違和感を感じていた。

「だって警邏隊の巡回は深夜もあるんじゃないですか？その深夜に反応が出たら……」

誠の言葉に小さなランはそのまま誠の腹の手前まで歩いてくると大きくため息をついた後まるで子供のように見上げる。

「普通に犯人の反応が出てもアタシ等は何人にもできねーのは説明したろ？それとだ。警邏隊はアストラルゲージについてちゃー説明なんて受けてねーんだ。異常があれば確認の連絡ぐらい入るだろ」

いかにも投げやりなランの言葉に誠はむっとして見下ろす。振り返るランはそんな誠を見て大きなため息をついた。

「だから焦るなって。それにだ。吉田に確認させたがあおの杉田とか言うここの署長の腰巾着だが……かなりの食わせもんだぜ」

「食わせもの？」

カウラは得意げに署の玄関を出て行くランの後ろ姿を見ながら首をかしげていた。

「吉田がお前等に頼まれて情報を探しているときしきりに保安隊のサーバーにアクセスしている馬鹿がいてな」

「それがあのおっさんか？……まさか」

要は話にならないと切って捨てるように吐き捨てた。豊川署の中庭を通り抜けそのまま裏手の駐車場に向かう。すでに六時を回れば冬の太陽は跡形もなく空から消え去って、闇だけがあたりを覆う。

「なに、本人がアクセスした訳じゃねーよ。隊長に確認したが杉田とか言う警部。外事課崩れって話だ。東都警察外事局あたりが動いていたとしても不思議じゃねーな」

「これは……また面倒な連中が出てきたな……東都警察は犯人逮捕

より同盟司法局の内偵がお好きなようだ」

要の皮肉にランは苦笑いを浮かべる。駐車場の手前の道には吉田のワゴン車がライトを付けて止まっていた。

「っていつまでも仕事の話は野暮だな。行くぞ！」

誠達に手を振るとランはそのまま小走りにワゴン車の方へと走り去った。ワゴン車の後ろには白いセダン。おそらく茜の愛車だろう。「でも本当に良いのかねえ……外野の連中が動き出しているんだろ？」

家路を急ぐ署員の車をやり過ごしながら要がめんどくさそうにつぶやいた。

「西園寺さん。外野って……東都警察の外事課ですか？」

ぼんやりとつぶやく誠を要のタレ目が見上げてくる。

「誠ちゃん。法術絡み。しかも新しい能力となれば地球諸国の研究機関も目の色変えるもの。外事課が動くも当然すぎるわね。それに同盟厚生局の時を忘れたの？地球やテロ組織。同盟非加盟国……いえ同盟機構の内部組織の連中も今回の犯人を狙っているのよ」

「それは分かるんですが……」

赤いカウラのスポーツカーが駐車場を照らす明かりに浮かんで見ても誠も要もしっくり行かない感覚が続いていた。

「逆に考えるとこれだけ注目を集めればそれぞれの組織は動きづらidだろうな。法術関連の特殊部隊の派遣は一般部隊に比べれば相当なコストとリスクが要求される。情報収集も然りだ。手駒である少ない法術師をやりくりしての調査。しかも獲物を横取りされる確率が高いとなれば手を出せる勢力は相当限られてくる。今回の法術師は直接的な破壊力がある訳じゃない」

カウラはそう言うとそのまま自分の車のドアを開いた。いつものように助手席の扉を開いてシートを倒すと後部座席に乗り込む要。

「低威力で高精度の兵器みたいなもんだからな、今回の法術師は。法術師のいない地域ではまるで役に立たないんだから地球での勢力争いに夢中な連中にはリスクに見合う見返りは無いだろうからな。」

そうなると思いつくのは遼州での活動を優位に進めたい『ギルド』と東モスレムの原理主義者連中……それにゲルパルトのネオナチくらしいものか？」

そう言いながら要は後部座席の自分の隣に誠を無理矢理引きずり込んだ。

「まあ遼州での利権獲得を目指す国なら手を出すんじゃないの？」
アイシャの言葉に要はしばらく考え込む。

「いつそのこと杉田のじいさんにどこの国が動いているか教えてもらうか？土下座でもすれば教えてくれるかもしれないぞ」

「馬鹿なことを言うな。車を出すぞ」

いつの間にか覚えたカウラの苦笑いが誠の目に飛び込んでくる。
ヘッドライトに照らされた駐車場。車は静かに走り始めた。

「要ちゃん……いつものは無しにしてね」

「なんだよいつものって……」

要に伝説の流し目を向けるアイシャ。呆然と誠は二人を見つめていた。

「誠ちゃんのビールにウイスキーを突っ込んだりすることよ」

「ウイスキー？アタシはウイスキーは飲まないぞ」

「ジンでもウォッカでも同じよ！」

飲むと暴れる。誠の酒癖は有名だった。当然要は面白がって遠慮しながら飲む誠のコップに細工をする。そして出来上がった誠は何度となく全裸で寝ているところを目撃されていた。

「僕もお願いしたいんですが……」

「何を？」

要は相変わらずとぼけていた。カウラは苦笑いを浮かべながら大通りへと車を進める。次第に冬の空は黒味を帯びて町を闇へと導いた。

「なんだか不気味な感じがしないか？」

「なんだよカウラ。ずいぶん感傷的な物言いじゃねえか。オメエも少しは進歩したんだな」

「酷いわよ、要ちゃん。私達だって心が有るんだから」

人造人間であることを指摘されるたびに嫌な顔をするアイシャが振り返る。要は隣で小さくなっている誠を突付きながら苦笑いを浮かべていた。

「でもこの街に例の犯人がいるんだ。しかも誰にも知られず次の悪戯を準備している……」

「悪戯？ そんな簡単なものかよ……」

「簡単に感じる人種もいるんでしょ」

加速するスポーツカーの中でアイシャは珍しく真剣な表情を浮かべてそうつぶやいていた。

繁華街の警察署を出ればすぐに下町のごみごみした建物の中の道へと入ることになる。久しぶりの定時の退社。街は人であふれている。

「ぶつけないでくれよ」

「誰にもを言っているんだ？」

要の言葉に苦笑いのカウラ。目の前に飛び出してきた小学生に急ブレーキを踏む。

「言ったばかりだろ？」

「予測はしていた」

いつものようなやり取りに沈黙とグラフばかりに集中していた時間を終えたことを実感する誠。そして再び走り出した車は見慣れたあまさき屋に続く商店街のアーケードの道にたどり着いた。

「ちっちゃい姐御に茜とラーナ。吉田は姐御の運転手か……あとは誰が来るんだろうな……」

「要ちゃんはすっかり乗り気ね」

「当たり前えだよ。おごりで飲めるんだ。たっぷり元をとらないとな」

にんまりと笑う隣の席の要に思わず誠は苦笑いを浮かべる。いつもどおり駅へ向かう道は渋滞していた。そしていつも通り近くの商業高校の学生達の自転車車が車を縫うようにして道を進んでいる。

「まったく自転車通学か……寒いのにご苦労さんだね」

「要ちゃん。私達も近々寒くてご苦労さんなことをするかもしれないんだけど」

助手席から身を乗り出して突っ込みを入れるアイシャ。カウラは苦笑いを浮かべて信号が変わって動き出した車の流れにあわせてアクセルを踏む。

「久々に島田とサラが来るんじゃないかな。それと……シヤムは吉

田少佐とセットだからな。連中は暇そうだし」

「でもなんだかシャムちゃんは白菜がどうか言ってたわよ。収穫に人手が足りないとか。もしかしたら警備部の人達のお手伝いとかしてるかも」

植物大好きな野生少女のシャムは部隊創設二年をかけて敷地の半分を占める荒地を開墾していた。それどころか今では隣の菱川重工豊川工場の職員に野菜を販売するまでになっていた。誠もその労力を想像する度になんて保安隊が同盟のお荷物と呼ばれるかがよく分かるかと納得していた。

「サラが来るとなると……パーラが運転手役で出てくるな。それと……」

「カウラちゃんを見に菰田君達が来るかもよ」
「勘弁してくれ」

カウラのファンクラブ『ヒンヌー教』の教祖菰田のことを思い出すとカウラは渋い顔をしてハンドルを大きく切った。

「いきなり曲がる……?」

「どうしました、西園寺さん」

急にコインパーキングに向かって乗り入れた車の中で頭をぶつけてうめいた要の視線に何かが映っているようで誠は彼女の視線の先を見た。

「あそこ、あまさき屋ですよね」

誠が見た先には何かの事件でもあったような人だかりができていた。よく見ると立ち去る人々の顔にはそれぞれ笑顔が浮かんでいる。それを察したアイシャは当然のようにカウラが車を停めたのを好機として扉を開く。

「突然降りるな」

「良いじゃないの……誠ちゃんも見たいでしょ?」

「見たいって……」

呆然としている誠を車から引っ張り出してそのまま歩き始めるアイシャ。驚いたように車を飛び出した要がその後が続く。

「なんだよ……オメエは知ってんのか？」

要がそう言うのを聞きながら誠があまさき屋の店先を見るといつものように猫耳をつけてジャケットを着たシャムと中学校の制服姿で同じく猫耳を付けたあまさき屋の看板娘の小夏が子供達と握手をしていた。

「何やってんだ？オメエ等」

そう言うそのまま小夏をにらみつける要。いつものようにそのガン付けににらみ返す小夏。

「知らないの？二人で漫才してるのよね」

「漫才？」

アイシャが当然のように言うので誠も少しばかり驚いた。要もまた珍しそうにシャム達の隣で困った表情を浮かべているラン、ラーナ、茜の三人に目をやった。

「副長……良いんですか？」

「おう、着いたか」

「着いたかじゃなくて……」

ランも少しばかり戸惑ったような表情で満面の笑みのシャム達を眺めていた。

「まあ……仕事が終われば別に良いんじゃないの。それほど任務に支障はなさそうだしな。ただ……」

「ネタが分かりませんわ……どこで笑ったら良いのか……」

ランと茜は首をひねりながらシャム達の後ろの引き戸を開いて店の中に消えていった。

「先にやってるわよ！」

真ん中のテーブルにはサラの赤い髪が揺れていた。すぐに隣にはうつむいてじっとたこ焼きをにらんでいる島田がいる。

「んだ……上は？」

「警備部の旦那衆が宴会だって……すごい盛り上がってるわよ」

そのまま自分の脇をすり抜けて厨房に向かう小夏の言葉に頷きながら要は先頭で店に入った。

「あら、神前君達も来たの……上は使っているからこちらでいいかしら」

小夏の母で女将の家村春子が厨房から顔を出して声をかける。いつものことながら紫色の小袖と軽くまとめた黒髪があまりにも似合うので誠は瞬時立ち止まってしまふ。

「かまいませんよ……それよりシヤム。吉田はどこ行つた」
猫耳を直していたシヤムはランの言葉にしばらく沈黙する。

「俊平は……」

そう言いかけたとき奥の上の座敷へと続く階段を降りてくる吉田の姿が入り口で躊躇している誠の目にも入って来た。

「中佐！先に始めさせてもらっています！」

よく見れば吉田の手にはビールを入れたグラスが握られていた。

「上の連中はウォッカだろ？」

「いえいえ。最近ではマリアの姐御がうるさくて……ビールでちびちび飲みながら上司の愚痴を……」

吉田はニヤニヤと笑うとそのまま入り口手前のテーブルに腰を下ろしてビールをあおった。

「なんだか嫌な飲み会ね」

「まあシュバーキナ中佐は厳しいですから」

サラのきつい言葉にフォローを入れながらずっとたこ焼きを口に入れるのを躊躇していた島田がたこ焼きを箸でつかむ。

「どれか一個が烏賊なのよ……当たるかしら」

にんまりと笑うパーラ。ようやく島田が何かをかけて烏賊とタコの区別をつける遊びをしていることがわかって納得する誠。

「つまらねえことやってるな」

「当たればガソリン一回満タンですよ……」

苦笑いを浮かべると島田は真ん中のたこ焼きを口に放り込んだ。

「これは……」

「島田君がんばってね！」

厨房からビールを運んできた小豆色の渋めの留袖姿の女将、家村

春子の言葉に島田は首をひねった。

「わかるもんかよ……女将さん。とりあえずアタシ等もビール」

そう言うとは奥のテーブルに着席する。そしてそのまま隣の椅子を叩いた。察した誠はアイシャ達に照れながら要の指示通りその隣の椅子に腰掛けた。

「女将さん、私とカウラは烏龍茶で」

「はいはい」

そう言うとは春子はビールを島田の隣に置いて厨房へと消えていった。

「分かるのか？」

要の正面の椅子に座りながら振り向いているカウラ。アイシャは椅子にも座らずに島田を興味深そうに眺めていた。

「うーん……」

「正人……」

唸る島田。サラはいつものように島田の名前を呼ぶ。

「降参？降参？」

迫るパーラ。ただ島田は黙ってたこ焼きを噛み始めた。

「馬鹿な遊びをしてるじゃねーか。烏賊？タコ？どっちだっていーじゃねーか」

入り口すぐのテーブルを占拠したラン。その正面には珍しそうに島田の悩む姿を眺めている茜とラーナの姿がある。

「お待たせしました！」

セーラー服にエプロン姿の小夏がビールを持ってランに迫る。その後ろには猫耳をつけたままのシャムがコップと付き出しを持って並んでいた。

「シャム！」

「駄目だよ俊平。飲酒運転になるよ」

「付き出しを取ってくれてこと。俺は烏龍茶で良いよ」

そう言うとはカウンターに座っている吉田は目の前の箸入れから割り箸を取り出した。

「吉田！オメーは体内でアルコールを分解するプラントを抱えてるはずだろ？」

早速ビールを飲みながら赤い顔のランが絡む。それを一瞥するとカウンター越しに烏龍茶を差し出す板前の源さんからコップを受け取りながら吉田は何度か頷いた。

「軍用義体だから多少の毒くらいは人工肝臓ですぐに解毒はできるけどさあ……酔ってる感覚が良いんじゃないか、それが楽しめないくらいならそもそも飲まないよ、俺は」

突き出しを口にしながら舐めるようにビールを飲む要の言葉に吉田は頷きつつ箸を進める。そんな吉田の隣ではすっかり機嫌を損ねたというようにシヤムが頬を膨らませている。

「考え方が間違ってるよ！俊平はお偉いさんだからみんなのお手本にならなきゃいけないんだよ！だから運転する時はお酒は飲まないの！」

シヤムの元気な声が響く。

「シヤムちゃんは偉いのね」

アイシャの問いにシヤムは大きく頷いた。要はそれを見て一度誠の顔をまじまじと眺めた後少し斜に構えるようにして笑みを浮かべた。

「西園寺さん。何が言いたいんですか？」

「いや、なんでも……」

「要ちゃんはボトルよね。……ラム？ジン？」

「ラムで。それと！食うもん頼もうぜ。アタシは焼きそば！」

要の注文を聞いてそのまま厨房に春子は消えた。手伝いの小夏はエプロンからメモ帳を取り出して周りを見渡す。

「私は……たこ焼きにしようかしら……カウラちゃんは？」

「鉄板があるんだ。烏賊玉かな」

テーブルの中央の鉄板を覆っていた板を慣れた手つきで外すとカウラは今度は視線を背後のラン達に向けた。

「アタシは豚玉で……ラーナもか。茜、どうするよ」

「わたくしは……あまりたっぷり食べる気にはなりません。つまり程度で見繕ってくださいな」

「じゃあアンコウ肝のいいのが入ったって源さんが言ってたからそれをメインで行きます?」

「お願いするわ」

ラン達幹部連の注文を受けるとメモを持って奥に小夏は消えた。

「まだ決まらないのか?」

「ちよつと食べたい気分なんで」

機嫌がよさそうなカウラに急かされながら誠はしばらくお品書きに目を向けて黙っていた。

足早に厨房から現れた春子は手にしたラム酒の瓶を要に差し出した。

「飲みすぎないでよ」

「気をつけまーす」

春子の言葉の意味など解さぬようにたっぷりとグラスにラム酒を注ぐ。呆れたようにカウラは要の手元のグラスに目をやった。

「飲みたいのか?」

「まさか」

「はい! お待たせです!」

失笑するカウラを見ていた誠の耳元で手に盆を持った小夏が現れて注文の品をテーブルに並べていく。ついその動作に手元のメニューを取り落とす誠。

「神前の兄貴。しっかりしてくださいよ。それより注文は?」

「豚玉の三倍で」

「誠ちゃん! それアタシの真似じゃないの! 小夏ちゃん、私も」

吉田の隣のカウンターでビールを手酌でやりながら叫ぶシャム。

小夏は笑顔を浮かべながら厨房に消えていく。

「上、妙に静かじゃねーか。島田の。法事でもやってんのか?」

ビールを飲んで顔を赤くしながらランがたこ焼きの中身当てに失敗してうつむいている島田に声をかけた。二階を占拠して飲み続け

ているという警備部の屈強な男達の沈黙。その事態に隣のサラもパ
ーラもランの質問に首をひねる。

「女将さん。アイツ等……」

「昼間からだったから……潰れてるんじゃないかしら」

阿鼻叫喚の地獄絵図にならずに済んでよかったというような表情
で笑う春子。彼女を見ながら誠もビールを飲み続ける。

「しかしアイツ等もマリアの姐さんのお手伝い係だから……大変
なんだろ」

相変わらずカウンターを背にテーブル席の誠達を眺めていた吉田
はそう言うのと烏龍茶を飲み干した。

「まあうちも大変だけど」

『何か言った？』

要の言葉にランと茜が同時にステレオで叫んでいた。思わずその
様子に誠は苦笑いを浮かべた。

「それにしても大変そうだな」

烏賊が入っているたこ焼きを当てられずに島田は懷からガソリン
スタンドのカードを取り出してパーラに手渡しながらつぶやいた。

「何？ 正人君も入りたかったの？」

「そんなことは無いですけど……法術を乗っ取る犯人でしょ？ 俺み
たいに死なないだけが取り得の法術師の方が適しているんじゃない
かなあとか思っただけです。力を乗っ取られても別に何も起きな
いんですから」

そう言いながら最後のたこ焼きを口に入れる。

「オメーはバックアップだよ。同盟司法局の事件じゃあオメーにぜ
ひ参加してもらって隊長に言われてたからな。まああれだ、今は
じっくり明華の仕事のやり方を見ておけてことだ……エンジン交
換のシミュレーション。終わってねーんだろ？」

ランはすでに手酌でビールを飲み始めていた。

「そうだぞ、島田。シャムのクロームナイトや隊長のカネミツの整
備の手順とかは明華さんのお手の物だけど代わりがないからな」

「代わり？」

突き出しの小さい烏賊を箸でつかみながらの吉田の言葉に島田はしばらく考えながらつぶやいた。

「正人！明華お姉さんは6月に結婚でしょ？」

「でも寿退職とかする人には見えないんですけど……」

隣のサラの言葉に首をひねる島田に思わずサラとパーラがため息をついた。

「結婚すれば……子供ができてもおかしくないな……まあしなくてもできる時はできるか」

「要ちゃん！」

「事実だろ？」

要とアイシャの掛け合いを見てようやく分かったと島田は膝を打つ。

「でも……『カネミツ』だの『クロームナイト』だの『ホーンオブルージュ』など……あんな機体。本当に使うんですか？地球侵略でも始めるなら別ですけど」

そう言う島田の視線は保安隊ナンバー2であるランへと向けられることになった。

「島田……出動関係の事例集。見てねーのか？」

「そりゃあ甲一種出動は使用兵器の制限が無くなりますが……反則ですよ、あの三機は」

島田の言葉に自然と誠は頷いていた。誠の愛機のアニメヒロインが大量に描かれた05式乙型も法術対応のアサルト・モジュールだがクロームナイトクラスとは桁が違った。法術師の展開する干渉空間にエネルギー炉を転移してメイン出力を確保する構造はエンジンの出力を上げる際にエンジン自体の強度の限界を想定せずにパワーを出すことができる。そんなメインエンジンを搭載した上に現在の技術の最先端クラスでとても一般部隊では運用不可能な高品位パルスエンジンでの驚異的な機動性を確保した機体には正直勝負を挑むのが馬鹿らしくなるほどだった。

「反則だろうが失格だろうが関係ねーんだよ。アタシ等は司法実働部隊だ。兵隊さんと違って勝たなきゃならねーし、勝つときは圧倒的じゃなきゃならねーんだ。わかるか？」

どう見ても小学生が飲んだくれているとしか思えない光景。言っていることの理屈が通っているだけに誠は一人萌えていた。だがその萌えを我慢できない存在がこの店にはいた。

「ランちゃん！」

立ち上がるとアイシヤはそのままずかずかとランに近づいていく。

「お……おうなんだ……！くつつくな！」

不意を付いてアイシヤはランに抱きついて頬擦りを始める。

「なんてかわいいの！萌えなの！」

「うるせえ！離れろ！」

「慕われていますのね、クバルカ中佐は……ちよつと妬けますわね」

「茜！くだらねーこと言ってねーで助けろよ！」

ばたばたと暴れているランを横目に見ながら笑顔の春子が料理を並べ始めた。

「いつも申し訳ありません」

「カウラさんが気にすることじゃないわ。それに本当にいつもごひいきにしてもらっちゃって。うちは保安隊さんがいなくなったらつぶれちゃうかも」

そう言いながら頭を撫でる程度に譲歩したアイシヤの愛情表現に落ち着いてきたランの目の前にアンキモを置く春子。

「でもクバルカ中佐は本当にかわいいですね。クラウゼさんもうい暴走しちゃうわよ」

「アタシは一応上官なんだけどな……」

アイシヤに撫でられながら仕方が無いというようにランはビールを飲み干した。

「じゃーん！来ましたよ」

小夏が突然のように現れて手にした料理を配っていく。春子はそ

れを見ながら誠達のテーブルの鉄板に火を入れた。

「やっぱり火がいいねえ。電気式のはどうも好きになれなくて」

「そう言えば要ちゃんは胡州よね。あそこは結構火の使用には厳しいんでしょ？二酸化炭素を出すエネルギーだとか言うことで」

アイシヤはようやくランをその手から開放すると満面の笑みで誠の豚玉を勝手に混ぜ始めた要の正面の自分の席に腰掛けた。

「まあな。あそこはどうも息苦しいところだからな。特に東和に来たら帰りたくなるよ……小夏、もう良いのか？」

「まだ。そんなすぐに暖まるわけ無いじゃないの」

鉄板の上に手をかざして軽蔑の眼差しで要を見つめる小夏。頭に来た様に視線をボールに落とすと要は一生懸命豚玉をかき混ぜ始めた。

「そんなに混ぜたら駄目じゃないの」

「いいんだよ。納豆だって混ぜた方が美味いだろ？」

「私はそうは思わないが……」

「カウラ……ノリが悪いな」

たこ焼きを食べ始めたカウラにそう言うと言は豚玉を混ぜる手を止めてグラスのラム酒に手を伸ばした。

「どうしたの？要ちゃん」

アイシヤの顔が真剣なものへと変わる。それは要の脳内の通信デバイスが何かをつかんでいることを悟っての態度だとわかって誠も要に視線を向けた。

要の瞳。それはすでに軽口を叩いていた誠の見慣れた要のものでは無かった。誠が知らない陸軍非正規部隊で戦争法規無視の捨て駒の戦いを演じていた時の要の表情。誠はこんな目をした要を見る度に彼女がいたという東都戦争の泥沼を想像して背筋に寒いものが走った。

「例の辻斬りだ。東寺町で近くのOLが背中からばっさりだそうだ」
その言葉に入り口近くのランの隣に座っていた茜が立ち上がる。

「おい、所轄の連中が捜査をはじめたばかりだぜ」

「そう言うわけには行きませんわ。一応わたくしが担当している事件ですから……クバルカ中佐、カルビナ。帰りはタクシーを拾ってもらえませんかしら」

「しゃーねーだろ。仕事優先だ」

ランの言葉に笑みを浮かべた茜は着物の襟元を調べるとそのまま店を出て行った。

「辻斬り……アイツも今回の犯人を追って出てきたか……」

ようやく温まった鉄板に誠の三倍豚玉を広げながら苦々しげに要はつぶやいた。

「でも法術師を狙ってわざわざやって来たんですかね。ただ都心じゃ捕まるかも知れないから郊外に現われただけなんじゃないですか？」

誠の言葉に要は思い切り酒を噴出した。

「何するのよ!」

顔面に直撃を受けたアイシャは叫ぶと同時にハンカチを探してコートに手を伸ばす。驚いた春子も厨房に飛び込んだ。

「クラウゼさん、これ」

春子から手ぬぐいを受け取ると顔を拭くアイシャ。その様子をまるで無視しているかのように一人烏賊玉を焼くカウラ。誠はいつものことながら食事中に異常な集中力をみせるカウラに呆れながら隣の要に目をやった。

「都心より郊外の方が良いだって? そんな訳ねえよ。薄暗がりの街の中。特に抜刀なんて言う近接戦闘メインの作戦行動を取るには都市部の方がやりやすいんだ。戦闘発生時の距離が常に近いからな」

「さすがに非正規戦闘のベテランは言うことが違うな」

烏賊玉をひっくり返して一息ついたカウラの一言。要は得意げに再びグラスを手取る。

「じゃあ、やっぱり狙いは今回の法術師ですか?」

誠の言葉にそれまで騒いでいたシャムや島田まで黙り込んで静寂

が支配した。

「普通に考えりゃーそうなるな。飼い主は分からねーがこの辻斬りは間違いない法術師だ。そいつの飼い主が相当な馬鹿野郎ならいざ知らず、いままで狂犬を官憲から匿い続けているところから見ても、かなりの情報通だ。今回の法術師に関心を持ってねー方がおかしいくらいだ」

ランの言葉に頷くラーナ。ただ不安そうに周りを見るパーラに少しばかり同情しながら誠はそれまで要が焼いていた自分の豚玉にソースをかける。

「最悪のパターンも想定しておくべきね。人斬りと今回の一風変わった法術師の両方に同時に出会うケース。想定していないと最悪の事態になるわね」

「アイシャさん。最悪の事態って……」

誠は豚玉を切り分けながら目の前で箸でたこ焼きを半分に割っている濃紺の長い髪の持ち主に語りかけた。

「馬鹿だな。オメエの能力が奪われた状態で人斬りにマンツーマンで対応しなきゃなくなることもあるってことだ」

ラムを飲む要の満足げな顔。思わずカウラは目をそむける。

「本当にこういときは悪い顔をするわね、要ちゃん。まるでそうなるのが楽しみだって言いたいみたい」

「そうか？」

アイシャの言葉を受け流しながら要は誠の豚玉の半分を奪い取ると自分の小皿に乗つけて食べはじめた。

「それ僕の……」

「小さいことは気にするなよ。それよりカウラよう。得物は特別なのが使えるのか？」

豚玉を頬張りながら要がたずねてくるのを見て少し馬鹿り気分を害したと言うようにカウラはたこ焼きに伸ばした箸を置いた。

「特別な許可は降りていない。使用可能なのは拳銃と貴様等がキムに送った警察官給品の低殺傷火器だけだ」

「マジかよ……東都警察はアタシ等を殺す気か？」

そう言う必要は静かにラム酒を喉の奥に流し込んだ。

「まあ相手は日本刀を振り回しているだけの暴漢と言うのが上の見方だから仕方がないか」

アイシヤとカウラの会話で誠は今回の事件がかなり危険なものだと言うことだけは理解できた。

「同盟外務省から辻斬りさんの飼い主が見つかったら何とか言ってくれねえかな。『うちはローリーサルウェポンしか使用しませんから手加減してください』ってさあ」

ラム酒の便を手に自分のグラスに酒を注ぐ要。沈鬱とした空気が場に流れる。

「おいおい、オメー等がそんな弱気でどうすんだよ」

「姐御……弱気にもなりますよ。相手はこれまで8人は斬ってる狂犬ですよ。それと何だかよく分からない能力の持ち主が敵に回る……」

「同時に相手をしなきゃいいだろ？それにいざとなれば拳銃で仕留めるくらいのことはいつも言ってるじゃねーか」

「姐御……」

いつの間にか誠達のテーブルの隣に立って弱音を吐く要からラム酒のビンを取り上げたランはそのまま半分以上酒が残っている要に瓶を差し出した。

「注ぐならこいつにしてくださいよ」

要は隣でビールをちびちび飲んでようやく空にした誠に目を向けた。

「え？あ？うーん」

「そうだな」

にんまりと笑ったランはどくどくと誠のグラスにラム酒を注いだ。

「クバルカ中佐！」

「良いんだよ。アタシの酒だ。飲めるだろ？」

凄みの聞いた少女の表情。誠はいつの間にか頭の中に異常な物質

でも発生しているのではないかと言うような気分になってグラスを手にした。

「ぐっとやれ、ぐっと」

ランの言葉が耳元で響く。アイシャもカウラも決して助け舟を出す様子は無い。

諦めた誠は一気にグラスの中の液体を空にした。そしてそのまま目の前が暗転するのを静かに理解することしかできなかった。

気が付いた誠を襲ったのはまず頭痛だった。次に全身に涼しげな感覚があるのが感じられた。

飛び起きるとそこは寮の誠の部屋だった。布団は乗せられているが全裸。隣を見るとごちゃごちゃと丸められた昨日着ていた服が転がっている。

「またか……」

かすかに残る記憶の断片で自分が酔っ払って全裸になったことが思い出されてきてそのまますばやく筆筒からパンツを取り出してはいた。

そのまま寒い部屋の中で周りを見る。いくつかのお気に入りのお風呂のフイギュアの並びが変わっているのが分かる。

「アイシャさん……気が付いたら止めてくれれば良いのに……」

「何か言った？」

「うわ！」

突然背中からアイシャに抱きつかれて飛び跳ねる誠。その衝撃でお気に入りの魔法少女のフィギュアが傾いた。

「危ないじゃないですか！」

「今飛び跳ねたのは誠ちゃんじゃない」

じりじり迫ってくるアイシャの背中の後ろにはニヤニヤ笑う要と呆れたような表情のカウラがドアのところに立っていた。

「早く服を着ろよ」

「顔が青いぞ。シャワーでも浴びて気合を入れなおせ」

薄情な言葉にそのまま転がっていた昨日着ていたズボンに手を伸ばす。

「昨日はすいませんでした」

「いつものことだよ、アタシは慣れた」

「慣れた？本当に慣れた？」

これまで誠の目の前で肩を突付いたりしていたアイシャが今度は顔を赤らめている要の頬をつついた。当然切れた要はそのままアイシャの頭を抱え込むと強化された人工筋肉のおかげでレスラー並みのパワーを誇る腕でぎりぎり頭を締め付けた。

「痛い！痛いわよ！」

「痛くしてるんだ。当然だろう？」

そんな二人のじゃれあい呆れたようにカウラは頭に指を当てた。「昨日の飲み会はリフレッシュの為のものだ。それを……」

カウラはそう言いながら誠の足元の布団に手を伸ばす。そのしぐさに思わず引き込まれそうになる誠だが、要とアイシャの視線を感じてカウラの前に立ちふさがった。

「布団ぐらい片付けますよ」

「その前に服を着ろ。今日からいつ何が起きてもかまわない覚悟をしてもらわないとな」

上官にこう言われたらどうしようもない誠だった。そのままセーターを頭から被る。そしてそのままじっと誠を見ている要とアイシャに目をやった。

「そんなに見ないでくださいよ」

「昨日はあんなに『俺を見ろ！』って叫んでたのに？」

「そんなこと言ってたんですか？」

顔を赤くする誠にアイシャと要が顔を見合わせて爆笑し始める。

「馬鹿は相手にするな。もうすぐ時間だぞ」

布団をたたみ終えてカウラが立ち上がる。仕方がなく誠もズボンを急いで履くとそのままカウラについて廊下へと出た。

早朝の寮はいつものように戦場だった。警備部の面々が二日酔いか何かのように頭を抱えながら短髪の金色の髪を掻き揚げながら誠達を避けて追い抜いていく。

「警備部の連中。昨日は飲まされてたからなあ」

「そんなことがあったんですか？」

「飲ませたのはオマエだろ？」

要にそう言われても誠の記憶はまるで消えていた。仕方なく階段を下りながら昨日の全裸になった自分の事を思い出してみるがまるで浮かんでこない。

「じゃあちよつとアタシはタバコを吸ってくるから」

「そのまま永遠に吸ってて良いわよ」

「うるせえ！」

にやけながら紺色の長い髪を掻きあげるアイシャに悪態をつくとそのまま中は二階のラウンジにある喫煙所に消えた。

「今日は……ヨハン君が食事当番ね」

「アイツがここににいる意味があるのか？ 味見とか言って大量に食べているらしいじゃないか。士官のアイツがここににいる理由はダイエツトの為だろ？」

カウラはそうつぶやきながら朝らしく忙しそうに動き回る隊員が集まる食堂へと入っていった。

「いらっしやい！」

「島田、元気だな」

要が呆れるのは無理も無いような気がした。誠がノックアウトされればあのメンバーの矛先は当然のように島田に向く。だが生体機能の異常な活性化と言う技のある島田なら致死量のアルコールを口から流し込まれても平気なように誠には思えた。

「さっさと食べて出勤だ」

「そうしましょ」

カウラとアイシャは島田を無視して厨房前のカウンターに並べられた料理のトレイを手にしていた。仕方がなく誠もその後が続く。タバコを吸い終えたにしてはやけに早く帰ってきた要がいつの間にか誠の後ろに立っていた。彼女もまた慣れた手つきでトレイを手に取り暇そうに食堂を眺める。

その様子を興味津々という感じで眺めていた島田と目が合うと要のタレ目のまなじりがさらに下がった。

「島田……どうすればオマエを殺せるんだ？」

「あれじゃないですか？ 銀の弾丸で額を撃ち抜くとか心臓に十字架を突き立てるとか……」

「西園寺遊んでないで早く食事をしろ！」

スープを注ぎ終えたカウラの言葉に舌を出しながら厨房に向かう要のおかつぱ頭。

「それにしても豊川署の警邏の面々。ちゃんと仕事はしているのかしら？ まるで連絡が無いじゃないの」

すでにすべての料理をトレーに載せて堂々といつもの指定席に座ったアイシャはすばやくワインナーをかじりながらそうつぶやいた。「彼等も仕事と割り切ってくれているだろうな。確かに杉田と言うあの警部。当てにはならないが他に手段は無いからな」

「そんな弱気で……」

誠は椅子に座りながらぱくぱく食事を食べているアイシャを眺める。見られていることが分かるにつこり笑ってすぐに今度は付け合せの茹でたキャベツを食べ始めた。

「ああ見えても東都警察は腐っている連中が過半数以下と言う遼州では貴重な組織だからな。それなりの結果は期待して良いんじゃないの？」

遅れて席に着いた要が同じように手にした緑色のものをかじり始めた。よく見ればそれは四分の一に切ったキャベツだった。呆れてみていた誠達だが、要は気にせずそれを見る間に食べ尽くした。

「なに？ 要ちゃんは芯が好きなの？」

「食物繊維だよ」

「サイボーグが健康志向か？」

「絡むじゃねえか。隊長殿」

いつものように要達の話が展開しているのを見て誠は安心してスープをすすった。

「二日目……意外とこういうときに見つかるんだよな」

要はスープを飲み干すとトーストに食いついた。

「そうか？ まだ全地域をパトロールできたわけでは無いんだろ？ そ

れに反応が丁度よく現れるとなると確率論敵にはかなり低い話になるぞ」

「そうよね。まあ節分前までには決着が付くといいわね」

カウラとアイシャ。それぞれにトーストとソーセージをかじりながらそれとなく誠の方に目をやりながら食事を続けていた。

「捜査なんて……よく分からないですけど……西園寺さん。そんなものなんですか？」

スープの味付けが少し濃すぎたのを気にするように舌を出しながらつぶやく誠に要は手を広げて見せた。

「すぐにターゲットが見つかるなら本当にすぐに見つかるもんだ。見つからない時は……」

「それはあるかもしれないわね。アニメキッズの景品も欲しいと思っ
ているときはスクラッチの点数が低くてもらえなくて、これは興味
が無いから当たったらシャムちゃんにあげようとか思っているとき
は結構いい点数が出て好感するかどうか迷うことが多いもの」

「その例え……適切なのか？」

アイシャの独特の話題についていけないカウラが突っ込みを入れる。
周りでは時間に厳しい技術部部長の許明華の部下達がすばやく食
事を済ませてトレーを返しに行っている。

「じゃあ、がんばってくださいね」

「オマエこそ潰されるなよ！」

島田が苦笑いを浮かべながら立ち去る背中に要が声をかける。

「それにしても……他人任せってのは……」

「それなら要ちゃんが計測器を持って走り回れば良いじゃないの」

「アイシャ……テメエ一回殺してやろうか？」

苛立つ要。誠も二人の気持ちを察しながら静かにパンをかじった。
もうすっかり二人の喧嘩に慣れたカウラはため息をつきながらデザ
ートの温州みかんの皮を丁寧剥いていた。

「いつ見つかったもおかしくないんですから。皆さんも十分注意してくださいね」

ラーナの言葉を待たずに誠達はそれぞれの端末にかじりついて警邏隊が車に積んでいるアストラルゲージの検索結果に目を通していった。

「言われるまでもねえよ」

そう言う必要は首のジャックに端末のコードを接続している。

「退屈よね……」

「言うことはそれだけか」

不機嫌そうに流し目を向けてくるアイシャに厳しい視線を送るカウラ。誠は苦笑いを浮かべながら目の前のモニターに目を向けていた。平坦なグラフが見える。時々跳ね上がる数値に驚いて以前の事件の際のデータを引っ張り出すが、すぐにゲージは穏やかに下がってしまふ。

「意外と法術師って多いのね。東和は法術適正検査を義務化したほうが良いんじゃないの？」

アイシャの言葉にカウラがため息をつく。誠もただ引きつった笑みを浮かべるだけだった。

「法術検査を受けるかどうかは東和では個人の意思ですから。同盟も内政干渉はできないですよ」

「同盟は内政干渉は行わないか……まあ理屈では分かるんだけどめんどくさい原則よね」

ラーナの弱った顔に満足したように頷いたアイシャはそのまま画面へと視線を戻した。

「見つかるものなら早く見つかるといいな」

「西園寺も良いことを言うもんだな」

要もカウラも昨日一日同じことをしていたのを思い出したかのよ

うにうんざりした表情を浮かべていた。

「無駄口を叩くんじゃないわよ」

「一番叩きそうな奴に言われたくねえよ」

アイシャもすでに飽きている。人造人間とサイボーグ。どちらも忍耐力は通常の人間よりも有るはずなのに明らかにその限界は近くまで来ていることを知って誠はただ苦笑いを浮かべるだけだった。

「神前、飽きねえか？」

「仕事ですから」

「ふーん」

まじめにモニターを見つめている誠の言葉にとげのある表情を浮かべながら再び要の視線はモニターに向かった。

「また反応だ……」

「ちゃんとチェックしろよ」

カウラの声に要はうんざりしたような表情を浮かべる。

「隊長命令か……ちよつと待て！」

要が突然立ち上がった。その叫びに全員が立ち上がり彼女のモニターに目をやる。時々数値が跳ね上がる。特徴的なアストラルパターン。

「ほら見ろ、またすぐに出やがった……特徴的なベータ波と……アストラルゲージは常に反転限界点で進行中だ」

得意げな要だがカウラがまじまじと画面を見た後ですぐに横からキーボードを叩いて事件現場で計測されたアストラルゲージパターンと照合する。

「似てはいるが……」

「だろ？」

「馬鹿ねえ、要ちゃんは。似てるから即犯人とは限らないでしょ？」

アイシャの言葉に頬を膨らませながら一人自分の端末のキーボードを叩いているラーナに目をやった。

「東寺町……3丁目。古いアパートが多い場所ですね」

淡々とつぶやくラーナの言葉が終わる前に要はそのまま腰の拳銃を確認するとそのまま部屋の奥にかけられたコートに向かっていく。

「西園寺！」

「なんだよ！犯人かどうか片っ端から訪問してそいつが怪しいかどうか確かめれば済むことだろ？」

「そんな胡州じゃないんだから」

アイシャの言葉に含まれた『胡州』と言う言葉が要の暴走を止めてくれた。コートに伸ばしていた手を引っ込めると要はそのままラーナのところへと歩み寄った。

「西園寺大尉も分かかってらっしゃると思いますが、政治犯が山ほどいる胡州なら予防検束はできます。でもここは東和です。何度も繰り返し申し合わせをしたとおりアストラルパターンデータは証拠としての力がありませんから……」

手を止めずにラーナはつぶやいた。誠も彼女が何をしているのか気になってそのまま立ち上がり要の横に立った。

「ここで例の不動産関係の資料を生かすわけね」

納得がいったように頷くアイシャ。ようやく自分の行動を理解してくれる人物が現れたことに安心したようにラーナは頷いた。

「まず……吉田さんからもらったキーワードで……」

「なんだ？あの機械人形はラーナにはそれを教えてたのか？」

不機嫌そうな要の肩を静かに叩くアイシャ。その様子を見て切れそうになる自分を治めるためのように要はゆっくりと深呼吸をした。「出ました。……水島勉……この前の十五人には入ってない名前だな」

画面に一人の人物の戸籍謄本が映し出される。

「前科無しか……別件で引っ張るわけには行かないか？」

「西園寺。貴様は逮捕することしか考えていないんだな。それに例の十五人はどうする？無視か？」

カウラの諦めたように一言に要は舌打ちで答える。

「例の十五人は東和警察の皆様に調べていただくとしても……法術

犯罪は現行犯が基本よ。とりあえず身边を探ることから始めないと」

そう言うときアイシャはすぐに先ほど要がコートを取りに戻った場所へと向かう。

「制服着てか？それこそ現行犯は無理になるだろうが」

「要ちゃん……すぐに身边に張り付くつもりなの？ラーナちゃん！水島とかいう人の以前の住所は分かるかしら？」

「ええ、……城東区砂町……」

「なるほど、まずは都心の事件の裏づけを取るのか」

納得したように要もコートに手を伸ばす。ラーナは二人とは別に再びキーボードをたたき始めた。

「それでは水島の動向についても警邏隊に把握してもらう必要があるな。ラーナ、頼む」

カウラもそう言うとき椅子にかけていたジャンバーを引っ掛ける。

誠も遅れまいと同じくジャンバーを着た。

「寺町交番には資料を回しておきます。それとデータ再確認の為に私はここに残りますね。十五人の動向も気になりますから」

そう言うとき再び端末に集中するラーナ。

「じゃあ行くか」

要の一言で頷いた誠達はそのまま倉庫のような部屋を後にした。

「これは……港灣部の難民租界と大差無いな」

巨大なトレーラーをやり過してそのまま埋立地の道に車を走らせながらカウラはつぶやいていた。冬の東都城東区。埋立地に向かうトレーラーには基礎工事に使うのだろう巨大な鉄骨がむき出しのまま積み重ねられているのが見えた。走る車は業務用の車両ばかり。去年から本格的に始まった城東沖の埋め立て工事がいかに大規模なものかと言うことを誠達に知らせるには十分すぎる車両の列が続いていた。

「アパートなんかあるのかよ」

「地下鉄の駅が近いからその周辺にはあるんじゃないの？」

要の言葉に助手席のアイシャが紺色の長い髪の毛を気にしながらぶっきらぼうに答える。誠も臨海部と言うと危険地帯の難民租界近辺ばかりを思い出していたが、目の前の次第に海へと拡張していく街の端っこと言う光景を見ると別世界のように思えた。

「人が住むには向かないところは租界と一緒に……だけどあっちの方がとりあえずとはいえ人が住んでるだけましかな」

つぶやいた要に誠も自然に頷いていた。大型車の絶え間ない通行に瀕死の道路のアスファルトの割れ目から地下水が絶え間なく湧き出す様が目に飛び込んでくる。

「これは……帰ったら洗車しないとな」

カウラはそうつぶやくとようやくビル基礎工事をしているらしい一角にトレーラーが入っていくのを避けながら車を加速させた。

「でもまあ……数年立ったらこら辺のビルもマンションだかオフィスだかができるんでしょ？ そうなればにぎやかになるかもしれないじゃない」

「アイシャ……おめでてえな。一発不況が来ればゴーストタウンの出来上がりだ。どうなるかわかったもんじゃねえよ」

「ずいぶん慎重なのね、要ちゃん……何か悪いものでも食べたの？」

「今朝はオメエと同じものを食った……そうか、オメエも悪いものを食ったから変なのか」

いつものように一触即発の二人を見ていた誠。まっすぐ続く道の片隅にようやくコンビニエンスストアと完成しているビルらしきものを見つけてほっとして運転中のカウラに目をやった。

「あそこのコンビニの近くだな」

カウラはそう言うと言わする車の無くなった道で車を加速させる。小さな点のように見えたコンビニエンスストアの建物が三階建ての比較的新しいビルでその二階より上がアパートになっていることに誠も気づいた。

「コンビニの近くって言うか……コンビニの上じゃん。水島とかいう奴はコンビニの店長だったのか？」

要の言葉に誠は曖昧な笑顔を浮かべて再び目の前のコンビニに目をやった。

意外にもコンビニには客が多く見られた。

「結構にぎわってるな……まあこれだけ工事現場だらけで他に競争相手も無いんだ。独占企業の利益とかいう奴かね」

助手席から降りると周りを見て回っているアイシャが降りるのにあわせて体を乗り出した要の言葉。誠は苦笑いでそれにこたえた。

「あそこ……駅？なんでもまたこんなところに」

アイシャが遠くの建物を指差す。そこにはいくつもの地下鉄の出口が見てとれた。周りは造成中で枯れた草だけが北風になびいている。予定された未来のために作られた駅。現在はまだ郊外から都心に向かう通勤客に停車時間の分だけ苛立ちを供給する要素以外の効果は無いだろう駅を見て誠もこの荒れ地に住むことの異常性に気がつきつつあった。

「まともな神経の持ち主なら逃げ出したくなるのも当然だな」

そう言うと言わすはコートから携帯端末を取り出した。

「水島勉……32歳。大手印刷会社の営業部に所属していたが四ヶ月前に退職。自主退職となっているが……これは事実上の法術師外しだな。一部の同期の面々が個人加盟組合をバックにつけて退職の取り消しを求めて裁判で係争中だ。全員が法術適正者。そう遠くないころにマスコミが騒ぎ出しそうな話だ」

誠も何度か同じような話を聞いたことがあった。東和政府は公式には法術師の差別行為には労働局の強制査察などの強硬姿勢で臨むと宣言していた。だが実際は査察が行われたケースではすべて裁判所の命令によるものだった。遼南などの著しい経済復興で経済の成長が鈍化していることに危機感を募らせている財界が競争力確保の為に法術師を狙い撃ちしてリストラを行っていると言う話は嫌と言うほど聞かされていた。

誠達はコンビニの駐車場で車を降りた。荒涼とした造成地を眺めながらアイシヤは眉をひそめている。

「こんなところで無職……一日じつとしてるわけ？おかしくなっちゃうわよ」

「なんだよアイシヤ。テメエなら一日中アニメが見れるって喜ぶんじゃないのか？」

要の突っ込みに手を叩いて笑みを浮かべるアイシヤ。

ただでさえ女性が珍しい埋め立て地のコンビニにエメラルドグリーンや濃紺の色の髪の長身の女性が周りを見渡していると言う状況には昼時の近くの工事現場に出入りしているらしい作業員達の注目を集めるには時間がかからなかった。

「おい、見物に来たわけじゃねえんだぞ。とっとと奴さんのお部屋とやらを拝みに行こうぜ」

要は手に管理事務所から借りた鍵を持って颯爽と歩き始める。店の前でタバコを吸っていた客の視線は要について動いているのが誠にも分かり次第に自分の頬が朱に染まっていくのを感じていた。

「誠ちゃん……どうしたの？」

明らかに自分が注目を集めていることを知りながら振り返るアイ

シャ。ただ何もできずに誠はそのままアパートの階段を登る要達の後に続くだけだった。

生活感が感じられない。階段を登りながら誠が感じたのはその事実だった。

「やっぱり誰もいないアパートはさびしいもんだな」

あちこち眺めながら要がつぶやく。彼女が寮に来る以前のマンションには他の同居人はいなかったが警備員が駐在していたので何とか人の住むところらしさを感じたが、このアパートにはそんな雰囲気すらなかった。二階に上がった四人の目の前には五つのドアの郵便受けから飛び出す雨に濡れてぐったりしたようなチラシがあるだけで他の気配は何一つ感じなかった。

「203号室ね」

アイシャはそう言うと言鍵を奪って真ん中のドアにたどり着いて電子キーをセットする。鈍いモーター音とともに扉の鍵が解除される。

「何が出てくるんだ？」

ニヤニヤ笑う要。誠にはただ異様な雰囲気ばかりが感じられて、思わず逃げ出したくなる自分を押さえ込んでいた。

「行くぞ」

開いたドアに入っていくアイシャに刺激されたようにカウラが誠の肩を叩いて部屋に入るように促す。仕方なく誠も冬だと言うのに妙に暖かい空気が流れてくる部屋に入っていた。

「普通だな……」

靴を脱いですでに部屋の真ん中に立っている要の言葉に誠も頷くしかなかった。染み一つ無い壁。天井も高く白い壁紙に覆われている。

「ちょっとこれを」

カウラはそう言うと言携帯端末並みの小さな機械を取り出した。残留アステロイドデータ測定器。ラーナに与えられた機械を部屋の中に設置するとその小さな画面に起動状態を示すマークが映り出した。

「これも証拠能力は無いんだろ？」

「しょうがないじゃない。今のところは水島とか言う人がこれまでの違法法術発動事件に関与している可能性があるくらいのことしか分からないんだもの。これで反応が一致すれば東都警察も彼の犯行当時の動向を捜査してくれるでしょうし、上手くいけば任意で引っ張れるかもしれないわよ」

「なんだよ、アイシャ。オマエもアイツを引っ張りたいんじゃないか」

アイシャの言葉にニヤニヤ笑う要。カウラは一人機械が求めるコマンドを入力していた。

「それにしても……もしかしてこの一室だけですか？入居していた人がいるのは」

誠の言葉に要は呆れたように頷いた。

「条件としては結構いい物件じゃないの。駅は見えるほど近いし……確かに殺風景で今の季節は冷えそうだけど」

「さっき住むのはごめんだと言っていたのは誰だかね」

思わず窓ガラスに手を伸ばすアイシャ。彼女の言葉に要が皮肉を込めてつぶやく。アイシャが開いた窓。そこからみえるのは基礎工事の為に杭を打つ機械の群れだった。

「まあ……この光景がいつまでも続くわけじゃないだろうからな。造成が終わればそれなりの街になるって言うのに」

「そうも行かなかったんだろ。突然リストラされて……何かを変えたかったんだらうな」

カウラは静かにそう言うのと水島勉の経歴書を携帯端末に表示させた。

「一応名門の私大の社会学部を優秀な成績で卒業。その後会社では営業マンとして務めているが……成績は芳しくないな」

「よくある話過ぎて笑いたくなるね」

そう言いながら要は新品の白い壁紙を撫でていた。ひとたび沈黙が部屋を支配する。

「解雇後は独学で司法試験受験で知られる豊川の明法大学の法科大学院試験に合格……」

「会社員失格の後は資格を取って独立ねえ……まじめそうな奴だね。不器用を絵に描いたような経歴だな」

要はそう言うとそのまま部屋の中央のアストラルゲージの計測器に歩み寄った。

「これで……結果が出るだろうな」

中央の小さな機械を手にとったカウラ。そしてそのまま画面を操作する。何も無い空間にいつものようにアストラルパターンデータが表示された。

「これをカルビナに転送して……」

「お仕事終了ね」

そう言うときアイシャは大きく伸びをした。要は飽きたというようにそのまま玄関に向かう。

そんな二人を見ながら誠はなんとなく外の杭打ち機を眺めていた。

「何か見えるのか？」

カウラに声をかけられて誠は我に返った。そして外の建築用機材の群れを見ながらしばらく眺めていた。

「こんな街……」

「街とは言えねえだろ。ただの工事現場だ」

外を眺める誠にそう言いながら一緒に外を見る要。二人とも明らかにこの部屋が異常な場所であると言うことを確認していた。

「夜はこの下のコンビニの店員と工事現場を警備する警備員だけ……さびしいところね」

アイシャはそう言いながらコートの襟を直す。その動作にカウラも苦笑いを浮かべながらアストラルゲージの終了を始めていた。

「この部屋で暮らすのを選んだ……先を見るにしてもほどがあるよな。確かに空気が読めなくて会社を解雇になるには十分な神経の持ち主だな」

そう言うとそのまま要は玄関に向かった。

「何年か経てば人気スポットになりそうだけど……どうなるか分からない時代だから」

果然と目の前の道路を通過していくトレーラを眺めている誠の肩に手を乗せるアイシャ。カウラはそれを見ても気にしないというように終了したアストラルゲージをコートのポケットに収めた。

「水島とかいう人物は人間が嫌いなのかな」

「好きだったらこんなところで暮らせるわけ無いわよね。でも……そんな人物が他人の能力を乗っ取って犯罪に走る。なんだか不思議な話よね」

「不思議？むしろ当然じゃねえのか？誰でも彼でも人であると言うことだけで憎むことができる人間はいるものだけ。まあめったに目にかかれねえが今回の水島何がしとかいう奴もそう言う人種だったと言うことだよ」

カウラ達の雑談に一区切りつけるとそのまま要は外へと出て行った。外の冬の冷たい外気がこもった部屋の中に舞い込んできて誠達を包む。妙に生暖かい空気から開放されて誠は一息つくと玄関に向かった。

「西園寺の言う通りなんだろうな。たまにはアイツもいいことを言うものだ」

そう言いながらブーツを履くカウラ。誠は靴を履く二人から再び視線を窓の外へと移した。

「どんな人物なんでしょうね」

「すぐに会えるわよ。まあ私は会いたくないけど」

アイシャはそう言いながらパンプスを履くと大きく伸びをして廊下へと消えていった。

水島勉は第六感というものを信じないリアリストだと自分を思っていた。

今日は自習の為に訪れた図書館にも例のクリタ少年は現れなかった。そしてその帰り道、自転車で走っていても特に彼に注目する人などいないことは分かっていた。

だが明らかに何かに監視されているような感覚はあった。

『まさか……法術絡みの件となれば現行犯逮捕が基本のはず。これまで法術発生と俺の関係は立証されていないはずだから捜査が俺のところまで及んでいるわけがない。たとえば法術の発生と俺の因果関係が立証できても起訴まで行くかどうか……』

商店街の上のアーケードが冬の北風を受けてばたんばたと唸りを上げる。だが気にすることなく水島はペダルをこぎ続けた。

周りには法術師の気配は無かった。

『力がある人間がいなければ俺も無力なんだな』

自分の能力を思い出し、少しばかり自虐的な笑みを浮かべた。その時だった。

一瞬だが明らかに以前の法術暴走で死んだ被害者と同じ力のある法術師の存在を感じた。背筋に寒いものが走りペダルを踏んでいた足がずれて思わず転倒しそうになるがなんとか自転車の体勢を立て直した。

「……大丈夫ですか？」

目の前の『あまさき屋』と言うお好み焼き屋の暖簾を出していた女子中学生に声をかけられる。

「は……大丈夫……大丈夫ですよ」

何とか言い訳をするがそこで力の源となる法術師の気配が残像であることを理解した。

『この店……法術師の気配が染みついているやがる……もしかすると

保安隊の法術師でも通っている店なのか？」

黙ったまま店を見上げた。実にこんな繁華街にはありがちの三階建ての店舗を兼ねた住宅があるだけ。少女は呆然と水島が自分の店を眺めているのを見つめるだけだった。

「本当に大丈夫……」

「大丈夫ですよ」

少女が手を伸ばすのを振り切ると水島は再びペダルをこぎ始めた。『確かにいるんだな……あの空間を切り裂く感覚と……死に行く恐怖の感覚……』

沈黙を続けながら水島はペダルをこぐ足に力を入れた。そしてこの通りは二度と通るまいと心に決めた。

一月も半ばとなれば正月の雰囲気も抜けるものだった。昨日、水島の前の住居の残留アストラル波の採取を行ったデータは司法局本局と東都警察に提出されていた。ともに結果が出るには時間がかかるという回答を受けていた。そんな中、誠はじつと端末を覗き見ながら隣で野球のボールをいじっている要に目をやった。

「そう言えば最近走ってませんね」

誠の一言に要はにんまりと笑いそのまま視線を正面のカウラに向けた。

「私は走っているぞ。夜なら時間は作れるだろ？」

「カウラちゃん……危ないわよ。夜中に一人で走るなんて……そうだ！誠ちゃんも一緒に走らない？私も少し走りたいのよ」

アイシャの言葉に呆れたカウラはそのままモニターに目を移して作業を始めた。

「馬鹿なことを言いてえところだが……最近は辻斬りがここらでも出てるからな。得物でも持つか？」

「だから、ここは胡州じゃないの」

指で銃の形を作ってみせる要にたしなめるような調子のアイシャの言葉が飛んだ。

「動けないのはつらいのは分かりますが……」

ラーナが困ったように机にかじりついている四人を見ながら苦笑する。違法法術発動の容疑者である水島勉の身辺捜査の権限は東都警察が握っていた。放火や傷害などの嫌疑のある事件の発生時刻の水島のアリバイの有無の操作は極秘裏に東都の捜査官達が探っていた。アストラル波の照合データの回答が司法局から出たとしても東都警察の許可がなければ誠達は指をくわえてみているしかない。その事実が重圧として誠達にのしかかっていた。

「しかし……奴等は嫌疑が裏付けられたらアタシ等に内緒で逮捕し

「ちゃうんじゃねえのか？」

ボールをもてあそぶのにも飽きた要の一言に思わず誠も頷いていた。

「先々月の同盟厚生局の事件では見せ場を私達が持っていたからな。今度は手柄を……などと言うのもありえる話だな」

いつもなら苦笑いで済ませる要の言葉に同調しながら微笑むカウラ。アイシャは何度か頷きながら時折ラーナに視線を送っていた。

「どうでしょうか……私としてはたぶんそれは無いと思いますよ。」

虎の子の法術部隊は相手が人の法術を勝手に発動すると言う事件の特性からあまり動かしたくは無いでしようし、どこまでその能力を水島とか言う被疑者が見につけているかも分からない状況ですから申し訳なさそうにつぶやくラーナ。

「手柄は自分で確保して厄介事はアタシ等に押しつけるわけだ……世渡りが上手いねえ、あの小太り署長」

要の愚痴にラーナは力なくほほえむ。彼女は真ん中分けのおっぱ頭の髪を手櫛ですきながらモニターに目を戻した。誠は要と同じ気持ちでなんとなく釈然としないまま、モニターの中の再びこれまでの犯行の手口を載せているファイルのデータを読み直していた。

「うちは便利屋ですね」

思わずつぶやいた誠にアイシャが笑いかける。

「今頃気づいたの？遅かったわね」

「なんだ？アイシャは警察の肩を持つのか？」

むっとしたように立ち上がりかける要。それをアイシャがにらみ返す。

「くだらないことは止めておけ。たとえすべての準備を整えたとしても東都警察には手に余るのは間違いないんだ」

それだけ言うとかウラは再び端末へと視線を向ける。時間が経つ事にイライラが増していくのが感じられる。誰もが結論を、結果を待ち望んでいた。

「カルビナさん。どこくらいまで捜査が進んでいるとかわかりませ

んか？」

耐えきれなかった誠の言葉にラーナはため息をついた。

「神前さん。一応東都の各警察署にもプライドがありますよ。自分の管轄した場所で起きた事件。その容疑者を特定するならできれば自分の手で捕まえたくなるものですよ……確かに最終的には手に余ってうちに回ってくるでしょうけど」

「縦割りの弊害だな……まあ、連中はアタシ等のことは『同盟司法局なんて無駄な組織を作りやがって』って思われているかも知れねえがな」

思い切り要らしい言葉に誠は頷くと目の前の画面に目を向けた。東都警察と同盟司法局。結局は別組織による同床異夢の捜査活動に過ぎないことは嫌でも分かっている。

ただその事実を確認するためだけに時間が流れているのではないか。誠はいつの間にかそう考えていた。

「慎重なのが信条の東都警察のご丁寧な捜査が続いているんだ。このまま一週間ぐらい待たされても不思議は無いぞ。楽にしてろよ」
要の言葉。ある意味当然だとは分かっているけど慣れない誠には待ち続けること自体が苦痛だった。

「でも……こんなところでくすぶっているのに意味はあるのかしら？ どうせ定時になったらこの部屋から追い出されるんでしょう？ しかも連絡が携帯端末に届けばいつでも出動できる状態にしているって言われてるんだから……無意味よね」

立ち上がるアイシャ。誠も左手の携帯端末に目をやる。小さな端末だが、その中の情報は常に東都警察の最新情報が流れ込んできている。

「私達はアウエーなんだ。我慢しかできないだろ」

まじめにモニターを覗くカウラ。げんなりしながら誠は再び画面へと目を向けた。

「うわー！ イライラする！」

珍しく取り乱したようにアイシャは叫ぶとそのままどっかりと椅

子に腰掛けた。

そしてまた沈黙が倉庫だった部屋の中を支配した。

見事な細工の石灯籠。その灰色の御影石に入る龍の文様。見るものには主張が強すぎるように見えるその空想上の生き物には眼が入れられていない。一人の着流し姿の男が剣の手入れを休めてその空虚な空洞に目を遣った。縁側をなびく冬の冷たい風が手にした紙切れをサワサワと揺らす。男はその瞳が無いことに満足したというように笑みを浮かべた後、そのままの表情で手にした刃の流れるような波紋を眺めていた。その波紋は脂のようなものでテラテラと光る。その様がさらに男の笑みを薄気味悪いものへと変える。

「旦那……寒くないですか？」

男に後ろから話しかけた北川公平はダウンジャケットに首の周りには襟巻きを巻いて寒そうに手を合わせてさすっていた。彼もこんな男、桐野孫四郎と一緒に行動するのはうんざりしていた。昨晩は桐野の旧友だというこの家の主と飲んでいるときも居心地が悪いことこの上なかった。

主は次々と収集したという武具やら日本刀やらを二人の前に引き出してきては満面の笑み浮かべた。桐野は甲冑や鉄砲には目もくれずにただ陰が出てくるとその一つ一つを引き抜いてしばらく眺めてみては静かに鞘に収めた。こう言う成金にはとりあえずお世辞でも言えばいいのと思う北川だが、そんな世渡りのことなど桐野には眼中にない。時々、『これは折れる』とか『斬れないな』などとけちを付ける度に家主の顔が醜く歪む。最後には勝手にしろとばかりに席を立った家主を何とかなだめてこうして家においてもらっているのに、肝心の桐野は自分の剣の手入れにしか関心が無いらしい。

桐野はしばらく北川の問いかけに無視していた。

「気合の問題だな……」

突然その薄い唇から言葉が発せられた。答えていると言うよりも自分に言い聞かせている。そんな様子はいつものことだった。北川

はとりあえず桐野が自分の言葉を聞く用意があることを確認できてほっとするとそのまま縁側に腰掛けた。

「前置きはいいい。昨日の俺の態度が気に入らないと言う愚痴も結構だ……見つかったのか？」

自分の無愛想の自覚があるのか。桐野の妙な言い回しに思わず顔がにやけそうになるのを引き留めながら北川は懷から携帯端末を取り出した。

「豊川警察署に勤務中の同志からの情報ですが……」

そう言うときーを操作してすぐに一人の男の顔写真を表示させた。映し出された一人の中年男。特徴がないのが特徴というようなその顔を一瞥すると桐野はそのまま視線を庭に向けてしまった。

「水島勉……聞いたことが無いな」

「旦那。それは冗談で言っているんですよ」

投げやりな言葉にすぐに桐野の虚ろな視線が北川に注がれる。肝を冷やすとはこのことか、北川は桐野の手が鞘に納まった剣から離れているのを確認して大きく息を飲んだ。

「どういう見で暴れてるのか分かりませんからね。だからすぐに斬りかかるのだけは勘弁して……」

「保障はできないな。相手がこちらの能力を奪って来るならこちらもそれなりに覚悟はするつもりだ」

桐野はそう言うとき再び剣を抜いた。突然の動きに驚く北川をあざ笑いながら桐野はすばやく剣を鞘に戻す。

「珍しい力です。太子も大層関心を持っていたらっしゃる。できれば生きたまま捕まえたいですから。斬るのは最後の手段にしてくださいよ」

そう言うとき北川は立ち上がる。

『この人殺しは……そのうち俺のケツにも火がつくかも知れねえな』心の中でそう思った北川はそのまま暖房の効いた部屋へと戻っていった。

「別に理想があるわけじゃないんだよ俺は。人が斬りたいんだ……」

独り言のようにつぶやいた桐野はそのままうつとりとした目で自分の業物をまじまじと眺めていた。

「まだかよ」

定時まで30分。要は大きく伸びをした。誠は呆れてつい目を要に向ける。その要が声をかけたカウラは警邏隊から送られてくるアストラルゲージの波だけが映る画面から目を放そうとしない。彼女も一応は小隊の隊長である。無駄かもしれないけれども仕事の真似事くらいは要の前ではしなければならない。

「聞ってるのか？」

「まだ30分前だ」

要のしつこさに耐えかねたというようにカウラが吐き捨てるようにつぶやく。

「それじゃねえよ。ちゃんと水島を引っ張れる証拠は見つかったのかって言うことだよ」

そう言うのを期待していないというように要は大きく身をそらして伸びをする。アイシャもラーナもいつものこの要の気まぐれな言動にため息を漏らした。

「要ちゃん。そう簡単に証拠が挙がるなら誰も苦労はしないわよ」

「そりゃあそうだけどさあ」

今度は要は左肩に手を当ててぐるぐると回す。要するに退屈なのだ。誠は思わず単純で分かりやすい要の行動を微笑みながら眺めることにした。

「サイボーグが準備運動か？」

重量のある義体の重さに耐えかねてぎしぎし言う椅子の音が気になったカウラの一言。要もその音が無駄に出しているという自覚はあるらしく回していた腕を止めて机に突っ伏せる。

「うるせえなあ……別にいいだろ」

しばらくそのまま時間が流れる。だが要の退屈がどうにかなるわけではない。

「とりあえずタバコ吸ってくるわ」

「はいはい！行ってらっしゃい！」

投げやりなアイシャの言葉にそのまま席を立とうとした要。ここまではいつもの光景だった。

だがその時突然ラーナが立ち上がった。

「取れました！取れましたよ！」

誠よりも二つ年下の割にはいつも落ち着き払っているラーナの歓喜の声に一気に部屋の緊張が高まる。

「なんだ？何が取れたんだ？」

まるで子供のようにモニターを指差すラーナの表情を見た要。その表情が眠そうな気配を一気に消し飛ばしてシリアスなものに変わると部屋の空気が一変した。

「元旦の東宮神社の放火！目撃証言が取れたんですよ！確かにその時に水島は現場にいたそうです！」

「一件だけか？偶然と言われたらおしまいだぞ」

待ちかねていた事実だがカウラはまだ冷静を装っていた。だがラーナの言葉は続く。

「それだけじゃ無いんです！豊川市での最初の自転車の転倒事件の現場、次の北川町でのぼや騒ぎ、そして駅前の殺傷事件の現場でも……」

「それどこの証言よ？それだけ証拠が揃ってれば東都警察が動いてるでしょ？」

アイシャのたしなめる声もラーナの笑みを止めることはできない。

「同盟司法局法術特捜を舐めてもらっては困りますよ！情報ソースは秘匿事項なので明かせませんが目撃者の身元は確かです。裁判での証言の約束も取れています！」

得意げに胸を張るラーナ。ただ呆然と新事実を目を見張るカウラとアイシャ。ただ要だけは一人頷いて納得が言ったような表情を浮かべていた。

「西園寺さん……？」

「なあに、情報収集を行う必要のある機関はどこでも独自の情報ルートは持つてるものだ。まあ……茜が一から作ったにしては準備が良すぎるから叔父貴のコンexionからの情報だろうな。なら精度は確かだ」

要の一言がただ立ち尽くしていたカウラとアイシャの目に生気を戻した。二人は顔を見合わせてとりあえず椅子に座った。

「これで引っ張れるぞ……どうする？」

「待ちなさいよ要ちゃん。情報が確かで起訴して勝てるのは分かっている……逮捕令状は？裁判所の命令書は？」

必死に落ち着こうとしているアイシャ。その声はいつもの余裕のある彼女らしくもなく上ずっていた。アイシャの珍しい鋭い目つきに刺激されるようにラーナのキーボードを叩く速度が加速する。

「地裁には嵯峨警視正の顔が利きますから……なんとかうちにも令状が……」

「頼むぞ茜、希望の星だよ……これでこの退屈な蟄居部屋ともおさらばだ！」

満面の笑みで叫ぶ要にさすがに不謹慎だと言うようにカウラが白い目を向けているのがおかしくて誠はつい噴出していた。

「そうだな……これで我々の勝ちだ」

これまでは黙っていたものの豊川署のやり方に我慢ならなかった。そんな気持ちがありありと分かるような薄ら笑いを浮かべながらラーナの手つきを眺めるカウラ。

誠は自分には少しばかり女性恐怖症の気があるのではないか。その顔を見て背筋が寒くなる自分を感じながらそんなことを考えていた。

「まだ……決心は付かないのかな？」

真新しいちゃぶ台。あの墓場のような湾岸地区のアパートを後にしたときにすべての家具は処分した。新しい生活が始まる。そう確信していた。水島にとってそれはまさに再出発のはずだった。

だが目の前で頬杖を付く少年を見るとそれがいかに浅はかな考えだったのか思い知らされてくる。再出発なんてできるわけがない。過去のない人間なんていないのだから。過去とのつながり、過去との折り合いを付けることを放棄したときから今の脅迫めいた目つきをする恐ろしい餓鬼の瞳を目にする運命にあった。そう思ってしまったところで急須を持つ手の震えを止めることなどできない話だった。

水島を苛立たせる嫌な目つきのクリタ少年の隣では例のキャシーと名乗る少女が目をつぶってじっと俯いていた。今日は玄関から来た二人。その二人が当然のようにこの水島の住処にたどり着いて腰を据えてからずっと彼女は同じ姿勢を保っていた。

「そちらのお嬢さんは……何を？」

他に言うべき言葉が見つからずに吐きだした水島の言葉が届いたのか、ようやくキャシーは顔を上げた。だがその目は浮ついていて水島を見ているとは思えない。

「ご馳走になりますね」

相変わらず長い黒髪を揺らしながら静かに湯飲みに手を伸ばした。クリタ少年はそれを見てもまだ目の前の湯飲みには関心が無いというようにキャシーを見つめる水島の観察を続けていた。

二人の能力をサーチしすれば逃げ出すことはできるかもしれない。だが、一体どこに逃げればいいのか？水島には分からなかった。恐らくサーチを始めた段階で気づかれて少なくとも水島に敵意を持っている二人の同類を敵に回すことになる。それから先にできるこ

とと言えば警察署に自首する位のことだろう。

そんな水島の動揺を見透かしたようにクリタ少年は満足げな笑みを浮かべた。目の前で湯気を立てる自分のための茶を断る理由はないと言うように手を伸ばし当然のように音を立てて啜り込んだ。

「そう言えば……もうそろそろ僕のタレこんだ情報を東都警察もつかむころだよ……」

少年の言葉。水島は手にしていた急須を取り落とした。ちゃぶ台から転がり落ちた急須はそのまま畳の上にひっくり返り残った茶をあたりにまき散らす。立ち上る湯気、しばらく言葉の意味が分からずに空転していた水島の頭の中にはつきりと『タレこんだ』という言葉が刻み込まれた。

水島は少年を睨み付けた。クリタ少年は表情を変えることなく水島を見つめている。悪事がばれた子供でさえもう少し悪気を感じた目の色をしているものだ。

「お……大人をからかうもんじゃないよ……」

水島は自分の喉が動揺で震えているのを感じながらどうにか言葉の体をなしたというような音を口から出した。それでもクリタ少年の表情は笑みで埋め尽くされたまま変わることがない。

「からかってなんかないさ。むしろ文句を言いたいのはこちらの方なんだから。おいたはするなってあれほど念押ししていたのに……事件を次々と起こしちゃってさ……」

クリタ少年はそう言うのと静かに湯飲みをちゃぶ台に置いた。

そしてその瞳が上目がちに水島を捉えた。その虚ろな姿。恐怖というものの、それまで考えていた恐怖というものの具体的な形を初めて見た水島はただ動けずに座り込んでいた。

「これ以上は我々は待てないってことだよ……分かったかい？ お馬鹿さん」

少年から聞くとは思えない言葉が部屋に響いた。水島は再び意識して少年を見たがそこには見慣れてきた単純に事態を楽しんでいる少年らしい笑顔があった。それでも先ほどの少年の顔に浮かんだ恫

喝の視線は水島の脳裏から離れることは無かった。頷くこともしやべることもできずにただズボンの膝のあたりに染みこむお湯の温度だけを感じていた。

「どうやら水島さんは私達と来る気は無いみたいね」

ぼつりとキャシーがつぶやく。水島は必死になつて首を振ろうとするが金縛りにあつたように体は言うことを聞かない。

「ああ、それならあと三時間くらいこの部屋で過ごすと良いよ。それだけ待てば東都警察も重い腰を上げるだろうからね。それとも動くのは保安隊かな？まあどちらでもいい話なんだけどね、僕にとつては」

何とか金縛りを解こうと力を入れた拍子に水島の脂肪の厚い腹がちゃぶ台にぶつかって揺れる。その弾みで少しこぼれたクリタ少年の目の前の茶色い湯飲み。それをハンカチでぬぐいながら手に取るクリタ少年はどこまでのその見た目通りの10歳に届かない少年だった。

思えば彼が米軍と関係する組織の人間だと言うことは彼自身の言葉意外に証明するものは何もなかった。その言葉にはどこことなく信用できない雰囲気がまわり付いていると水島は思いたかった。隣の少女も多少クリタ少年よりは分別がありそうには見えるが彼女から有益な情報が聞き出せると言う雰囲気は丸でない。事実今も再び目をつぶって俯いて水島が言葉をかけたとしても返事をしてもらえないかどうかすら定かではない。

「東都警察……違法法術行使は懲役2年だね……これまでの起訴事件は三件。判決が出た一件は法術に対する使用者の軽い思い違いがあつたということで執行猶予の判決だったはず……」

とりあえず沈黙に耐えきれずに水島は聞きかじった知識を口に出してみた。だが少年の笑みは崩れることは無い。それどころかそう水島が言い出すに違いないと読んでいたと言うように満足げに頷いてさえる。

「それはまた……ずいぶん希望的な見方をなさっているようですわ

ね。確かに私もその話は聞いています。駐車場に止めてあった車のタイヤをバーストさせたおじいさんが被告だった話ですわよね、その事件は」

珍しく少女が口を開く。水島は驚きとともに少女を見つめた。はつきりとその黒い瞳は水島を見据えていた。反論は何もない。事件の詳細については水島も少女の口から初めて聞いたくらいだった。

少女はそのまま湯飲みの中に視線を落とした。沈黙の後、静かに茶を口に含む。

「確かに僕の場合とは違うね……死者が出ているから」

「ご存知ならいいんです。なら迷うことは無いと思うのですが……」

そう言う少女は珍しくちゃぶ台の中央に置かれたみかんに手を伸ばした。水島はただひたすら反論の材料を頭の中から引き出そうとする。

「それなら……実験材料や戦争の小道具に使われるなら……牢屋の中のほうがずっとすごしやすいと思うんだけどな」

水島の苦し紛れの一言。少女は剥いたみかんの袋を一つ手に取ると口に放り込む。クリタ少年は動揺する水島の様子が本当に面白いと言うように相変わらず頬杖について笑っていた。

「それも甘いですね。あなたの犯罪については同盟司法局が動いています。同盟司法局は名前の通り遼州同盟の司法執行機関です」

「だから何が言いたい……」

「言いたいことがあるのはおじさんじゃないの？」

クリタ少年はそう言う顔で顔を上げる。そのまま背筋を伸ばしてじつと水島を見つめてきた。

「自分の能力はどんなものなのか？東都警察はそれをどう見ているのか？同盟司法局は？そして僕らは？こんな話を聞く相手、そうはいないと思うんだけど」

確かにその通りだと水島は思っていた。自分の経験など法術と言う奇妙な存在がこの国で知られるようになってからはまるで役に立

たない。

会社を解雇され、住む場所を失って居場所を探すのにも苦勞して、そしてこうして目的を見つけたとしてもそこには悪意に満ちた会いたくも無い化け物達が待ち構えている。

「それなら僕は……どうしたら良いんだね？」

ようやく搾り出した言葉にクリタ少年はうれしそうな表情を作った。

「ようやく分かってくれたんだね。じゃあ……少し待っててくれるかな」

そう言うときクリタ少年は湯飲みを置いて立ち上がった。黒髪の少女もまた仕方がないというような表情を浮かべて立ち上がる。そしてクリタ少年は背後の何もない空間に銀色の板を展開させた。『干涉空間』と呼ぶというその空間は空間制御系法術師が展開できる能力だという説明はクリタ少年から以前受けていた。その板は少年の意識によるコントロールでどんな場所ともつなげることができる。この家に突然現われる少年の行動で水島はその事実を思い知らされていた。

「とりあえず僕のボスに話をつけてくるから。安心して待っていてくれても良いよ。それと東和警察や保安隊が来たら抵抗しないでそのまま捕縛されても……」

「逮捕されると？ 本当に大丈夫なんだね？」

弱みを握られたような表情で水島は干涉空間に消えようとするクリタに声をかける。

「なに、外交官特権でどうにでもできるからさ。数日くさい飯を食べていれば自由の身さ」

「自由……？ ふざけたことを」

つい本音を水島がこぼしたのを見ると黒髪の少女が初めて見るような素敵な笑みを浮かべた。

「じゃあね」

クリタ少年の言葉とともに干涉空間は消滅して何も無い部屋に戻

る。

「食べる為なら何でもするさ。この国が僕を必要としていないなら僕を必要とする悪魔にでも魂を売ってやるよ」

つぶやいた水島。そしてそのまま自分の注いだまままで冷めている茶をゆっくりと飲み干して立ち上がると手にしてい行政訴訟の判例集のノートを思い切りよく引き裂いた。

トレンチコートの男は夕闇が迫る路地に立っていた。その目の前には古びたアパートがある。男は周りを見回した。子供の声が遠くで聞こえるが見る限り人影は無い。それを確認すると桐野孫四郎はコートの下からまるで図面でも入れるためのような長い紙の筒のふたを開けた。逆さにして滑り出した物の重量がどっかりと桐野の左手にのしかかる。それは図面などではなく真剣だった。『備前忠正』。桐野はダミーのつもりで入っていた図面入れを投げた。そしてそのまま朱塗りの鞘を静かに払って鞘をベルトに指した。その動作はあまりに自然だった。アパートの一階に並ぶ洗濯機の列の乱れて汚れた感じと比べれば桐野の一連の動作の方が理にかなっているように見る者がいれば思ったことだろう。だが誰もその姿を見る者はいない。そして桐野はさも当然のようにそのままぎしぎしときしみをあげる作りの悪い階段を昇った。

彼の意識はすでに人を斬るときのものに切り替わっていた。意識でたどれる範囲では法術の気配は無かった。アパートの二階の四つの部屋。目的の一番奥の部屋までの三つの部屋には人の気配自体が無かった。このアパートに着いた直後に桐野を襲った脳髓を刺激するほどの力の存在はすでに消えうせていたのが残念に感じられた。

「時間だな」

そう言うとき桐野は目的の扉に向けて体当たりをかました。安い板とアルミの枠でできた扉は大柄な桐野の体当たりで見事に押し破られた。

「うわ！」

飛び込んだ部屋の中に一人のうだつの上がらない中年男が腰を抜かして倒れている。突然の出来事に混乱しているのは見れば分かる。桐野はすでに何人もの人を殺めたが、彼の手にある真剣を見て驚くその表情はどれも同じで時々デジャブーを見ているような気分にな

る。今もまたそんな気分で腰を抜かしたままじりじりと部屋の奥へ這っていく男を玄関先で見下ろしていた。

「失礼したね……どうやら驚かせてしまったようだ」

そう言うのと桐野はそのまま土足でアパートの一室に上がりこんだ。男は奥の窓の下に張り付いてただ震えながら桐野を見上げている。意識してか、無意識にか。その手にしている引き裂かれたノートが何かをその貧弱な男が決意したことを示しているように桐野には見えた。

「水島……勉強さんだね」

自分の間合いに入ったところで静かに桐野は男に尋ねた。そのいかにも平和に慣れ親しんできたと言う水島の顔の周りの肉。自分のこれまでの境遇とはあまりにかけ離れたその造形に桐野にはふつふつと殺意が沸き上がってくる。だがそれに身を任せるのはいつでもできることだった。窓から没した太陽の残り火が差し込む中、桐野は黙って震える水島を見下ろしていた。

「そう……ですけど……あなたは？」

泣き叫ばないだけましなのか。桐野は震えながらも自分の名前を聞いてくる水島を見て少しばかり感心した。顔は恐怖で引きつっているが、桐野の頭の中を必死で探っている水島の力のかけらは感じている。力には力で応じる主義の桐野は右手に握った刀の柄に力を込めた。

「なんだ……旦那。先にはじめちゃったんですか？」

入り口の壊れたドアを呆れたように見つめている男がさらに現れた。その革ジャンと洗いざらしのジーンズ。その姿を見て水島の表情が明るく変わる。しかし、その希望は馴れ馴れしく桐野に話しかけている事実を見れば自然に霧消する儚い希望に過ぎなかった。

「さっきまでいたのは……どこですかね？ゲルパルトのネオナチの旦那達……東モスレムの原理主義者連中……それとも？」

革ジャンの男、北川公平は見慣れた桐野の手荒いやり口に苦笑いを浮かべながら目の前で震えている水島に気づいてそれを見下ろし

た。水島はその目を見てすぐに気づいた。その革ジャンの男の方が刀を手にした大男より信用に足らない。おそらくは革ジャンの男が今回の襲撃を仕組んだ本人で刀の大男はただの手駒に過ぎない。

水島は混乱していた。クリタ少年の言葉通りなら彼の部屋の前には紳士的な東都警察の捜査官か兵隊やくざの保安隊の武装隊員が現われるはずだった。だが目の前にいる二人は警察官にも軍人にも見えない。無頼漢。まさにその言葉がぴったりと来る二人のコンビをただ黙って見上げる水島。

『おじさん……ピンチなの』

頭の中でクリタ少年の声が響いた。

「なんでだ！話が違うぞ！」

「話が違う？なにも俺は話してないですけど……」

革ジャンの男の言葉に水島は我に返った。

「北川。たぶんこいつはどっかの勢力に買われたんだろ。そいつからの思念通話だ」

落ち着いて分析してみせる刀を手にした桐野の死んだような表情に水島は死を直感した。ゆっくりと刀が振り上げられる。

「飼い主が決まるまで静かにしていれば良かったのにねえ……それともたった今落札されたところかな？だとしたら運が悪かったね」

北川と呼ばれた革ジャンの男の笑み。自分が斬り殺されるのを覚悟しながら恐怖に震えるしかない自分に呆れながら水島は考えていた。

『助けてくれ！』

次の瞬間、振り下ろされた桐野の刀は何も無い畳に突き立てられた。桐野はその独特の感覚から一瞬だけ干涉空間が目の前に展開されたことを悟った。すぐに備前忠正の刃に目をやる。

「刃こぼれは無いか……」

「何言ってるんですか？旦那。逃げられちゃったじゃないですか」

北川はそう言うと言水島が消えた畳を丁寧にさする。

「いい飼い主が見つかったようだな。他にも空間制御系の能力者、

しかも有力な奴を飼っている。なかなか面白い展開だ」

暗がりの中に光る刃をじっくりと眺めた後、静かに鞘に収める桐野。その不満そうな表情を見ると北川はいかにも滑稽なものを見たというように爆笑を始めた。

「何がおかしい」

「旦那……せっかくの得物に逃げられて無様に刀を納めるなんて……」

「そういうオマエは逃げられてそのまま帰るつもりか？」

不愉快そうにつぶやく桐野に笑みを浮かべると北川は長身の桐野の耳元に背伸びをしてつぶやく。

「なあに、相手の法術師はやり手みたいですが……詰めが甘いですね。飛んだ先も俺のテリトリーの中ですよ。場所は割れてます。行きましょう」

そう言うとそのまま部屋を出て行く北川。彼の背中を見ながら桐野は剣を手に古いアパートの壁をさすりながら用がなくなった部屋を後にした。

水島のアパートまであと少しというところだった。信号待ちのためにかウラは車を止めた。

「おい、西園寺……何かあったのか？」

カウラは後ろの席の要に声をかけた。右足を車の後部座席に突っ込んだまま右手を耳に当ててじっと動かない要。それは彼女の脳の中に埋め込まれた通信端末にアクセスしている時の彼女らしい態度だった。

「西園寺さん……」

心配して声を掛けた誠の顔面に要の右ストレートが炸裂する。そのまま誠の体はアイシャの頭のある助手席の背もたれに激突する。そしてすぐに苦々しげな笑みが要の顔に浮かんた。

「どこかの馬鹿野郎が水島のアパートにカチコミをかけやがった。騒ぎを聞きつけて駆けつけた巡回の警官二名が重傷だ」

「後手を踏んだか……で？そのあとは？」

いつもなら車が傷つくと言文句を言うカウラだが冷静に後部座席の要に振り向いて尋ねる。隣ではアイシャがすでに端末を取り出して検索を掛けていた。

「出てきたのはダンビラ片手の大男だそうだ。防弾ベスト越しに二太刀浴びせた後は忽然と銀色の円盤の中に消えたそうだ……そりゃあ干渉空間だな。やられたよ」

要はそう言うと言制服のポケットに手を伸ばしてタバコを取り出したがさすがにそれを許すほどカウラは寛容ではなかった。睨み付けられるといつもの卑屈な笑みを浮かべて要はタバコを仕舞った。

「警察も非常線を張ってるみたいだけど……空間跳躍をする相手に何をやっているのやら……。それにしても先を越されたわけね……。どうするの？」

助手席で携帯端末の検索結果から視線を離れたアイシャの目がカ

ウラに向かう。誠はただ黙って指揮官の表情のカウラを眺めていた。

「西園寺。他に死者や怪我人は出ているのか？」

「怪我したのは警官だけ。斬り付けられた時に悲鳴を上げてそれに驚いて飛び出した近くの住人がいるそうだが……顔とかを見る余裕も無かったらしい。単独犯かどうかも定かでは無いみたいだな」

「カウラちゃん。こうなったらいっそのことのんびりと怪我をしたおまわりさんの回復まで待ちましょうか？」

アイシャの笑み。明らかにカウラを挑発しているような雰囲気。その言葉がカウラに迅速な行動を強制していることだけは確かだった。誠はそんな彼女を一瞥した後あごに右手の親指を当てて考え込んでいるカウラに視線を移す。

「例の人斬りかどうかは分からないが、警官相手に冷静に刀を振えるそういうことに慣れた人物。それに大男の仕業かどうかは別として干涉空間を展開できるだけの法術師が動いている。ターゲットが留守だと言うのに行われた騒ぎだとしたらとてつもない馬鹿だったと言うことだが……そんな馬鹿が今まで東都警察の捜査網に引っかからないで闊歩していったとは考えにくいな」

カウラの推察にアイシャは同感というように頷く。

「恐らく水島とは顔を合わせたが逃げられた……斬殺魔以外にも水島さんとやらの接触している勢力があるわけね……しかもこちらも干涉空間を展開できる手練れ付き。厄介なことになりそうじゃないの」

そう言うときアイシャはそのまま助手席の扉を開けてカウラの赤いスポーツカーの後ろに回りこんだ。カウラはそれを見てトランクの鍵を開ける。開いたトランクに上半身をつっ込んだアイシャはそのまま鮮やかなオレンジ色に染められたショットガンを取り出した。そしてそのまま車中にショットガンを突き出してくる。夕闇の中、あまり車の通りの多くない大通りの中央で銃の受け渡しをしている姿は極めて目立つものだった。誠がなんとか銃を受け取りながら周りをみるといつの間にか何人かの通行人が珍しそうに歩道で立ち止

まっているのが見える。アイシャが東都警察の制服を着ていなかったら通報されていたかもしれない。

「要ちゃん。ラーナちゃんに連絡つく？」

「例の警邏隊に仕掛けたアストラルセンサーか？頼りになるかねえ」

「他に手段が無い」

渋る要を一瞥した後カウラはそう言う。アイシャから銃を受け取ってそのままダッシュボードを開けた。中にはオレンジ色の紙箱が入っている。カウラはそれを躊躇無く開け、中から取り出した低殺傷性弾薬を薬室に装填する。

「誠ちゃんも」

助手席に戻ったアイシャから低殺傷弾薬を受け取った誠もまねをして初弾を装填する。要も同じく銃を手にしてにんまりと笑いながら弾を込め始める。

「どこまで干渉空間を使つての転移ができるかはわからないが……突然の襲撃を受けてとなればそう遠くには飛べないはずだ。上手くいけば警邏隊のアストラルゲージに動きが見れるはずだ」

「あくまで希望的な推測だと言うわけね」

そう言う。アイシャは自分の銃を手にして初弾を装填した。

「人事を尽くしたんだから後は天命を待ちましょう」

アイシャの言葉に誠達は大きく頷いた。

飛び込んだ銀色の板の向こう側。埃のたまったコンクリートの上に頭を打ち付けて水島は困惑しながら周りを見渡した。

暗い。すでに日没後だ。しかもあたりを見れば壁材が剥がれて裏のコンクリートが露出した壁で覆われた一室。元はマンションだったのか、事務所だったのか、それすら分らないほど何もない空虚な部屋。じつとここに座っているほど水島の肝は据わっていない。

まず水島はとりあえずこの場から遠くに去ろうと比較的ましに見えたアルミ製の扉を開いてそこに飛び込む。

人気はない。見渡せば廊下のような場所だった。遙かに続く薄暗がりの中、先ほど振り下ろされた日本刀がどこにも見えないことに気がついて安心した水島はその場にへたりこんだ。

『これまたずいぶんとおどろいちゃって……』

まるで人ごとのような少年のつぶやきが頭の中に響く。

「どこにいる！お前が呼んだのか！あの人殺しを……」

冗談の過ぎる少年の言葉に叫び声で答える。しかしどこにも人の気配はしない。そして水島はとりあえず廊下をそのまま歩き続けた。ドアに付けられたプレートやご丁寧な手すり。どうやらここは廃病院らしい。だがそれが分かったところでどうなるものでもない。

しばらく歩いても人の気配は無かった。むしろあちこちの壁の傷み具合からみてそれなりの年月放置されてきた建物だと言うことは分かる。割れた窓ガラスが靴下だけの水島の足に突き刺さった。

「痛っ」

思わず後ずさる。調剤室のガラスが砕かれ、それを割るのに使ったらしい水道管の切れ端がカウンターの下に何本も転がっている。その有様を見て水島はここが誰の目からも離れた置き去りにされた場所だと言うことを確認した。

『僕がアイツ等と呼んだだって？おじさん……人間きの悪いことは

言わないでよ。僕だってあんな化け物が来るとは思ってたんだから……」

足の裏の痛みを指すって誤魔化す水島の頭の中ににやけた笑いを浮かべたクリタ少年が映る。忌々しげに手元に落ちていた水道管を手にとってガラスの破片を迂回して進む水島。

「化け物？じゃあ知っているんだな、あの日本刀の男のこと」

『一応、噂ではね。でも僕にも守秘義務があつてさ……生きてそこを出られたら教えてあげるよ』

「無責任なことを言うな」

怒りに駆られた水島は思わず目の前の壁を水道管で叩いた。火花が散るがただそれだけ。ぶつかった部分の塗料が剥げ、コンクリートの地肌が顔をだす。そうしているうちに水島は偶然かつては床を覆っていたらしい元の色すら分からないほど埃にまみれたタイルの下にスリッパの山があるのに気がついた。

水道管を投げ捨て、スリッパに手を伸ばす。どれも湿気で黴を生やしているが何も履いていないより遙かにましだ。そう思いながら水島は左右のスリッパを見つけると足に履いて履き心地を確かめる。『あのさあ、そんなに暴れていいの？さっきの化け物。恐らく僕がおじさんを飛ばした場所を見つけているころだよ……逃げるなら今のうち……』

少年の言葉が終わらないうちに水島は走り出した。目の前に階段がある。とりあえずそこを駆け下りる。廊下や壁を見てようやく自分がいる廃墟が病院のあとであることに気づく。

『おじさんストップ！』

頭の中でまたクリタ少年の声が響く。驚いて壁に張り付き息を整える。

『来たよ。ぴったりさっきおじさんがいた場所だ。逃げた分だけ遠くなったよね』

「責任を取れよ……貴様らに協力するんだから……ちゃんと助けてよ……」

運動不足の水島には恐怖と戦いながら廃墟を巡るのは酷な作業だった。百メートルも移動していないというのに心臓は激しく波打って息もかなり上がってきていた。

少年の満足そうな笑みが頭の中に浮かぶ。

『まあ、できるだけのことはするつもりだよ。もったもおじさんがなかなか決断してくれないからできることは限られているかもしれないけどね』

焼け石に水と言うような調子の言葉を最後に頭の中から少年の気配が消えた。水島はその時になって初めて自分が本当の意味で孤独であることに気づいた。

東豊川を流れるゆたか川の下流へ向かう堤防沿いの道をヘッドライトを灯したスポーツカーが走っていた。

「ラーナ。間違いはねえんだな？」

『はい、反応は新東豊川病院跡で途切れています。再びの法術発動の気配はありませんから……』

ショットガンを肩に担ぐようにして狭いカウラの車の後部座席にふんぞり返る要。誠は身を小さくしてショットガンに何度となく頭をぶつけながら黙って座っていた。

「要ちゃん。もう少し詰めてあげてよ。誠ちゃんが苦しそうじゃない」

「は？ いいんだよ。これで少しは体がやわらかくなるだろう？ こいつの投球フォームにはもう少し柔軟性が必要なんだ。このくらいのことには耐えてもらわねえとな」

屁理屈をこねる要。誠は苦笑いを浮かべながら要の言葉に頷いていた。たしかに最近の実業団のチーム同士の練習試合では腕の振りが鈍っているのは自分でもよく分かっていた。

「それより……間に合うのか？」

「間に合わせてみせるさ」

要の疑いを愚問だと言うように何もない堤防沿いの道に車を走らせるカウラ。フロントガラスには近辺の地図とラーナから送られてきている法術反応のデータが表示されていた。

「廃病院で鬼ごっこ。こりゃあ楽しくなりそうだ」

「不謹慎ね、要ちゃんは」

「そう言うオメエも顔がにやけてるぜ。戦闘用の人造人間の闘争本能でも出てきたのか？」

「まあ否定はしないわよ。でもまあ……辻斬りの犯人に茜ちゃんより先にお目にかかれるとは……運がい良いのか悪いのか……」

振り向いたアイシャの目がぎらぎらと光るのが誠の目からも見て取れた。

「あのー。嵯峨警視正は？」

誠の言葉ににんまりと笑う要がいた。その姿に誠の背筋が凍りつく。

「ラーナの奴が連絡済だ。今のところアイツが動いた気配が無いところから見てアタシ等が本当に例の辻斬りかどうか確認するまで動けない状況なんだろう」

「まーそれは残念。みんなまとめて捕まえちゃいましょうよ」

「クラウゼ。気軽に言うものだな」

アイシャを口ではたしなめているカウラ。だがそのバックミラーに映る彼女の顔は楽しいことが待っているとでも言うように微笑みに満ちていた。誠はそんな雰囲気飲まれないうようにと唇を噛み締め銃を握り締めた。

急カーブを切ったスポーツカーの中で誠は思いきり顔面をショットガンに打ち付けた。

そして車は急に止まる。川べりに立つ巨大な廃墟。こんなところがあったのかと誠は度肝を抜かれた。

「こんなところがあるんですね……って！」

「ごちゃごちゃ言うんじゃないよ！とっとと下りろ」

要に蹴飛ばされて何とかカウラのスポーツカーの狭い後部座席から転がるようにして廃病院の中庭に出た。

「なんでも……菱川重工の併設病院ができたおかげで経営が行き詰まっってこうなったらしいわね……って走るわよ」

いつものようにどこから仕入れたか怪しい言葉を吐きながらアイシャが銃を持って走り出すのに誠達も続く。割れた正面玄関の扉はガラスもほとんどが砕け、それを固定していた針金も朽ち果てていた。

「本当にお化けが出てきそうよね……要ちゃん、平気？」

「何でアタシに振るんだ？」

「こういうとき要ちゃんみたいなキャラがお化けが苦手でお荷物になると面白いかなーとか思ったんだけど」

「アニメの中じゃねえんだよ。アタシはお化けよりよっぽど生きている人間の方が恐ええよ」

そう言うとき要が先頭を切って割れたガラスに気をつけながら病院の中に入った。

「こりゃあ……見事な廃墟だ」

要の言葉も当然だった。壁は落書きに覆われ、あちこちに雑誌や空き缶が転がっている。足元を見れば焚き火をした後らしき焦げた跡まである。

「間違えて悪戯しにきた餓鬼を殺さないようにするには一番の得物だな……」

自虐的に笑って手にした銃を見て笑う要。誠も自分達の持っている銃に入っている弾が殺傷能力の低い弾丸を使用したものだということを思い出した。

「とりあえず分かれたら危険だ。西園寺がポイントマン。クラウゼが後衛を頼む」

「だろうな……」

「了解っと！」

要が銃を構えてそのまま走り出す。誠とカウラはそれに続いた。一階のかつては診察室だったらしい部屋の並ぶ廊下で要が足を止めた。そのまま一つ目のドアを指差し突入するべきかとカウラにハインドサインを送る。

頷くカウラ。それを見た要はそのまま半分朽ちた扉を蹴破って中に入った。

「なにやってるのよ！」

「でけえ声出すんじゃないよ！」

「先に扉を蹴破って大きな音を立てたのは要ちゃんですよ！」

何も無い診察室の中に飛び込むとすぐさま喧嘩を始めるアイシャと要。カウラはこめかみに手を当てながらいつものように呆れて二

人が口を閉じるのを待った。

「結構広いから大丈夫なんじゃないですか？」

『そんなわけ無いでしょ！』

アイシヤと要がせっかく仲裁に入った誠を怒鳴りつける。落ち込む誠の肩を叩きながらカウラは部屋から外を眺めた。

「全く……一人の方が向いてるぜ、アタシには」

そう言う要はカウラを押しつけて周りを見回した。彼女の目は闇夜には向いていた。眼球にはスターライトスコップが仕込まれていて、もうすでに太陽が沈んで暗がりばかりになった廃病院の何も無い光景を見通すことができた。

「ラッキーだな。誰もいねえよ」

そう言うショットガンを構えながら走る要。誠達もその後に続いた。物音は誠達の走る靴の音ばかり。ただひんやりとした空気を頬に感じながら誠は走った。

要が階段の手前で立ち止まると中腰で手で後続のカウラ達に止まるようにサインを出した。

「誰か……」

確認をしようと口を開いた誠の口元に要が指を差し出して制止する。そして指で上の階を指すと一人の人物がそこにいると言うハンドサインを出した。銃を握り締める誠。その不安そうな様子にニヤリと笑みを浮かべた後、要は静かに階段を登りはじめた。

誠にもしばらくして気配が感じられた。何かを探していると言うような雰囲気や頭の中を駆け巡る。

『水島勉の法術発動かな……でもそれなら……』

考え事をしていた誠は階段の端にあった窓ガラスの破片を踏んで音を立ててしまった。

「誰だ！」

高めの男の声が響いたので誠達はそのまま声がしたあたりから見えないようにそのまま身を暗闇に沈ませた。

「まったく……桐野の旦那も困ったもんだぜ……」

悪態を付きながら声の主は遠ざかっていった。

「桐野の旦那？」

ささやくような声で誠が要に目を向ける。

「桐野……聞かねえ名前だな……」

曖昧に首を振る要。アイシャも難しい表情で黙り込んでいた。

「先ほどの声の声紋は取れたか？」

カウラの一言に驚いたように顔を上げたあとで黙り込む要。

「間違いない。あれは北川公平だ」

「すると……動いているのは『ギルド』？勘弁してよ……」

アイシャはそう言うと言を振ってお手上げと言うように手を広げる。誠も彼女の放った『ギルド』と言う言葉に少しばかり恐怖を感じ始めていた。

遼南王朝の手足となって働く法術師集団。何度とない政変で今は王朝の支配を離れ、『太子』と呼ばれる長髪の大男に率いられていると言うテロ組織。近年は遼南のイスラム原理組織や外惑星のゲルパルトのネオナチ系の非合法組織と連携しての動きを水面下で見せている。そのことはランからも聞いていたので事の大きさを誠も自覚した。そしてその『ギルド』でも『太子』直轄で動いている法術師の北川公平が動いている。その事実自分達の独断専行と取られかねない出動が拙速だったことを知らしめるには十分な出来事だった。

「相手は『ギルド』。しかも正体不明の人斬りとこれも能力の判定ができない法術師のおまけ付き。仕切りなおす？」

「馬鹿言うんじゃないよ……ここで逃げたらシャムに笑われんぞ」

「シャムちゃんはこのときは笑わないと思うわよ」

「いちいちうるせえアマだなあ」

アイシャと要がちやごちやと喧嘩を始める。黙って二人を見つめていたカウラだが覚悟を決めたと言うように顔を上げた。

要は静かに階段を登っていく。誠とカウラはその様子を見ながら静かに彼女が登りきるのを待っていた。

そのまま顔を出した要。そしてそのままついて来いというハンドサインを出す。誠、カウラはそのまま銃を手にゆっくりと階段を登った。

「アイツ等も水島とかいう奴を見失ってるみたいだな」

そう言うとは要は静かに銃を小脇に抱えたと腰の拳銃に手を伸ばした。

「やるのか？」

「丸腰とは思えねえからな。とりあえず確認しただけだ。ちゃんと入っているな……弾」

「要ちゃんらしくも無いわね。緊張してる？」

後から追いついたアイシャの言葉に力なく笑みを浮かべる要。状況としてはいつもの強気が要に無いのは誠にも理解できた。

「恐らく『ギルド』の連中以外にも水島をここに飛ばした法術師を擁する勢力の介入が予想されるわけだ。慎重に動くだろうな」

カウラは前方をうかがう要の後ろから声をかける。

「確かにそう簡単に尻尾を掴ませない奴等の事だ。相手によっては無理はしねえだろうな……ネオナチ連中だと数で来るそうになると怪我じゃすまねえ事くらいの分別はついてるだろ」

要の表情が再び曇る。そして誠と目があつた要は自分の弱気を悟られまいとそのまま北川が消えていった方向に眼を凝らす。

「実弾は……カウラちゃん持ってる？」

「スラグ、散弾ともに無しだ。場合によってはこちらでやるしかないな」

今度はカウラが腰の拳銃を叩く。誠もさっと腰に手をやる。

「誠ちゃんは期待していないから良いわよ」

「すみません……」

謝る誠に笑顔で返すアイシャ。それを見て舌打ちした要はそのまま立ち上がって北川の歩いていった方に歩き始めた。

「無駄口はいい、進むぞ」

カウラの声に誠の顔から笑顔が消えた。次第に闇夜に沈む廃病院。

要の目に内蔵された暗視機能と誠の法術師としてのサーチ能力に頼る前進。

北川の足音が次第に遠くなる。誠は要についていきながらただどこからか飛び出てくるだろう第三勢力を想像しながらショットガンを構えながら進んでいった。

「何でこんなことに……なんでこんなことに……」

震えていた。水島はただ狭い書庫にしては大きすぎる棚の中で震えていた。気配の数が増えたのを感じる。警察か……それとも他の組織か……思いを巡らす度に恐怖が増幅される悪循環に思わず頭を抱えた。

『それはね、おじさん……あなたに力があるからですよ。力がなければあなたなんかだーれも目なんてくれないよ。でもあなたにはそれがあつた。そしてそれを使ってしまった。力があるって事はそれだけで責任が伴うものなんだよ。それを無視したから……ああ、知らなかったなんて世の中じゃ通用しないよ。いい大人なんだからそのくらい分かるでしょ？』

頭の中であざ笑うようにクリタ少年の声が響いた。だが水島には今は震えること以外はできるはずも無かつた。

「知らなかったのがなぜ悪い！俺は知らなかった！こんな目に遭う事なんて知らなかったぞ！君だって何も言わなかったじゃないか！」

誰かに聞かれるかもしれない。そんなことは今は関係なかつた。叫ぶ。恐怖に打ち勝つのに水島ができるただ一つの抵抗だった。

しばらくしてそんな無謀な水島の行動を窘めるような別の感覚が頭に入り込んできた。冷たい、感情が死んだような感覚。初めてのその感覚に水島は我に返って医務室だったらしいこの部屋の机の下へと体を滑り込ませた。

『申し訳ありません。ジョージは悪戯が過ぎましたね。この事態はあなたの逡巡が招いたことは事実として……合衆国はあなたにはいくつか保障したいことがあります』

キャシーと名乗った女性らしい声が脳内に響く。水島は今となつてはただ静かに頷くしかなかった。

『まずあなたの身の安全。これは我々も守らなければならない義務が生まれる可能性があります……』

「可能性だって？この期に及んで何が望みなんだ？」

叫びたくなるのを我慢しながら水島は小声でつぶやく。無表情なまま水島の言葉の意味を反芻しているだろう少女の顔を思い出すと水島の怒りは爆発しそうになった。

『あなたが我々に今後無条件で協力すると言う意思を示さない限りは、我々にあなたの安全を守る義務は発生しません……忘れませんか？あなたはすでに一人の人物の命を奪っていることを。他国の法を犯した者を匿うリスク。考えてみれば当然のことではありませんか？』

少女の声。抑揚を殺している脳内に響く声に水島は自分を罰しようとしているような少女の表情を思い浮かべて苦笑した。

「確かに……それは事実だけど……不可抗力と言うか……」

『不可抗力？おじさんはストレス解消に放火や器物破損を繰り返してきた犯罪者なんだよ。それをすべて帳消しにしてあげるんだから……それなりに待遇が悪くなるのも我慢しなきゃ』

クリタ少年の言葉はその通りだった。それだけに水島は苦悩の表情を浮かべたまま錆の浮いた事務机の脚にしがみつく手に力を込めることくらいしかできなかった。

「分かった！なんでもする！」

いつの間にか自分が叫んでいることに気づいて口を押さえる水島。確かな気配。それも水島の力では進入を拒む意識を持った独特の気配。一瞬だったとは言え忘れることなど無い。先ほどの斬殺魔の気配であることは間違いなかった。

『それじゃあ……すぐ迎えに行くと言いたいんだけど……』

危機が迫っていることは分かっている。その上でさらに水島を怯えさせて喜んでいるような調子のクリタ少年の声が響いた。

「なんだ？何かあるのか？」

『おじさんも分かっているでしょ？日本刀を持っている男、それにも

う一人そいつをサポートしている法術師の存在。そしてさっき第三勢力が到着した……勘が良いみたいだから東都警察じゃなくて保安隊かな？ともかく僕達は表に出るわけには行かないんだよ……タイミングを計らないとね』

クリタの言葉に水島は体が熱くなるのを感じていた。この騒動のすべての源。水島が法術適正があると言う事実がわかるきっかけを作った組織である保安隊。どこまでも自分の運命を振り回すその忌まわしい組織の名前を聞いて自然と奥歯を噛みしめている。

『そんなに熱くならないでよ。こういう時は冷静に動くのが事態を開くコツだよ。それに衛星軌道からの映像では連中はショットガンで武装しているみたいだね。場合によっては即座に射殺なんてこともあるかも……』

「射殺……？」

絶句する水島。憎たらしい保安隊が動いている。しかもその目的の一つは自分を射殺すること。そう言われて水島の体の緊張はさらに激しくなった。

『脅しなどはするものじゃないわよ。私達の手元の情報では彼等は確かに同盟司法局実働部隊、通称『保安隊』の隊員ですが、現在は東都警察に出向の身分です。東都警察はそう簡単に犯人の射殺を行なう組織ではありませんわ。警察官に保護されてそれを私達が合法的に引き取ると言うやり方も……』

「止めてくれ！警察なんか……警察なんか……それ以前に保安隊なんか……」

立ち上がるとそのまま薄暗い部屋を飛び出した。水島はその行動の意味を自分でもよく分からなかった。動けば殺される。そんな思いで扉の中に隠れていた自分。だが動き出したい衝動に駆られるとその本能のままに立ち上がり走り出していた。

『おいおい、おじさん大丈夫なのかな？』

楽しんでいるようなクリタ少年の声が頭の中で響く。だが水島はそのまま腐った鉄筋がむき出しの廊下の壁に沿って走り出す以外の

ことはできなかった。

「死んでたまるか……死んでたまるか……」

そうつぶやきながら階段を駆け下りたところで背後に気配を感じて水島は振り返った。

静かに北川に追尾する要。そして彼女に付き従う誠達。その行進は三階の開けたフロアーまで続いた。暗がりの中、不意に北川が足を止める。

「いい加減……出てきても良いんじゃないですか？」

北川の言葉に自分達の存在がばれたと思った要がショットガンの一撃を加えた。銀色に光る板のような干渉空間に殺傷能力の低い弾丸が中に入っている粉を振りまきながら飲み込まれた。

「消えた？」

要の言葉の通り北川の姿は干渉空間が消滅した時には消えていた。誠はすぐに北川の意識の断片が吹き抜けの階段に現われるのを確認して叫ぶ。

「上です！西園寺さん！」

階段の手すりを盾にするようにしてその上に銃口から光る赤い弾が二つ。それと同時に誠の正面にいた要は右肩を抑えて銃を取り落とした。

「西園寺さん！」

「来るな！他にもいるぞ」

要の叫び。そして再び彼女の前に銀色の干渉空間が出現する。次の瞬間には彼女の右腕が切り落とされて地面に転がった。一瞬見えた大男の影が再び消え失せる。誠は背後から襟首を捕まれて何もできずに北川の火線の中で孤立した要を置き去りにしてフロアー手前の壁際まで引きずられた。

振り向いた誠の目に飛び込む真剣な表情のカウラ。後衛にいたアイシャが孤立した要の元に姿勢を低くして駆け寄る。

「どこよ？どこにいるのよ！」

アイシャは誠の見上げていた階段に銃口を向けたまま叫んだ。

「このままじゃ……」

「お前には無理だ」

低威力のショットガンを見切ったカウラは拳銃を抜くとそのままフロアーの向こうの壁に張り付く。

今度は階段の反対側からの銃声。何とか残った左手で拳銃を抜いた要の手前で銃弾が跳ねるのが見えた。要をかばうように片膝を立てて反撃するアイシャ。カウラが要の元に飛び出してきたのは彼女の背後から大男が現われたからだった。

「このままじゃ……」

誠は銃を握りしめる。自分が行っても足手まといになるだけ。それは十分に分かっていた。カウラが廊下を悠々と歩く大男に発砲するが弾はすべて銀色の干涉空間に消える。

じりじりと大男が刀を手にしたままフロアーの中央で負傷した要をかばうカウラ達に歩み寄る。北川の発砲の様子は無い。大男は間合いが詰まったと判断したように太刀を大上段に振り上げた。

「うわー！」

夢中だった。誠は繰り返し発動する法術の気配を感じながら手にした銃を逆手に持って大男に殴りかかった。振り下ろされたショットガンのストックは男の前に展開された干涉空間にぶち当たる。

「こなくそ！」

力を込めて押し込む誠。その銃を中心に誠の干涉空間が展開される。男はそれまでの無表情を驚愕の表情に変え、背後に展開された干涉空間に姿を消した。

「馬鹿か！ 神前！ 銃はバットじゃない！」

カウラはそう言いながら周りの気配を探る。再び階段の上から銃弾が誠の足下を掠めた。

「カウラ！ がたがた抜かす前に銃を撃て！」

要は左手で無理に拳銃を取り出すと階段を駆け上がっていく北川の背中に三発の銃弾を発射した。

すべての弾丸が銀色の空間に消える。

「人斬りは！」

要が叫ぶ。誠のショットガンが空を切った辺りで構えていたアイシャのが広がった銀色の空間から現れた刀に両断された。

「なによ！」

アイシャは拳銃を抜いてそのまま転がるようにして壁に張り付く。再びこの階に転移してきた北川の弾丸がかつてアイシャのいた場所に着弾して煙を上げていた。

「西園寺！下がるぞ」

カウラの言葉で我を取り戻した要は切り落とされた自分の右腕をちらりと見た後そのままアイシャのいる壁際に後退してきた。

「とんでもねえ！ありゃ化け物だ」

ようやく北川の銃撃から逃れてきた要が吐き捨てるように叫ぶ。切り落とされた右腕の血は止まり。相変わらずひねくれたような笑みを浮かべながら北川が隠れていた物陰をにらみつける。

「西園寺さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫に見えるか？片腕切り落とされたら痛いぞ」

「それは分かるけど……」

腰の拳銃を取り出してけん制射撃をしながらアイシャがつぶやく。反撃がないことから北川がすでに移動していることはすぐに分かった。

「今からでも救援を呼ぶか？」

「なんだよ、救援呼んでなかったのか？頼むぜ隊長さん」

カウラを呆れたような顔で見るとすぐに立ち上がる要。

「片腕じゃショットガンは無理だな……神前、とりあえず弾だけ取っつけ」

そう言うと言は落ちていたショットガンを拾った。そしてそのまま誠に銃を差し出す。誠とは呆れつつ、ショットガンから弾を抜いてポケットに押し込んだ。

「あの刀の化け物と法術師のコンビネーション……舐めない方がいいわね。とりあえず法術師はこう言う場には慣れていないみたいだからそっちから潰す？」

「まあその方が賢いやりかただな。アタシ等に出会ったのは想定外の事件のはずだ。さもないやリボルバーとダンビラで喧嘩を売ってくる意味がわからねえ」

要はそう言うとそのまま北川のいた物陰に銃を向ける。

「やはりあちらも予想外な事態なわけね。となると……あの方々と私達。どちらが先に水島さんに出会うかが勝負の分かれ目になりそうね……私達は上がってきたけど運動不足の中年男には出会わなかった訳だし」

「となると上だな」

笑みを浮かべて周りを警戒するアイシャ。カウラもその死角をカバーするように位置をとって拳銃を構える。誠は緊張感に胃が痛くなるのを感じながら周りを見回す。

廃病院がつかの間の沈黙に包まれた。

「こっちも茜クラスの使い手がいれば楽なのにな……」

「西園寺さん、すみません」

頭を下げた誠を心底呆れたという顔で要が見つめ返す。

「謝って済むなら少しは鍛えろ。それじゃあ行きますか!」

要はそう言うに残った左手の銃を握り直すと先ほど北川が昇っていった階段を駆け上がって行った。

階下で銃声が響く。水島は反射的に頭を下げて廊下の腐ったタイルに這いつくばる。しばらくの銃撃戦の様子が聞こえる。そしてまだ遠くの出来事だというのに自分が晒している滑稽な姿を思い出してこんな状況だというのに笑いが起きてくるのを感じていた。

「な……なんなんだよ……まったく何がどうなっているんだ？」

『おじさんも鈍いね。さっき説明しなかったかな？ 保安隊だよ』
相変わらずのんびりとしたクリタ少年の言葉が頭の中に響く。

「銃撃戦をしているのか流れ弾でばったりなんて……勘弁してくれよ」

恐怖に震えながら一言。這いつくばっている水島の姿を想像しながら腹を抱えて笑っているだろう少年を思い出すとはらわたが煮えくりかえる思いがする。だが事実水島は今は無力そのものだった。法術師の気配はびんびん感じる。それほどげっぷがでるほどだ。だがどれも水島の手に負えるような甘い輩は一人もない。その中でも一番の力の引っかけかりを感じる存在の感情が水島と同じく恐怖のどん底にあるのが唯一の救いだった。

「馬鹿が一人いるよ……保安隊かな？ 力があるのにびびっちゃって……それでも軍人か？」

憎まれ口を叩いたところで誰も聞くものなどいないというのに。水島はそんな軽口を叩かなければ正気が保てない自分を腹立たしく思いながら再び立ち上がろうと手に力を入れる。

こんなに自分の体が重かったのか。そう感じるほど両の腕は緊張でこわばって言うことを聞こうとしない。なんとかよろよろと立ち上がった瞬間。水島の目の前に干渉空間が広がった。

どうにでもなれ。そう思って黙って壁に寄りかかって見つめていた空間から人影が現われる様。そこに敵意が無いのが分かるとようやく水島は足の震えを止めることができた。

だが現れたのはクリタ少年ではなかった。

「どうも……」

戦闘服に身を包んだサングラスの大男。手にした銃はごてごてした正規軍の銃などではなくやたらとスマートな見慣れない形をしている。あの少年が連れてくる助っ人。真つ当な軍人のはずがない。先ほどの安心が次第に氷解していく中、男はそのまま動けない水島に近づいてくる。

「ちゃんと立ってください」

男の体格にも似合わないか細い声に驚きながら水島は壁に張り付いていた背中を持ち上げてよろよろと直立した。戦闘服の男は手にした軽そうなアサルトライフルを何度か叩いた後、そのまま扉から頭を出す。そして水島を振り返り、付いてこいと言うように指を指し示した。

他に水島に頼るものなど無い。ただ重そうな防弾チョッキと予備弾薬を胴に巻き付けた大男が暗がりの中に消えないように必死に後を付ける。

「離れないでくださいね」

まるで賓客を案内するかのような言葉に、彼があまり日本語が得意ではないことに水島は気づいた。任務とは言え異国で自分のようなつまらない人間のごたごたに巻き込まれたかわいそうな男。先ほどのまでの無様な自分を忘れたかのように水島の心に同情の念がわいてくる。

「ご苦労様ですね」

「これも仕事ですから」

男はかけていたサングラスに手やりながら階段の手前で止まった。先ほどの銃撃戦の後、しばらく廃病院は元の沈黙を取り戻していた。

「銃撃戦になりますか？」

「さあどうでしょうか？」

水島の余計な感情を察したような投げやりな言葉。男はそのまま銃を構えて階段を下りていく。

「ミスター水島。法術の気配はありますか？」

「いえ……」

水島の言葉に少し不満そうにそのまま男は階段を静かに下りる。水島の足取りも釣られて忍び足に変わっていた。

「恐らく『ギルド』ですね。それに保安隊……難しい任務です」

「はあ」

淡々と話す大男の言葉を聞きながら水島は静かに四階の階段を下りきったところで身を伏せる大男に合わせてしゃがみこんだ。

「西園寺さん！」

誠の言葉に階段を登ろうとしていた要が振り返る。

「法術反応です。しかもこれまでのものとは違います！これまでの誰とも違う感じです。もしかして……」

「ここに来て急にか。これは動いたようだな……おそらく水島をここに飛ばした誰かだ」

カウラはそう言うとりあえず三階に向かう階段の踊り場で銃を手の上に階を警戒している要の隣でしゃがみこんだ。

「第三勢力か？でももしあのダンビラで切りつけてくるような連中が増えたらどうするよ」

タレ目で上官を見つめる要。カウラはしばらく沈黙した後口を開いた。

「その場合は一時撤収だな。私達の戦力ではどうにもできない」
カウラの言葉に遅れてきたアイシャも頷く。

「でも……」

「神前。オマエは数に入れてねえからな」

失った右腕の跡をさすりながら要が天井を向いてつぶやく。

「西園寺さん……」

半分泣きながらの誠の言葉。しかし事実だった。法術が使える以外は要達に比べれば素人に毛が生えたような存在なのは自分が一番自覚している。女性士官三人ははじめからそれが当たり前だと言うように、少しばかりセンチメンタルな表情を浮かべている誠の存在を忘れたとでも言うように上の階を警戒していた。

「第三勢力だとしたら……戦力が気になるわね……」

「今のアタシ等でどうにかなる相手なら……ちょうど良い転換点だ。北川達はこのままじゃ挟み撃ちだからな。油断ができれば後は双方が損耗するのを待って騒動から逃げたがってる水島を引き離してそ

のまま捕縛といけるな」

要はそれだけ言うとそのまま階段を登り始めた。

「そう上手く行けばいいけどね。いっそのこと神様にでも祈ろうかしら」

アイシャが誠の背中を叩く。それに気がついて誠もカウラとともに要のあとに続く。

フロアーが広がると要は動きを止めた。静かに周りを見渡す。すでに夜と言っている時間帯。明かりの無い廃墟では目は要だけが頼りだった。

「気配がしねえ。赤外線反応なし。北川の奴は上に向かったか」

そう言いながら壁伝いに三階にたどり着いた要。それを確認するとカウラと誠もその後続いた。

「北川さんの拳銃は脅威にならないとしてももう一人の例の辻斬り相手にするにはきついわよ」

アイシャの言葉に要は頷いた後そのまま四階に上がる階段に取り付いた。

「きつなくても仕方がない。これ以上事態が良くなることは考えにくいからな。豊川工場からここまでではどう急いでもあと十分はかかる。それまでに結果は出るだろう」

「おう、それまでに決めるぞ」

カウラの言葉に振り向いてにやりと微笑んだ後要は飛ぶようにして階段を駆け上がって行った。

「旦那……」

北川は膝を突いてじつと業物『備前忠正』を満足そうに眺めている桐野孫四郎に声をかけた。まさにその表情は満足している。北川にはそう見えた。趣味的な斬殺事件を起こした後の不服そうな無表情ではなく、斬るに足る獲物を見つけて喜びに充ち満ちている。桐野の顔に浮かんだ笑みがそんな狂気に満ちたものなのでは無いかと思うと北川は自然と額に脂汗が浮かんでくるのを感じる。

「ああ、上の階の標的が増えたことか？結構な話じゃないか。逃げ回る不完全な法術師を追いつく良心の呵責に責められずに済む理由が一つできた。これで思い切り刀を振える」

「旦那……」

諦めたような言葉が自然に北川の口から出てくる。それを無視して立ち上がる桐野。闇の中に爛々と輝く瞳。口元の笑みは桐野のサポート役と言う名目があるおかげで斬られずに済んでいる北川でさえ見ていて恐ろしく感じられるほど不気味なものだった。

「さあ、行こうじゃないか。相手の手並みで今回の法術師を囲おうとしている面倒な連中が俺達をどの程度に評価しているか分かるんだ。楽しくなるだろ？」

桐野の言葉があまりにも予想通りだったので北川はため息をついた。

「そう簡単な話ですか？今回の件でこれまでの旦那の趣味が司法機関にはばれたと思いますし……」

「それで貴様が困るのか？」

相変わらずうれしくてたまらないという表情で桐野が振り返る。

実際その手にしている日本刀が無く、そして桐野の法術の限界を北川が知っていたならばその場で拳銃で撃ち殺しているところだった。

「困りますよ！旦那の活動に制約ができれば俺一人で動かなきゃな

らないことも増えてきます！ただでさえうちは人手不足なんですから……これ以上の面倒はごめんです！」

言葉を重ねるだけ北川はむなしくなってきた。自分があの保安隊の神前とか言う甘ちゃん（あまちゃん）の法術師を舐めていたおかげで自分の顔が割れていることが痛い。そしてそんな自分の失態ばかりではなく、こんどは相棒の桐野の顔が連続斬殺犯としてあちこちの警察署の掲示板などに貼りだされることになれば、後々動くのが面倒になるのは間違いない。同盟や遼州に司法機関や軍の機関は様々あるが、一番の武闘派と言える保安隊を相手にできる実力者となると桐野の他には太子本人くらいしか同志の中では北川には思いあたる使い手はいなかった。

「まあ楽しもうじゃないか、今日は。物事はシンプルに考えるのが一番だぞ。最悪の事態なんぞ相手を斬り殺してから考えれば良いことだ」

そう言いながら再び刀を見つめて悦に入る桐野にただため息をつくしかない北川。

「じゃあ水島とか言う哀れな中年法術師を捕えるとして……その護衛役に飛ばされてきた奴。どうやって片づけますか？こちらでも干渉空間を使える俺と人斬りの旦那がいること位は第三勢力の連中も理解してそれなりの手練れを送り込んできたと思いますが……」

銃に五発の弾薬が入っていることを確認しながら北川は長身の桐野を見上げた。相変わらず満面の笑みを浮かべて満足そうに北川の言葉に頷いている。

「いいじゃないか！逆にそうでなくては困るな。弱いものいじめは性に合わない」

北川の言など闘争心をかき立てる調味料でしかない。そんな様子の桐野の笑顔。北川は再び大きくため息をつく。拳銃のシリンドー（シリンダー）を銃に収めた。

「まあ旦那は好きに暴れてください。俺は俺でやりますから……下の保安隊の連中を牽制します」

そう言うとそのまま階段を下ろうと北川だったが桐野の殺気に振り返った。

「そちらは避けるべきだな……」

「どうしてですか？」

突然らしくもない助言をする桐野に驚いた北川は顔を向けた。

「保安隊は……あの嵯峨の部隊だ。手を出して虎を怒らせる必要もあるまい」

「旦那が弱気なことを言うとは……」

北川は桐野の言葉に頷くとそのまま桐野に続いて階段を昇ることにした。

「先ほどの強気……保安隊相手だとどうしてそう慎重になるんですかね？」

嫌みのつもりで愚痴る北川を桐野が睨み付ける。恫喝。脅迫。ともかく北川はその敵意に満ちた桐野の顔を見て桐野と保安隊にそれなりの因縁があることは察しがついたが、今はそれを詮索する場面では無いことだけは分かっていた。

北川達には彼等の飼い主が欲する力を手に入れると言う目的があった。北川は余計な事を考えようとする頭を切り換えようと銃を握りなおして大股で階段を駆け上がる桐野の後を追った。

「おい、神前……ラッキーかもしれないぞ」

突然拳銃を手に振り返る要。ニヤリとその口元が笑っている。感情の起伏の激しい要だが、こんなところで突然振り返って笑ってくるので誠は面食らって黙り込んでしまった。

「西園寺。ラッキーとはどういうことだ？根拠の無い事を言える状況じゃない」

不機嫌そうな表情を浮かべて首をひねるカウラ。それを見ても要は勝ち誇ったような笑みを浮かべていた。

「一瞬だがこの建物の四階で衛星通信をしている奴の反応が出た。恐らく水島が呼び寄せた使い魔は法術師じゃなくてサイボーグだ」

「使い魔？ドラゴンとかじゃないから良かったとしても言いたいのは？サイボーグだって十分驚異じゃないの。あんたの片腕。その状況だとそいつのをもぎ取って使えるから人斬り相手に有利に戦えるようになる」とも言いたいわけ？」

アイシャはあきれ果てたようにそう言うとそのまま要を追い抜いて四階のフロアーに顔を上げる。

銃声もない。誠も気配を感じることができない。ただ暗がりだけが広がっていくのがわかるだけだった。

「静かね……で？軍用義体のサイボーグが水島さんを助けに来た。そののどこがラッキーなのよ」

何もないのを確認したアイシャが要を振り返り小声で詰問する。そんなアイシャを見てさげすむように笑う。

「サイボーグは所詮工業製品だ。どんなに高性能な義体でも性能の上限は設計図を見れば分かる。研究途中でどんな力があるのか分からない法術師より与し易いだろう？」

「事実だが楽観論だな。今の状況じゃ性能は分からないんだろ？」
あっさりと要の意見をカウラが切って捨てた。要はそのまま不機

嫌そうに闇に目を向ける。そしてそのまま一気に四階のフロアーに飛び上がった。

「西園寺さん！」

誠が驚いて声をかける。要はムキになったようにそのまま前進した。

「馬鹿が！」

カウラがその後に続いた。遅れまいと誠は左右を、アイシャは後方を警戒しながら前進していく。

要は最初のドアを見つけるとカウラに少し離れて止まるように指示を出した。静かに彼女は左手の拳銃を手にドアを押し破ろうと手を伸ばした。

その瞬間、誠は強い感情の流れを要の死角に当たる廊下の中央に感じた。

「正面！干渉空間！」

その瞬間銃声がドアではなく廊下から響いた。手を伸ばしていた要がそのままその場に倒れ込む。要の隣に突然現われた発砲の作り出した火の玉がかき消すように消えた。

「正面！こちらの場所を特定された！警戒！」

カウラはそう言いながら銃を構えて周りを見回す。誠もまたカウラの隣でショットガンを構える。まるでこちらを分断しようとするように一発一発、別の場所からの発砲が続く。

「痛てえ！」

ドアの下。腹部を押さえて要が叫んだ。

「当たり前でしょ！こっちに這ってきなさいよ！」

アイシャが叫びつつ銃口の光を目印に銃を三発打ち込む。北川の銃はリボルバー。弾を撃ち尽くしてとりあえず引いたようで着弾した感触は無かった。

しかし、その時廊下の奥の黒い塊の方で金属パイプが落ちるような音が響いた。

『銃だ！銃だ！』

誠が凝視するとその黒い塊はベッドのクッション部分を積み重ねたもののように見えた。そしてその影で人影のようなものが動いているのが誠にも見えた。

「見つけたぞ。神前、西園寺を何とかしろ！」

カウラの言葉に誠は干涉空間を展開した。そしてそのまま床に転がってわめいている要に向かう。

銀色の光の板。誠が作り出した干涉空間に向けて先ほどのベッドの後ろからの三発の銃弾が着弾した。

「カウラさん！拳銃じゃ無理ですよ！」

正確な射撃。距離と三発の射撃間隔を計れば銃が苦手な誠でもそれがサブマシンガン以上の火力の火器のものだと言うことはわかる。カウラは誠が言葉をかけるまでもなく、消火栓の影に身を沈めてベッドの向こうのサイボーグだという水島の護衛の射撃に備えていた。

「済まねえ……しくじった！」

腹から血を流している要。誠はただ要を守りたい一心で干涉空間を展開し続ける。

「神前……力はとっておくもんだぞ……人斬りが出て来たときに……力がでないとそれこそ洒落に……」

要はそれだけ言うど動きを止めた。

「嘘……嘘ですよね！」

誠は展開していた干涉空間を収束させるとそのまま目を閉じたままの要の頬を叩いた。反応は無い。胸を触ってみた。動かない。涙が自然にあふれてくる。どうして良いか分からなくなる。明らかに要は機能を止めていた。

そのまま片膝を付いていた姿勢からよろよろと誠は立ち上がった。「カウラさん……西園寺さんが……」

無防備に立ち尽くす誠を見てカウラの表情が怒りに震えたものへと瞬時に変わった。

「馬鹿！脳内の血液損失を防ぐ為に仮死状態になっただけだ！さっさと引きずって来い！」

ベッドの裏からまた正確な牽制射撃が二発カウラの手前のコンクリートブロックにはじける。

誠はカウラの言葉でようやく我に返り、そのまま干涉空間を展開しながら要を引きずり始めた。

二発銃弾が誠の展開する干涉空間に吸収された時にベッドの裏の敵の動きが止まった。

『相手はベテランだ。テメエの能力が予想以上だってことで弾を節約し始めてやがる』

「西園寺さん！」

耳の通信端末から響く要の声に思わず手を止めた誠。

『さっきは勝手に殺しやがって！とっとと運べよ』

「早くしろ！北川達も目標を見つけたんだ。動き出すぞ！」

壁際で叫ぶカウラ。誠は必死になって動くことの無い要の体を引きずって行く。

「いい様ね、要ちゃん」

背後の警戒から帰ってきたアイシャが要の足を持って誠を手伝う。

『ぶっ殺す！後で……』

「威勢は良いのねえ……動けないくせに」

『やっぱりぶっ殺す』

動けない要の通信に背後を警戒していたアイシャが絡む。だがそこに背後からの銃弾が届いてきた。

「来ちゃったわよ！北川と例の人斬り」

牽制射撃で何とか時間を稼ごうとするアイシャ。カウラのところまでたどり着けないと悟った誠とアイシャはそのまま手前の病室に入ろうと扉を蹴破る。

パイプ椅子が乱雑に置かれた部屋。カウラもまた水島をかばうサイボーグの的確な射撃に押されて誠達と合流すべく部屋に駆け込んできた。

「ここでなんとかあの連中がつぶし合うのを……」

アイシャがそう言った時、要を置いた壁の隣にあったパイプ椅子が半分になった。部屋のあちこちに干涉空間が展開される。

「北川の狙いはこちらか……終わりかもな」

カウラのつぶやき。それを聞いた時誠の中で何かがはじけた。

誠は立ち上がりまわりに干涉空間を展開する。

「誠ちゃん！死ぬ気？」

アイシャの言葉は誠には届かなかった。そのまま部屋を飛び出した誠。階段付近からの北川の拳銃弾と奥のベッドからのライフルの銃弾が次々と銀色に輝く誠を覆う干涉空間に命中しては消える。

「神前……」

『誠？』

つぶやくカウラ。要は唯一自由の利くタレ目を誠に向けた。

『なんだありゃ？』

階段近くで北川が叫ぶ声が誠達にも聞こえてきた。

「なんだろう……あれ？」

誠は自分のしていることが今ひとつよく分からなかった。展開された干渉空間に手が自然と伸びる。そこには一振りの剣があった。

「鳥毛一文字……」

手に触れた瞬間に誠は確信した。嵯峨から託された地球の日本で鍛えられたと言う名刀。誠は手にするまますると鞘から刀身を引き出す。

「神前！」

カウラの言葉を浴びて誠の周りの空間が飛び散った。両側から掃射が行なわれる。だが誠にはそれはぬるい攻撃に見えた。

『なんだか時が……ゆっくり流れるんだな』

空中を流れるように進む弾丸が見て取れる。誠はすばやく身を翻しそれを避けた。そしてそのままゆっくりとベッドの後ろに隠れているサイボーグに走り寄った。

恐怖の表情が米軍の軍服を着たサイボーグに浮かんでいるのが分かる。ゆっくりとライフルの銃口を誠に向けようとする動きが極めて緩慢でまるでスローモーションを見ているようだった。誠は余裕を持って剣をサイボーグの顔面の暗視ゴーグルに突き立てた。まるでケーキか何かにフォークを立てるような柔らかな感覚で刀が突き立てられる。

次の瞬間、サイボーグの顔面から血が勢いよく噴出した。隣では震えながら誠を見つめる水島の姿がある。

「な……なんで？ あんた……何者だよ！」

誠はその水島の問いに答えることができなかった。確かに時間がゆっくりと流れる感覚があり、いつの間にかサイボーグを倒していた。息すら切らさず、先ほどまでの怯えも心の端から消え去っていた。

「水島勉……違法法術展開および殺人未遂容疑で逮捕する」

落ち着いての誠の一言。水島はただ腰を抜かして倒れていた。彼にはもはや頼るものは何もない。

「あんた……化け物だ！なんでそんなことができる！そしてなんで俺から力が見えないんだ！おかしい！これは何かの間違いだ！茶番だ！」

我を忘れて叫ぶ水島。その表情を見て困惑していた誠だが頭の中に何度か痛みたのを見逃すことは無かった。

「ここで僕的能力をハッキングしたらさらに公務執行妨害がつくぞ」

言い切った誠の言葉に水島は諦めたようにうなだれた。

「神前！応援が到着した！」

背後でカウラが叫んでいた。アイシヤも満面の笑みで誠を見つめている。

「あちらも済んだのか……まあ『ギルド』もあなたの身柄が我々の手に落ちれば引くしか無いわけだけどね」

そうつぶやくと誠はただ果然と立ち尽くした。

「水島。この馬鹿野郎！かけさせやがって！……と貴様を半殺しにする隊員は今は休眠中だ。ついていな」

カウラはそう言うと言の腰のベルトのポーチから手錠を取り出し水島にかける。水島は手を差し出したアイシヤに引き起こされながらただ誠を見つめていた。

「あんたさえいなければこんな事にはならなかったんだ……」

誠の顔を見上げたその目は憤怒に満ちあふれていた。だが誠にその怒りにいい訳をする気力は無かった。不意に訪れた眠気。サイボーグのチタン製の頭蓋骨に突き立てられた刀に手を伸ばそうとするがその手は意識のコントロールを失ってそのまま空を切る。

「神前！」

カウラの声が耳の奥で遠くに聞こえるように感じながら誠は意識を失っていった。

「起きたか……」

廃病院の中庭の仮設ベッドの上で誠は目を覚ました。時々誠の視界を赤い回転灯が照らす。すでに東都警察、保安隊警備部は到着しているようで捜査官や武装した警備部員が慌ただしく行き来するのが気配で感じられた。

「やはり北川とかは……？」

「逃げられちゃったわよ。まああちらとしたら無理をしてうちとやり合うつもりは端から無かったんでしょけどね。機会さえあれば確保したかったというくらいのところだったんじゃないの？今回は」

アイシャが心配そうに毛布に包まれた誠を眺めている。

「やはり本気じゃ無かったんですね……僕がそんなに活躍できるわけ無いですからね……そう言えば西園寺さんは？」

「ああ、西園寺はそのまま義体の交換だそうだ。右腕は完全破損。

腹部の人工消化器系も復旧不可能。ラボでの完全交換になる」

「工場で修理。まるでおもちゃみたいね……まあ私達も工場生まれ。お似合いの捜査チームだったってわけね」

カウラの冷静な声とアイシャのいつもの自嘲に誠は少しばかり安心して周りを眺めた。深夜の闇に廃病院の影が不気味に照らし出されて浮き上がって見える。先ほどまであの中で命のやりとりをしていた。そんな事実がまるで夢だったようにその黒い塊は静かに照明の中で佇んでいた。

「これで終わりですね」

「そうなのか？」

浮かない顔のカウラに誠は少し首をひねっていた。

「法術の可能性が示されたんだ。今回の件で少なくとも東和では確実に今までは任意だった法術適性検査が強制になるだろうな。他の

同盟諸国で任意制をとっている大麗、西モスレムも同調するだろう。場合によっては他の植民星系国家や地球にも影響を与えることにもなりかねない……私達にとってはこれでおわりだが、多くのの人にとってはこれから始まりなんだ。ちょうどお前が半年前胡州の叛乱艦隊に対して法術を使用したときと同じ状況だ」

カウラは唇を噛みしめつつつぶやく。そんなカウラに近くを通った警備部員から受け取ったコーヒーを差し出すアイシャ。その目もいつものふざけた調子は消えていた。

「全く……誠ちゃんも因果な星の下に生まれたものね。そうして人類は未知の能力者の存在に怯えて憎しみの中でのたうち回ることになる。別に力を欲しくてそう生まれたわけでも無いと言うのに力があるだけで憎まれ、力があるために憎む。今回の水島も連行する最中に散々誠ちゃんの悪口を喋り続けていたわよ。俺が犯罪者になったのは神前誠と言う化け物が勝手に力を使っただって……まあ拳銃強盗が銃の発明者を恨むような話だから気にすること無いわよ」アイシャが力なく笑うのが見えた。誠はそれを見ながら上体を起こした。そして自分の枕元に剣が一振り置かれているのに気がついた。誠の意志に答えた鳥毛一文字。

「これ……僕が呼んだんですよね？」

「呼んだのか？ まあ……そうかもしれないな」

「それだけの力がオメエさんにはあるんだよ」

そこに突然現れた長身の男。カウラが敬礼していることからそれが保安隊隊長嵯峨惟基特務大佐であることが分かった。

「隊長……」

「いいよ寝ておけ。まあ……オメエさんが仕留めた義体だが……元アメリカ軍の兵隊さんだそうな。東和警察が手を出そうとするのを外交官特権で持って行きやがった……まあちゃんけな悪党一人のために外交問題を引き起こしても損なだけだから俺も黙っていたけどさ」

「元？」

嵯峨は口にタバコを咥えてつぶやく。その言葉に誠は不思議そうに首をひねった。

「どう見ても最新鋭の義体ですよ。元というのは……」

「カウラも脇が見えてきてるじゃねえか。偽装だな。まあ突っ込んで調べてみるのもできなくは無いが……どうせ二等書記官クラスが左遷されて終わり程度の話にしかならんだろう。俺は動くのもばかばかしいから豊川署の署長には俺がそう言ってたと言うのを上に伝えておいてくれと言ったがね」

力なく笑う嵯峨。誠はそんな自分の無力さを部下に吐露する嵯峨を初めて見た。カウラも、コーヒーに口を付けているアイシャもその表情は冴えない。

「そんなにがっかりするなよ。確かに状況証拠はどう見ても水島を囲ってたのは米軍だって事を示している。すでにべらべら自供を始めている水島もアメリカ大使館の関係者の餓鬼から勧誘を受けていたとか訳の分からないこと抜かしてやがる。だがね。こちらとしても公にそのことを言うわけには行かない事情がある。ベルルカンの失敗国家で同盟成立以来三件、これから予定されているだけでも二件の選挙が行なわれる。失敗国家の選挙管理なんて言うのはどこでも非常にデリケートな問題だ。民間、政府機関のどちらにおいてもアメリカさんのお手を煩わせているのも事実だし、もしアメリカがその選挙を遼州同盟が仕組んだ茶番だと騒ぎ始めれば一気に地球と遼州の関係は前の大戦の直前並みに悪化することも考えられる。外交問題にして得することは俺達には何も無いんだ」

それだけ言うとは嵯峨はそのまま病院の建物へと歩き出した。誠はベッドに横たわりながら両の手を握りしめていた。目を向ければカウラも顔に出さないが嵯峨の言い方にはかなり腹を立てているように見えた。

「気持ちとは分かるけど現実はそういう事。今回は要ちゃんとは正体不明のテロリストに蜂の巣にされたと言うことで終りよ。それ以上は考えても無駄だし、考えない方がましだわね」

誠にはアイシャの言葉が冷たく感じられた。ただし嵯峨の言うとおりこの惑星遼州の南方に浮かぶベルカン大陸の混乱收拾が同盟には不可欠な政治上の問題であることは誠にもよく分かる。ただ分かるがあれほどに要を痛めつけた相手を正体不明の死体一つを残して解決しようとする嵯峨の言葉には納得できないでいた。

「お前も不満か？」

突然頭の後ろから声をかけられてびっくりと誠は振り返った。

「ベルガー大尉……驚かせないでくださいよ」

「驚かせたつもりは無いがな。とりあえず体を休めつつ腹の中で怒っておけ。それと西園寺だがすでに義体の予備があったそうだから再調整を二日くらいすれば原隊復帰ができるそうだ……アイツのことでまた機の二つや三つぶち壊すだろうが今回は私もつきあいで始末書でも書くつもりで壊すかな」

「カウラちゃんまで馬鹿言わないでよ。それにしてもあの馬鹿みたいに高い義体に予備？ さすがお姫様は違うわね」

アイシャがからかうように叫ぶ。もしこの場に要がいれば蹴りの二三発は飛んでいたと想像して誠が笑い始めたときだった。

『何がおかしいんだ？ 神前』

突然誠の右腕の携帯端末がしゃべりだした。そしてその声は明らかに要のものだった。

「西園寺さんですか？」

『他の誰が今の会話に突っ込みをいれるんだ？』

不機嫌そうな声に頭をかく誠。それを見てにやりと笑うアイシャ。カウラは面倒に関わるのはごめんだと言うようにそのまま近くのパトロールカーの回りに群がる捜査関係者の方へと歩き出してしまった。

「身動きとれずにじっとしている気分はどう？」

『アイシャ……あさっては覚えてろよ』

誠の端末から響く声に誠とアイシャは目を見合わせて笑っていた。「とりあえず終わったんだ……」

事態の中途半端な収拾は腹に据えかねたがただとりあえずの決着を見たことに対する安心感が誠を包み込んでいた。そして睡魔が再び誠を静かな眠りへと導いた。

その日、誠は殺気を感じて目覚めた。時計は5時45分を指している。まだ起きるのに早い。事実寮のほかの部屋には動きのようなものは感じられなかった。

「眠れないか……」

一月半ばの寒気が全身を覆いつくしたのでそのまま誠は起き上がった。そしてそのまま部屋の端の棚に目を向ける。

「明後日だったよな」

その棚にはびっしりとアニメのヒロインのフィギュアが並んでいた。半分は誠が作ったものだったが入隊してからは作るのを止めていた。道具を実家に置いてあったという事情もある。軍の養成所の二人部屋では有機溶剤を溶かすなどと言うことはルームメイトに喧嘩を売るようなものだった。保安隊の下士官寮に移ってからはアイシャ達に何度も作るように催促された。それでもどうも気分が乗らずに今日まで手を出さずにいた。

「そろそろ作ろうかな……」

「何を作るんだ？」

「うわ！」

背中からの女性の声に誠は棚に倒れそうになるのを上手くかわしてそのまま畳に転がった。

「西園寺さん！直ったんですか？」

「おうよ、修理完了だ……それにしても気持ち悪いなあ。人形見つめてニヤニヤ笑いやがって」

「良いじゃないですか！それより何で今の時間に？」

そう言う誠だがすでにジャージに着替えて要の背中後ろに立つカウラとアイシャの落ち込んだ表情でなんとなく予想がついた。

「ランニングにでも？」

「そう言う事だ。豊川署にいる間はしてないだろ？たるんできても

うそろそろ自主的にやろうと言う気になるだろ？ エース殿」

タレ目の端をさらにたらしめてにやける要。誠は大きくため息をついた。

「ごめんね誠ちゃん。止められなくて……」

「クラウゼさんいいですよ。着替えますから」

「え？」

聞こえない振りのアイシャにため息をつきながら誠は筆筒をあけてジャージを取り出した。

「じゃあ食堂で」

そう言う必要は居座る気が満々のアイシャを引っ張って部屋の外に消えた。

「なんだかなあ……」

寒さに震えながら着替える誠。そして先日的事件を思い出しながら着替えをした。

水島勉による連続違法法術発動事件は複雑な様相を呈し始めている。東都でも地球伝統保守派系の野党が国民全員の法術適正検査の義務化の法案を提出していた。与党がその法案の対案として提出したものにも年齢制限などの緩和策が盛り込まれているものの義務化と言う方向性ではどちらの法案も似たり寄ったたりの内容だった。

法術師の脅威を叫ぶマスコミ人が連日ワイドショーに集まっては司会者を苦笑させるような暴言を吐き続け、法術適正者の氏名発表を望む意見がネットを駆け巡る。遺伝子検査で地球人以外のDNAが検出された人間の排斥を訴えた月刊誌が同盟憲章に違反する行為だとして廃刊になるなど騒ぎはとどまるところを知らなかった。

ただ朝の誠にはとりあえず着替えを済ませることの方がそんな世の中の流れより重要なことだった。いつもの事ながら大通りから遠い住宅街の中の下士官寮の冬の朝は静かだった。着替えを済ませて顔を洗って階段を下りる。世の中がどう動こうがその動作が変わることは無かった。

なぜか食堂には多数の人の気配があった。皆暗鬱な表情でジャー

ジを着て雑談を続けている。

「西園寺さん……なんで俺達まで」

入り口でジャージ姿で突っ立っている島田。隣の菰田もめんどくさそうにあくびをこらえていた。

「鍛え方が足りねえから鍛えてやろうってんだ。感謝しろよ」

二人を眺めながら食堂の椅子にどっかりと腰を下ろしている要。厨房の中を見れば食事当番と言うことで難を逃れた肥満体型のヨハンとその仲間達がちらちら島田達に哀れみの視線を投げながら料理の真っ最中だった。

「なんですか……寮の全員ですか？」

いつも出勤時にはジャージを着ることにしている誠。おかげで二度手間にはならなくて済むがこの夜明け直後の早朝からのランニングにつきあわされるとは思っていなかったのてただ呆然とやる気をみなぎらせている要を見つめるだけだった。

「これから忙しくなった時を考えたら当然だろ？ 法術がらみとなれば茜の法術特捜や東都警察の法術部隊じゃ遅すぎることは分かったんだから」

「でも要ちゃん。それと私達の早朝強制ランニングと何か関係があるわけ？」

アイシャは相変わらず不満そうにつぶやく。隣のカウラは要がマメに非番の隊員までたたき起こしたことに呆れるように静かに番茶を啜っていた。

「なんでもそうだが体力が重要だぞ。今回の事件で分かったろ？」

「誰かはかませ犬になって蜂の巣にされたもんね」

「アイシャ……死にたいか？ そんなに……」

「苦しいわよ！ 要ちゃん！」

口答えをするアイシャの首を握って振り回す要。その様子に苦笑いを浮かべながら厨房からヨハンが顔を覗かせた。

「簡単なものしかありませんけど。豆のスープと黒パン。そしてベークン」

「それだけありや十分だ。とつとと食うぞ」

要はそう言うのと先頭に立って朝食を乗せるトレーに手を伸ばした。

「朝食！」

さっと飛び上がりアイシャが要からトレーを奪う。そして何事も無かったようにお玉を手にしたヨハンの前に立った。

「デメエ……」

「ぼんやりしているからでしょ？この前だって簡単に片腕斬られて腹に銃弾を受けて……」

「オメエなら大丈夫とでも言うつもりか？」

「そこまで言うつもりは無いわよ……でも今現にこうしてトレーを奪われたわけだし」

アイシャの言葉に言葉をのむ要。その様子を見ながら笑顔のカウラが一番早くヨハン達から朝食をトレーに受けて一番手前のテーブルに着いた。

「カウラちゃん……」

「早く食べろ。ランニングをするなら食べてしばらくは動かない方が良くいんだろ？」

平然と食を進めるカウラに要とアイシャは顔を見合わせると並んでいた島田達整備班員ににらみを利かせてそのまま割り込む。

「神前！オメエも早く食え」

要の言葉に苦笑いを浮かべると誠はそのまま列に並ばされた。

「でも……ランニングから帰ってから食事の方が良いんじゃないの、ホントは」

アイシャの何気ない言葉に要の頬がぴくりと震えた。

「考えてなかったみたいだな……」

「一応俺達は生身なんで……食べてすぐに運動すると腹痛を起こすかも知れませんよ」

カウラと島田の言葉が呆然と立ち尽くす要に止めを刺した。

「うるせえ！朝食は大事だ！後で出勤の準備の時間が無くなると困るだろ？」

「いい訳ですね」

要の理屈をそう切って捨てるヨハンはさっさと黒パンを口に投げ入れた。それを見ながらアイシャは何事も無かったかのようにカウラの隣に座って食べ始める。

「早くしなさいよ。冷めちゃうわよ」

アイシャのちゃっかりした態度に切れそうになる要を見ながら誠も彼女の正面に座ってスープをすすることになった。

「なんでこんな事に……」

誠の愚痴にただカウラとアイシャは苦笑いで答えることしかできなかった。

「予想通り……たるんでるな」

要は余裕の表情でつぶやいた。彼女の気まぐれに付き合わされた寮の住人はランニングから戻ると我慢していた腹痛に襲われて食堂に突っ伏していた。あの不死身の島田でさえも顔色を青くしてテールに突っ伏せている。これが真冬の出来事だからまだ誰も要に食ってかかることはなかったが、これが真夏の出来事ならば一騒動あっただろう。誠は取り合えず腹痛もなかったが、ただ苦笑いを浮かべながら椅子の上で息を整えつつ様子をうかがっていた。

「気合が足りねえな」

たたみ掛けるようにそう言うときまた周りを見回す要。

「これが気合の問題？生理現象でしようが」

涼しい顔の要にアイシヤが青い顔で突っ込みを入れた。いつもは平然と笑っているだけの彼女の右手も脇腹に当てられている。相当苦しいらしく冷や汗のようなものさえ浮かんでいるのが見える。

部屋中の空気はアイシヤに味方していた。冷たい視線が要を取り巻く。さすがに自己中心的な要も雰囲気だけは分かるのか、アイシヤに浴びせようとしていた罵声を飲み込んでただ黙り込んでいる。「単に自分の義体の慣らしに全員をつき合わせたかっただけだろ。そう言うことなら自分一人でやれ」

カウラの一言。アイシヤを始め、食堂の人々が大きく頷く。要は状況不利と悟るとただ乾いた笑みを浮かべていた。

疲労感が部屋中を支配している。ただ一人元気な要はとりあえず話題を変えようと目をつぶった。彼女の脳と直結するネット情報。おそらくは話題を変えてくるだろう。誠も要の小手先のごまかしには騙されまいと身構えて彼女が口を開くのを待った。

「それより……面白い話があるんだが……」

誠の予想通り、どこか彼女らしくもなく遠慮がちに要が口を開い

た。

「なによ要ちゃん。これ以上何か変なことがしたいわけ？ つまらない話なら本当に怒るわよ」

いつもは騒動を起こす側のアイシャのその態度に誠は少しばかりおかしく感じながらもどう話が続くのか見守ることにした。要もこのくらいのアイシャの態度は想像していたらしく苦笑いを浮かべながらもつたいぶることもせずに左腕の端末を起動させ立体画面を表示させた。

「こいつだ……どう思う？」

「遼州同盟の人権機構の声明？ 例の東和の間抜けな法術師が起こしたトラブルの帳尻あわせでしょ？ それで何か動きがあったわけ？ どうせろくな事じゃないんでしょ、その様子だと」

アイシャは小さな画面の詳細を見ようと立ち上がるとそのままよたよたと要の腕の上に展開された画面に顔を近づけた。わざと見えにくいというように責めるような視線を要に向けるアイシャ。

「こうすれば見えるだろ？」

「見えるけど……ちよつともう少し腕を上げて」

人造人間の強化された視力ならば余裕で読めているはずの画面をまるで見えないというように角度を変えて何度も覗き込むアイシャ。その姿にそれまで下手に出ていた要がまた苛立ちの表情を浮かべ始める。誠はもうめ事はごめんだと逃げ出す心構えをしはじめた時だった。

「法術適正の強制化に反対する署名活動を始める？ ずいぶんと消極的なお話ね。だからなんなのよ」

「それでも同盟の意志として法術適正検査の強制化に反対することをして見せたんだ。かなりぎりぎりの選択だったと思うぞ。遼南あたりがかなりごねたんだろうな。あそこは法術師のパラダイスみたいな門だからな。法術適正検査の受検率が一桁代……東和の右っぱい連中もかなり騒いでいるからな」

苦笑いの要。予想通りの世の中の反応。誠はすでに法術師と認定

された身分として複雑な心境で会話を聞いていた。アイシャはまだ要の腕を手にとって画面を読み続けている。

「ここから先は……遼南宰相アンリ・ブルゴーニュの声明文ね。何々……法術適性検査の強制化は著しい人権問題になるであろうと……ひいては同盟の人民の間に分断と亀裂を生むことになる……。生むことになるも何も生まれてるじゃないの」

「今頃何言ってるんですかねえ。適性検査の強制化に反対するものも遼北や西モスレムじゃ強制じゃないですか」

「島田ちゃん。元々人権意識の薄い国の話をしてもむなしいだけよ」

島田の言葉に余裕のある突込みを入れるアイシャを見ながら誠の目は端末を起動させた要に向いた。

「で……どうなるんでしょうか？」

「これからは色々あるってことさ。軍事や犯罪組織の活動に関するだけが法術師の話題だった訳だが……これからは人と人との個人的な関係にまで法術と言う存在が食い込んでくることになる。法術を持つものと持たないもの。それが憎み憎まれて世の中が転がることになるってことさ」

吐き捨てるようにそう言うとな要は自分の右腕を握りしめてその上空に表示された画面を追っていたアイシャを振り払って端末の画面を消した。ふてくされたように黙り込むアイシャ。要は彼女を無視するとそのまま視線を誠に向ける。

「東和も法術師を押さえ込む方向に進むだろうな……そうなればたぶんオマエの両親も今回は年貢の納め時だってことだ」

「親が？なんで？」

ぼけっとしている誠に要は大きくため息をついた。

「誠ちゃんが明らかに進んだ法術師である以上、その両親が法術適正があると考えるのが普通でしょ？それに誠ちゃんのお父さんは学校の体育の先生じゃないの。まずこういう時は教育現場が狙われるものよ」

「あ……」

アイシャに指摘されて誠はようやく要の意図に気づいた。

「ともかくこれからはかなり息苦しい世の中になりそうだな」

要がため息をつく。部屋のそれまで要への怨嗟の念に満ちていた
雰囲気が消え去っているのを誠はようやく感じていた。島田を始め、
法術適正を持つ隊員は少なくは無い。そして自分の血縁者にそう言
う存在がいることが不思議ではないこととそうなればどのような言
われない攻撃が突然訪れるか。そんな事を考えると朝食後にランニ
ングをさせられるくらいの事はすでにどうでもいい話だった。

「東和も揺れるな……『官派の乱』の胡州の再現か？」

「そうはならんだろ。東和は一応シビリアンコントロールができて
る国だ。保守派が叫んでも軍は動かねえよ」

カウラと要。別の話題を口にしながらもその目は誠を見つめてい
た。

「どうなりますかね？」

「私に振らないでよ」

誠の言葉にアイシャが苦笑いで答える。誰もが当惑し、ただどん
よりとした空気が食堂に立ちこめた。

「はいはい！なんだか知らないけどお通夜じゃないんだから！まも
なく出勤の時間ですよ！」

突然の快活な声。誠もまたその声に救いを感じて顔を上げた。叫
んだのは食堂に闖入してきたサラだった。その隣にはため息をつい
ているパーラがいる。

「アイシャさんに呼び出されたんですか？」

「まあね。パーラに頼んで送ってきてもらったの」

サラの言葉にパーラが引きつった笑いで頷いた。恐らく早朝にア
イシャからの電話で無理やり起こされて、サラを家まで車で迎えに
行ったパーラ。その苦労を想像すると誠も彼女が不憫に思えてきた。
隊員達もそれぞれに我に返ると重い腰を上げて食堂から自室へ散
っていった。

「それにしても……なんだか重苦しい雰囲気ね。何かあったの？」
サラは島田のジャージの襟をいじりながら誠達を眺めた。

「まあ……食後すぐに運動させた誰かさんのおかげでね」

「しつこいぞ、アイシャ！それに暗くなったのはアタシのせいじゃ無くて世の中のせいだ」

「都合が悪いと何でも世の中のせい……要ちゃんは中学生？」

「おい、いっぺん死ぬか？本当にいっぺん死んでみるか？」

にらみ合う要とアイシャ。その進歩のないやりとりにカウラが大きくため息をつく。

「それにしても……アイシャの頼みで吉田さんに調べてもらったんだけど……今回の事件後に情報発信を増やした個人や団体の名前が……」

「ありがと！」

そう言うとサラが取り出した一枚のチップをアイシャは受け取ってその手にかざして見せた。

「吉田に？そんな事を頼んでどうするんだ？」

啞然とする要を横目に笑顔のアイシャはチップ握りしめるとそのまま食堂の外へと消えた。

「アイシャの奴は何か知ってるのか？」

「あいつも一応は運用艦の艦長代理だ。政治的判断に直結するような指示を受けたときの対応策でも考えているんじゃないのか」

カウラの言葉に要は煮え切らないという表情で腕を組む。

「法術師とそうで無いものの対立が誰の利益になるか……そんなことでも調べてるんじゃないですか？」

「対立を煽っている奴がいる……アメリカ軍かね？それにしちゃあずいぶんの不器用で危なっかしいやり口じゃねえか。『ギルド』ほどじゃ無くても法術師の小さな互助組織の存在はいくつか確認されているんだ。それが今回の騒動の反動で騒ぎ立てた連中にせき立てられて手でもつないでみる。地球も巻き込んだ大騒動になるぞ」

要の言葉に誠は反論できなかった。今の状況は誰の利益にもなら

ないように見える。だがあまりに事態は急転していた。そこに作為が無いと考えるのもまた不自然に見える。

「とりあえず後でそれとなく聞いてみるか」

そう言うとかウラが立ち上がる。

「これから聞くんですか？」

「今は着替えるだけだ」

誠の言葉にそっけなく答えるとカウラも食堂を出て行った。

「この寒さで汗もかかない癖にな……」

要はそう言うのと伸びをしてそのまま食堂の出口に向かう。

「遅刻するぞ」

「はい！」

振り返っての一言に誠も気がついてそのまま食堂を飛び出した。

「なんだか……大きな話になってきたな」

階段を駆け下りる隊員達とすれ違いながら誠はそのまま自分の部屋に飛び込んだ。すぐにジャージを脱いでTシャツとジーンズ、ジャンパーに身を包んで部屋を飛び出す。

階段を駆け下りて玄関に向かうと誠の前にすでに着替えを済ませたカウラと要が立っていた。

「それじゃあ行くぞ」

「え？ アイシャさんは？」

「アイツはパーラ車で先に出た」

それだけ言うのと実に普通に靴を履くカウラ。要も気にならないというようにブーツに手を伸ばした。

「そうですか……」

釈然としない誠は彼女達に付き合うようにスニーカーを履いて立ち上がった。

「おかしいな……」

先に男子更衣室でつなぎに着替えた島田は入ってきた誠にそうつぶやいた。

「何がですか？」

とりあえず自分のロッカーから勤務服を取り出しながらこたえる誠。それをじろじろと主計下士官の徽章を直しながら見つめる菰田。朝のいつもの部隊の光景。ようやく戻ってきた日常に誠は少しばかりわくわくしていた。しかし島田の表情は浮かない。

「分からないのか？すでに運行部の女の子達が全員来てるんだぞ」

「ああ、あの人達は遅刻の常習犯ですからね……」

誠も菰田にそう言われるとようやくちよつとした異変に気がついた。そして朝の吉田から保安隊運用艦である『高雄』の副長のアイシャにデータが届いたことを思い出していた。

「そう言えば吉田さんからクラウゼ少佐にデータが渡ってましたけど……」

「なんだよ、それを早く言えよ。……何か特別任務かね」

ロッカーの奥の丸椅子に腰掛けた島田が腕組みをして難しい顔で誠をにらみつけている。にらまれて怯みながらワイシャツに袖を通していた誠の後ろのドアが突然開いた。

「遅くなりました！」

入ってきたのは第三小隊のルーキーであるアン・ナン・パク軍曹だった。突然の出来事に島田が椅子からずり落ちる。

「突然でかい声を出すんじゃないよ！」

「すみません……」

しなを作るアン。菰田が苦虫を噛み潰したような表情で隣のロッカーに手を伸ばすアンを避ける。

「でも運行部の隊員が早出……読めないな」

「読めないな」

いつもは犬猿の仲の島田と菰田が腕組みをして思案にふけっている。その様は見ていると少しばかり滑稽でつい誠は笑いそうになっ
てしまっていた。

「運行部の早出が関係するのかどうかは知りませんが、なんか一階
であるみたいですね」

何気なくアンが上着を脱ぎながら言った言葉に二人はアンへ詰め
寄った。突然の上官の接近に頬を赤らめつつ戸惑うアン。

「島田さん……そんな……僕には心に決めた人が……」

「そんな話は良いんだ！何を見てきた？何かあったのか？」

頬を染めるアンの言葉を無視してじりじりと島田の顔がアンに近
づく。そしてその心に決めた人がたぶん自分だと想像した誠は好奇
心と恐怖の感情が入り乱れるなかじつとアンの言葉に耳を済ませて
いた。

「何がって……」

ためらうアン。その言葉がいつものやけに色気があるものだった
ので島田も菰田も諦めたようにため息をついた。

「おい！このぼんくらども！」

要の叫びと同時に更衣室のドアを蹴り上げる音が響いた。

「壊さないでくださいよ！」

なんとか島田が叫ぶと外でささやきあう声が響いていた。

「西園寺さんが……俺達に用事か。……一体何事なんだ？本当に」

菰田が目アンに向ける。だがアンは相変わらず熱い視線を誠に
向けるばかり。室内の男性隊員にはただ不思議な現象が起きている
と言う事実しか知ることではできなかった。

「誠ちゃん！早くしなさいよ！」

今度はアイシャの声だった。注目の運行部のナンバー2の登場に
さらに誠達は混乱した。

「じゃあ、俺が出るわ」

覚悟を決めたと言うように島田が扉を開く。そこには再び扉を蹴

り上げようと右足を準備していた要が立っていた。

「痛え！」

思い切り要に弁慶の泣き所を蹴り上げられた島田が痛みのあまり倒れこむと転がりまわる。

「大丈夫か？」

「ベルガー大尉……大丈夫に見えますか？」

カウラに手を借りて立ち上がりながらも顔をしかめている島田。自分じゃなくて良かったと言うような表情を浮かべている菰田がアイシャの手にクラッカーが握られているのに気がついた。

「何かめでたいんですか？」

「菰田ちゃん……実はカウラが菰田ちゃんのことを……」

「くだらないことは止める。子供ができたんだ」

「え？ 菰田とベルガー大尉との子供？」

島田は痛みに思考回路を停止させながら搾り出すように言葉を口にした。あまりに突拍子も無い島田の言葉に今度は要が腹を抱えて笑い出した。

「菰田！ 良かったな！ 一人前の男になれて！」

「西園寺さん！ 何言っているんですか！」

顔を真っ赤にする菰田。隣で理解できずに固まっているカウラを見て今度は菰田の顔が青く染まった。

「本当にもう……要ちゃんたら。赤ちゃんができたのはカウラちゃんじゃなくて！ お姉さんよ」

アイシャの言葉でようやく誠も事態が理解できた。

保安隊運行部。部隊を運用する巡洋艦『高雄』の艦長鈴木リアナ中佐は数少ない部隊の既婚者だった。穏やかな性格で刺々しいほかの女性部隊指揮官達が『姐御』扱いされている中で彼女は『お姉さん』と呼ばれて親しまれていた。

「知っちゃうと普通ですね」

「だな」

「なに？ 誠ちゃんに島田君。つまらなそうじゃない」

アイシャに言い寄られて苦笑いを浮かべる二人。それを見るとアイシャは二人にクラッカーを持たせた。いつの間にか来ていたサラやパーラもアンや菰田にクラッカーを渡す。

「もうそろそろ来るから。これでパーンてやるのよ」

サラの言葉に誠と島田は顔を見合わせた。

「来る？ 挨拶に行くんじゃない？」

「狭い部屋に入られても迷惑でしょ？ それなら部隊をぐるりと回ってお祝いした方が良くないじゃない」

「まあ……そうですね」

なんとも狐につままれたような表情で納得してみせる島田。誠も仕方が無いと言うように廊下に並んでいた。目の前の医務室には医務間のドム大尉が運行部の黄色い髪の下士官からクラッカーを受け取って階段を上がってくるリアナに向けてクラッカーを鳴らした。

「おめでとう！」

ドムの言葉に合わせるように誠達もクラッカーを鳴らす。白い長い髪のリアナが手を振りながらそれに答えた。

「おめでとうさん」

なぜか関西弁で言うのと要も遅れてクラッカーを鳴らした。

「みんな！ 有難う！」

純粹無垢な表情で手を振るリアナ。SP気取りのシャムが彼女の前で手を振る隊員に目を光らせている。

「なんでシャムが？」

「吉田君から頼まれたんでしょ？ お姉さんが喜びすぎて無理しないようにそして……」

アイシャの言葉が終わらない時にすでにリアナは手にマイクを握っていた。

「皆さんのおかげでここまで来ました……私は……私は……」

「お姉さん！ 演歌禁止！」

早速シャムがリアナからマイクを取り上げた。

「なんで？ シャムちゃん！」

「おなかの赤ちゃんがかわいそうでしょ？」

シャムに言われてしばらく理解できないというように首をかしげるリアナ。誠もリアナの電波演歌の被害を体験したことがあるので胸をなでおろした。

「胎教……どうなると思う？」

「要ちゃん……私に聞かないでよ」

要の問いに半分やけになって答えるアイシャ。リアナはシャムからマイクを取り上げられて少ししよげながら廊下を隊長室へと歩いていた。

「おめでたいな」

「なに？カウラちゃんが言うど皮肉みたい」

「別にそんなつもりは無いがな。私も興味深い出来事だと思うよ」

「硬いねえ……もう少し柔らかく物事考えなきゃ」

不器用に笑うカウラに要が呆れたような視線を送る。

「それじゃあ……私は色々あるから」

「サボるなよ」

アイシャは要にチャカされながら階段を駆け下りていく。要とカウラは安心したように深呼吸をした。

「それじゃあ詰め所に行くぞ」

そう言うどカウラは更衣室で着替え途中の誠に一言言うどリアナ達の行列に付き合って廊下を実働部隊の詰め所へと歩いていった。

「隊長！」

「おう！おめつとさん！」

リアナが隊長室に入るとにこやかに嵯峨は彼女を迎え入れた。隣には笑顔の明華が、その隣の小さなランはまるで子供の手のような両手で大きく拍手をしていた。

「この部屋は空気が悪いからな……窓を開けるか？」

「厳しいねえ……マリアは」

窓に向かう金髪瘦身のマリアを隊長の椅子に座ったまま苦笑いで嵯峨は見つめていた。

「それより兄さん。リアナさんが抜けるとなると……」

背広の小男が嵯峨を兄と呼びながら難しい顔でリアナを見ていた。
「高梨さん。すぐに休むわけじゃないですから」

「でも鈴木中佐。お体が第一ですよ」

「そうだな。アイシャの馬鹿も使えるようになってきたんだ。楽し
たってバチはあたらねーと思うぞ」

嵯峨の弟で管理部部長の高梨涉と部隊副長のクバルカ・ランの言
葉にリアナが微笑みで返した。その時部屋の扉をノックする音が響
いた。

「開いてるぜ！」

めんどくさそうに叫ぶ嵯峨の言葉を聞くと扉が開いた。そこには
噂のアイシャの他に要とカウラ、そして誠が神妙な表情で立ってい
た。

「遠くにいても始まらねえよ！こっち来い！」

入り口で黙って歩哨の真似事をしているシャムと吉田を白い目で
見ながら誠達は部屋に通された。

「お疲れ様だね。例の犯人の身柄の確保。結果オーライと言うところ
か？」

「相手が相手とはいえ、一名負傷。室内戦闘の訓練が必要な感じだ
がな」

嵯峨の言葉に警備部部长として室内戦闘などの訓練の指揮を担当
しているマリアの厳しい言葉が飛んだ。

「はあ、申し訳ありません」

片腕を落とされ腹に七発の銃弾を受けて義体を駄目にした要が渋
々頭を下げた。

「それにしてもアイシャ。行けるか？艦長代理」

椅子に座った嵯峨の見上げる挑戦的な視線にアイシャは余裕の笑
みを浮かべる。

「隊長の指示なら」

「指示よりもオマエさんのやる気が重要だ。行けるか？」

嵯峨の言葉に部屋の中の人々の視線がアイシャに集中する。アイシャは照れたように自分の頬を右手でつつきながら嵯峨を見つめていた。

「できる限りがんばります」

「まあいい返事だ。できないことはやっぱりできないからな」

アイシャの答えに満足したように嵯峨が笑う。それを見てリアナは手を叩いた。

「それじゃあお祝いしないと！」

「酒抜きでな」

「えー！」

マリアの『酒抜き』の一言に要が思わず叫んでいた。

「あのねえ、要ちゃん。リアナお姉さんのお腹には赤ちゃんがいるの。分かる？」

「だからってアタシ等まで酒禁止なのか？」

不満そうに周りを見る要。だが誰一人として助け舟を出す様子は無かった。

「主賓が飲めないのに祝う側の人間が飲んでたら意味ねーだろう？そのくらい分かれよ」

子供のような体に似合わず酒飲みのランに言われて要がうなだれた。

「それは良いとして……シャム！」

衛兵の真似をしているシャムに声をかける嵯峨。声をかけられてすぐにシャムはドアを開けて飛び出す。そしてそんな彼女の相棒である吉田もあとに続いた。

「バーベキューの準備ですか？でも寒いですよ」

誠の言葉に嵯峨は苦笑いを浮かべる。

「一応うちでのしきたりみたいなのもんだ。リアナには毛布でもかけておけば良いだろ？」

「ええ、にぎやかなのは赤ちゃんも喜びますよ」

そんなリアナの一言に場は一気に和やかなものへと戻り始めた。

そんな中、一人嵯峨は浮かない表情で誠達を見つめていた。

「ああ、そう言えば要」

「アタシ？」

嵯峨の声に振り返る要。きよんとしているアイシヤも思わず嵯峨に目をやる。

「あの現場、とんでもない化け物がいたらしいじゃねえか……桐野だろ？」

何気なく言ってみせる嵯峨だがその目は先ほどと違い鋭い光をはらんでいた。誠は再びあの冷たい殺意を帯びた大男の笑みを思い出して背筋に寒いものが走るのを感じる。

「叔父貴のかつての部下だろ？調べたよ」

「知ってるか……」

「部下？調べたって……」

要のタレ目がしつかりと嵯峨を見ているのを見てアイシヤは戸惑うようにつぶやく。

「前の大戦で胡州幼年挺身隊の隊長として俺の下にいたんだよ、アイツは。そこで俺に能力を見出されたのは良いが……」

「そのまま人殺しが趣味にでもなったんですか？」

「ベルガーは鋭いねえ。いつも通り情報元の安全のため詳しくは言えねえが……今は例の『ギルド』に属して荒事を専門に仕切っているそうだ。お前さん等も見たとおり、例の北川とか言う法術師がお守りでついているらしい」

「最初から知ってたんじゃないか？叔父貴」

要に突かれるとそのまま背を向けて外を向く嵯峨。それをみて要は嫌味のように敬礼するとそのまま部屋を出ようとした。

「私達もお手伝いしていいかしら？」

「お姉さんは……賓客じゃないの」

アイシヤの言葉に首を振りながらランとマリアに目をやるリアナ。仕方が無いと言うように二人はそのままリアナに釣られて廊下に出た。

「隊長も難しい立場なんだから。分かってあげないと」

リアナはそう言うとそのまま笑顔でクラッカーを鳴らす実働部隊や管理部員の輪の中へと飛び込んでいった。

「やっぱりかなわねえや」

要はそう言うとそのあとに続いた。

「でも……良いんですか？『ギルド』の面々はまだ身柄を押さえられて無いんですよ。僕達がこんなどんちゃん騒ぎなんてしてても……」

「いつもいつも……水ばっか差しやがって！水差し野郎！」

誠の言葉に要はすばやく反応するとそのまま首にまとわりついてそのままヘッドロックを決めた。

「苦しい……」

「しょうがないじゃないの。前から言っているようにこの法術の力。存在自体がタブーみたいなのものふたを開けちゃったんだから……ある程度の摩擦は覚悟しないと」

「ほう、クラウゼが珍しいな。正論だな」

「カウラちゃん。珍しいとは心外ね」

ニヤニヤ笑いながらのアイシャとカウラの言葉を聞きながらようやく首を万力のような要の腕から開放されて息をつく誠。やってきたハンガーに張り出した階段から階下を覗いた。

整備班員が大漁旗を振り回しながら万歳を続けている。その中心にはライトブルーと言うより白に近い色の髪のリアナの笑顔が揺れていた。

「まあ……あれだ。難しいことは後で考える。それで駄目なら叔父貴に押し付ける。それがうちの流儀だからな。気にせず楽しめばいいんだよ」

「ずいぶんとまあ……お気楽なのね」

「アイシャに言われる筋合いはねえよ」

じゃれながらも要もアイシャも笑顔だった。横を見ればライトグリーンポニーテールを開かれたハンガーの扉から吹いてくる北風

になびかせながら笑顔を浮かべるカウラがいた。

「寒いですね」

「そりゃ冬だからな。まあいいや、とりあえずシャムのところに行つてジュースをあるだけ持って来い。足りなかったら買出しに行くから。パーラの車で行けば結構詰めるからな」

「仕切るわね。要ちゃん」

「別に仕切っているわけじゃねえよ」

相変わらず口だけの要にせかされて誠は階段を駆け下りる。

「神前君！よろしくね！」

リアナが手を振るのを見ながら誠は笑顔でシャムが溜め込んでいくジュースのある一階の食堂に向かう。

すべてはことも無く平和である。そんな当たり前の日々が帰ってきたことに誠は満足しながら走り始めた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7746/>

遼州戦記 保安隊日乗 6 改訂版

2010年10月8日17時40分発行